

目座遺跡、八丁田圃遺跡、塗屋城跡、
大古Ⅱ遺跡、稻成Ⅰ遺跡、安宅本城跡、
田ノ口遺跡、岩崎大泓遺跡、岩崎大泓Ⅱ遺跡

—近畿自動車道紀勢線事業に伴う発掘調査報告書—

2015年1月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

序

紀伊半島西部に位置する和歌山県は温暖な気候に恵まれ、黒潮がもたらす太平洋の水産資源、豊富な水源を持つ紀伊山地の林産資源など、豊かな自然環境から古来より多くの恩恵を受けてきました。また、このような自然の恵みが創り出した、趣に富み且つ雄大な景観は、観光資源としても魅力の多いところとなっています。

自然環境のみならず、古代における行幸の記録が残された「牟婁の湯」といわれる白浜温泉一帯は今なお訪れる人も多く、平安時代後期以降多くの参詣者が歩いた熊野三山への参詣道は現在、ユネスコにより世界遺産に登録され、このほど10周年を迎えました。長い歴史において人々が創造してきたものが、これほど永く人々を魅了して止まないのは、これらが自然との調和において紡ぎ出されてきたものであり、和歌山県の文化財における特筆すべき一面であるといえます。

今回、和歌山県文化財センターでは、近畿自動車道紀勢線の建設に伴い、田辺市、上富田町、白浜町内において9箇所の遺跡の発掘調査を実施してまいりました。

発掘調査では、八丁田圃遺跡と稻成Ⅰ遺跡において、県内では発見例の少ない石帶巡方が出土したほか、大古Ⅱ遺跡で出土した絵画土器は、小破片ではありますが建物と屋根飾りを描いた可能性も指摘されるなど、注目すべき成果がありました。

ここに調査成果をまとめ、発掘調査報告書を刊行します。

最後になりましたが、現地調査と整理業務の実施にあたりご協力いただいた、和歌山県教育委員会、国土交通省近畿地方整備局紀南河川国道事務所をはじめ、地元地区の方々ならびに関係各位に対し深く感謝の意を表しますとともに、今後とも当センターの事業により一層のご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成27年1月

公益財団法人 和歌山県文化財センター
理 事 長 工 樂 善 通

例　言

1. 本書は、田辺市の目座遺跡、八丁田圃遺跡、稻成Ⅰ遺跡、西牟婁郡上富田町の塗屋城跡、岩崎大泓遺跡、岩崎大泓Ⅱ遺跡、西牟婁郡白浜町の田ノ口遺跡、大古Ⅱ遺跡、安宅本城跡の発掘調査報告書である。
2. 上記の調査は近畿自動車道紀勢線事業に伴い、平成21年度から同24年度にわたって実施したもので、第1次及び第2次の出土遺物等整理業務を平成25年度から同26年度にかけて実施した。
3. 発掘調査及び出土遺物等整理業務は、国土交通省近畿地方整備局紀南河川国道事務所の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもと、公益財団法人和歌山県文化財センターが実施した。
4. 発掘調査及び出土遺物等整理業務の組織は以下の通りである。

[発掘調査]

専務理事　白藤正和（平成21・22年度）、小堀基二（平成23・24年度）

事務局長　田中洋次（平成21～24年度）、渋谷高秀（平成24年度）

管理課長　富加見泰彦（平成23年度）、渋谷高秀（平成24年度）

埋蔵文化財課長　村田　弘（平成21～24年度）

発掘調査担当

平成21年度　八丁田圃遺跡　土井孝之

平成22年度　目座遺跡、八丁田圃遺跡　寺西朗平

　　塗屋城跡　井石好裕

平成23年度　目座遺跡、八丁田圃遺跡、稻成Ⅰ遺跡　寺西朗平

　　大古Ⅱ遺跡、安宅本城跡　川崎雅史

平成24年度　田ノ口遺跡　寺西朗平

　　大古Ⅱ遺跡　川崎雅史　森原　聖

　　岩崎大泓遺跡、岩崎大泓Ⅱ遺跡　佐伯和也　山野晃司

[出土遺物等整理業務]

専務理事　里森　修（平成25・26年度）

事務局長（管理課長）　勝浦久和（平成25年度）、嶋田文紀（平成26年度）

埋蔵文化財課長　井石好裕（平成25・26年度）

出土遺物整理担当　寺西朗平

5. 本書は各発掘調査担当者と協議の上、寺西が執筆・編集した。

7. 本書で用いた現地写真は各発掘調査担当者が撮影した。また、遺物写真は寺西が撮影した。

8. 発掘調査及び出土遺物等整理業務で作成した実測図・写真・デジタルデータ・台帳などの記録資料は、公益財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が保管している。

9. 発掘調査及び出土遺物等整理業務に際し、下記の諸機関・諸氏よりご協力・ご教示を得た。記して感謝の意を表したい。（敬称略・順不同）

国土交通省近畿地方整備局紀南河川国道事務所 田辺市教育委員会 白浜町教育委員会 上富田町教育委員会
白石博則（和歌山城郭調査研究会 代表） 深澤芳樹（独立行政法人 奈良文化財研究所）

凡 例

1. 発掘調査及び出土遺物整理作業は、当センターの定めた『発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006.4）に準拠して行った。
2. 座標値は平面直角座標系第VI系（世界測地系）による。また、図上に表示した方角は座標北による北方向を示している。今回報告した遺跡の所在地（和歌山県南部）においては、磁北は座標北に対し $6^{\circ} 34' \sim 6^{\circ} 48'$ 西偏する。これについては、各空測図化図の成果に記載している。
3. 基準高の表示は、T.P. (Tokyo Peil : 東京湾標準潮位) を基準とした数値による。
4. 土色は、『新版標準土色帖』小山正忠・竹原秀雄編著（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修）2005年度版を基準とした。
5. 発掘調査コードは以下のとおりである。出土遺物及び調査記録等の資料はこれを用いて管理している。（調査年度－市町村コード・遺跡番号）
 - 9 - 35・064 八丁田圃遺跡（2009年度 第1次調査）
 - 10 - 35・063 目座遺跡（2010年度 第1次調査）
 - 10 - 35・064 八丁田圃遺跡（2010年度 第2次調査）
 - 10 - 39・035 塗屋城跡（2010年度調査）
 - 11 - 35・063 目座遺跡（2011年度 第2次調査）
 - 11 - 35・064 八丁田圃遺跡（2011年度調査 第3次調査）
 - 11 - 35・160 稲成Ⅰ遺跡（2011年度調査）
 - 11 - 40・003 大古Ⅱ遺跡（2011年度調査）
 - 11 - 40・008 安宅本城跡（2011年度調査）
 - 12 - 35・003 大古Ⅱ遺跡（2012年度調査）
 - 12 - 36・061 田ノ口遺跡（2012年度調査）
 - 12 - 39・044 岩崎大泓遺跡（2012年度調査）
 - 12 - 39・063 岩崎大泓Ⅱ遺跡（2012年度調査）
6. 遺構番号は、各遺跡毎に1番から始まる通し番号を付した。但し、調査区が複数ある場合において、各調査区が離れた場所にある等といった場合には便宜上調査区毎に1番からの通し番号を付している。煩雑とならない場合に限り、調査区名を先頭に付して遺構 1002（調査区1 遺構 002）など表記している。また、必要に応じて遺構の種類（性格）を付して通し番号を与えた。
例：掘立柱建物 1、溝状遺構 2
7. 遺構及び遺物実測図の縮尺は特に統一していないが、各々に明示している。
8. 遺物番号は、本文、実測図及び写真図版において一致する。
9. 掲図、写真是煩雑さを避けるため、各遺跡の成果毎に1番から始まる通し番号を付した。

目 次

第Ⅰ章 環境 -----	1	第5項 まとめ -----	69
第1節 地理的環境 -----	1	第5節 安宅本城跡 -----	76
第2節 歴史的環境 -----	2	第1項 調査に至る経緯 -----	76
第Ⅱ章 調査に至る経緯 -----	4	第2項 位置と環境 -----	76
第Ⅲ章 調査の方法 -----	4	第3項 調査の方法 -----	78
第1節 地区割りの方法 -----	4	第4項 調査成果 -----	79
第2節 遺構名・遺構番号 -----	5	第5項 まとめ -----	79
第3節 遺物の取り上げ -----	5	第6節 田ノ口遺跡 -----	82
第4節 調査区の設定 -----	5	第1項 調査に至る経緯 -----	82
第5節 実測図作成 -----	5	第2項 位置と環境 -----	83
第6節 写真撮影 -----	6	第3項 調査の方法 -----	84
第7節 出土遺物等整理作業 -----	6	第4項 調査成果 -----	87
第Ⅳ章 各遺跡の調査成果 -----	7	第5項 まとめ -----	99
第1節 目座遺跡・八丁田園遺跡 -----	7	第7節 岩崎大泓遺跡 岩崎大泓Ⅱ遺跡 -----	112
第1項 調査に至る経緯 -----	7	第1項 調査に至る経緯 -----	112
第2項 位置と環境 -----	8	第2項 位置と環境 -----	112
第3項 調査の方法 -----	10	第3項 岩崎大泓遺跡 -----	112
第4項 調査成果 -----	12	第4項 岩崎大泓Ⅱ遺跡 -----	118
第5項 まとめ -----	22	第5項 まとめ -----	123
第2節 塗屋城跡 -----	30		
第1項 調査に至る経緯 -----	30		
第2項 位置と環境 -----	30		
第3項 調査の方法 -----	32		
第4項 調査成果 -----	32		
第5項 まとめ -----	33		
第3節 大古Ⅱ遺跡 -----	35		
第1項 調査に至る経緯 -----	35		
第2項 位置と環境 -----	36		
第3項 調査の方法 -----	37		
第4項 調査成果 -----	38		
第5項 まとめ -----	48		
第4節 稲成Ⅰ遺跡 -----	64		
第1項 調査に至る経緯 -----	64		
第2項 位置と環境 -----	64		
第3項 調査の方法 -----	65		
第4項 調査成果 -----	66		

挿図目次

- 図 1 各遺跡の位置
図 2 和歌山県南部の地質
図 3 地区割及び区画名
- 目座遺跡・八丁田圃遺跡**
- 図 1 目座遺跡、八丁田圃遺跡及びその周辺の遺跡
図 2 地区割 中区画及び小区画
図 3 各年度における調査区及び基本層序に示す土層の位置
図 4 基本層序
図 5 調査区及び地区割（小区画）
図 6 調査区北東壁土層図
図 7 第1次調査 遺構配置図及び各遺構図
図 8 第2次調査 調査区及び地区割（小区画）
図 9 調査区2-1 遺構配置図
図 10 調査区2-1 遺構 2001 土層図
図 11 調査区2-1 遺構 2002 平面
及び土層・断面見通し図
図 12 調査区2-2 遺構配置図
図 13 調査区2-3 遺構配置図
図 14 調査区2-2 遺構 2258 実測図
図 15 調査区2-2 遺構 2289 実測図
図 16 調査区2-2 遺構 2254 実測図
図 17 調査区2-2 遺構 2191 実測図
図 18 第3次調査 調査区及び地区割（小区画）
図 19 調査区3-1 遺構配置図
図 20 調査区3-2、3-3、3-7-1、
3-7-2 遺構配置図
図 21 調査区3-2、3-3、3-4、3-5-1、3-5-2、
3-6、3-7-1、3-7-2 遺構配置図
図 22 調査区3-1 北壁土層図
図 23 調査区3-1 遺構 3002 土層図
図 24 調査区3-1 遺構 3008 土層図
図 25 調査区3-1 遺構 3007、3008 土層図
図 26 調査区3-1 遺構 3079 実測図
図 27 調査区3-1 遺構 3080 実測図
図 28 第4層上面 断面図
図 29 遺物実測図
図 30 遺物実測図
図 31 遺物実測図
- 塗屋城跡**
- 図 1 塗屋城跡及び周辺の遺跡
- 図 2 調査位置図
図 3 地区割 中区画及び小区画
図 4 地形測量図（表土除去後）
図 5 堀切セクションベルト土層図
図 6 トレンチ土層図
図 7 出土遺物実測図
- 大古II遺跡**
- 図 1 大古II遺跡及び周辺の遺跡
図 2 地区割 中区画
図 3 地区割 小区画
図 4 調査区位置図
図 5 各調査区土層堆積状況
図 6 調査区1 遺構配置図
図 7 調査区2 遺構配置図
図 8 調査区4 第1遺構面 遺構配置図
図 9 調査区4 第2遺構面 遺構配置図
図 10 調査区4 第1遺構面 挖立柱建物1
図 11 調査区4 検出遺構土層図
図 12 調査区4 検出遺構土層図
図 13 調査区5 遺構配置図
図 14 調査区5 井戸1
図 15 調査区3 第1・2遺構面 遺構配置図
図 16 調査区3 第3遺構面 遺構配置図
図 17 調査区6 第1遺構面 遺構配置図
図 18 調査区6 第2遺構面 遺構配置図
図 19 調査区7 第1遺構面 遺構配置図
図 20 調査区7 第2遺構面 遺構配置図
図 21 調査区7 第3遺構面 遺構配置図
図 22 遺構 3002 土層図
図 23 遺構 3006 土層図
図 24 遺構 3002・3003 土層図
図 25 遺構 7004
図 26 遺構 7005
図 27 遺構 7002
図 28 遺構 7002 土層図
図 29 遺構 7002
図 30 遺構 7002 土層図
図 31 調査区8 遺構配置図
図 32 出土遺物実測図
図 33 出土遺物実測図
図 34 出土遺物実測図
図 35 出土遺物実測図
図 36 出土遺物実測図
図 37 出土遺物実測図

- 図 38 出土遺物実測図
 図 39 出土遺物実測図
 図 40 出土遺物実測図
 図 41 平成 22 ~ 24 年度調査各調査区
 遺構配置図

稻成 I 遺跡

- 図 1 地区割 大区画
 図 2 地区割 中区画
 図 3 調査区及び小区画
 図 4 調査位置及び地区割（中区画）
 図 5 調査区 1・2・3 遺構配置図
 図 6 調査区 2 セクション 1 南壁土層
 図 7 調査区 2 調査区東壁 断削南壁土層
 図 8 竪穴建物 1 平面遺構実測図
 図 9 竪穴建物 1 カマド実測図
 図 10 竪穴建物 2 実測図
 図 11 遺構 2 実測図
 図 12 遺構 7 実測図
 図 13 調査区 3 檢出遺構 土層図
 図 14 調査区検出遺構及び
 掘立柱建物 1 平面・土層図
 図 15 調査区 1 調査区壁面土層図
 図 16 出土遺物実測図

安宅本城跡

- 図 1 安宅本城跡及び周辺の遺跡
 図 2 調査区位置図
 図 3 調査区及び地区割
 図 4 調査区 1・2 第 1 遺構面検出遺構図
 図 5 調査区 1・2 第 2 遺構面検出遺構図
 図 6 出土遺物実測図

田ノ口遺跡

- 図 1 田ノ口遺跡及び周辺の遺跡
 図 2 調査区位置図
 図 3 地区割 中区画
 図 4 調査区及び地区割 中区画及び小区画
 図 5 調査区 1 セクション 1 南壁土層図
 図 6 調査区 2 セクション 1 北壁土層図
 図 7 調査区 3 セクション 1 東壁土層図
 図 8 遺構 101 土層図
 図 9 調査区 1・2 遺構配置図
 図 10 遺構 109 遺物出土状況図及び土層図
 図 11 遺構 108 実測図
 図 12 遺構 112 実測図
 図 13 遺構 113 実測図

- 図 14 遺構 118 実測図
 図 15 遺構 123 実測図
 図 16 遺構 111・114 土層図
 図 17 調査区 1 西壁土層図
 図 18 調査区 1~2 横断図及び旧地形復元図
 図 19 調査区 2 遺構 228 実測図
 図 20 調査区 2 遺構 234 実測図
 図 21 調査区 3 遺構配置図（第 4 層上面）
 図 22 調査区 3-1 調査区北壁土層図
 図 23 調査区 3-2 セクション 5 南壁土層図
 図 24 調査区 3 セクション 1 土層図
 図 25 遺構 302 実測図
 図 26 遺構 348 実測図
 図 27 遺構 366 実測図
 図 28 遺構 381 実測図
 図 29 遺構 352 実測図
 図 30 遺構 327 実測図
 図 31 遺構 301 実測図
 図 32 遺構 109 出土土器等の種類別構成
 図 33 土師器皿の口径と器高
 図 34 土師器碗の口径と器高
 図 35 出土遺物実測図
 図 36 出土遺物実測図
 図 37 出土遺物実測図
 図 38 出土遺物実測図

岩崎大泓遺跡 岩崎大泓 II 遺跡

- 図 1 調査区及び周辺の地形
 図 2 調査区及び小区画
 図 3 地区割 中区画
 図 4 岩崎大泓遺跡 遺構配置図
 図 5 岩崎大泓 II 遺跡 第 1 遺構面 遺構配置図
 図 6 岩崎大泓 II 遺跡 第 2 遺構面 遺構配置図
 図 7 岩崎大泓 II 遺跡 調査区 1
 中央セクションベルト土層図
 図 8 岩崎大泓 II 遺跡 掘立柱建物 1
 図 9 岩崎大泓 II 遺跡 掘立柱建物 1 柱穴土層図
 図 10 岩崎大泓 II 遺跡 棚列 1
 図 11 岩崎大泓 II 遺跡 調査区 1
 中央セクションベルト土層図
 図 12 出土遺物実測図
 図 13 出土遺物実測図
 図 14 出土遺物実測図

第Ⅰ章 環 境

第1節 地理的環境

和歌山県は紀伊半島の西部に位置する。紀伊半島の大部分は紀伊山地が占めており、このため県域沿岸部では紀伊山地の山塊が海岸付近まで迫る地域も多い。また高野山や護摩壇山等標高1000m前後の山々、県域の76%を占める森林及び太平洋を北流する黒潮は、温暖で多雨な気候をもたらしている。このような地形と気候から、日高川、富田川、日置川等、県南部を流れる河川は総じて急流となって太平洋に注ぎ込んでいる。そのためこれらの河川の堆積平野は大部分が河口域に広がっており、住民の生活圏も河川下流域及び沿岸地域が中心となっている。太平洋に面した海岸は典型的なリアス式海岸が随所にみられ、景観的にも美しく多くの地域が国立或いは県立公園として指定を受けている。

地質的に紀伊半島南部の大部分を占めるのは四万十累帯である。四万十累帯は北から日高川帶、音無川帶、牟婁帶に区分され、田辺市、上富田町、白浜町には音無川層群から成る音無川帶、牟婁層群から成る牟婁帶が分布する。

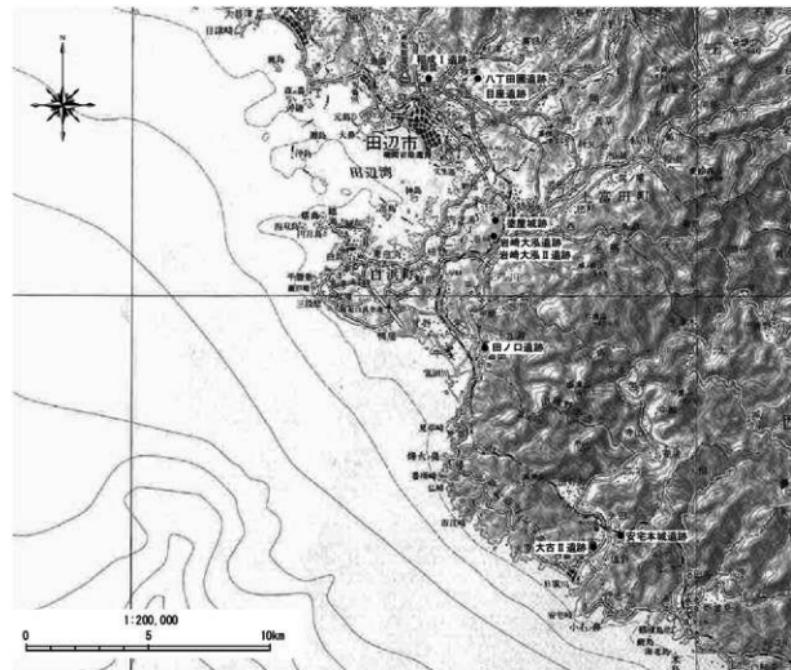


図1 各遺跡の位置（国土地理院発行（平成24年）20万分の1地勢図に一部加筆）

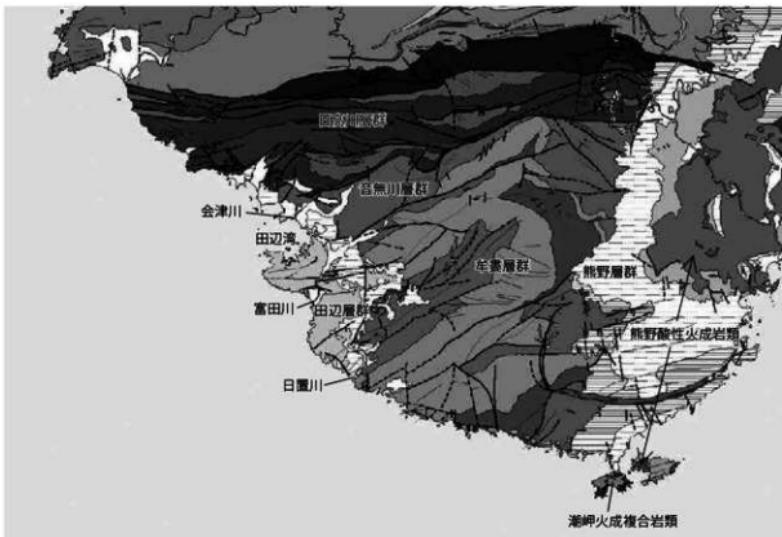


図2 和歌山県南部の地質（産業技術総合研究所地質調査総合センター(編) (2004) 20万分の1数値地質図幅集「北陸、中部及び近畿」に加筆）縮尺任意

また、田辺市北部から白浜町日置付近までは沿岸部を中心に第三紀前期から中期中新世の田辺層群があり、第三紀漸新世から前期中新世の牟婁層群に不整合で重なる。田辺層群の東及び南側を占める牟婁層群は合川累層、下露累層、打越累層、三尾川累層、安川累層、和深累層等から成り串本町近辺まで分布する。紀伊半島南部の串本町潮岬付近から三重県熊野市あたりまでは南北に長く熊野層群が分布し、これに大島の大半を占める潮岬火成複合岩体及び串本町から那智勝浦町あたりまで分布する熊野酸性火成岩類が貫いている。潮岬火成複合岩体、熊野酸性火成岩類のほかは海底における堆積による堆積岩がほとんどであり、紀伊半島南部では南へ向かうほど地質的には新しくなる傾向にあるといえる(*1)。

第2節 歴史的環境

各遺跡周辺における歴史的環境は、各調査成果の項目で述べることとし、ここでは主に紀南地方を中心とした大まかな状況のみを述べる。

紀南地方(*2)はその面積の大半を山地が占め、平地が少ないこともあって会津川や富田川、日高川等の河川下流域に広がる堆積平野に多くの遺跡が所在する。

旧石器時代の遺跡は、和歌山県内では紀の川流域、日高川流域のほか、有田川町の野田地区遺跡、藤並地区遺跡、土生池遺跡等がありナイフ形石器等が出土しているが、紀南地方における最も古い時代の遺物としては、白浜町十九瀬遺跡出土の有舌尖頭器が挙げられる。サヌカイト製で、旧石器時代から縄文時代草創期の石器であると考えられ、太地町梶取崎遺跡でも同様の有舌尖頭器が採集されている。これらの遺物の出土は、既にこの頃紀南地方において人々が生活していた事を示すといえる。

縄文時代の遺跡は、田辺市に所在する高山寺貝塚が高山寺式土器の標識遺跡としてよく知られる。高山寺式土器は早期後半或いは末の土器として近畿地方及び北陸地方の一部にまでその分布がみられるが、日高川町和佐遺跡（B地点）で船型式、上ノ山式、入海I式、入海式土器と非常によく似た土器が出土していることからも、早期後半には既に東海地方と交流があったことを窺わせる。さらに同遺跡では北白川下層I～III式土器の出土も確認されており、前期には他地域との交流も活発化することが明らかとなっている。縄文時代中期の遺跡として白浜町瀬戸遺跡、平遺跡、大瀬遺跡、串本町大水崎遺跡等があり、遺跡数は後期から晩期にかけて増加する。

弥生時代の遺跡は現在の田辺市域をはじめ多くの地域で確認されている。特に平成22・24年度に発掘調査が実施された立野遺跡では、前期の流路から木製品が多量に出土し水田稲作開始期の貴重な資料となった。また紀南地方は銅鐸の出土が多いことでよく知られる。銅鐸は和歌山県内で総数40点以上（*3）の出土があり、全国的に見ても突出した出土点数であるが、紀北地方の紀の川流域及び有田川流域での出土総数11点に比べ御坊市以南では合計25点となり、紀中（*4）から紀南にかけ集中して分布することがわかる。

また弥生時代後期までに全国的に出現する高地性集落は後期後半に減少するが、日高川以南の地域では後期後半以降まで存続することが指摘されている。

県内における古墳の分布は紀北の平野部に集中し、総数800基を超える県内最大の古墳群である岩橋千塚古墳群のほか、船戸山古墳群、百合山古墳群等、紀の川流域に広く分布する。また有田川や日高川河口域にも古墳の分布はみられるものの、南へ向かうほど減少する傾向が明らかで、田辺市域や白浜町域では4～5世紀に造営されるものがあるものの数は少ない。同時期のこの地域における特徴的な遺跡として、田辺湾岸地域に分布する岩陰遺跡がある。これらは埋葬施設として海蝕洞穴内に竪穴式石室や箱式石棺墓、土坑墓を設けたもので、立戸岩陰遺跡、磯間岩陰遺跡等がそれである。

律令制下においては、現在の田辺市、上富田町、白浜町にあたる地域は牟婁郡に属していたと考えられ、牟婁郡の郷名として『和名抄』や平城宮出土木簡に牟婁、岡田、来柄、三前、神戸等の名がみえる。牟婁郡はほぼ現在の田辺市域と想定されており、ここには郡内唯一の古代寺院である三栖廢寺跡が所在することから、牟婁郡内でも中心的な地域であったとされる。

三栖廢寺跡は、左会津川北岸の台地上に所在する白鳳期創建の寺院跡で、現在も基壇跡や塔心礎が残る。寺域の広がりや基壇、塔心礎の位置等から法隆寺式の伽藍配置が想定されており、発掘調査の結果平安時代末期から鎌倉時代頃に廃絶したことが明らかとなっている。

記録に残る最初の熊野参詣は平安時代の延喜7（907）年に宇多法皇によって行われたものであるが、それを契機とし以後皇族や貴族達によって盛んに熊野参詣が行われるようになったとされる。田辺市域では出立王子から万呂王子、三栖王子を経由して上富田町域の八上王子、稻葉根王子に至るルートが知られているが、会津川近辺は秋津王子があつたと伝えられる。稻葉根王子から富田川沿いに滝尻王子を経て山深い道を熊野本宮大社へと向かう道筋は中辺路と呼ばれ、さながら山岳信仰の修行を思い起させるが、ここは平安時代から中世末頃に至るまでは多く利用されたといわれ、熊野参詣を繰り返した院政期の上皇達もほとんどがこのルートを辿ったとされる。また、富田川を渡り南へと向かう道筋は大辺路と呼ばれるが、この陸路は地理的に難所が多く、ときには海路を併用しながら熊野へと向かったものと想定される。

第Ⅱ章 調査に至る経緯

近畿自動車道紀勢線の建設にあたり、田辺市、上富田町及び白浜町において、建設予定地の一部が周知の埋蔵文化財包蔵地に該当したことから、和歌山県教育委員会と国土交通省近畿地方整備局紀南河川国道事務所の協議により、分布・試掘・確認調査を実施することとなった。

和歌山県教育委員会による確認調査は平成21年6月1日から平成24年6月27日までに第1次から第7次まで実施され、その結果、田辺市内では目座遺跡、八丁田圃遺跡及び稻成Ⅰ遺跡、上富田町内では塗屋城跡、岩崎大泓遺跡、岩崎大泓Ⅱ遺跡、白浜町内においては大古Ⅱ遺跡、安宅本城跡、田ノ口遺跡で埋蔵文化財の展開が認められ、本調査を実施する運びとなった。このうち岩崎大泓Ⅱ遺跡は、第7次試掘・確認調査において弥生時代から中世の埋蔵文化財包蔵地であると確認され、且つ岩崎大泓遺跡とは自然流路または谷状地形により分断された別の遺跡であると判断されたため、新たに埋蔵文化財包蔵地として取り扱うこととなった。

各遺跡が所在する行政区画は田辺市（目座遺跡、八丁田圃遺跡、稻成Ⅰ遺跡）、西牟婁郡上富田町（塗屋城跡、岩崎大泓遺跡、岩崎大泓Ⅱ遺跡）西牟婁郡白浜町白浜地区（田ノ口遺跡）、西牟婁郡白浜町日置川地区（大古Ⅱ遺跡、安宅本城跡）である。

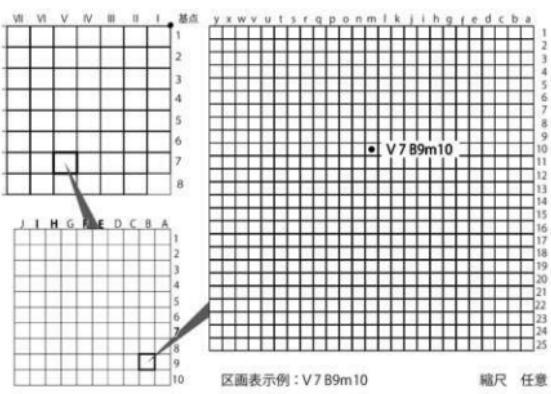
第Ⅲ章 調査の方法

調査は原則的に、当文化財センターが定めた『財団法人和歌山県文化財センター発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006.4）及び『公益財団法人和歌山県文化財センター発掘調査マニュアル（基礎編）』（2011.4）を基準として進めた。

第1節 地区割の方法

実測図作成や遺物取り上げの際に用いた地区割は、平面直角座標系第VI系（世界測地系または世界測地系（測地成果2011））により、遺跡の所在する各行政区画を網羅する範囲の北東隅を原点と定めた大区画または調査地を含む1km四方の中区画を設定した。

地区割は、まず原点からX軸に沿って西方向へ、Y軸に沿って南方向へそれぞれ1kmごとに区分し、第1図に示すように1km四方の範囲を1単位とした大区画を設定した。この大区画には北東隅を基点としてX軸方向へローマ数字を、Y軸方向へアラビア数字1を付しており、ローマ数字とアラビア数字を併記し大区画名としている。



さらにこの大区画内に、同様の方法で北東隅からX軸方向及びY軸方向に沿って100mごとに区分し、それらの北東隅を基点としてX軸方向にA～Jのアルファベット（大文字）を、Y軸方向には1～10のアラビア数字を付して、区画名を「A6」等とする100m四方の範囲を1単位とした中区画を設定した。

中区画内にはさらに4m四方の範囲を1単位とする小区画を設定した。これに北東隅を基点としてX軸方向にアルファベット（小文字）a～yを、Y軸方向にアラビア数字1～25を付した。これらの設定による区画名は「V 7 B9 m10」或いは中・小区画のみを表記し「B9 m10」等と呼称している。

地区割による実測図の配置や遺物の出土位置は大区画・中区画・小区画または中区画・小区画を組み合わせた表記によっている。

原則として、実測図作成には小区画を基準として作図し、遺物取上には一部の出土遺物を除いて小区画を最小単位とした出土位置を記録している。

第2節 遺構名・遺構番号

遺構番号は各調査において個別に付しており、本報告でもそれを踏襲しているが、掘立柱建物等複数の遺構からなるひとまとまりの遺構に対し新たに遺構名付与した場合がある。この場合、遺構名はその種類ごとにアラビア数字を末尾に付して「掘立柱建物1」等と表記している。

第3節 遺物の取上

出土遺物は小区画ごとに取り上げ、ポリ袋またはコンテナの取り上げ単位ごとに付した1番からの通し番号を登録番号とし、また必要に応じて出土状況写真の撮影や出土位置を計測して出土状況図の作成を行った。取り上げた全ての遺物は遺物登録台帳を作成し管理している。

第4節 調査区の設定

各遺跡の調査成果については、第1次調査・第2次調査といった調査次数ごとに報告する。調査区名の表記には基本的に調査時の名称に付された番号を踏襲しているが、数次にわたって調査が実施された遺跡については、調査字数と調査時の区名により、調査区名を「調査区1-1」、「調査区2-1」等と表記している。また調査時に「番号+区」と記録があるものについても「調査区+番号」として統一的に表記した。

第5節 実測図作成

記録として、実測図の作成と写真撮影を行った。実測図は縮尺100分の1及び50分の1の遺構平面図を航空測量により作成したが、作業進行上、調査担当者と調査補助員により縮尺100分の1で遺構配置図を、更に遺構については必要に応じて縮尺10分の1または20分の1で個



写真1 遺構（土層）実測作業風景（稲成1遺跡）



写真2 航空測量・写真撮影作業風景
(八丁田園遺跡第2次)

別に実測図を作成した。

第6節 写真撮影

写真は 4×5 判、 6×7 判、35mmのカラー及びモノクロフィルムを用いて撮影した。また、補助的に有効画素数700～1400万画素相当のデジタルカメラを使用し、撮影画像をJPEG形式で保存している。

撮影した写真の内容については写真台帳を作成し、撮影日、調査区、撮影対象、方向、使用フィルムを基本的な情報として記録し把握している。またデジタルカメラにより撮影したデータについては上記と同じ内容のほか、撮影機材の機能によりExif(Exchangeable image file format)データが各画像ファイルに記録されている。

第7節 出土遺物等整理作業

出土遺物の整理作業は、整理補助員及び整理作業員を直接雇用して、出土遺物の洗浄、注記、登録、接合、復原、実測、トレースの各作業を実施した。また調査においては微細な遺物を確認する目的で、一部の遺構の埋土、炭化物を多量に含む堆積土等を採集しており、これらについて洗浄作業を行った。

注記は骨片、金属製品以外の全ての遺物について実施した。

発掘調査において撮影した写真は、フィルムの種類ごとに分けアルバムに収納した。各アルバムには調査年度、遺跡名、地区名、撮影対象の名称、撮影方向等を記入して撮影日順に収納し、管理のため写真台帳を作成している。

報告書に掲載した遺構実測図は、Adobe社のアプリケーション「Photoshop」、「Illustrator」を使用してトレース図を作成し、ファイルをデジタルデータ（拡張子“.ai”的ファイル形式）として保存している。なお、これらのアプリケーションのバージョンはいずれもCS4以降を使用した。



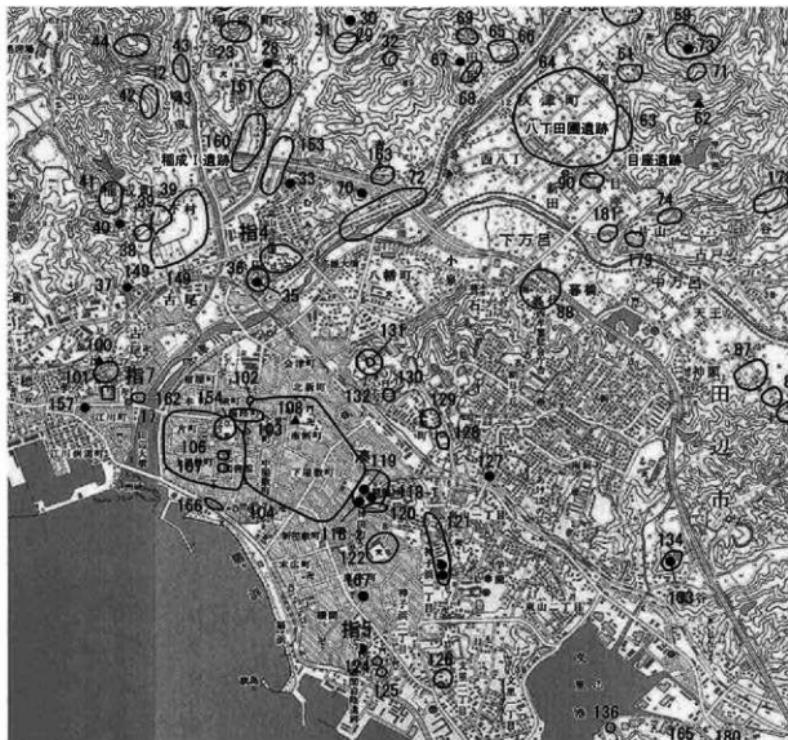
写真3 応急遺物整理作業風景



写真4 出土遺物等整理作業風景



写真5 台帳作成等、データ入力作業風景



28. 福成山古墳 29. 丸橋丘岩陰遺跡 30. 丸橋丘火葬墓 31. 丸橋丘遺跡 33. 東江原火葬墓 35. 糸田古墳 36. 糸田II遺跡 39. 北冲代遺跡
 43. 天王原遺跡 58. 矢矧遺跡 59. 岩倉山清跡 61. 上新田遺跡 62. 岩倉山岡崎出土地 63. 目座遺跡 64. 八丁田圃遺跡 65. 城の尾遺跡
 67. 東の庄火葬墓 70. 青木古墳 72. 接代遺跡 73. 矢矧石器遺跡 74. 古戸谷遺跡 87. 法丁II遺跡 90. 目座II遺跡 127. 碑山古墳
 130. 宝乗院岩陰遺跡 132. 山崎遺跡 136. 鳥が谷岩陰遺跡 149. 下村遺跡 153. 稲成遺跡 160. 稲成I遺跡 161. 稲成II遺跡
 178. 万呂大谷遺跡 179. 高山寺貝塚

図1 目座遺跡、八丁田圃遺跡及びその周辺の遺跡（縮尺任意）

第IV章 各遺跡の調査成果

第1節 目座遺跡・八丁田圃遺跡

第1項 調査に至る経緯

近畿自動車道紀勢線事業に伴う自動車道建設工事予定地が、田辺市秋津町の八丁田圃遺跡及び目座遺跡として埋蔵文化財包蔵地とされている範囲にかかることとなり、平成21年度に県文化遺産課により試掘・確認調査が実施された。その結果、当該工事対象地は記録保存のための本発掘調査を要するものと判断され、財団法人和歌山県文化財センターが平成21～23年度にかけ

目座遺跡・八丁田圃遺跡

て第1～3次の本調査を実施した。本調査は平成21年度に第1次調査として八丁田圃遺跡、平成22年度に第2次調査として八丁田圃遺跡及び目座遺跡、平成23年度に第3次調査として八丁田圃遺跡及び目座遺跡について行った。

第2項 位置と環境

(1) 地理的環境

田辺市は県南部に位置し、東に紀伊山地、西に太平洋を望む中山間地域にあたる。平成17年に旧田辺市、龍神村、中辺路町、大塔村、本宮町が合併して現在の田辺市となり、市総面積は和歌山県全域の22%を占め県内第1位である。市域の大半は森林となっており、日高川水系、富田川水系、日置川水系、熊野川水系、会津川水系を有する。

県南部の海岸線は複雑に入り組んだアリス式海岸が多くみられ、芳養湾及び田辺湾^{(*)5}沿岸には比較的発達した海岸砂丘がみられる。また紀伊山地果無山脈を源とする左会津川はその下流域で右会津川と合流して会津川となり田辺湾に注いでいるが、この田辺湾沿岸及び会津川下流域に広がる平野部には市街地が広がっており、近隣地域を含めた経済・産業の中心地となっている。また、水田経営のほか、丘陵地においては梅を代表とした果樹の栽培が盛んである。

田辺市一帯は第三紀の音無川層群が分布する音無川帯及び牟婁層群が分布する牟婁帯が占めている。田辺湾沿岸の左・右会津川下流域は第四紀沖積層であり、これを中心として半円状に東方向へ第三紀中新世の堆積とみられる田辺層群、牟婁層群が分布する。田辺層群は牟婁層群に不整合で重なっており、上部の椿累層及び鉛山累層、下部の日置累層から成り白浜町日置付近まで分布する。田辺層群は比較的軟質の岩盤となっていることが多く海岸部では波浪等の浸食を受けやすいことが知られる。

(2) 歴史的環境

田辺市域は和歌山市、御坊市に次いで遺跡数が多く、縄文時代から古代にかけて芳養川流域や左・右会津川が合流する秋津平野及び田辺湾沿岸部に多く所在する。

縄文時代の遺跡は会津川北岸の丘陵上に早期の高山寺貝塚（指4）があり、鹹水性の貝類に伴つて押型文土器（高山寺式土器、早期）が出土している。当遺跡は昭和13年に発掘調査が実施されており、昭和45年に国史跡に指定されている。また発掘調査による出土遺物ではないが、目座II遺跡（90）からは船元I～IV式、里木II式に属する縄文時代中期の土器が出土している。

鬼橋岩陰II遺跡は海岸付近の浸食作用により形成された岩陰に営まれた遺跡であり、縄文時代後期初頭にあたる土器のほか、石斧や石錘等の石器が出土しており、湾内での漁業活動を窺わせる。また、鳥が谷岩陰遺跡（136）も同様の岩陰に営まれた遺跡であり、これらの岩陰遺跡は居住場所としての使用というより食料獲得等のための一時的滞在によって営まれたものと考えられている。また下芳養遺跡では発掘調査により前期末から中期後半の土器や石斧、石錘等の石器が出土している。但馬遺跡は右会津川上流、中期前半から後期末の土器が確認されている。

弥生時代は、旧田辺市域の範囲において遺跡数が急激に増加する時期であり、特に会津川流域や芳養川流域、田辺湾沿岸部に多数の遺跡が存在する。左・右会津川に挟まれた平野に所在する八丁田圃遺跡（64）では縄文時代晚期や弥生時代前期、中期の土器が出土しており、拠点的な集落遺跡であると考えられている。また弥生時代中期には会津川流域に矢矧遺跡（58）、万呂大谷遺跡（178）が出現し、会津川の支流である稻成川流域には丸橋丘遺跡（31）等がある。また海岸線

に近い場所に立地する遺跡として神田遺跡(122)、田辺城下町遺跡、今福町遺跡(103)、新庄遺跡が確認されており、これらは出土遺物や他地域の調査例から、墓地である事がわかっている。

後期には綾代遺跡(72)のように低地に立地する遺跡があるものの、富山遺跡(42)、小野遺跡、田中遺跡、中の段遺跡、高地山遺跡、矢田ヶ谷遺跡等、やや標高の高い丘陵上に所在する高地性集落の存在が目立つ。小野遺跡は昭和50年に発掘調査が行われており(*6)、眺望のきく山頂や山腹をテラス状に整形した遺構が確認されている。

また田辺市から御坊市にかけての地域は、全国的にみて銅鐸の出土が多いところであり、田辺市域では7点が発見されているが、いずれも平野部ではなく、平野部縁辺の丘陵斜面や、山間部においての発見である。

古墳時代の遺跡としては、田辺湾沿岸に古目良岩陰遺跡、磯間岩陰遺跡(指5)等の岩陰遺跡がある。田辺層群の砂岩層に形成された海蝕洞穴を利用したものであるが、埋葬施設の存在から古墳時代中期から後期にかけて墓地として利用されたものとみられている。磯間岩陰遺跡は発掘調査により8基の石室が確認されており、被葬者とみられる人骨も残存していた。出土遺物は土師器、須恵器、製塙土器、鉄鏃や釣針といった鉄製品のほか、鹿角製の鳴镝や鏃等がある。後期には田辺湾沿岸の平野部において牛の鼻古墳、後口谷古墳、葉糸古墳(133)、神田古墳群(120)、浜田古墳群(120)など古墳が築かれる。葉糸古墳は横穴式石室内に箱式石棺を設けて埋葬施設とし、副葬品として須恵器のほか鉄刀、刀子、鉄鏃、馬具(金銅製飾金具)、金環が出土しており6世紀後半の築造とみられる。後口谷古墳は2基からなる古墳群であるが、1基は周溝を伴うことが確認されており、その形状から円墳とみられる。残存している横穴式石室からは須恵器、鉄鏃、鉄釘のほか土師器のミニチュア炊飯具が出土しており、6世紀末から7世紀前半の築造と考えられる。

古代の遺跡としては、8世紀頃の創建と考えられる三栖庵寺跡があり国史跡となっている。史跡指定地内に塔心礎も現存しており、数次の発掘調査から法隆寺式の伽藍配置が想定されている。出土遺物として白鳳時代及び奈良時代の軒丸瓦のほか、石造相輪の残片がある。

古代の瓦窯や須恵器窯跡としては中の段窯跡、奥江原窯跡(23)、小屋川瓦窯跡(32)等が知られている。また高尾山の中腹には高尾山経塚があり、一直線に並ぶ1~3号の3基の経塚からは、釣り環鉢を持つ青銅製経筒や和鏡、合子等が埋納品として出土している。この近くでは蓮華文軒丸瓦、鬼瓦等も出土しており、平安時代末期から鎌倉時代初期にかかる高尾山廃寺の存在が知られる。さらに田辺湾周辺の平野及びその周辺の丘陵上には火葬墓が分布する。丸橋丘火葬墓(30)は標高40mの丘陵上に須恵器の藏骨器を埋納し、和同開珎、神功開宝等を副葬する。またその南東500m程に位置する標高50mの台地上には須恵器の藏骨器を埋納した峯の庄火葬墓があり、いずれも奈良時代のものとみられる。

(3) 既往の調査

八丁田圃遺跡と目座遺跡は右会津川の南にあたる沖積平野に所在し、縄文時代から鎌倉時代にかけての遺物が確認されている。現在の地表面には条里型の地割りが顕著に残り、1町四方ごとに「一の坪」等、条里に関連するとみられる名称も伝えられる。

本調査までには2度の発掘調査が実施されている。まず昭和53年に現在の会津保育所が所在する場所において行われ、遺構は確認されていないが耕作土直下に黄褐色粘土層が存在すること

から、この付近における大規模な削平作業の可能性が指摘されている。(6)

次に昭和 56 年、現在の西八丁会館が所在する場所において行われた発掘調査では、大溝や土坑等の遺構が検出され、弥生時代前期から中期（第 I から第 IV 様式）にかけての甕、壺等土器のほか石鏃や石斧、石包丁等が出土している。このほか表面調査も実施されており、サヌカイト製の石器をはじめ土師器や須恵器、青磁片が採集されている。

第 3 項 調査の方法

(1) 地区割りの方法

実測図作成や遺物取上の際に用いる地区割りは、平面直角座標系第 VI 系（世界測地系）により中区画、小区画を設定した（図 2）。なお、中区画は 100m 四方の区画内を 1 単位とするが、第 1 ~ 3 次の調査範囲は Y 座標軸 Y=56000 を境界として 2 つの大区画にわたるため、これらの中区画を包含する X=240000、Y=50000 を原点とした 1km 区画の大区画を設定している。これにより、近畿自動車道紀勢線事業に伴い実施された目座遺跡の 1 ~ 2 次、八丁田圃遺跡の 1 ~ 3 次調査についてその全ての範囲を網羅することになり、第 1 次調査が、VII 10-A7、第 2 次調査及び第 3 次調査が VII 10-A7、VI 10-J7、VI 10-J8 の区画内に位置する（図 2）。

各中区画は平面直角座標系の X 軸方向及び Y 軸方向に 25 等分して区画される 4m 四方の小区画（625 区画）に分け、X 軸方向に a から y までのアルファベット、Y 軸方向に 1 から 25 までの数字を付して区画名を「a7」等と呼称する。小区画の設定状況は各次調査における

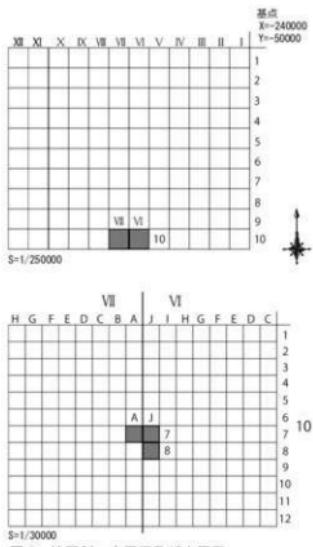


図 2 地区割 中区画及び小区画

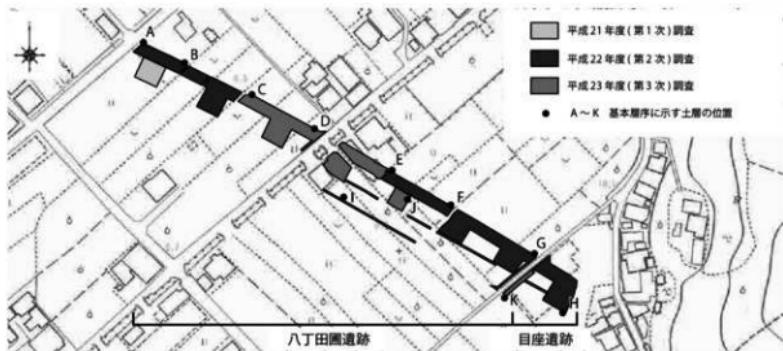


図 3 各年度における調査区及び基本層序に示す土層の位置（縮尺任意）

(2) 調査区の設定

本報告書では、第1次から第3次調査までの調査次数ごとに成果を報告する。

第1次調査は調査範囲が高速道路の橋脚部分にあたる範囲が対象となった。現状は水田であり、調査予定範囲の周辺に測量用の基準点を設け、橋脚部分の位置を特定する座標を逆トラバース測量により算出して設定した。

第2次調査では、橋脚部分及び側道の建設予定範囲が対象となった。調査区は調査区1から3までの3区画に分け(図8)、掘削及び調査は各調査区について同時に実行した。

第3次調査は、橋脚部分、側道の建設予定範囲、現行道路の拡張部分及び水路部分を調査区1から7までの7区画に分けた。道路拡張部分と水路部分については進捗管理上、枝番を付して細分を表記した(図18)。各年度毎の調査位置は図3に示すとおりである。

以上の通り設定した調査区を、その調査次数と調査区名により「調査区2-1」、「調査区3-7-1」等と呼称する。

(3) 基本層序

第1～3次調査における基本層序は図4の通りである。各土層の位置は図3上にアルファベットA～Kにより表示している。

土色は各調査区において若干違いが見られる場合もあるが、代表的な土色名を表記している。

次に、各土層について説明する。

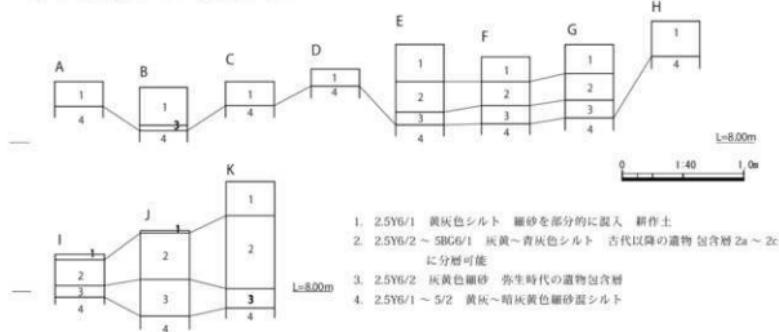


図4 基本層序

第1層は、現代の水田耕作土である。畑地の歴史または現況で水田上に更に盛り土等がなされている場合であっても、第1層とした。

第2層は、比較的均質なシルトから成る層で、礫等の混入も少ない。調査箇所によってはa～c層に分層が可能であり、包含する遺物から、これらは堆積時期に若干の差異があるものと判断された。出土遺物の大部分は摩滅が著しい。

第3層は、弥生時代の遺物包含層である。第3a、3b層に細分が可能であり、このうち第3a層は弥生時代前期の遺物を含み、第3次調査において調査区3-2及び3-3で検出された溝状遺構308の埋土3a～e(図24・25)と同一である。第4層は本調査で確認した範囲において無遺物層であり、上面が弥生時代前期～中期の遺構検出面である。第4a～f層に細分が可能であるが、

このうち最上層にあたる第4a層が削平を受け、第4b層以下複数の層が露出している箇所ではその上面を遺構検出面としたため、第4a層以外の層を検出した箇所でも遺構検出面を包括的に第4層上面と表記している。

以上が基本層序であるが、各調査区においては随時下層確認用のトレーナーを設定して、遺構検出面以下の土層を確認した。その結果、第1次調査の範囲を除き、第4層以下にはシルト層が堆積し、更にそのシルト層の下層は概ね川原石からなる礫層となっているようである。

第4項 調査成果

(1) 第1次調査

第1次調査の調査区及び地区割りは図5に示す通りである。

地表面は厚さ60cm程度の盛り土がなされていたが、標高8.50m付近で現代の水田耕作土表面を確認した。ただし床土は明確でない。第4層上面において弥生時代前期とみられる遺構面を確認し(図6)、遺構検出を行った(図7)。

また調査の最終段階に、調査区北東壁付近において堆積層の断面を行い、遺構検出面との関係を確認した結果、図6に示す3a～3g層にも僅かな遺物が含まれることが判明し、さらに遺構状の落ち込みも認められたが、第2次調査において近隣地点を検討した結果、これらは自然堆積と判断された。

1) 遺構と遺物

遺構1001(図7、図版1) 短軸0.51m以上、長軸0.73m、深さ0.08mの土坑で、平面形は円形を呈する。弥生土器の小破片2点が出土した。埋土は2.5Y5/2暗灰黄色細砂混じりシルトを基本とする。

遺構1002(図7、図版2) 短軸1.65m、長軸1.90m、深さ0.05～0.10mの土坑で、平面形は

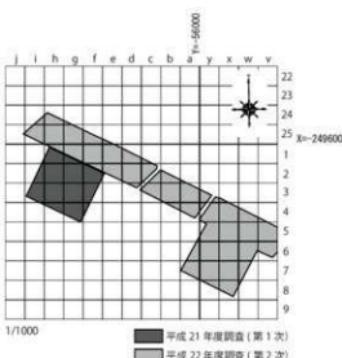
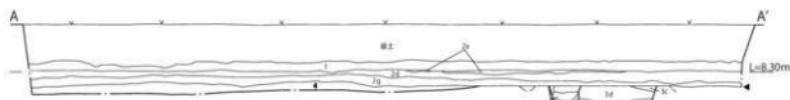


図5 調査区及び地区割り(小区画)



1. 10YR4/2 灰黄褐色～2.5Y4/1 黄灰色 細砂混じるシルト
- 2a. 2.5Y6/2 灰黄色 細砂混じるシルト
- 2d. 2.5Y5/2 黄灰黄色～5/3 黄褐色細砂混じるシルト
- 2g. 2.5Y5/1 黄灰褐色～5/2 暗灰黄色 細砂混じるシルト
4. 2.5Y6/1 黄灰褐色から5/2 暗灰黄色 細砂混じるシルト
- 3c. 2.5Y5/1～4/1 黄灰色 粗砂混じる細砂
- 3d. 2.5Y5/1～5/2 暗灰色 細砂
- 3f. 2.5Y5/2 暗灰黄色 粉砂、細砂混じるシルト
- 3g. 2.5Y6/1 黄灰褐色～6/2 灰黄色 黏質シルト 上半は粗砂混じる

図6 調査区北東壁土層図

不定形である。弥生土器の小破片が多数出土した。埋土は 2.5Y6/2 灰黄色～2.5Y5/2 暗灰黄色細砂混じりシルトを基本とする。

遺構 1003（図 7、図版 1・2） 短軸 0.52m、長軸 0.53m、深さ 0.09m の土坑で、平面形は円形を呈する。弥生土器の破片が出土した。埋土は 2.5Y6/2 灰黄色～2.5Y5/2 暗灰黄色細砂混じりシルトを基本とする。

遺構 1004（図 7、図版 1・2） 短軸 0.90m、長軸 0.95m、深さ 0.16m の土坑で、平面形は円形を呈する。弥生土器の破片が出土した。

遺構 1005（図 7、図版 2） 短軸 0.39m、長軸 0.60m、深さ 0.08m の土坑で、平面形は円形を呈する。弥生土器の小破片が出土した。埋土は 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂混じりシルトを基本とする。

遺構 1006（図 7、図版 1・2） 短軸 0.40m、長軸 0.53m、深さ 0.10m の土坑で、平面形は円形を呈する。弥生土器の小破片とともに弥生時代中期前葉と思われる甕底部1点が出土した。埋土は 2.5Y5/2 暗灰黄色細砂混じりシルトを基本とする。

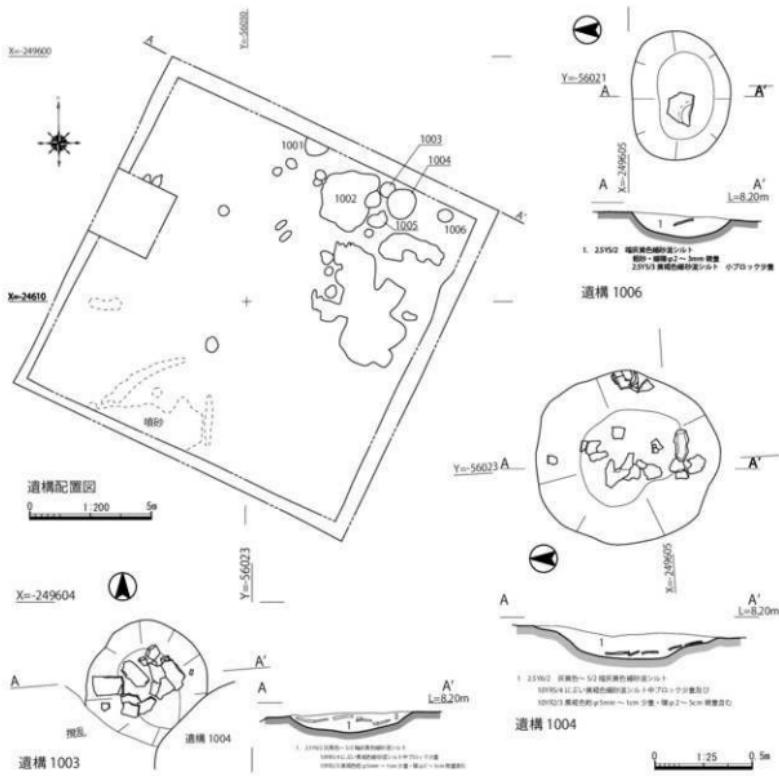


図 7 第 1 次調査 遺構配置図及び各遺構図

このほか、柱穴と考えられるピット9基を検出している。

2) 小結

第1次調査では遺構検出面上に土坑等を確認した。また部分的にサブトレンチを設け確認したところでは、更に下層において遺物包含層（図6の第3c～3g層）及び遺構とみられる落ち込み（図6のA・B）を確認し、弥生時代前期後半に帰属するとみられる土器片も出土したが、第2次調査において、当該地點に近接した範囲を調査した結果、これら（図6の第3c～3g層・A・B）は、遺構2001（自然流路）による自然堆積と判断された。遺構2001は当該地點付近で緩やかなカーブを描いて、侵食と堆積を繰り返していたと推測される。

（2）第2次調査

1) 調査区の設定

第2次調査の調査区及び地区割は図8に示す通りである。

図3及び図4のAに示すとおり調査区2-1では耕作土直下に第4層があり、この第4層上面で遺構検出を行った。第4層上面はほぼ水平で、下層が露出しているとみられる箇所もあったことから、一的に削平されたものと判断された。なお、Bの位置に第3層の堆積が僅かに存在するが、この部分は埋没した自然流路の直上にあたり、自然流路の埋没後、窪んだ地形となっていたところへ堆積した第3層が部分的に削平されず残存していたものと考えられる。

図3及び図4のE、F、Gでは、水田耕作土である第1層直下に第2層及び第3層の堆積がみられる。第2層はほぼ水平に堆積し、前述のとおりa～cに分層が可能である。このうち、上位の第2a層及び第2b層は平安時代後期から近世頃までの遺物を含み、この時期の水田耕作土及び床土と考えられる。また下位の第2c層はほぼ均質で、平安時代末から中世初頭までの遺物を含む。Hは調査区2-3東南端にあたる地点である。調査区2-3は第2次調査の調査地東端に位置し、ここでは平野部から丘陵裾部へ向かい緩やかに上る地形を確認した。また遺構検出面は第4層上面としているが、調査区2-3の東半では下層の細礫が露出している。

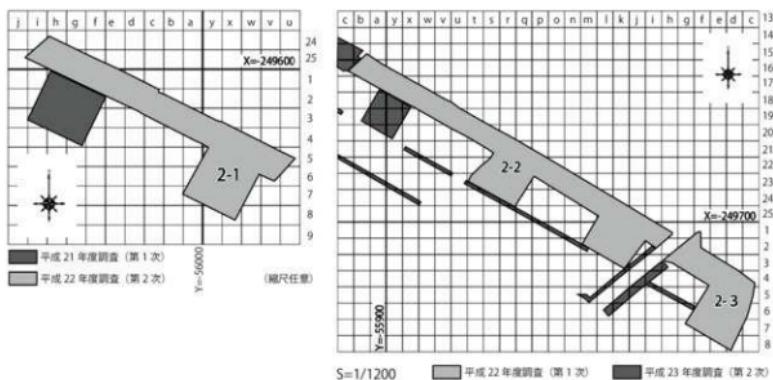


図8 第2次調査 調査区及び地区割（小区画）

2) 遺構と遺物

調査区 2-1

遺構 2001 (図9、図版4) 南北に延びる自然流路である。底部のレベルと調査区周囲の標高から、北から南への水流が推定される。埋土最下層は炭化物を多量に含むもので、弥生土器片が出土した。幅は8m以上とみられるが、調査区北壁土層ではこの流路が東西方向に位置や幅を変えている痕跡が窺い、遺構上端は東岸で明瞭に検出されたものの、西岸では極めて不明瞭であった。またこの流路の東岸と西岸では土質が異なっており、東側は細礫を僅かに含むシルト質土であるが、西側はシルトに細砂を含み、調査区の西側ほど細砂の混入が顕著となる傾向が窺えた。これは流路東岸では浸食が、西岸では堆積が進行していたことを示すものと考えられ、さらに東側へ緩やかな曲線を描いていたことが推定される。またその流量の変化により、西岸に形成された砂州状地形において堆積と流失と繰り返された結果、ここでは第1次調査の調査区北東壁土層（図6）に示すような複雑な堆積状況を呈することになったと判断された。埋土中の土器片は摩滅したものが多いが、弥生時代前期後半の土器（図30-1）が西岸に堆積した細砂中から出土しており、流路の時期はこれと大差ないものと考えられる。

遺構 2002 (図9・11) 長さ5.0m、幅1.0m、深さ0.2~0.3mの溝状遺構で、遺構2001に流れ込む。遺構2001にはほぼ直角に合流しており、人為的に掘削された可能性が高い。また遺構2001との合流点付近には遺構内から3個の自然石が出土しており、ここに堰等が設けられていた可能性がある。弥生土器の底面（図30-4）が出土しており、遺構2001に流れ込む状況から、これと同時期であると考えられる。

調査区2-2

調査区2-2では径0.2~0.4m程度の浅いビットを多数検出したが、これらは断面に明瞭な掘形を示す

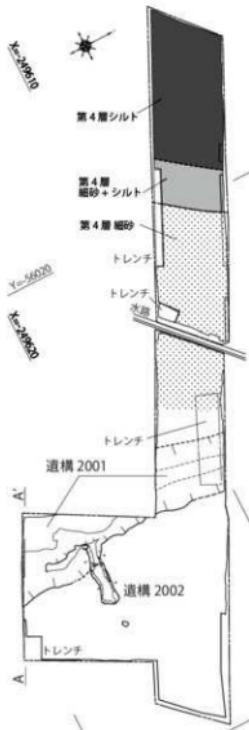


図9 調査区2-1 遺構配置図
S=1/400



図10 調査区2-1 遺構2001 土層図

もののが少ない。これらの埋土はほぼ全てが第3a層の暗青灰色土である。

遺構2191 (図12・17、図版5) 径0.4m程度の、円形に炭化物が集中する遺構である。炭化物が集中する範囲の周囲は土色が灰白色に変化している。

遺構2254 (図12・16、図版4) 長径1.6m、短径1.4m、深さ0.18m程度の浅い土坑である。土坑内には弥生土器が据え置かれた状況で出土した。弥生時代前期後半の竈とみられるが、土器は摩滅が著しく、脆く多数の破片となっていたため、復元・図化し得なかった。本来有ったと考えられる、遺構検出面より上の部分は欠損しており、出土状況から埋藏であるとは考えにくい。

遺構2258 (図12、図版5) 径0.7~0.8m、深さ0.08m程度のやや隅丸方形をした浅い土坑である。埋土は均質であり、弥生土器片が出土している。

遺構2289 (図12、図版5) 長径0.7m、短径0.5mを検出したが、一部調査区外に及ぶため全容は不明である。深さは0.18m程度で、埋土は遺構2258と同じ様である。

包含層の出土遺物 (図29・30・31)

調査区2-1の表土層からは近世陶磁器の摩滅した小片のほか、古墳時代以降の遺物も出土している。ただし今回の調査において同時期の遺構は確認されていない。

調査区2-2の包含層（第2層）からは弥生時代及び平安時代後期の遺物（図30・5~25）が出土している。18は石帶であるが摩滅が著しく、4分の3以上を欠損している。残存部分には垂孔が一部確認でき、潜り孔といった特徴が窺える。潜り孔は位置からみて3箇所或いは4箇所に、平行⁽⁷⁾に設けられたものと考えられる。石材はやや黄色かった白色であるが、種類の判別は困難である。穿孔方法に潜り孔の技法を用いていることから、平安時代後期以降のものと推定される。

調査区2-3

調査区2-3では調査区西半に第2層の堆積があり、東半では現代の耕作土直下が第4層となる。第4層より下層は礫を主体とする層の堆積が有って、調査区東端付近ではそれが第4層上面まで及んでいたため、第4層上面及びこの礫層上面で遺構検出を行った。出土遺物は、弥生土器の小片等が僅かに出土した。

遺構2335 (図13、図版6) 長さ5.0m、幅0.5mの畦畔状の遺構である。第3層上面において第4層の露出が南北方向の帯状に認められるもので、水田遺構の畦畔である可能性を検討したが、周囲との比高差は数cmと僅かで、また輪郭も非常に不明瞭であること等から、その可能性は低いものと考えられる。

遺構2336 (図13、図版6) 南北に長さ18.0mにわたり検出された溝状遺構で、幅は北側で1.4m、南側で3.0mを測る。遺物は弥生土器片等が出土しており、同時期の遺構である可能性が高いが、いずれ

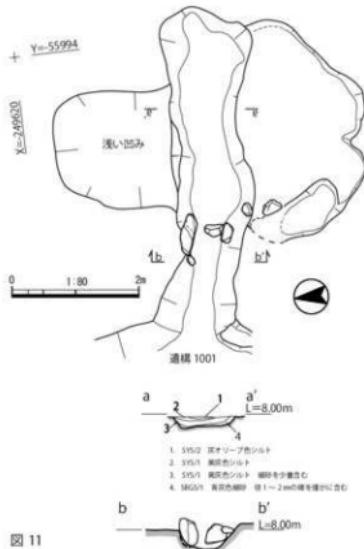


図 11

調査区 2-1 遺構 2002 平面及び土層・断面見通し図

S=1/80

も摩滅の著しい小片であり、時期の特定は難しい。

3) 小結

第2次調査では、調査区2-1から2-3にわたる東西約250mの範囲において、その旧地形を把握することができた。調査区1-1は現況で削平されているが本来は微高地であったと推定され、そこから東へ徐々に標高が下って調査区2では低地となる。さらに調査区3では調査地東側の丘陵へ向かい緩やかに上る傾斜なる一連の地形を復元することができる。

調査区2-2では第4層の上面において広く堆積する第3a層が確認された。第3a層の厚さは場所によって不均一であるが、第4層上面の地形に沿ってより標高の低い箇所へ集中し、南北方向に延びる数条の流路状の痕跡を残していることから、この低地に一時的な第3a層の流入があったと考えられる。

またこの第3a層の堆積はその上面及び下面において一部攪拌された状況が窺え、調査区2-2を含む一帯は絶えず水が流れ込む低湿地となっていたことが推定される。

(3) 第3次調査

1) 調査区の設定

調査区のうち、調査区3-1、3-2、3-3、3-4、3-5-1、3-7-4は八丁田圃遺跡、調査区3-5-2、3-6は目座遺跡にある。調査対象地は橋脚及び側道、水路の建設予定地となった場所であり、各調査区の地区割り（小区画）は図18に示すとおりである。

調査区3-1と、3-2の西半部分は第4層まで大きく削平を受けており、弥生時代の遺構は残存していないかった。このことから、少なくとも調査区3-1から現有の道路と水路の範囲を含み調査区3-2まで及ぶ東西70mあまりにわたり削平を受けているものと考えられる。調査区3-3の第4層上面は東南方向へ緩やかに下る傾斜となっており、溝等の遺構が検出されている。

調査区4、3-7-1、3-5-1、3-5-2、3-6、3-7-1、3-7-2、3-7-3、3-7-4にあたる一帯は弥生時代以降も低湿地であったと考えられ、当該各調査区で検出された第2層はこれらの調査区を含む東西80m以上の広い範囲にわたって堆積する。

調査区3-6では、第4層が東へと緩やかに上ることを確認しており、当該調査区付近が低湿地の東端にあたるようである。

2) 遺構と遺物

調査区3-1

現状では水田または畠地であり、調査区内のほぼ全面において、現代の耕作土である第1層の直下に第4層が検出された。この第4層上面では更に下層の第4b層等（図22）が露出しており、調査区の全体にわたって一様的に削平を受けていることが明らかである。

遺構3001（図版7） 調査区の東端に検出された遺構で、土坑の一部分であると考えられる。南北2.7m前後、東西3.0m前後にわたり、不定形な平面形状を呈するが、底面は比較的平坦である。ここから弥生土器の壺底部が出土している。

調査区3-2

調査区3-2の西半部分は削平を受けており、この範囲に遺構は検出されなかった。しかし、東端で第2層及び第3層を確認しており、第2層上面では畦畔状の遺構を検出した（図20）。この畦畔が検出された位置にはかつて里道が存在したとのことで、その里道はこの畦畔状遺構を踏襲したものであると判断される。この畦畔状遺構を形成する第2層を除去後に第4層を検出したが、調査区西半に検出した第

日座遺跡・八丁田園遺跡

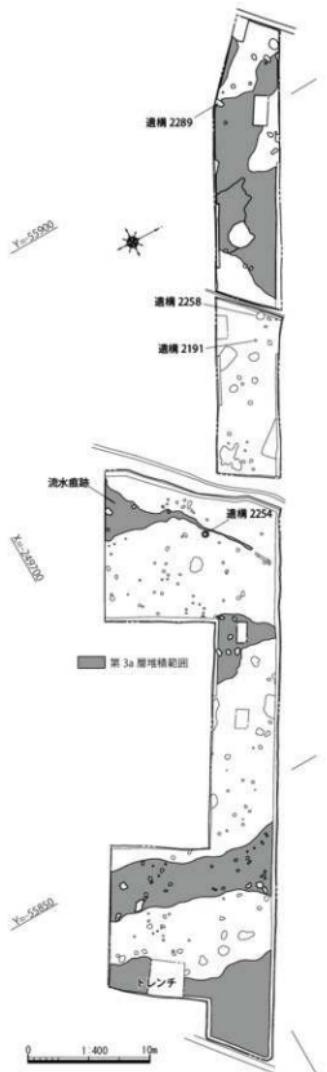


図 12 調査区 2-2 透構配置図

S=1/400

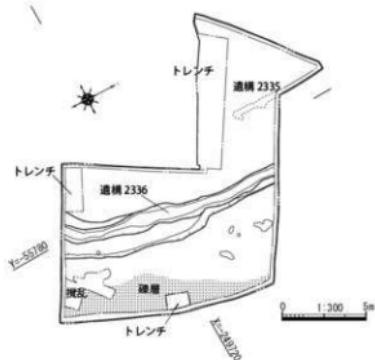


図 13 調査区 2-3 造構配置図 S=1/300

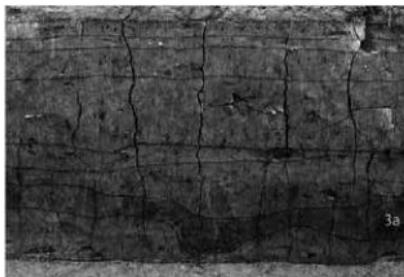


写真2 第3a層の堆積（調査区2-2南壁、北から）



写真3 調査区2-3北壁土層（礫層部分、南から）

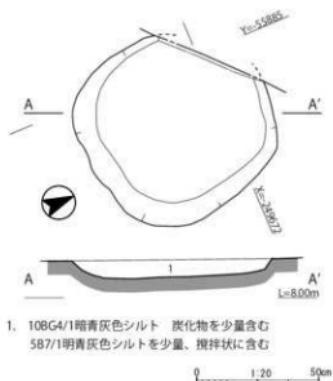


図14 調査区2-2 遺構2258実測図

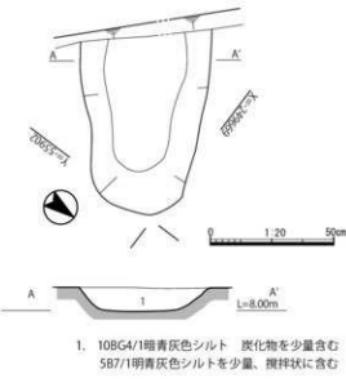


図15 調査区2-2 遺構2289実測図

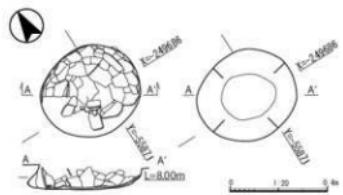


図16 調査区2-2 遺構2254実測図

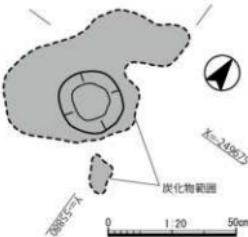


図17 調査区2-2 遺構2191実測図

4b層上面に連続するものではなく第4b層の上層にあたる第4a層であると判断され、弥生時代の遺構面が残存しているのはこの第2層に覆われた範囲のみであるとみられた。

遺構3008 長さ11.3mにわたって検出された溝状遺構で、幅1.6m、深さ0.43mである。幅、深さとも検出した範囲ではほぼ均一で、底部のレベルから北東から南西方向へと水の流れがあったものと推定される。図18に示す土層の第3a層は遺構3009の埋土及び調査区3-4以西において広範囲に堆積するものである。土層からは、第3a層が遺構3008の西側から遺構内に流入し、遺構309とした位置から東側へ溢れ出ている様子が窺える。遺物は突堤文系とみられる弥生土器(39)が出土しており、遺構の帰属時期は弥生時代前期であると判断される。

遺構3009 南北、東西とも3.3m以上の不定形をなす浅い土坑であるが、第3a層が遺構308から流出した箇所が土坑状を呈して検出されたものであると判断された。

調査区3-3

調査区3-3では第4層上面において遺構3007、3008等を検出した。

遺構3007 遺構3008は溝状の凹みを残して埋没しており、それへ流れ込んだシルトの堆積範囲を遺構3007とした(写真3)。なお、埋土は第2層の最下層である第2c層に酷似する。

遺構3008 調査区3-2において検出された溝状遺構と同一遺構であると判断されるものである。

当該調査区では長さ12.6mが検出されており、調査区3-2と合わせ長さ30m程度となる。遺物は敲き石（図31-51）が出土している。

調査区3-4

現代の水田耕作土の除去後、畦畔状遺構を検出している（図15）。また、第2層以下には調査区全体に第3a層の堆積がみられ、遺構検出面である第4層上面では20基近くのピット及び土坑3基が検出されたが、埋土はいずれも第3a層であり、遺物を伴わないことから樹根の痕跡等である可能性もある。同様の遺構は第2次調査における調査区2-2でも検出している。調査区中央には第3a層を埋土とする流水痕跡が検出された。

畦畔状遺構2（図21） 第2層上面に検出された遺構で、調査区の北西から南東へ長さ約8.8mが検出している。幅0.50m程度である。当該遺構の北側では第2b層、南側では第2a層を確認しているが、このことは畦畔の北側と南側では水田床土の高さに違いがあることを示す。

遺構3063（図21） 第4層上面に検出された遺構で、埋土は第3a層であり、第2次調査の調査区2-2等に検出されている流水痕跡にあたるとみられる。遺物は第3a層中から弥生土器の小片が出土しているが、摩滅が著しく、器種等は不明である。

調査区3-5

調査区3-5は3-5-1及び3-5-2に分かれ、いずれも道路の拡張部分にあたる。（図21）

調査区3-5-1は道路の西側に沿う調査区で、第2層から管玉（52）が出土した。第4層上面で遺構検出を行ったが、遺構は検出されていない。調査区全体に第3a層の堆積を検出しているが、土色は調査区3-4での検出時と同様ではなく、やや明るい色調を呈する。

畦畔状遺構3（図21） 調査区3-5-2では第2層上面に畦畔状遺構3を検出した（写真1,2）。長さは17.2mを測り、幅はほ0.50mでほぼ一定である。また調査区南側ではこれに伴うとみられる杭列も検出

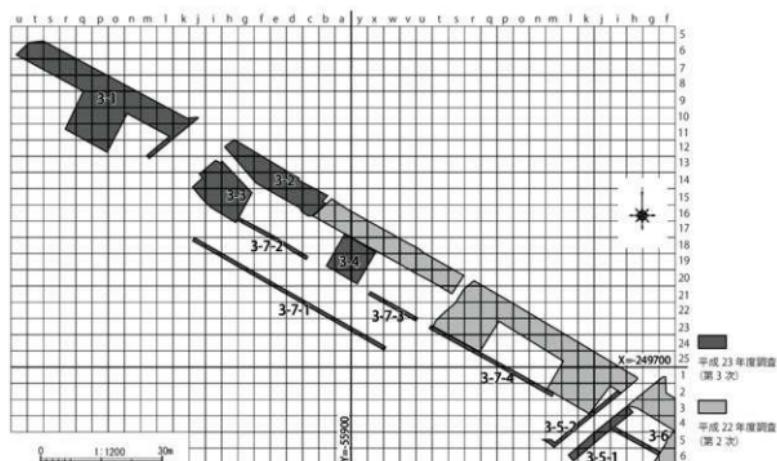


図 18 第3次調査 調査区及び地区割（小区画）

された。また当該遺構を形成する第2層から遺物の出土はないが、これに伴うとみられる水田耕作土からは近世陶器等が出土しており、近世頃まで畦畔として存続した可能性が高い。断面からは、水田の床土が東側においてやや高く、西側が低くなる状況が窺える。

遺構3086(図21) 長径1.6m、短径0.7m、深さ0.25mの楕円形をなす土坑である。埋土は2層に分かれるが、両層の境界に板状木片の痕跡を検出した。木片は樹皮に近い部分であり、スギまたはヒノキと判断された。埋土はいずれも遺構への流れ込みと判断され、本来土坑を覆うように板状の木片が被せられていたものと推定される。

調査区3-6

第4層上面で遺構検出を行ったが、遺構は検出されていない。第3a層の堆積はここでも確認されたが、調査区の西半分を覆う程度にとどまる。また、第4層上面は東側へ向かってゆるやかに上り、当該調査区近辺は低湿地の東端にあたるものと考えられる。

調査区3-7

水路の設置予定地となっている部分で、調査区3-7-1、3-7-2、3-7-3、3-7-4の各調査区に分かれている。ピット状の遺構が複数検出されたが、調査区3-4同様、樹根の痕跡である可能性の高いものである。当該調査区においては第3a層の広がりを検出している。

(5) 小結

第3次調査における成果は畦畔状遺構の検出、溝状遺構3002及び3008の検出、第3a層の範囲と堆積状況の確認等が挙げられる。

畦畔状遺構の検出は、その両側における水田床土面上に比高差が認められた。八丁田圃遺跡が所在する平野一帯は北から南へかけて、また、北東側の山裾から平野中央部へ向けて標高が下るが、畦畔状遺構の方向はこれに対応し水田への水回りを考慮して整備されたことによるといえる。

溝状遺構3002及び3008は、それぞれの帰属時期に差が認められるものの、いずれも北東から南西方向に延びており、これは第4層上面の等高線に沿うもので、当時の地形に沿った方向に掘削されたものと考えられる。調査区3-1及び3-2における削平の状況からみれば、旧地形ではこの付近が最も高所であったことが推定され、現在この位置にある水路が主に灌漑用であることからすれば、遺構3002及び3008も同様の機能を想定することができる。さらに現存の水路は一帯にみられる条里型地割の傾向と付合し、このときに整備されたものと推定される。

第3a層は、調査区3-2、3-6、3-7にかけての広い範囲で堆積が確認されたが、調査区3-2における遺構3009の検出により、この部分から低地に向かって流出したものであることが判明した。遺構3008からの出土遺物は多くないが、その帰属時期は弥生時代前期であると推定され、第2次調査において第3a

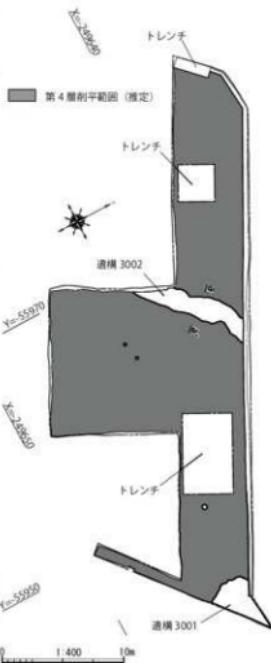


図19 調査区3-1 遺構配置図

目座遺跡・八丁田圃遺跡

層から出土した遺物が弥生時代前期とみられることも、このことを裏付ける。第3a層の堆積は八丁田圃遺跡における弥生時代前期及び中期の2時期を分けるメルクマールとなる可能性が高い。

第5項まとめ

今回の調査では、平野部において東西方向に長くトレチを設定した結果、弥生時代前期から中期における遺構の立地状況について、一定の手掛かりを得られた。

図28は、第1～3次調査において作成した調査区壁面土層を東西方向に繋げたもので、弥生時代前期から中期の遺構検出面である第4層上面の断面図である。比高差を明確にするため、水平方向の縮尺(S=1/2000)と垂直方向の縮尺(S=1/400)は同一としていない。

この図では、今回の調査において確認された、アルファベットのAで範囲を示した微高地と、Bで範囲を示した谷状の低地が存在することが分かる。またCは自然流路及び溝等、遺構がまとまって存在する範囲を示している。

微高地は4箇所あるが、西側のA及び流路を挟んで東側の3つのAが連なる部分の2つのまとまりが認められる。図では、西側をA1、東側のまとまりをA2～A4としている。これらの部分を微高地としたのは、その周辺の地形がAの方向に高まる傾向を示していたことと、検出面上での観察では、

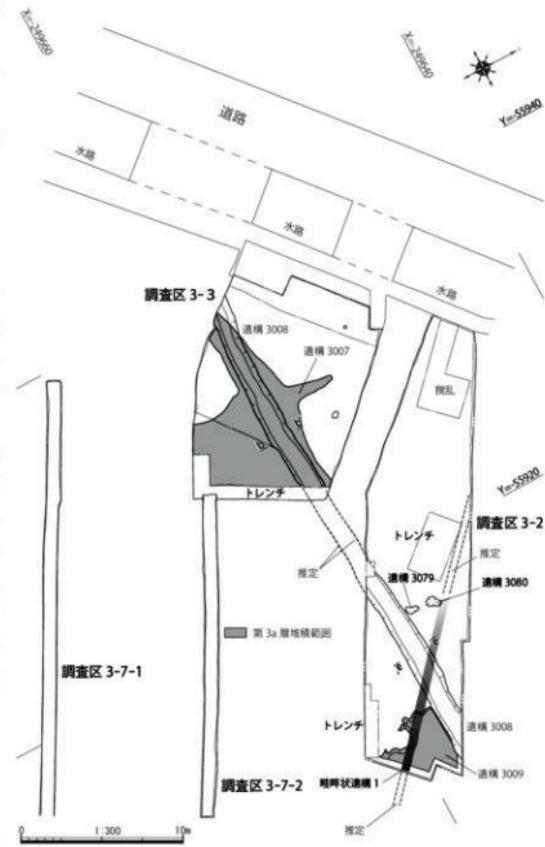


図20 調査区3-2、3-3、3-7-1、3-7-2 遺構配置図



写真3 調査区3-2 遺構検出状況 (南西から)

第4a層より下位の第4b層等の露出が認められたことによる。さらに、これらの微高地は遺構の存在しない空白地となっている。

Bとして範囲を示した谷状の低地は、第3a層が堆積する範囲に相当する。第3a層は炭化物を含む暗青灰色シルトであり、遺構3009の位置において、遺構3008上端から溢れ出るように東側へ流出し、より標高の低い位置へと堆積する様子が窺える。またこの層は弥生時代前期の遺物を含む。

遺構はCの範囲において顕著に認められるが、前述したとおりAには存在せず、第4層の下位または第5層以下の層が表出している。またBにおいてはわずかに遺構が存在する。

遺物の分布は、Cとその周辺において集中する傾向があり、Bにおいてもわずかながらみられる。ただし、Bの範囲内で出土する土器のほとんどは摩滅が激しく、土器以外では石器が少量出土している。またAのうち、第1次調査を実施した範囲では遺物の出土をみているものの、そのすぐ北側にある地点(第2次調査地点)では遺物がほとんど出土していない等、近接した地点においても、遺物の出土量が大きく異なる場合がある。

これらのこととは、当該調査地の旧地形と後世の土地利用に深く関わるものと考えられる。弥生時代前期から中期にかけて、当該調査地一帯は会津川の堆積作用により形成された周囲との標高差の比較的小さい微高地が点在する、起伏に富んだ地形であったと推定される。また、Aのような遺構の空白地は、遺構が集中するCに隣接して存在し遺構や遺物は確認されないが、これに隣接するCに遺構が検出され遺物の分布密度が高まることから、もとはC同様に遺構が集中していた可能性が高い。今回調査を実施した範囲内からは、会津川が現在と比べ大きくその流れを変えた形跡は確認されておらず、その周辺の微高地に遺構が展開していることが把握された。河岸段丘上に存在する微高地の後背湿地において適地を選び水田を営んでいた可能性も指摘できる。また、遺構面の削平を裏付けるものとして、溝3002の検出状況が挙げられる。溝3002は深さ0.2m程度の浅い溝として検出されたが、土層はその粒度から3層に分層可能で、上



図21 調査区3-2、3-3、3-4、3-5-1、3-5-2、3-6、3-7-1、3-7-2 遺構配置図



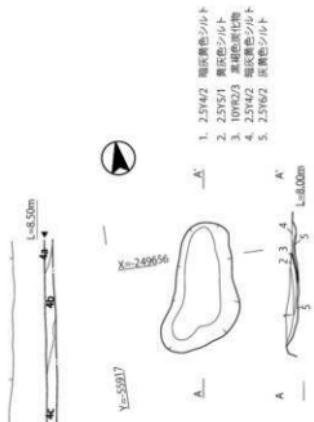
图26 调查区3-1 通海3079 条测圆 ($\leq 1/30$)
图27 调查区3-1 通海3002 土层圆 ($S=1/30$)



図24 調査区3-1 遺構3008 土層図 (S=1/30)



卷二



國26 調査区3-1 通算3079 実測図 (S=1/30)



1



図25 腹蓋区3-1 連繩3007、3008 土層図 (S=1/30)

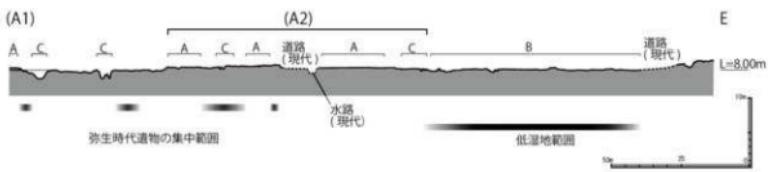


図28 第4層上面 断面図

層から細砂、粗砂、小礫に分けられる。各層の主体をなす砂粒の粒度が大きく異なることは、この溝が本来最下層に礫を堆積させる程度の水量と流速を保っていたことを意味していると考えられ、溝3002はその上部の大半が削平されており、本来の遺構上端は残存していないものとみてよい。

更にAの部分が削平された時期であるが、第3層直上に堆積する第2層は平安時代後期から鎌倉時代前期及び近世の遺物を含んでいる。Bで確認した第2a・2b層は水田耕作土と考えられ、層位的に把握することは可能であるが、水田耕作に伴い搅拌されている可能性がある。それに対し第2c層は床土であり、堆積時の状態を保っているとみられる。第2c層の出土遺物は平安時代後期から鎌倉時代前期を下限とするところから、この時期に大規模な削平が行われたとみることができ、現在当該地域一帯に確認される地割りはこの時期に整備されたものと考えられる。

さらにこの地割りの方向であるが、旧地形において北東から南西方向にかけ尾根状に標高の高い部分が続くことから、この部分に沿う方向を一定の基準とした可能性が高い。現有水路はいつの時期からこの位置に設けられているのか不明であるが、現在の道路の東側にあり、より標高の低い水田が存在する東側への水回りを考慮したものであろう。

また、区画された個々の水田については、平安時代後期以降の地割整備時において、調査区3-4第1遺構面にみられたように、整備前の地形状況に応じて1区画ごとに段差を設け、各水田への取水を容易にしていた可能性が高い。



写真4 第3a層遺物出土状況（調査区2-2）

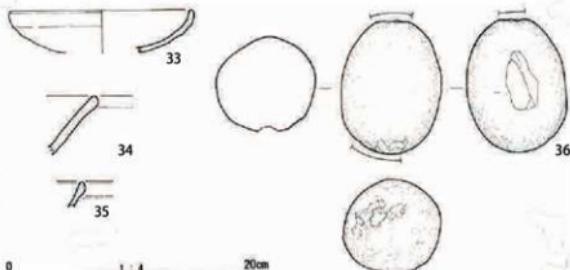


図29 遺物実測図

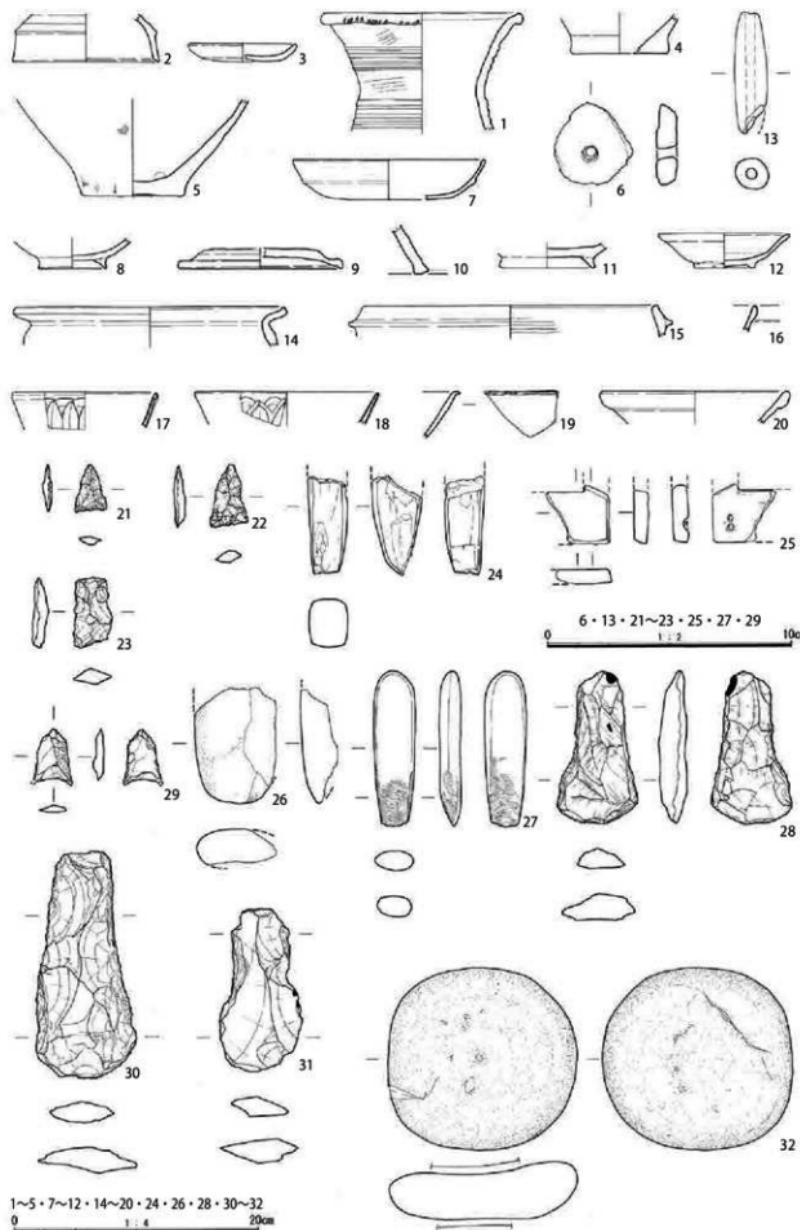


図30 遺物実測図

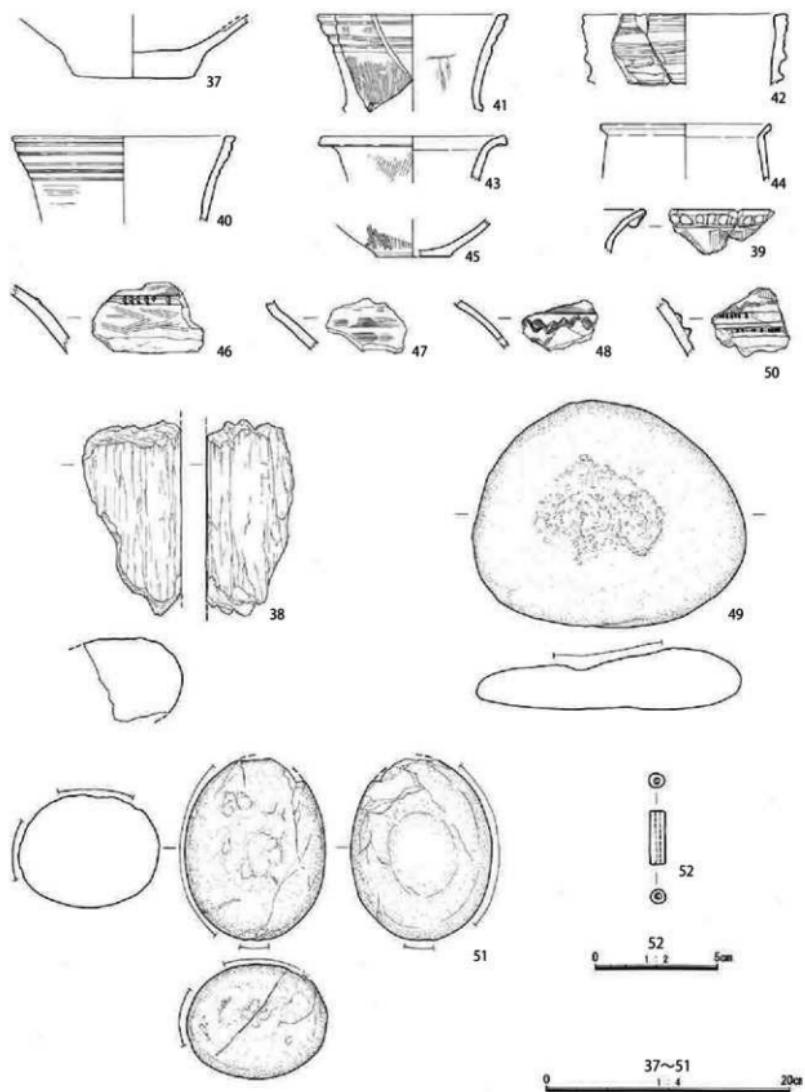


図31 遺物実測図

目座遺跡・八丁田塗遺跡

土器一覧表

登録番号	國・都道府県	種類	調査地区	過機	口径 cm	高さ cm	基盤 cm	性状等	色調	歩移・技法・特徴等
1 国30 國版52	佐生土器 正口巣	2-1 A7	2001 2層	(16.1)	残5.7	口縁15% 底部40% 外: 黄褐色2.3YR6/4 内: 黄褐色2.3YR6/2	(内) に少し黒2.5YR6/4 底部40% (外) に少し黒2.5YR6/2	外面ハケ調壁等、削り出した突起の波線を残す。第1様式2 -3? 各地系か。		
2 国30 國版52	里窯器 巣	2-1 A7a2	1a層	(12.0)	残3.8	10%	(内) 反白N/ 外: 白N/7	(内) -7	天井部と口縁部の接は焼が目立ち、口縁端部は段差なし。やや小型。	
3 国30 國版52	瓦器 小皿	2-1 A7a2	1a層	(8.7)	1.5	20%	(内) 反白N/ 外: 反白N/7	(内) -7	側成形好、口縁部から裏部までヨコナリを施し、口縁端部を丸くする。底部外周はコビオサエ。	
4 国30 國版52	佐生土器 巣? 墓?	2-1 J1a2	2層		残2.2	(8.0)	底部25%	(内) 混合2.5YR6/2 (外) に少し黒2.5YR6/4 (内) 反白N/9	全体的に摩擦が強く、隕壁は不明である。	
5 国30 國版52	佐生土器 巣? 墓?	2-2 B2	2層		残6.0	8.5	底部25%	(内) 明褐色2.5YR7/1 天井部2.5YR6/2 線2.5YR7/6 底部2.5YR6/1 底部10% N/ 白反10YR8/2 (外) 混合2.5YR6/8	外内共とも摩滅が強く隕壁は不明であるが、外面にハケ調壁、内面は底部付近にササガラ跡がある。	
6 国30 國版52	佐生土器 耕作車	2-2 B2a20	2a層	高さ3.4	残2.2	厚0.8	不明 (外) 反白N/7	(内) 2.5YR6/2	土器身を再利用。不定形であるが、縁辺及び直面は摩滅が著しい。	
7 国30 國版52	土器器 皿	2-2 B2	2層	(15.6)	残3.0	口縁15% 以上	(内) 反白2.5YR6/2 (外) 反白N/	(内) N/	地土は焼成土で非常に黒いつぶである。全体的に摩擦が強く、隕壁は不明である。	
8 国30 國版52	土器器 皿	2-2 B2a1	2a層		残2.5	5.8	高台10%	(内) 反白10YR8/2 (外) に少し黒2.5YR6/1 底部2.5YR6/1 (外) 反白10YR8/2 (内) に少し黒2.5YR6/1 (外) 反白10YR8/2	底部付近のみ保存、基台は點打で斜面三角形に近く、ややfハ)の字に傾く。持続10-11世紀頃か。	
9 国30 國版52	里窯器 皿	2-2 B2	2a層	(13.4)	残1.7	口縁15%	(内) 反白N/6 (外) 反白N/7	(内) 反白N/6	ツマリは欠損、口縁端部はやや内傾する。	
10 国30 國版52	里窯器 器皿	2-2 B2a4	2a層	(15.0)	残4.0	脚10%	(内) 反白N/7 (外) 反白N/7 ~反白N/ (内) 反白N/	(内) 反白N/7	圓軸ナギによる調壁、端部はやや厚壁する。底成形時灰による自然黒の付着あり。	
11 国30 國版52	山系陶 器	2-2 B2a19	2層		残2.05	7.5	高台10% 全体	反白N/	ややハバの字に落基を付す。高台内面に落ちあと切痕は後のナグ調整によらず剥離。やや傾いてつり。	
12 国30 國版52	白磁 皿	2-2 D2a2	2a層	(5.4)	2.8	(5.0) 以下 白色	高台20% 以下 白色	反白N/6 (外) 反白N/6	高台は引出しがある。内面の化粧土を剥げ落す。見込み高輪に次輪状の付着有る。	
13 国30 國版52	佐生土器 皿	2区 J1a15	2層		残4.4	9.5以下	(内) 反2.5YR6/1 (外) 反白N/6 反白2.5YR6/1	(内) N/	直面付近か、貼り付けた突起に剥み目を施す。ハケ調整が部分的に認められる。	
14 国30 國版52	土器器 皿	2-2 D2a2	2a層	(22.0)	残3.2	口縁25%	(内) 明褐色2.5YR6/2 (外) 線2.5YR6/5 明褐色2.5YR6/6	(内) N/	底部下部をやや厚壁させ、口縁は端部を上方へつまみ上げる。外内面ともモザイク調隕壁不明。	
15 国30 國版52	土器器 皿	2-2 D2	2a層	(24.0)	残2.7	10%以下	(内) 5.5 (内) 反2.5YR6/2 (外) 6-6.5 (内) 明褐色2.5YR6/6	(内) N/	隕は粗く、保てずする。口縁端部は内側に内傾する平面面をつくる。内面はハケ調壁を施す。	
16 国30 國版52	白磁 碗?	2-2 B2a1	2a層		残2.2	10%以下	白色	反白2.5YR6/1 削	口縁は反白N/6	口縁は反白N/6で、外側は化粧土を剥げ落す。底成形時灰による自然黒の付着?時期は11-12世紀頃?
17 国30 國版52	青磁 碗?	2-2 D2a2	2a層	(12.0)	残2.0	10%以下	白色	明褐色10YR7/1	口縁は直口し、片切げ窓文で薄く厚壁する。腹は墨色で、底部は13-14世紀頃?	
18 国30 國版52	青磁 碗?	2-2 D2a25	2a層	(15.0)	残2.2	10%以下	(内-外) オリーバ反10YR6/2 削	反白N/	口縁は直口し、底部はへと直線的に延びる。墨文は片切口による。既東系系。	
19 国30 國版52	白磁 碗?	2-2 D2	2a層	(10.2)	残1.8	12%	白色	反白10YR9/1 削	反白N/	口縁端部を水平につくり、外反する。外面はヘアゼリ後端部か、太宰府編V-4?時期は平安世紀。
20 国30 國版52	白磁 碗?	2-2 D2	2a層	(12.4)	残2.7	口縁20% 白色	反白2.5YR6/1 削	反白N/	口縁外側をやや厚壁させ、化粧土を剥げ落す。太宰府編V-4?時期は平安世紀。	
21 国29 國版52	瓦器 皿	2-2 B2a2	2a層	(14.0)	残1.5	10%以下	(内) 反白N/ ~5.5 (外) 反白N/ 削	(内) N/	内外共とも摩滅が著しく、隕壁は不明である。	
22 国30 國版52	東播磨 須恵器	2-2, 2a層	2a層		残4.0	10%以下 全体	反白N/ 口縁端部	反白N/	口縁端部はやや厚壁させ、化粧土を剥げ落す。腹は直口し、底部はナグ調整を施す。	
23 国29 國版52	白磁 碗?	2-2 B2a3	2a層		残2.1	10%以下	白色	反白2.5YR6/2 削	反白N/	口縁端部はやや厚壁させ、化粧土を剥げ落す。腹は直口し、底部はナグ調整を施す。
24 国31 國版52	佐生土器 巣?	2-1 J1a10	3001 2層		残5.3	(9.8)	底部40%	(内) 線2.5YR6/2 (剥離部分) 剥離10YR6/1 底部40% (内) 黄褐色2.5YR6/1	(内) N/	内外共とも摩滅が著しく、隕壁は不明である。
25 国31 國版52	佐生土器 巣?	2-1 J1a15	2層		残3.7	10%以下	(内-外) 反2.5YR6/1 削	反白2.5YR6/2 底部2.5YR6/1	底部は折れ、外側にハケ調壁が認められる。口縁は折り返して厚壁させ、剥み目地に沿て押さええる。	
26 国31 國版52	佐生土器 巣?	2-1 J1a2	2層		残2.7	10%以下	(内-外) 反2.5YR6/2 削	反白2.5YR6/2 底部2.5YR6/1	口縁端部はナグ調整を施す。口縁に2条の凹縫を残せ、2条の突起を付す。内面ナグ調整。	
27 国31 國版52	佐生土器 巣?	2-1 J1a2	2層		残2.0	10%以下	(内) 反2.5YR6/1 削	反白2.5YR6/2 底部2.5YR6/1	口縁端部はナグ調整により水平につくる。口縁に3条の凹縫を残せ、2条の突起を付す。内面ナグ調整。	
28 国31 國版52	佐生土器 巣?	2-1 J1a2	2層		残1.8	10%以下	(内) 反2.5YR6/2 削	反白2.5YR6/2 底部2.5YR6/1	口縁端部はナグ調整により水平につくる。口縁に3条の凹縫を残せ、2条の突起を付す。内面ナグ調整。	
29 国31 國版52	佐生土器 巣?	2-1 J1a2	2層		残1.8	10%以下	(内) 反2.5YR6/2 削	反白2.5YR6/2 底部2.5YR6/1	口縁端部はナグ調整を施す。口縁に2条の凹縫を残せ、2条の突起を付す。内面ナグ調整。	
30 国31 國版52	佐生土器 巣?	2-1 J1a2	2層		残1.8	10%以下	(内) 反2.5YR6/2 削	反白2.5YR6/2 底部2.5YR6/1	口縁端部はナグ調整を施す。口縁に2条の凹縫を残せ、2条の突起を付す。内面ナグ調整。	
31 国31 國版52	佐生土器 巣?	2-1 J1a2	2層		残1.8	10%以下	(内) 反2.5YR6/2 削	反白2.5YR6/2 底部2.5YR6/1	口縁端部はナグ調整を施す。口縁に2条の凹縫を残せ、2条の突起を付す。内面ナグ調整。	
32 国31 國版52	佐生土器 巣?	2-1 J1a2	2層		残1.8	10%以下	(内) 反2.5YR6/2 削	反白2.5YR6/2 底部2.5YR6/1	口縁端部はナグ調整を施す。口縁に2条の凹縫を残せ、2条の突起を付す。内面ナグ調整。	
33 国31 國版52	佐生土器 巣?	2-1 J1a2	2層		残1.8	10%以下	(内) 反白N/ ~5.5 (外) 反白N/ 削	(内) N/	内外共とも摩滅が著しく、隕壁は不明である。	
34 国31 國版52	東播磨 須恵器	2-2, 2a層	2a層		残4.0	10%以下 全体	反白N/ 口縁端部	反白N/	口縁端部はやや厚壁させ、化粧土を剥げ落す。腹は直口し、底部はナグ調整を施す。	
35 国29 國版52	白磁 碗?	2-2 B2a3	2a層		残2.1	10%以下	白色	反白2.5YR6/2 削	反白N/	口縁端部はやや厚壁させ、化粧土を剥げ落す。腹は直口し、底部はナグ調整を施す。
36 国31 國版52	佐生土器 巣?	2-1 J1a2	2層		残2.1	10%以下	白色	反白2.5YR6/2 削	反白N/	口縁端部はやや厚壁させ、化粧土を剥げ落す。腹は直口し、底部はナグ調整を施す。
37 国31 國版52	佐生土器 巣?	2-1 J1a2	2層		残2.1	10%以下	白色	反白2.5YR6/2 削	反白N/	口縁端部はやや厚壁させ、化粧土を剥げ落す。腹は直口し、底部はナグ調整を施す。
38 国31 國版52	佐生土器 巣?	2-1 J1a2	2層		残2.1	10%以下	白色	反白2.5YR6/2 削	反白N/	口縁端部はやや厚壁させ、化粧土を剥げ落す。腹は直口し、底部はナグ調整を施す。
39 国31 國版52	佐生土器 巣?	2-1 J1a2	2層		残2.1	10%以下	白色	反白2.5YR6/2 削	反白N/	口縁端部はナグ調整を施す。口縁に2条の凹縫を残せ、2条の突起を付す。内面ナグ調整。
40 国31 國版52	佐生土器 巣?	2-1 J1a2	2層		残2.1	10%以下	白色	反白2.5YR6/2 削	反白N/	口縁端部はナグ調整を施す。口縁に2条の凹縫を残せ、2条の突起を付す。内面ナグ調整。
41 国31 國版52	佐生土器 巣?	2-1 J1a2	2層		残2.1	10%以下	白色	反白2.5YR6/2 削	反白N/	口縁端部はナグ調整により水平につくる。口縁に3条の凹縫を残せ、2条の突起を付す。内面ナグ調整。
42 国31 國版52	佐生土器 巣?	2-1 J1a2	2層		残2.1	10%以下	白色	反白2.5YR6/2 削	反白N/	口縁端部はナグ調整により水平につくる。口縁に3条の凹縫を残せ、2条の突起を付す。内面ナグ調整。
43 国31 國版52	佐生土器 巣?	2-1 J1a2	2層		残2.1	10%以下	白色	反白2.5YR6/2 削	反白N/	口縁端部はナグ調整により水平につくる。口縁に3条の凹縫を残せ、2条の突起を付す。内面ナグ調整。
44 国31 國版52	佐生土器 巣?	2-1 J1a2	2層		残2.1	10%以下	白色	反白2.5YR6/2 削	反白N/	口縁端部はナグ調整により水平につくる。口縁に3条の凹縫を残せ、2条の突起を付す。内面ナグ調整。
45 国31 國版52	佐生土器 巣?	2-1 J1a2	2層		残2.1	10%以下	白色	反白2.5YR6/2 削	反白N/	口縁端部はナグ調整により水平につくる。口縁に3条の凹縫を残せ、2条の突起を付す。内面ナグ調整。
46 国31 國版52	佐生土器 巣?	2-1 J1a2	2層		残2.1	10%以下	白色	反白2.5YR6/2 削	反白N/	口縁端部はナグ調整により水平につくる。口縁に3条の凹縫を残せ、2条の突起を付す。内面ナグ調整。
47 国31 國版52	佐生土器 巣?	2-1 J1a2	2層		残2.1	10%以下	白色	反白2.5YR6/2 削	反白N/	口縁端部はナグ調整により水平につくる。口縁に3条の凹縫を残せ、2条の突起を付す。内面ナグ調整。
48 国31 國版52	佐生土器 巣?	2-1 J1a2	2層		残2.1	10%以下	白色	反白2.5YR6/2 削	反白N/	口縁端部はナグ調整により水平につくる。口縁に3条の凹縫を残せ、2条の突起を付す。内面ナグ調整。
49 国31 國版52	佐生土器 巣?	2-1 J1a2	2層		残2.1	10%以下	白色	反白2.5YR6/2 削	反白N/	口縁端部はナグ調整により水平につくる。口縁に3条の凹縫を残せ、2条の突起を付す。内面ナグ調整。
50 国31 國版52	佐生土器 巣?	2-2 J1a15	2層		残4.4	9%以下	(内) 反2.5YR6/1 削	(内) N/4-5 (内) 反2.5YR6/1	(内) N/	底部膨らみと底部端部が厚壁である。底部は底面付近までガキ、底部外周はナグ調整を施す。

石器一覧表

標名番号	器・遺物番号	基盤	調査区・地区	造構・層位	最大厚さ mm	最小厚さ mm	裏面	石材	保存率	備考	
13	遺30 遺版53	石製品 石器	2-2 B4	2a層	5.0	1.3	1.4	80%	墨反面？	70%	
21	遺30 遺版53	打製石器 石器	2-2 B17/19	3層上面	2.0	1.3	0.4	88%	サスカイト-	100%	
22	遺30 遺版53	打製石器 石器	2-2 B6/18	3層上面	2.0	1.5	0.5	1.4	サスカイト-	100%	
23	遺30 遺版53	打製石器 石器	2-2 B6	3a層上面	1.9	1.6	0.7	3.1	サスカイト-	不明	
24	遺30 遺版53	磨製石器 石材・刃 石器	2-2 B7/23	2a層	8.15	3.15	4.0	173.8	緑色片岩	35%	
25	遺30 遺版53	石器 石方	2-2 B6/4	2a層	2.8	2.6	0.65	5.4	不明	20%	
26	遺30 遺版53	磨製石器 石材	2-2 B1-3 3層上 面	8.6	6.7	3.1	277.8	砂岩	不明	刃形のみで大部分を欠損している。刃部先端のラインは平滑形で弧を描き基部両側面に向かう。	
27	遺30 遺版53	磨製石器 石器	2-2 B6	3層上面	6.4	1.7	0.9	15.9	真岩	100%	円錐の一部を刃部に加工。両刃であるが、片方からの剥落が激しい。
28	遺30 遺版53	打製石器 石器	2-2 B6	3層上面	12.4	6.6	2.3	178.7	真岩	100%	
29	遺30 遺版53	打製石器 石器	2-2 B7/20	3層	2.3	1.6	0.4	0.7	サスカイト-	100%	
30	遺30 遺版53	打製石器 石器	2-2 B7/21	3層	18.7	8.2	2.1	354.5	頁岩	100%	先端に使用跡とみられる。刃部には磨滅及び刃部先端のラインに沿って縦状の擦痕あり。基部両側面を斜段状に削離。
31	遺30 遺版53	打製石器 石器	2-2 B7/24	3層	13.3	6.6	2.0	213.5	真岩	100%	
32	遺30 遺版53	磨製石器 石器	2-2 B6	3a層	10.7	12.0	2.9	774.5	砂岩	100%	扁平な自然石を利用。片面が凹面状をなすが、片面に敲打痕及び擦痕が認められる。
36	遺30 遺版53	磨石器 磨石・鉢 石	2-2 B1	2-3層	11.1	8.1	7.7	301.0	砂岩	100%	4箇所に敲打痕が認められる。
38	遺30 遺版53	磨石器 石器	3-1 B1	3001 2層	16.1	8.0	7.8	1167	緑色片岩	不明	大部分を欠損しているため、形状は不詳である。石材の片面に古い断面形円形で柱状をなす。
49	遺30 遺版53	磨石器 石器	3-1 B17/8	3層	22.5	18.6	5.1	2730	砂岩	100%	
51	遺30 遺版53	磨石器 石器	3-2 B1/5	3008 1層	14.85	11.8	9.3	2075	花崗岩	80%	美化し、磨いた、4箇所に敲打痕が認められる。
52	遺30 遺版53	磨玉	3-2 B7	2a層	2.2	0.65	0.8	1.6	碧玉？	100%	両端から穿孔しており、孔内に粗末が認められる。

第2節 塗屋城跡

第1項 調査に至る経緯

(1) 調査に至る経緯

近畿自動車道紀勢線事業に伴う田辺～すさみ町間の自動車道建設により、その建設予定地が塗屋城跡として文化財包蔵地に指定されている範囲にかかることとなった。これにより、県文化遺産課ではこれにかかる平野部及び丘陵部について平成21年度に分布調査を実施した。この第2次調査によりそれまで知られていた曲輪と堀切の存在が改めて確認され、さらに堅掘の可能性があると考えられる地形も2箇所に認められたため、丘陵部について記録保存措置をとることになった。また、丘陵北側に存在する平野部についても試掘調査が実施されたが、その結果、埋蔵文化財の存在する可能性はきわめて低いと判断された。

以上の経緯により、財団法人和歌山県文化財センターは国土交通省近畿地方整備局紀南河川国道事務所の委託を受け、発掘調査業務を実施した。

掘削作業に先立ち、調査範囲において伐木・伐竹作業を行った。伐木・集積作業は、重機の進入できない急斜面については人力で実施した。

掘削作業は、調査範囲内の大部分が急傾斜地であったことにより、重機の進入できない範囲については表土から人力掘削を行った。掘削土は重機により移動して用地内に仮置きした。また、調査終了後は斜面から流出する濁水への対策として、調査地北側の丘陵裾平坦部に沈砂池を設けた。この発掘調査と並行し応急整理として遺物の洗浄及び登録を行った。

第2項 位置と環境

(1) 地理的環境

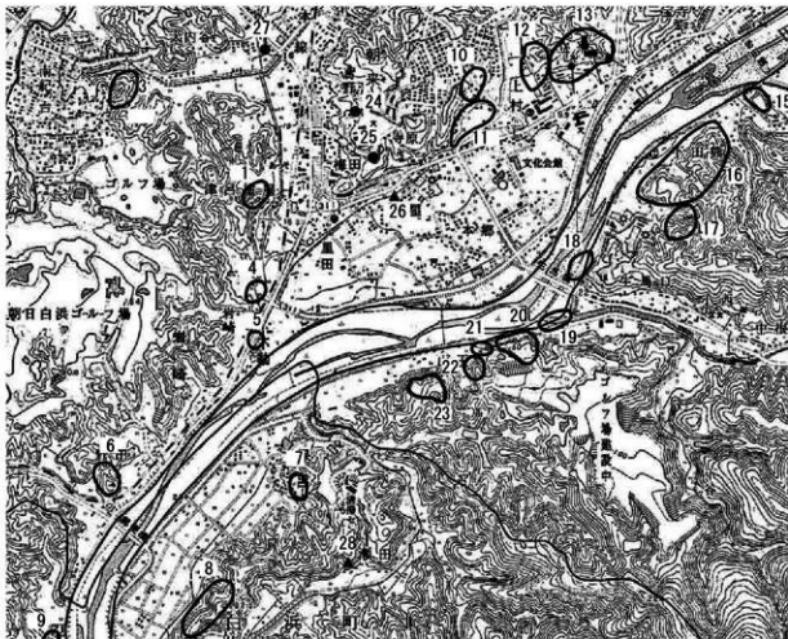
上富田町は西牟婁郡の西部に位置し、北は田辺市、南は白浜町と境を接する。町内を北東から南西へと流れる富田川は奈良県十津川村、果無山脈に源を発する延長46kmの二級河川である。紀伊水道に流れ込む富田川は中流域の上富田町付近において両岸に沖積平野と河岸段丘を形成しているが、塗屋城跡はその北岸の平野部北西端に位置する、丘陵から半島状に張り出す標高約51mを最高所とする尾根先端付近に所在し、川沿いに東方向へと広がる平野を一望することができる。田辺市の会津川下流域の平野へは約5kmほどの距離にあるが途中丘陵地を隔ており、現在は主要な交通路として国道42号のほかJR西日本紀勢本線が山間を縫って南北に延びる。なお、本遺跡はJR西日本朝来駅の南西約200mに位置する。

(2) 歴史的環境

上富田町内には、縄文時代から近世にかけての遺跡が数多く存在する。

縄文時代の遺跡としては早期とみられる石斧や後期の土器、石器が出土した平見遺跡(19)、後期、晚期の土器、石器が出土した市ノ瀬遺跡があり、両者はともに富田川とその支流との合流地点に立地する点が共通している。

弥生時代の遺跡は20箇所が確認されており、富田川及びその支流である岡川流域に多くが所在する。塗屋城の西約1.5kmの丘陵地には朝来銅鐸出土地がある。



1. 塗屋城跡
2. 大谷尾崎遺跡
3. 大内谷陣跡
4. 岩崎大浜遺跡
5. 不動山設置跡
6. 野田城跡
7. 保呂遺跡
8. 鴻巣城跡
9. 平遺跡
10. 塔ノ谷遺跡
11. 上村遺跡
12. 立平遺跡
13. 岩田古墳群
14. 三宝寺山狼煙跡
15. 舞鶴山城跡
16. 田熊遺跡
17. 田野丘遺跡
18. 生馬口遺跡
19. 平見遺跡
20. 山王遺跡
21. 日吉神社境内遺跡
22. 山王古墳群
23. 塚山遺跡
24. 朝来古墳
25. 朝来経塚
26. 馬川古銭出土地
27. ぬか塚遺跡
28. 潟田遺跡

図1 塗屋城跡及び周辺の遺跡 S=1/25,000

古墳時代には、朝来古墳（24）、岩田古墳群（13）、山王古墳群（22）等が築造される。山王古墳群は2基の円墳からなり、どちらも墳丘は削平されて現存しないが、周溝から径12m(1号墳)及び径7.3m(2号墳)の規模が推定されている。1号墳は主体部が現存しないが、墳丘裾に追葬とみられる組合式石棺が直葬されている。2号墳は組合式石棺を主体部としており、副葬品については詳らかではないが、発掘調査時に鉄斧等が出土しており4世紀末の築造と考えられる。岩田古墳群は2基の前方後円墳と1基の円墳、1基の横穴からなる。

平安時代より熊野への参詣道とされた熊野古道（中辺路）は、田辺市の万呂王子から三柄王子、八上王子を経て富田川沿いの稻葉根王子、鮎川王子へ至るルートが想定されており、塗屋城跡は熊野古道からやや南西にその位置にあることになる。

第3項 調査の方法

(1) 地区割りの方法

調査位置は図2に示すとおりである。実測図作成や遺物取上の際に用いた地区割りは、平面直角座標系第VI系（世界測地系）により大区画、中区画及び小区画を設定（図3）した。遺物の取り上げ等に用いるはラベルに、中・小区画名を記した。

大区画の原点は中区画の原点はX=-255000m、Y=-54000mであり、平成24年度に調査を実施した岩崎大泓遺跡、岩崎大泓II遺跡と同一である。これにより、塗屋城跡、岩崎大泓遺跡及び岩崎大泓II遺跡はともに大区画「A1」内に所在することになり、各々の位置関係は容易に把握できる。

また今回の調査範囲を含む丘陵全体は、中区画B6、C5、C6の範囲内に位置する（図3）。

(2) 基本層序

丘陵斜面の堆積状況を把握するため、斜面に直行するトレンチを数か所設定して確認した。層序は、第1層表土層である腐植土、第2層浅黄色～淡黄色のシルト層、第3層は岩盤片を多量に含む層で、第4層は岩盤である。第2、3層は部分的に堆積する層のため、掘削を行ったのは、基本的には表土層のみである。

第4項 調査成果

(1) 遺構

調査区内の分布調査で確認されたのは、堀切及び堅堀の可能性がある地形である。

堀切は調査地の南東部にある。曲輪が存在する調査地南西の丘陵地から伸びる尾根に直行する形で、尾根を切断する様に北西～南東方向に掘削されている。幅は上端部で4.8～5.2m、下部で1.6～2.8m、深さは最大2.4mである。（A-A'）底面は南東から北西に向かって下降しており、標高差は5.0m前後である。底部の形態は、現状ではほぼ平坦となっている（図5）。

堅堀は、分布調査で尾根線の北側においてその可能性が指摘された範囲にトレンチB-B'（図4.6）を設定して確認を行った。その結果、人為的な掘削が行われた可能性は



図2 調査位置図

S=1/12000

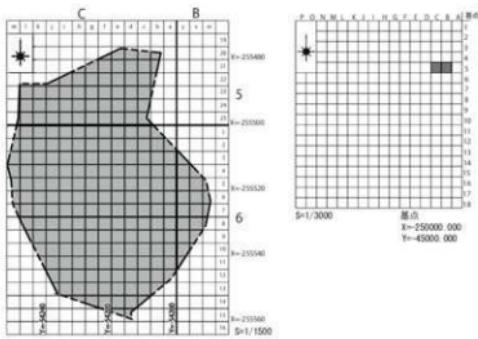


図3 地区割り 中区画及び小区画

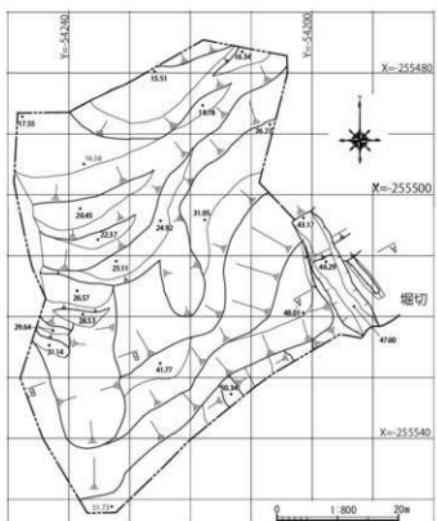


図4 地形測量図（表土除去後）

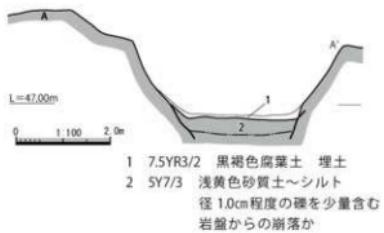


図5 堀切セクションベルト土層図

もあり、深さは最大 2.4m である。調査前の地表面観察で確認されていたように、底面は南東から北西に向かって下降しており、標高差は 5.0m 前後ある。背後に続く尾根を切断するもので、断面形状はいわゆる箱堀の特徴を持つ。

丘陵裾部の平坦地においても遺構は検出されず、遺物も出土していないが、当該平坦地は北、西、南を丘陵に囲まれた谷奥部となることから、こういった平坦地も地形の条件として築城時の選地に影響した可能性も考慮する必要があると考えられる。

上富田町域に存在する中世の城館跡は、当地を根拠地とした山本氏によるもののほか、天正 13 年（1585）当地を攻めた羽柴秀吉によるものが知られている。

山本氏は鎌倉時代に護良親王の倒幕に関わって現れ、紀南の南朝方勢力の中核に位置づけられる。室町時代の寛正元年（1460）には幕府の奉行衆をつとめ、紀伊国八庄司の一つとして熊野衆を代表する有力な国衆となり、富田川流域をはじめ、田辺・日高郡の一部を領有した。

低く、自然地形と判断された。

調査範囲の北側平坦部は表土層直下が粘土層であり、遺構・遺物共に確認されなかった。

(2) 出土遺物

今回の調査で遺物が出土したのは、西侧斜面の丘陵裾部分のみである。出土遺物は表土層からであり、量的にも極めて少ない。また、城郭に関連するとみられる時期の遺物は出土していない。

表土層から出土した遺物は古墳時代初頭と考えられる土師器（図 7-2・3、図版 53）と近世の磁器（図 7-1、図版 53）がある。高環（3）は、表面が磨滅した中空の脚柱部である。近世の遺物は、皿・椀等がある。椀（図 7-1、図版 53）は、見込み部分に 5箇所の針目跡があり、疊付は釉を搔き落としている。見込みには「寿」の文字が描かれ、高台には二重の圓線を巡らす。また外面には箋文が描かれる。時期は近世とみられるが、他に明治期の碗・皿なども出土している。

第5項 まとめ

調査の結果、堀切は曲輪が存在する丘陵頂部から延びる尾根に直行する形で掘削されており、幅は、上端部で 4.8 ~ 5.2m

塗屋城跡

『風土記新御饋ニ付御尋之品書上帳』によれば、塗屋城は天正13（1585）年、羽柴秀吉による紀州攻めの際に、その最前線として築かれたものとされるが、現在のところ、築城がその南征軍（寄せ手）によるものであるということについては決着をみておらず、山本氏やその他の勢力による築城の可能性も否定できない。

また、その構造から検討してみると（図8）、城郭としての規模は極めて小さいものであるといえ、虎口を含め、いわゆる織田系城郭の特徴が認められない。また、同様な単郭で小規模の山城は、木之本城等、和歌山県内では少なからず見られるものであり、これによって在地勢力の手によるものでないとはいえない。ただ、箱堀の堀切は特筆すべき点といえ、在地以外の勢力が関わった疑いが残る。（*8）

塗屋城が秀吉の南征軍により築かれたものであるとすれば、このとき朝来大内谷に陣を設けた南征軍は、富田川沿いに龍松山城を目指したと推定されるが、このときの本陣は田辺湾岸の神子浜に置かれたことから、富田川流域を睨む位置にあって、且つ田辺湾にも近い塗屋城は、その兵站を確保する。

兵站、或いは富田川を北から見下ろす丘陵縁辺部を、連携的な防御ラインとした場合の1点にあたること等といった面からも評価すべきであろう。

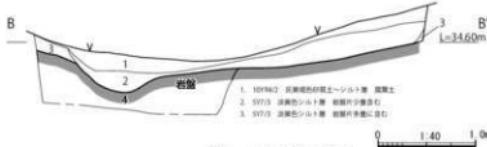


図6 トレンチ土層図

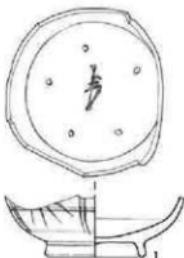
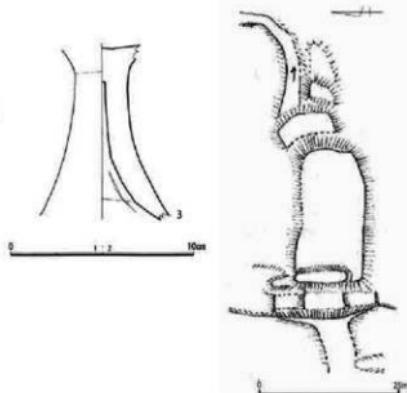


図7 出土遺物実測図



絵図：白石博則氏

（和歌山城郭調査研究会代表）

第3節 大古II遺跡

第1項 調査に至る経緯

近畿自動車道紀勢線事業に伴う田辺～すさみ町間の建設工事により、大古II遺跡、安宅本城跡としてそれぞれ埋蔵文化財包蔵地となっている2箇所の範囲に自動車道が建設されることとなった。このため県文化遺産課が平成21年度から22年度にかけて試掘確認調査を実施した。



- 1. 大古II遺跡
- 2. 安宅本城跡
- 3. 垂野遺跡
- 4. 安宅遺跡
- 5. 矢田遺跡
- 6. 大古I遺跡
- 7. 古武之間跡(古武之森城跡)
- 8. 大向出城跡
- 9. 八幡山城跡
- 10. 鶴山城跡
- 11. 大野城跡

図1 大古II遺跡及び周辺の遺跡（縮尺任意）

試掘確認調査は、大古II遺跡では開発予定範囲内の10箇所にトレンチを設定し調査を行ったところ、そのうちの8箇所において弥生時代の遺物が出土し、遺構面2面が確認された。その結果を受け、橋脚の設置が予定されている4箇所（調査区1、2、3、4）について本調査が実施されるはこびとなった。

安宅本城跡では開発予定範囲内に5箇所のトレンチを設定して試掘確認調査を実施しており、このうち1箇所で旧河道が、他の2箇所で溝状遺構や土坑が検出された。そのため当該地点が遺跡の縁辺部にあたると判断され、橋脚の設置が予定されている2箇所（調査区1、2）について本調査が実施された。

大古II遺跡では平成23年度に、当初橋脚部分にあたる4箇所について本調査を実施したが、その際各調査区は橋脚工事と調整しつつ実施しており、調査区3にあたる範囲は橋脚工事の作業ヤードとして使用することとなつたため、当該調査区の調査は次年度に持ち越した。また調査区5は平成24年度の調査において、調査開始後に新たに調査対象として追加となつた調査区である。

第2節 位置と環境

(1) 地理的環境

大古II遺跡は日置川下流域、河口付近の右岸に位置する。当該地域一帯は紀伊山地の西側縁辺にあたり、急峻な山間を蛇行する河川はその河口付近においてわずかに堆積平野を形成する傾向にあるが、日置川河口域周辺はそういった堆積平野の一つで、比較的安定した平地が広がることから、縄文時代から弥生時代、古代、中世にかけての遺跡が集中するところとなっている。

(2) 歴史的環境

大古II遺跡周辺における縄文時代の遺跡としては大古I遺跡（6）があり、ここでは縄文時代前期末の大歳山式土器、中期初頭の鷹島式土器、後期の元住吉山式土器が出土している。

日置川左岸の安宅遺跡（4）では1975年に発掘調査が実施されており、弥生時代とみられる溝が検出された。またその北約100mに所在する八幡山城跡（9）では弥生時代後期の土器が出土しており、高地性集落の存在が推定される。さらにその北100mに位置する矢田遺跡（5）では石包丁が採集されており、弥生時代の生活圏が河口域一帯に広がっていた様子が窺える。

古墳時代の遺跡は、古墳時代前期とみられる集落跡が安宅遺跡で検出されているが、現在までのところ古墳は確認されていない。

古代において、この日置川下流域は、律令制下の牟婁郡に属したものと推定される。八幡山城跡では2004年の調査において永樂通宝等とともに富本銭が出土しており、古代から中世における貨幣の取り扱いや流通を探る資料として貴重な発見である。日置川右岸の大古集落北側に位置する長寿寺はその創建年代が不明であるが、その境内地からは暦応5(1342)年の刻書がある備前焼大甕が出土しており、紀年銘を持つ備前焼としては最古のものである。長寿寺に伝わる平安時代中期（10世紀後半）の作とみられる本尊の薬師如来像、脇侍の日光、月光菩薩は必ずしも創建年代を示すものとは言えないが、少なくともその頃には当地域に寺院が造営され、一帯の中核地域的な様相を呈していたことも推定される。

鎌倉時代前期の天福元（1233）年には、当該遺跡を含む範囲における安宅荘の成立が文書により明らかとなっているが、中世には安宅氏が安宅荘とその周辺一帯に大きな影響力を持つよう

なる。安宅氏は安宅本城を本拠としてその水軍力を駆使した所謂水軍領主であり、戦国時代においては更に日置川を上流へとさかのぼった地域に本拠を構える小山氏とともに、鎌倉時代、南北朝時代から室町時代における武家勢力として活躍する。安宅本城跡は所謂「詰めの城」である八幡山城とひとまとめの、麓の居館にある。これらの城郭を中心として、安宅氏とその家臣団は安宅荘に比定される範囲を含む地域を中心に9箇所の城郭を築いていたことが確認されており、限られた範囲において多数の支城が築かれている点は特徴的なものである。これらは当該地域一帯において相互の連携を持った城郭群といえ、そこには紀伊水道、瀬戸内海方面からの海上交易における玄関口として機能した日置川河口付近の水運が大きく影響していたと推定される。

安宅本城の所在地を中心とした安宅荘は少なくとも鎌倉時代頃には成立しているが、中世の史料『慶長検地高目録』によると、安宅荘は岡田郷に属していたことがわかる。

第3項 調査の方法

(1) 地区割の方法

実測図作成や遺物取上の際に用いた地区割は、平面直角座標系第VI系（世界測地系（測地成果2011）による中区画、小区画を設定した（図2・3）。なお、中区画の原点はX=-268,000m、Y=-49,000mで、大古II遺跡及び安宅本城跡を網羅するよう設定した。

各調査区は、第1次調査・第2次調査とも大区画L6・L7・M6・M7の範囲内に位置する（図2）。

(2) 調査区の設定

調査区名は平成23年度分が調査区1・2・4・5、平成24年度分が調査区3・6・7・8となる（図

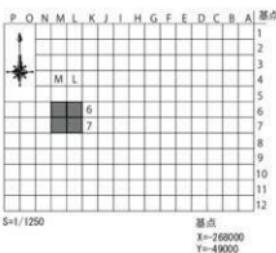


図2 地区割 中区画

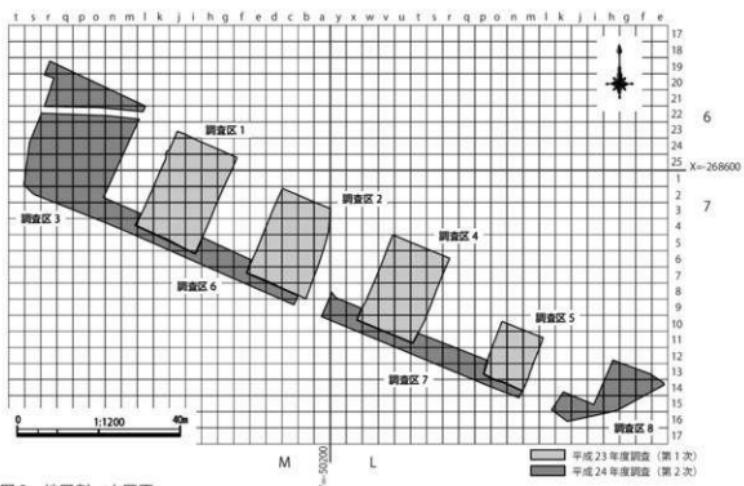


図3 地区割 小区画

3)。



図4 調査区位置図

第4項 調査成果

(1) 第1次調査

調査地は南北に細長く広がる微高地上にあり、調査区4を最高所として傾斜は概ね東西に向かって緩やかに下る。また調査区5付近ではさらに日置川方向へと下る傾斜が続く。

1) 基本層序

第1層が現在の耕作土及び床土、第2層が近世を含む耕作土及び床土である。第3層が弥生時代の包含層で、第3-1層と第3-2層に分層が可能であるが、時期的に大きな差はないものと判断された。第4層は地山である。遺構検出は第3層上面と第4層上面で行い、調査区4では更に第3-2層上面でも遺構検出を行った(図5)。

2) 調査区1

古代・中世の遺構

第1遺構面(第3層上面)で検出した遺構はいずれも出土した土器が細片で帰属時期の決定は難しいものの、層位や遺構面の標高から判断すると、調査区4の第1遺構面において検出された遺構と同時期である可能性が高く、古代の遺構であると考えられる。

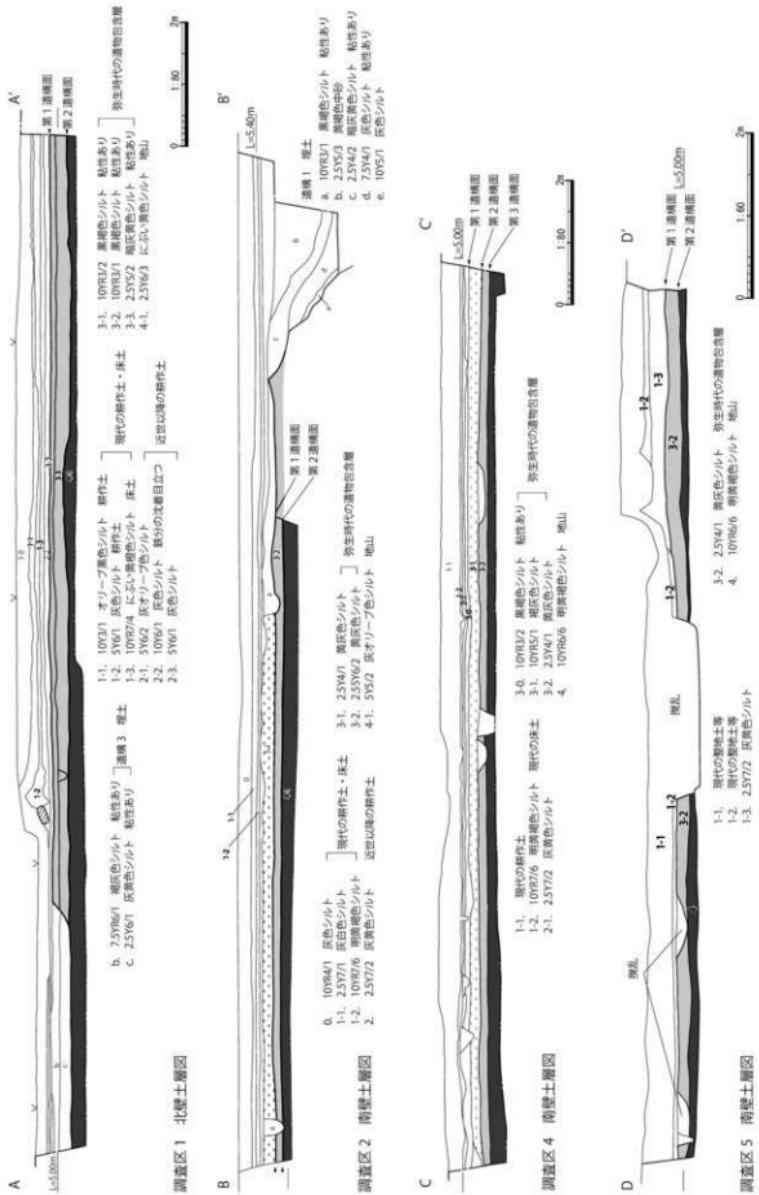


図5 各調査区土層堆積状況

遺構 1001 東西に延びる溝状遺構である。幅 0.6 ~ 1.9m、深さ 0.05 ~ 0.25m で、遺物は土器の細片が出土する程度である。

遺構 1002 浅い溝状遺構で、柵状遺構 2 に沿って東西に延びる。幅 15 ~ 20cm、深さ 5cm で、長さ 8m を測る。遺物は出土しておらず時期は明らかではないが、柵状遺構 2 との位置関係から、柵状遺構に伴う遺構であると考えられる。

柵状遺構 1 東西に並ぶ 6 基のビットから成る。各ビットは直径 20 ~ 28cm、深さ 10cm 程度で、間隔は 1.5 ~ 2.6m と開きがあるが、ほぼ一直線に並び長さは 11m までを確認しているが、調査区 2 において検出された柵状遺構 1 と位置関係や方向において同一性が認められることから、一連のものであると考えられる。時期については遺構 1 の埋土上に検出されていることから、遺構 1 より新しい時期に属すると判断される。

柵状遺構 2 東西に並ぶ 7 基のビットから成る。各ビットの規模は柵状遺構 1 とほぼ同じで、長さは 11.5m を測る。柵状遺構 1 及び 2 は 9.5m の間隔を空けて平行に設けられている。

弥生時代の遺構

第 2 遺構面（第 4 層上面）で検出された遺構は埋土に少量の弥生土器片を包含するのみであるが、第 3 層は弥生時代の遺物を含む包含層であり、当該遺構面で検出された遺構は弥生時代以降に属すると考えられる。

遺構 1018 平面形が円形を呈する土坑で、直径 1.0m、深さ 0.3m を測る。

遺構 1019 平面形が楕円形を呈する土坑で、長径 1.3m、短径 1.0m、深さ 5cm である。

畦畔状遺構 1 幅 0.3m ~ 0.7m で、L 字状に検出された。長さは東西 11.0m、南北 6.8 m であり、最もよく残存する箇所で高さは 0.1m 程度である。

3) 調査区 2

近世の遺構

第 1 遺構面では近世とみられる溝状遺構のほか、調査区 1 から連続するとみられる柵状遺構を検出した。

遺構 2001 調査区の東壁に沿って幅 4m 以上、長さ 21m を測るが、調査区内に検出されたのは全体のうちの一部分であると考えられ、幅は更に広くなるものと推定される。埋土は砂質土で崩落の恐れがあったため、掘り下げは上端から 1.5m までとしたが、出土遺物には近世陶磁器があり、近世以降に大部分が埋没したものと考えられる。

柵状遺構 1 調査区 1 において検出した柵状遺構 1 に連続するものと考えられ、ほぼ一列に並ぶ 5 基のビットを検出した。これらのビットは直径 0.1 ~ 0.28m、間隔は 1.2 ~ 2.1m で、調査区 1 で検出したものを含めれば、延長 37m 以上となる。

弥生時代の遺構

第 2 遺構面では弥生時代に帰属するとみられる柱穴、土坑を検出した。柱穴は調査区中央付近から東側に集中する傾向があったものの、掘立柱建物のプランを示すものはない。

4) 調査区 4

古代の遺構

第 1 遺構面では、古代の掘立柱建物 1 棟分の柱穴を検出した。

掘立柱建物 1 3 間 × 2 間で柱穴は 10 箇所を検出。更に建物内には補助的に設けたとみられる

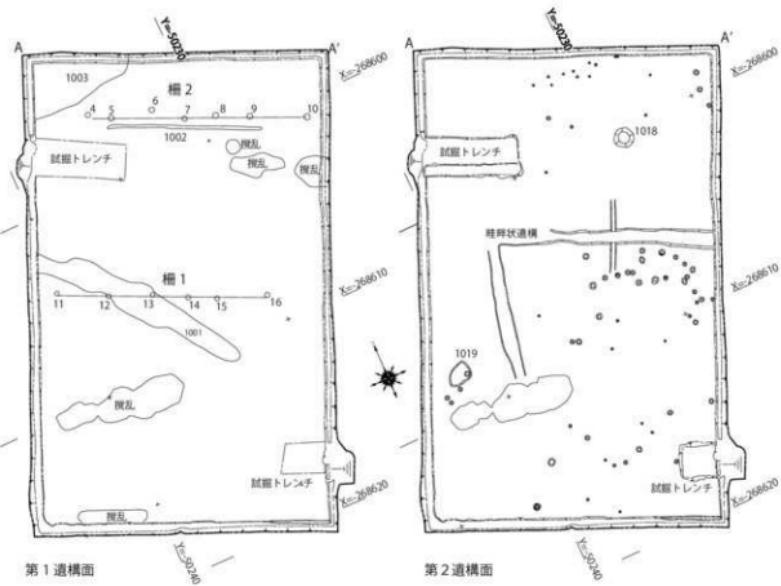


図6 調査区1 遺構配置図

0 1:250 10m

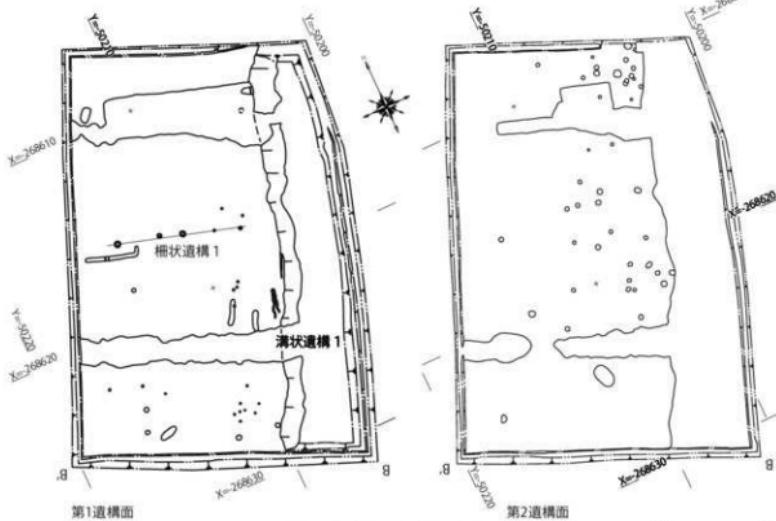


図7 調査区2 遺構配置図

0 1:250 10m

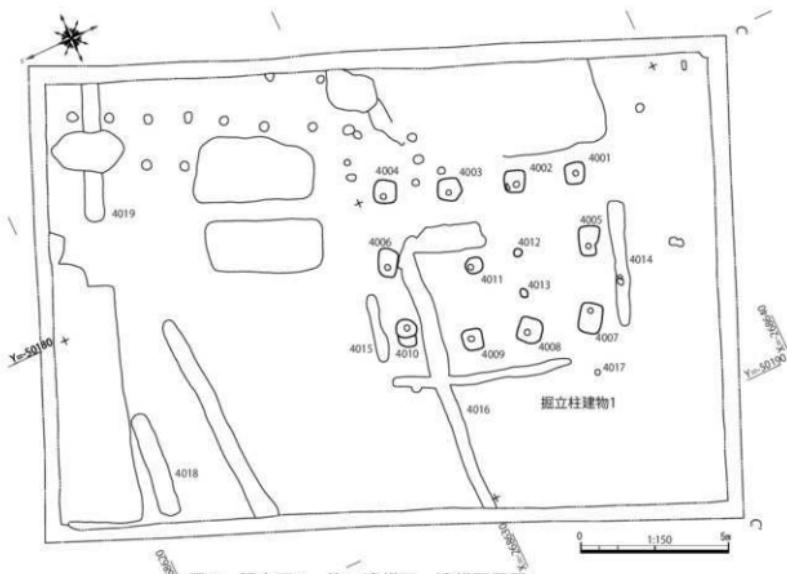


図8 調査区4 第1遺構面 遺構配置図

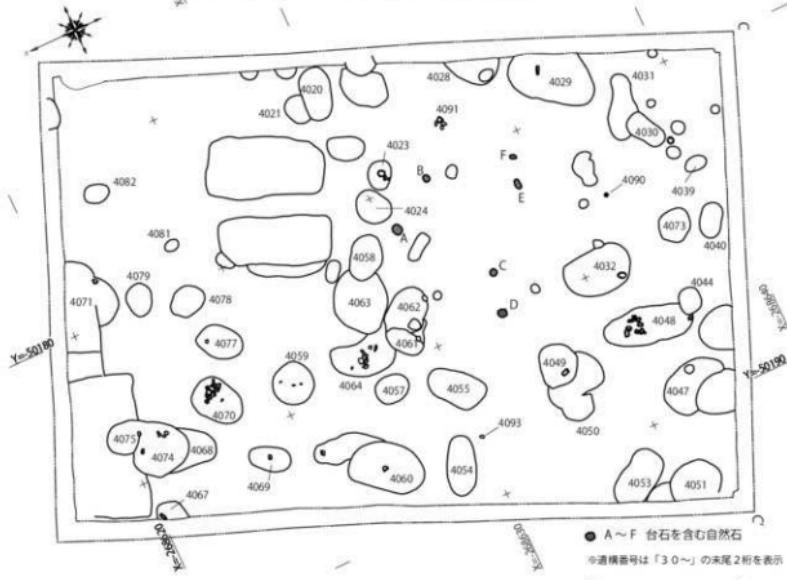


図9 調査区4 第2遺構面 遺構配置図

柱穴を1箇所確認している。また柱穴底部において、検出時とは異なる位置に柱当りを確認できる等、同じ位置において建て替えを行った形跡がみられる。更に建物の北側（遺構14）、南側（遺構4015）及び東側（遺構4016）に幅30～50cmの浅い溝を検出しており、当該建物に伴う遺構と考えられる。柱穴間は概ね2.0mであるが、北東隅にあたる柱穴がやや西側に食い違いを見せており、出入口の存在等が想定できる。掘形は隅丸の正方形または長方形に近い平面形で1辺60～90cmを測り、柱痕の直径は20cm程度である。柱穴からの出土遺物は弥生土器の小片や石器のみであるが、形状や規模等からみて時期は古代に帰属するものと考えられる。

弥生時代の遺構

第2遺構面では、弥生時代のものとみられる多数の土坑及び集石遺構を検出した。

遺構4020（図11）長径1.6m、短径0.9m、深さ0.2mの楕円形を呈する土坑である。

遺構4022（図11）長径0.8m、短径0.5m、深さ0.2mの楕円形を呈する土坑である。

遺構4026（図11）径が少なくとも0.9m以上と考えらえる土坑である。遺物は弥生土器の甕(7・9)が出土している。

遺構4029（図11）長径2.7m、短径1.5m、深さ0.68mの楕円形を呈する土坑である。

遺構4030（図11）長径1.2m、短径0.6m、深さ0.12mの楕円形を呈する土坑である。

遺構4031（図11）長径2.0m、短径0.8m、深さ0.14mの楕円形を呈する土坑である。遺物は敲石（139）が出土している。

遺構4032（図11）長径2.1m、短径1.4m、深さ0.54mの楕円形を呈する土坑である。遺物は石鐵（139）が出土している。

遺構4047（図11）長径2.0m、短径1.4m、深さ0.42mの楕円形を呈する土坑である。遺物はスクレイパーとみられる石器（47）が出土している。

遺構4048（図11）長径、短径、深さ 程度の楕円形を呈する土坑である。

遺構4049（図11）長径1.4m、短径1.1m、深さ0.36mの楕円形を呈する土坑である。遺物は弥生土器（6）、スクレイパーとみられる石器（125）が出土している。

遺構4050（図11）長径1.9m、短径1.2m以上、深さ0.36mの楕円形を呈する土坑である。遺物は弥生土器の甕（8・12）、スクレイパーとみられる石器（124）が出土している。

遺構4053（図11）長径1.8m、短径1.0m、深さ0.36mの楕円形を呈する土坑である。

遺構4058（図11）長径1.4m、短径1.0m、深さ0.46m程度の楕円形を呈する土坑である。遺物は土製の紡錘車（11）が出土している。

遺構4059（図12）径1.3m、深さ0.2～0.34m程度の楕円形を呈する土坑である。遺物は弥生土器の甕（15・22）、壺（14・16）が出土している。

遺構4060（図11）長径2.3m、短径1.4m、深さ0.46mの楕円形を呈する土坑である。遺物は弥生土器の甕（23）及び壺（18）、石器（120・121・137・141）が出土している。

遺構4062（図11）長径1.4m以上、短径1.0m、深さ0.2mの楕円形を呈する土坑である。遺物は軽石製品（142）が出土している。

遺構4063（図11）長径2.0m、短径1.6m、深さ0.51mの楕円形を呈する土坑である。遺物は石鐵（118）及びセスクレイパーとみられる石器（131）が出土している。

遺構4070（図12）長径1.7m、短径1.2m、深さ0.2mの楕円形を呈する土坑である。遺物は石

器（133）が出土している。

遺構 4073（図 12）集石遺構である。径 100cm、深さ 20cm の不定形な掘り込みに、径約 10cm の礫、長さ約 30cm の台石（143）を含む合わせて十数個の礫・石器が集中して出土した。礫は遺構検出面よりも高位において検出されており、掘り込み内に礫を積み上げた状況であったことが推定される。

遺構 4074（図 12）長径 1.8m、短径 1.7m、深さ 0.48m の楕円形を呈する土坑である。遺物は弥生土器の壺（24）、石器（130・140）が出土している。

遺構 4077（図 12）長径 1.4m、短径 1.0m、深さ 0.36m の楕円形を呈する土坑である。遺物は弥生土器の壺（19）、石器（123・126）が出土している。

遺構 4090（図 12）長径 1.8m、短径 1.7m、深さ 10cm の楕円形を呈する土坑内に台石等が重ねて納められた集石遺構である。

遺構 4091（図 12）台石を含む集石遺構である。浅い掘り込みを作るとみられるが明瞭には検出されなかった。遺物は弥生土器の壺（28）が出土している。

遺構 4093（図 12）集石遺構である。長径約 10～60cm の大小の礫及び台石等の石器合わせて十数個が、直径約 70cm、深さ 10cm 程度の楕円形に近い平面形を呈する掘り込み内で出土しており、礫はやはり遺構検出面よりも高位において検出されており、掘り込み内に礫を積み上げた状況であったことが推定される。

5) 調査区 5

井戸 1 室町時代頃に埋没したとみられる井戸である。比較的大きな礫を、小口面にあたる部分を内側にして積み上げている。遺物は青磁（29）、瓦質の羽釜（32）等が出土している。

（2）第 2 次調査

1) 基本層序

基本層序は第 1 次調査と同一である。第 1 層が現在の耕作土及び床土、第 2 層が近世を含む耕作土及び床土である。第 3 層が弥生時代の包含層で、第 3-1 層と第 3-2 層に分層が可能であるが、時期的に大きな差はないものと判断された。第 4 層は地山である。

2) 調査区 3

調査区 3 では遺構面を 3 面確認した。第 3-1 層上面を第 1 遺構面、第 3-2 層上面を第 2 遺構面、第 4 層上面を第 3 遺構面としている。

第 1 遺構面検出遺構

遺構 3001 幅約 2.1～3.9m、深さ約 1.0m を測る溝で、断面は V 字状となっている。遺物は須恵器の小片が出土していることから、古代に帰属すると考えられる。

遺構 3003 幅約 3.0m、深さ約 1.0m を測る溝である。延長約 10.4m を検出しており、断面は V 字状となる。遺構 3001 とともに、西側に存在する丘陵からの流水があったものと推定される。

柵状遺構 1 調査区の北端で検出した、7 基のピットからなるものである。延長約 4.5m にわたり検出したが、さらに北側に延長する可能性が高い。

第 2 遺構面検出遺構

第 2 遺構面では溝等の遺構を検出したが、埋土に含まれる遺物がきわめて少量であるため、

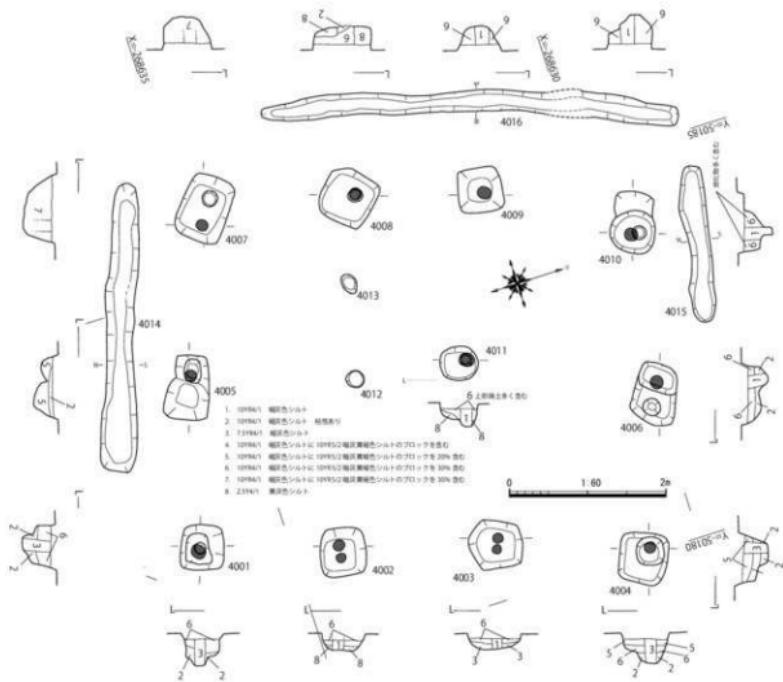


図 10 調査区 4 第1遺構面 掘立柱建物 1 S=1/60

帰属する時期は詳らかでないが、第1遺構面に検出した遺構の時期からすれば、弥生時代とみることができる。溝の流水は概ね北から南方向となるようである。

遺構 3002 幅 2.0 ~ 3.8m、深さ 1.0m の溝である。約 29.2m にわたり検出しており、断面は V 字状を呈する。底面のレベルから、遺構内には北から南への流水があったものと考えられる。

遺構 3006 幅 0.9 ~ 1.8m、深さ 0.7 ~ 0.8m の溝である。約 28.8m にわたり検出しており、断面は U 字状を呈する。

遺構 3051 幅 1.1 ~ 1.5m、深さ 0.45m の溝である。約 13.0m にわたり検出しており、断面は U 字状を呈する。調査区外の南北に延長するものと考えられる。

第3 遺構面

溝及び多数のピット、数基の土坑を検出した。

3) 調査区 6

調査区 6 では 2 面の遺構検出面において溝等の遺構を検出したが、調査区全体にわたり遺構は希薄である。第1遺構面では階段状遺構 1 を検出した。南北 5.5m、東西 3.3m にわたり、東から西方向へむけて 0.2m ずつ階段状に下がる 3 段の段差がある。これを覆う埋土の上層から須恵器片が出土した。第2遺構面からは多数のピットを検出下が、規模、形態は様々であり、性

大古II遺跡

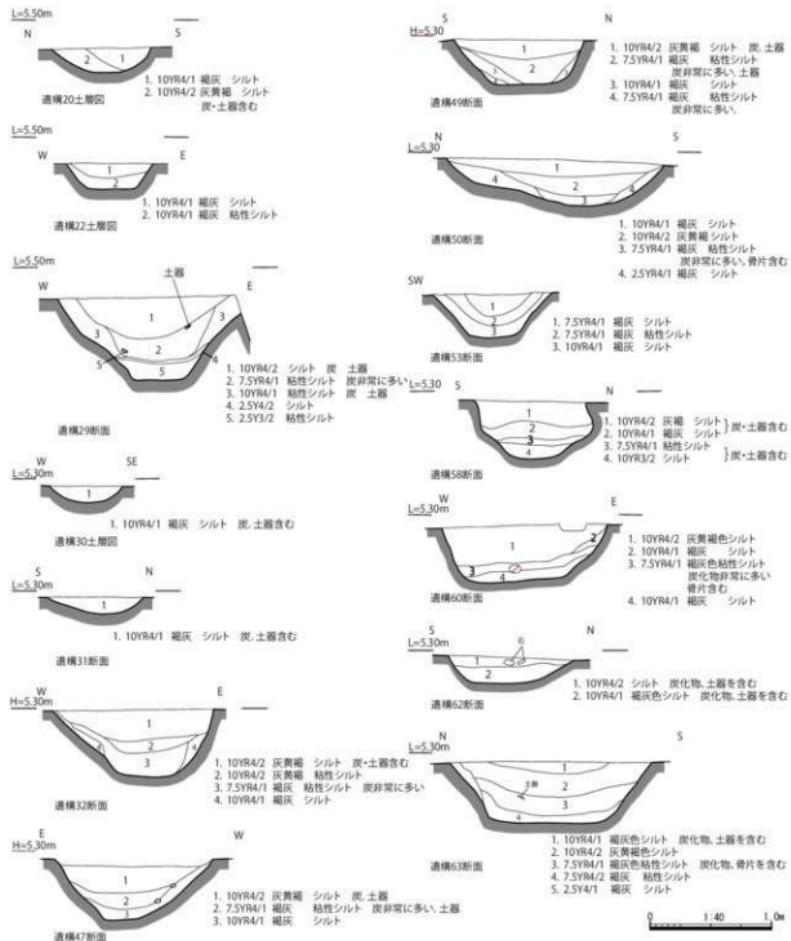


図11 調査区4 棱出造構土層図

格等は詳らかでない。遺構からは少量であるが、弥生土器片が出土した。

4) 調査区7

第1遺構面

遺構 7002 幅0.6mの溝である。延長4.6mにわたり検出した。深さは0.3mで、断面からは緩やかに立ち上がる逆三角形となっている。土師器皿が出土しており、時期は古代に帰属すると考えられる。

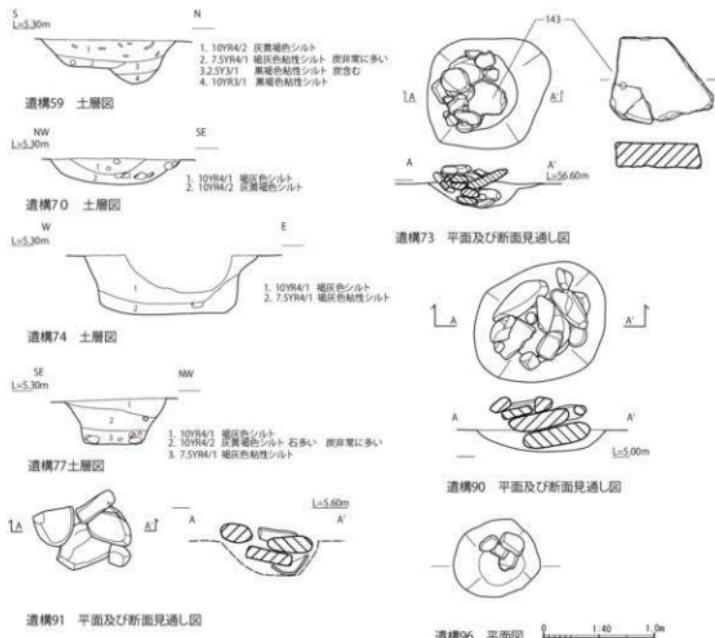


図 12 調査区 4 掘出遺構土層図

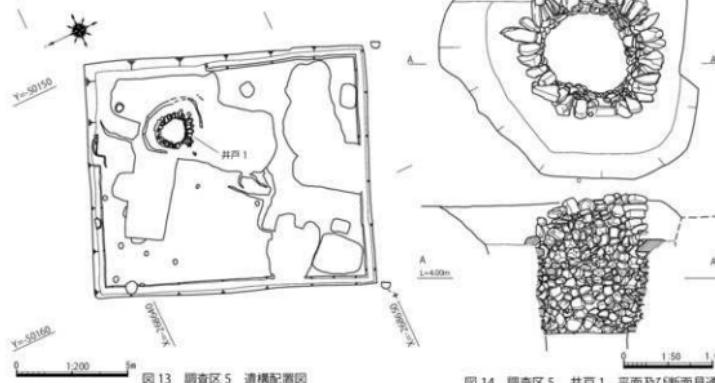


図 13 調査区 5 遺構配置図

図 14 調査区 5 井戸 1 平面及び断面見通し図

大古II遺跡

柱列1 径0.3mのピットが3基、北東から南西方向へ1列に並ぶ。溝7002と方向を同じくしており、関連性が窺える。また、ピットの一つ(遺構7025)からは、柱の沈み込み防止等、礎盤の用途を果たしていたとみられる石が出土している。

遺構7019 幅0.8mの溝である。南北5.1mにわたり検出しており、深さは0.2mである。埋土からは少量の弥生土器片が出土している。

第2遺構面

遺構7104 1.0m×1.8mの土坑で、楕円形に近い平面形をなす。深さは0.56mで多量の土器片及び炭化した種子等が出土した。土器片は弥生時代中期に属するもので、種子は詳細な分析を経ていないが、一部は大豆と考えられるものがある。廃棄のための土坑であるとみられる。

遺構7105 1.15m×1.0mの土坑で、円形に近い平面形をなす。深さは0.3mで多量の土器片及び炭化した種子等が出土した。土器片は遺構7104と同時期であり、弥生時代中期に属するものである。廃棄のための土坑であるとみられる。

遺構7059 幅0.15mの溝状の遺構である。深さは0.1mで、南北4.2mにわたり検出したが、少量の弥生土器片が出土したのみである。

遺構7060 幅1.2mの溝で、南北2.1mを検出した。

遺構7102 東西5m、南北3mを測る竪穴状の遺構である。北側は調査区外となり、全容は不詳である。遺物は、弥生土器が少量出土している。

第3遺構面

土坑1基及び複数のピットを検出した。遺物は、弥生土器が少量出土したのみである。

5) 調査区8

調査区8は、大古II遺跡として埋蔵文化財包蔵地に指定されている範囲の東端に位置する。近世の石垣のほかに検出された遺構はなく、2箇所において下層確認のためのトレンチを設定したところ、トレンチ1では地表から約2.8m下に河原石の堆積を確認した。またトレンチ2では砂質土及びシルトの堆積があり、第4層の堆積はみられなかった。

第5項まとめ

今回の調査では、古代と弥生時代の遺構が確認された。

弥生時代の遺構としては土坑、集石遺構がほとんどで、石器の出土が多い。遺構は土坑が多く、長径が1m以上ある比較的大きなものが多数を占める。これらはその中で火を焚いた等の痕跡はみられないが、埋土中に炭化物、骨片の混入がみられる。出土遺物は石鏃が比較的少量であるものの、刃器が多いことや、台石や敲き石の出土及び遺構73・90・93等にみられるような台石等の集積状況からは、ここで調理或いは皮革の獲得等に関わる獣類等の解体といった作業が行われたことが推定される。遺構4073・4090・4091等の集石遺構が存在する部分には土坑の分布が希薄で、集石遺構と土坑には位置関係において一定の相関関係があるものと判断される。また埋土に炭化物や骨片が含まれることからも、上記のような作業に伴いその残滓を廃棄した可能性が高い。

石器の石材はサヌカイトが少量含まれるもの、日置川流域とその近辺に産する石を多く用いているものとみられ、大部分は頁岩またはより变成の進んだ粘板岩である。また、大型蛤刃石

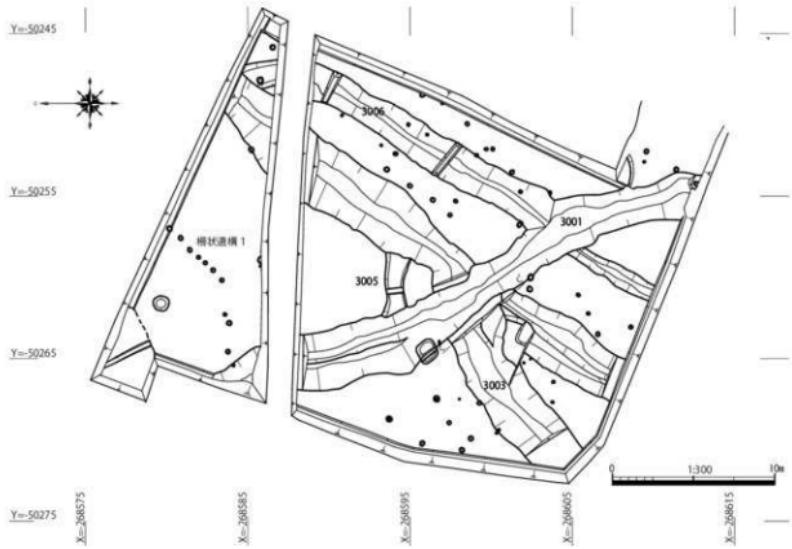


図 15 調査区3 第1・2遺構面 遺構配置図

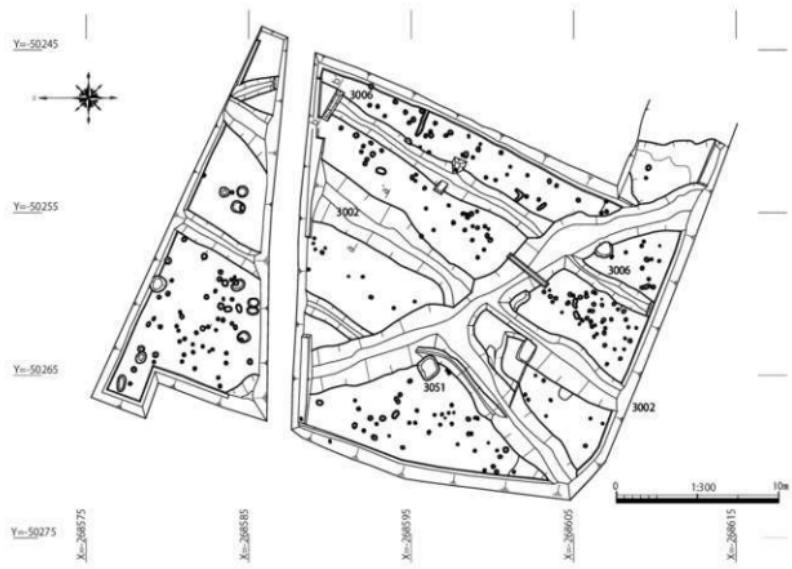


図 16 調査区3 第3遺構面 遺構配置図

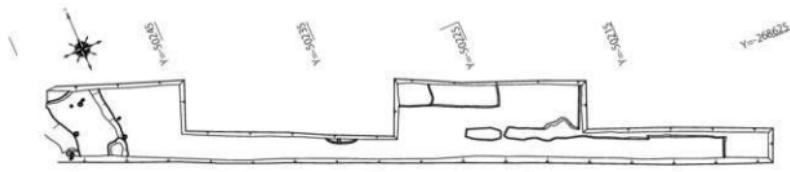


図17 調査区6 第1遺構面 遺構配置図

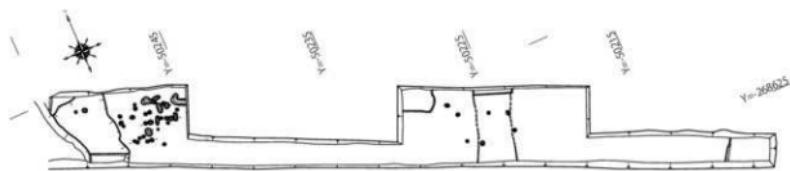


図18 調査区6 第2遺構面 遺構配置図

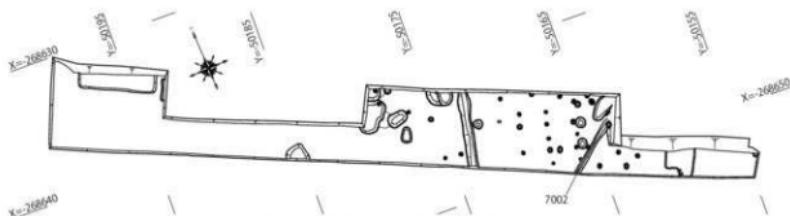


図19 調査区7 第1遺構面 遺構配置図

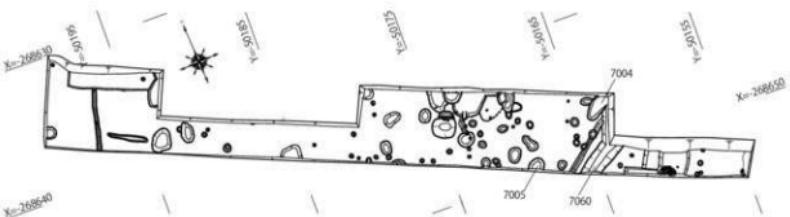


図20 調査区7 第2遺構面 遺構配置図

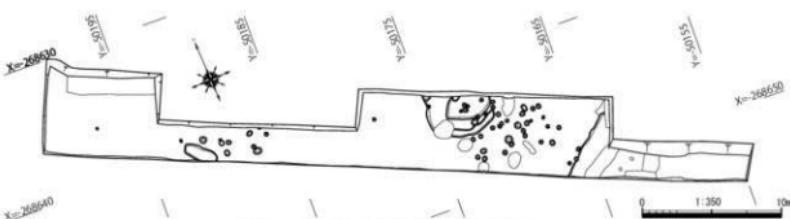
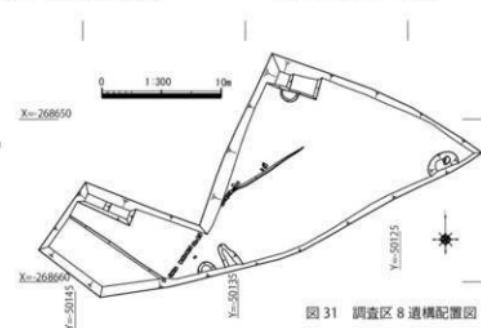
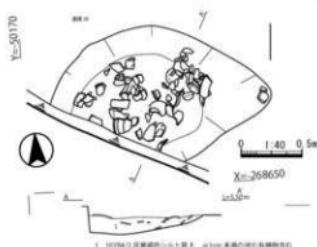
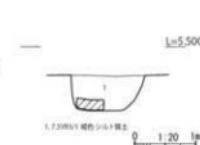
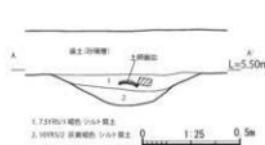
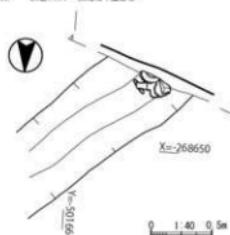
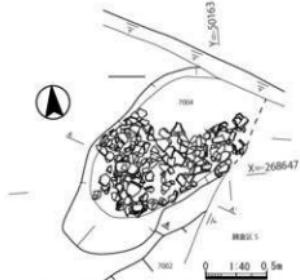
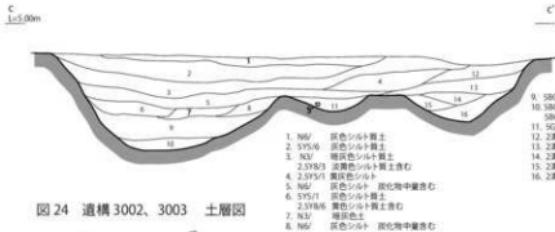
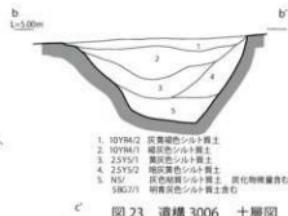
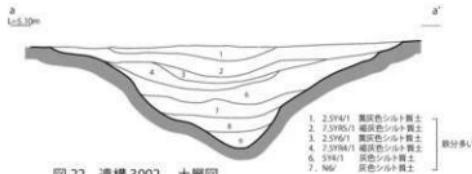


図21 調査区7 第3遺構面 遺構配置図

大古II遺跡



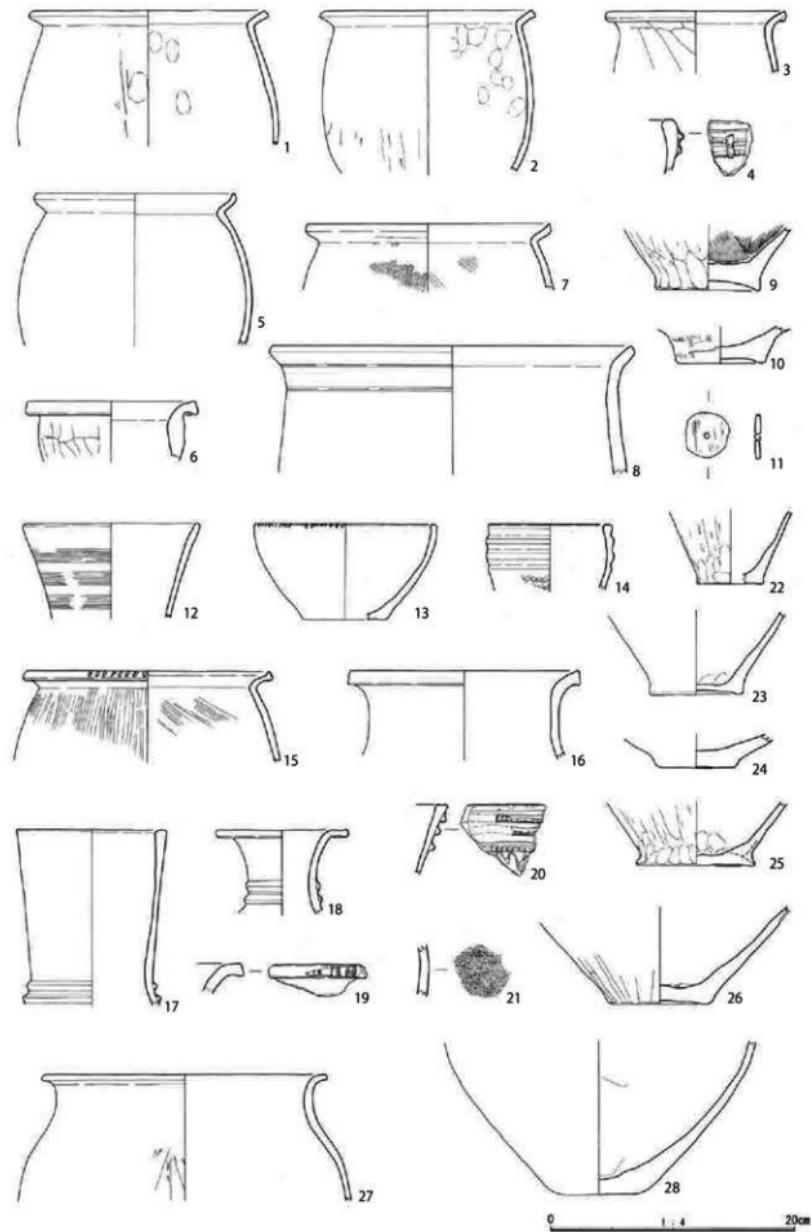


図32 遺物実測図

斧 160（遺構 4075 出土）及び 134 の石材は粗粒玄武岩であるとみられ、同様の岩石は潮岬の海浜で小さな転疊を拾うことが可能であり、その近辺では枕状溶岩のなかに岩脈もみられる。163 も玄武岩製であるとみられることから、石斧は概ね火成岩をその石材とする傾向があるといえ、紀伊半島南部に分布する熊野酸性火成岩類の使用を考慮する必要があろう。以上のこととは、本遺跡では石器石材を遠隔地に求めるのではなく、近辺に求める傾向を示すものといえる。

土器は沈線で区画された中に縄文を施すものや、頸部上位口縁部付近に貝殻による条痕を施すもの（51）等があり、尾張地方或いは伊勢湾西岸地方との交流を窺わせるものがある。

絵画土器は 2 点（71・72）出土しており、いずれも壺の肩部付近の破片である可能性が高い。71 は建物の屋根の一部と屋根飾り、柱や梯子を描いたとの解釈が可能であるが、絵画の全体像は不明であり、屋根と見られる部分が 72 に描かれる館歯文と同様の筆致であることや、梯子とみられる 2 本の線のうち、1 本は棟を突き抜けて描かれる等、建物とするには不自然な点も残る。屋根飾りは唐古・鍵遺跡出土例に酷似するが、大棟の端部に描かれることが多く、軒に付くとみられる本例に類似するものは、池上・曾根遺跡出土例等があるが多くのない。

第 2 次調査においては、調査区ごとに遺構の集中する範囲及びそうでない範囲を明確に把握することができた。第 1 次、第 2 次調査の最終遺構面の遺構配置を図 41 に示す。このうち弥生時代の遺構について検討すると、限られた調査範囲からの推定となるが、遺構、概ね北北西から南南東の方向へとその疎密を把握することができる。この方向は現在の等高線に直交するものであり、また日置川に向かって検出面の標高は下がる。調査区 4 は最も標高の高い位置にあり、調査区 7 近辺も微高地となっていることから、本遺跡では日置川北岸の微高地上に遺構が集中する傾向を指摘することができる。調査区 3 では溝が多く検出されたが、これらは採水可能な、やや標高の高い丘陵裾から、集落或いは水田への水のまわりを考慮した水路である可能性を指摘することができる。

調査区 4 で検出した掘立柱建物の時期は古代に帰属すると考えられるもので、この地域において一定の勢力が存在した可能性を指摘することができるが、当該時期の掘立柱建物の検出例や、調査区 2 における縄釉陶器の出土からは、これに官的な性格を帯びるという見方が可能となる。

今回出土した縄釉陶器は摩滅が著しいため調整は詳らかでないが、高台が円盤状の平高台であ

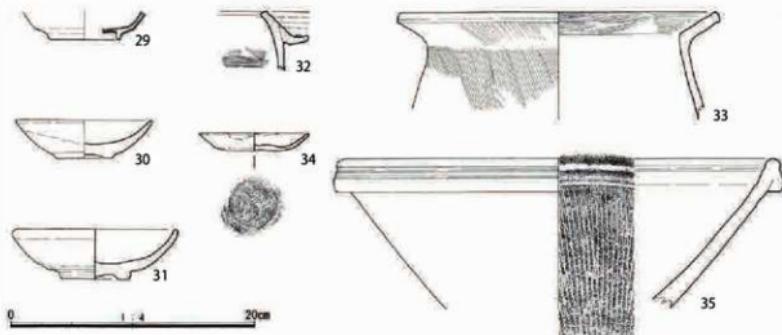


図 33 遺物実測図

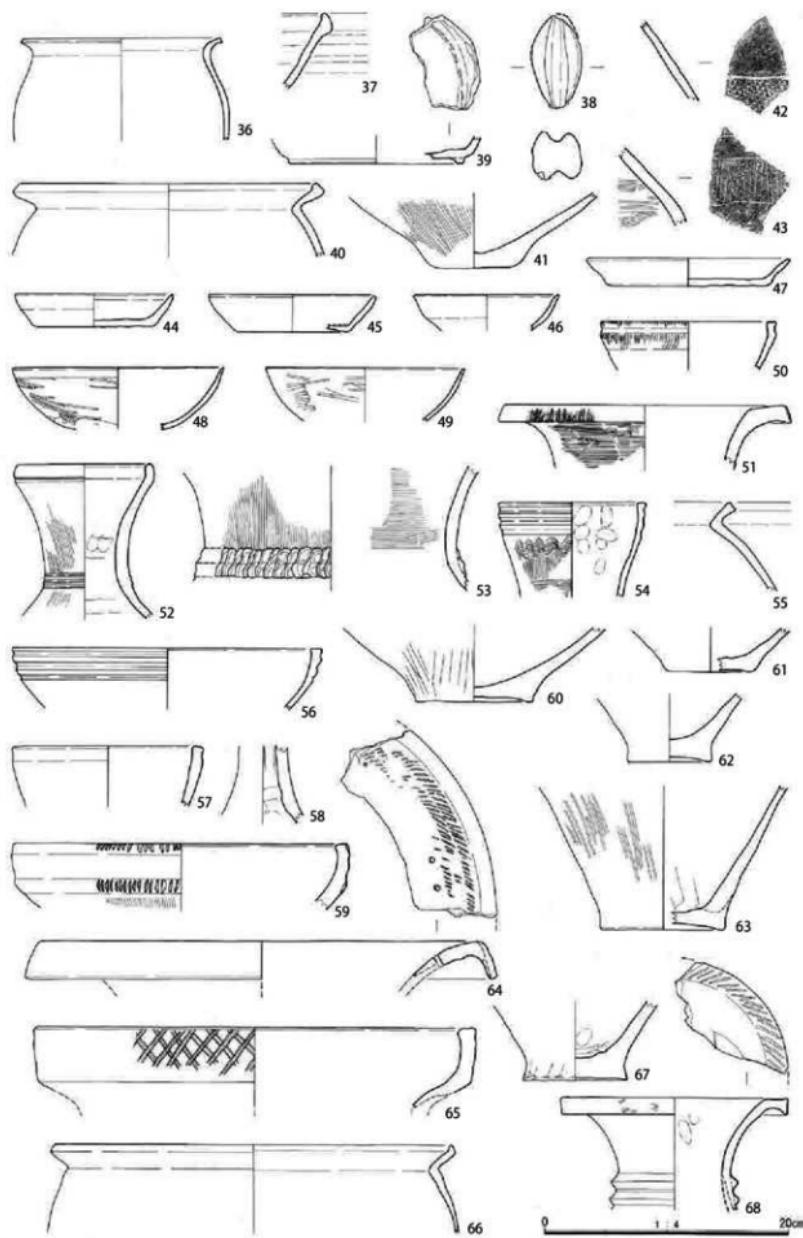


図34 遺物実測図

り、底面中央が僅かに凹む形状をなすこと、軟質に焼成され、釉は剥落は激しいが透明に近い淡い色調(*9)で、これが高台底面にも残存すること。器種は、底部径と体部の立ち上がり角度から、椀とみられる等の特徴から、9世紀から10世紀初頭頃の時期に帰属すると考えられ、山城産である可能性が高い。

日置川の恵みが当地一帯における遺跡の集中をもたらしたことは前述したとおりであるが、律令体制における官衙的な施設の選地も、同様の地理的条件による必然であったといえ、このことは、後にこの地域を含めた一帯が安宅莊として安宅氏の活躍をみたことからもうなづける。リアス式海岸が多く、海岸線の地形的条件が限られる紀南地方にあっては、比較的水流の穏やかな河岸に港の機能が求められたと考えられ、また紀伊半島沿岸を巡り伊勢湾に至るまでの交通路である海上路の中継点にあたる好条件の地といえよう。

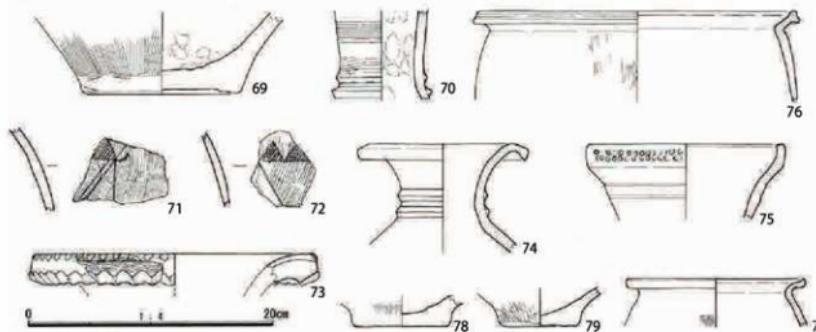


図35 遺物実測図

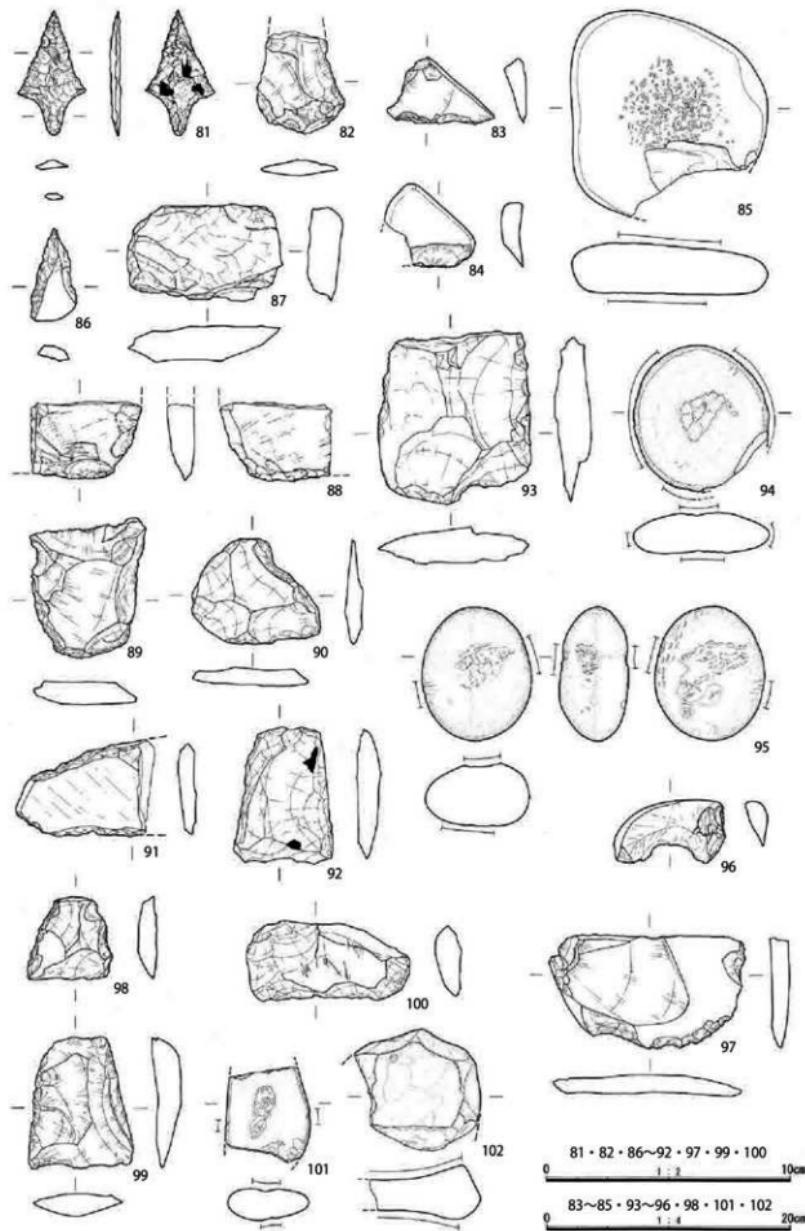


図 36 遺物実測図

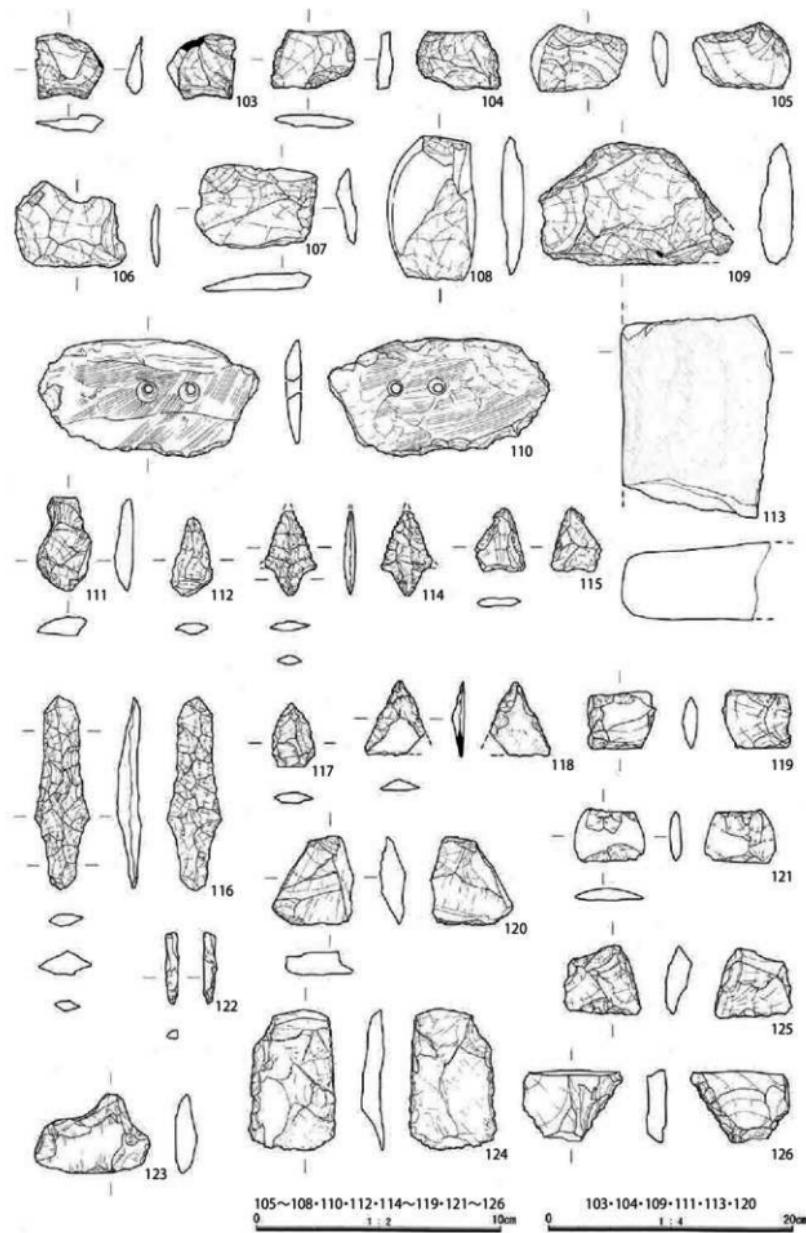


図37 遺物実測図

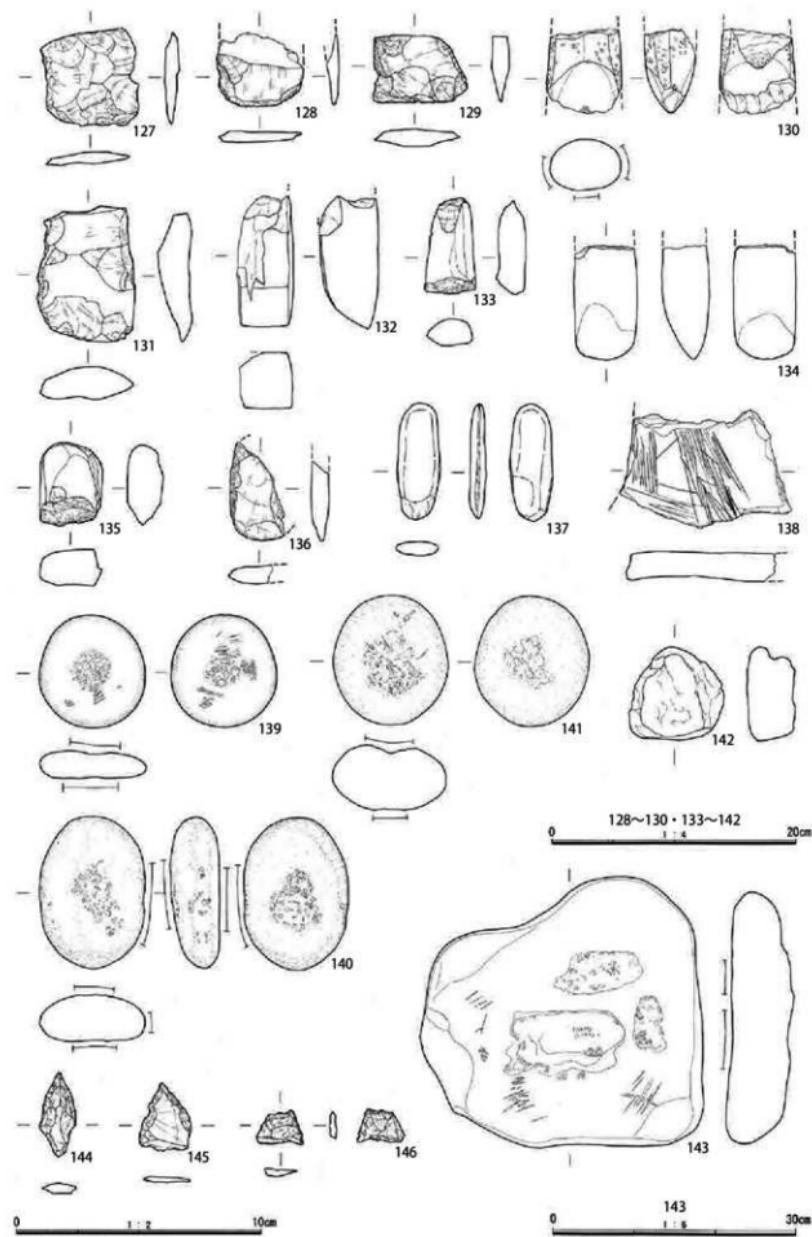


図38 遺物実測図

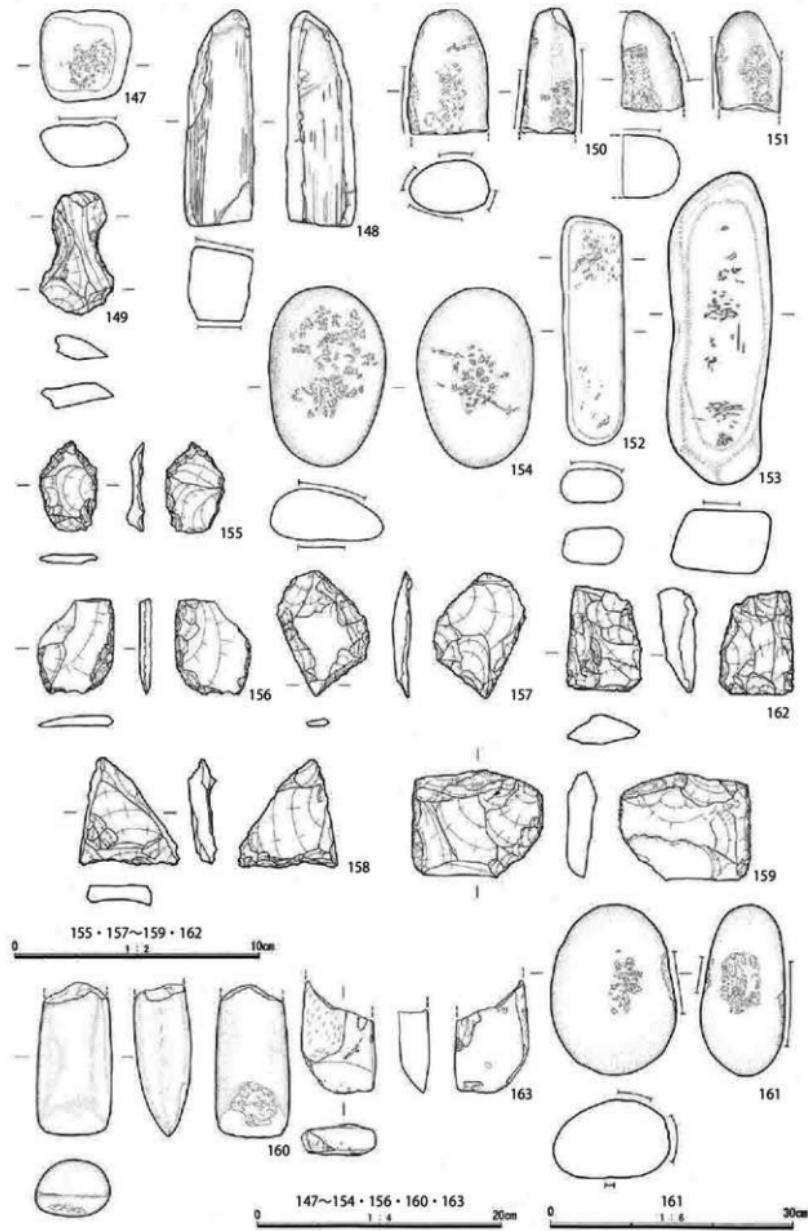


図39 遺物実測図



図40 遺物実測図

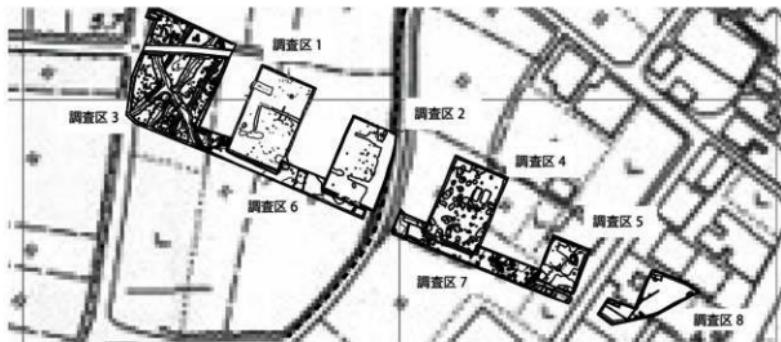


図41 平成22～24年度調査各調査区 遺構配置図

土器一覧表 調査区番号	器種	器形	縦寸	横寸	高さ cm	厚さ cm	件数	色調	特徴・状況・特徴等			
									内	外		
1 調20	陶生土器	4	18.0	3.0	(19.0)	残1.0	20%	内) (に) 黄褐色SYR8/2 外) 黄褐色SYR8/2	断面はやや僅く圓錐形、輪郭は半径約8cmをなす。断面部はヘラケツリ便用で、内側はナメ無効。反転復元。			
2 調20	陶生土器	4	17.0	3.0	(17.0)	残1.2	口縁15%	内) (に) 黄褐色SYR8/4 外) 黄褐色SYR8/3	断面はやや僅く圓錐形、輪郭は半径約8cmをなす。断面部はヘラケツリ便用で、内側はナメ無効。反転復元。			
3 調20	陶生土器	4	17.0	3.0	(14.6)	残5.2	口縁25%	内) 残底2/3~外) 黄褐色SYR8/1~6/1	断面はやや薄厚差、口縁部は外側に僅かに折り返して3ミリを出す。外側少々真っ直ぐとなる。断面はヘラケツリ便用。反転復元。			
4 調20	陶生土器	4	3.0			残4.5	不明	内) 浅黄褐色SYR8/6 外) (未) 浅黄褐色SYR8/6	口縁部はヨコで内に凹り平底の状態をなす。断面形状上に厚底の土器を想起させる。内側はナメ無効。反転復元。			
5 調20	陶生土器	4	23.0	アゼ	(16.0)	残1.5	20%	内) 残2 外) 浅黄褐色SYR8/1 内) (に) 黄褐色SYR8/4	断面はやや僅く圓錐形、輪郭はヨコで斜めに上方にまみ上げる。内側はナメ無効し、反転復元。			
6 調20	陶生土器	4	49		(13.0)	残5.0	18%	内) (に) 黄褐色SYR8/4 外) 黄褐色SYR8/3~5/3	口縁部が厚底化せざるを得ず、断面はヨコで斜めに下方にまみ上げる。内側はナメ無効。反転復元。			
7 調20	土器	4	28		(16.0)	残5.5	15%	内) (未) 黄褐色SYR8/4 外) (未) 黄褐色SYR8/4	断面は後方で斜めに下方にまみ上げる。外側はハサエ工具によるアザレ感か。反転復元。			
8 調20	陶生土器	4	50		(29.0)	残10.5	10%	内) 黄褐色SYR8/6 外) 明赤褐色SYR8/6 削	断面は緩やかに圓錐形、輪郭は少しだけ凹線を抱く。反転復元。			
9 調20	陶生土器	4	25	底		残2.2	6.6	底盤100%	内) 浅黄褐色SYR8/2 外) 黄褐色SYR8/1 内) (に) 黄褐色SYR8/1	底盤のみ。外側はカスケードナメ無効。内側は(未)のハサエ工具のほか、ユカリササ根跡があり。反転復元。		
10 調20	陶生土器	4	57	付近		残3.0	7.0	底盤100% 内) (に) 黄褐色SYR8/4	内) 黄褐色SYR8/6	内外摩擦減らし、調査不透明。反転復元。		
11 調20	土器	4	58		3.5	0.5	3.7	土器	土器片を利用した鉢器車か。一部灰化。	土器片を用いた鉢器車か。一部灰化。		
12 調20	陶生土器	4	50	アゼ	(14.0)	残1.8	口縁10.0	内) (に) 浅黄褐色SYR8/2~4 外) 白10YR8/2	内) と土壤接觸して調査不明確。外側は(未)。一部は黒土で塗抹される。一部灰化復元。			
13 調20	陶生土器	4	51		(14.6)	2.9	(0.9)	20%	内) (未) 黄褐色SYR8/3 外) (未) 黄褐色SYR8/3	内) と土壤接觸し、調査不明確。外側は(未)。一部は黒土で塗抹される。一部灰化復元。		
14 調20	陶生土器	4	59		(10.0)	残5.5	口縫30%	内) (に) 黄褐色SYR8/6~4 外) (未) 黄褐色SYR8/6	口縫部が(未)で鉢形。水平の底盤をなす。外側は(未)。一部に浮遊灰。			
15 調20	陶生土器	4	59		(18.0)	残7.5	口縫30%	内) (に) 黄褐色SYR8/4	断面後方で底盤し、口縫部は厚底化せざる得ず。上方にまみ上げる。一部に浮遊灰。			
16 調20	陶生土器	4	59		(18.0)	底2.5	25%	内) (未) 黄褐色SYR8/3 外) (未) 黄褐色SYR8/3	内) と土壤接觸し、調査不明。外側は(未)。一部は黒土で塗抹される。一部灰化復元。			
17 調20	陶生土器	4	64		(12.0)	残14.4	口縫25% 縫合77%	内) (未) 浅黄褐色SYR8/2 内) (に) 黄褐色SYR8/3	口縫部が(未)で鉢形。僅かに底盤となる平底をなす。外側はナメ無効し、調査不透明。外側は(未)。一部は黒土で塗抹される。一部灰化復元。			
18 調20	陶生土器	4	60		(10.0)	残4.8	口縫50%	内) 浅黄褐色SYR8/6 外) (未) 黄褐色SYR8/6	小口の広い鉢形。底盤し、輪郭は(未)で底盤をなす。外側は(未)。一部は黒土で塗抹される。一部はナメ無効。一部反転復元。			
19 調20	陶生土器	4	77			残2.5	不明	内) (未) 黄褐色SYR8/3	口縫部の(未)。断面に(未)を単位とする横方向の刻文を抱く。			
20 調20	陶生土器	4	82		(18.2)	残5.9	10%	内) 白10YR8/2~3 外) 白10YR8/1~4 内) (に) 黄褐色SYR7/4	3巻の実帶を抱く。下巻は波状文帯。			
21 調20	陶生土器	4	85			不明	10%以下	内) (未) 黄褐色SYR8/4 外) (未) 黄褐色SYR8/4	量か。腹壁木文施す。			
22 調20	陶生土器	4	59			残4.0	3.4	底盤20% 内) (未) 黄褐色SYR8/1~5/1 外) (未) 黄褐色SYR8/6~4	脚部下位一部のみ。外側はヘラケツリ後ナメ調査。内側は板状工具によるアザレ感を抱く。反転復元。			
23 調20	陶生土器	4	60			残4.8	7.4	底盤100% 内) (未) 黄褐色SYR8/1~5/1 外) (未) 黄褐色SYR8/2~3/1	内) と土壤接觸し、調査不明。底部はナメ調査。一部反転復元。			
24 調20	陶生土器	4	74			残2.8	6.4	底盤100% 内) (未) 黄褐色SYR8/6	内外摩擦減らし、調査不明。一部反転復元。			
25 調20	陶生土器	4	78	アゼ		残6.2	(0.6)	内) (未) 黄褐色SYR8/1~5/1 外) (未) 黄褐色SYR8/6	内) 土壤接觸し、調査不明確。外側は(未)。内側はナメ調査による。底部は(未)。一部反転復元。			
26 調20	陶生土器	4	78			残6.2	内) (未) 白10YR8/1~4 外) (未) 白10YR8/6	量か。腹壁木文施す。				
27 調20	陶生土器	4	75		(23.0)	残10.4	口縫10%	内) (未) 黄褐色SYR8/6~4 外) (未) 黄褐色SYR8/6~6/6	口縫部が(未)で鉢形。輪郭はやや僅く底盤をなす。断面部は下縫合部にナメ調査。下巻はヘラケツリ。反転復元。			
28 調20	陶生土器	4	91			残12.8	(0.0)	内) 浅黄褐色SYR8/2~5/2 外) (未) 黄褐色SYR8/2~5/2	摩耗面に(未)調査し、調査不明。外側は(未)。内側は(未)。一部反転復元。			
29 調21	骨	5	井戸内			残2.4	(5.9)	10%以下 内) (未) 黄褐色SYR8/1~5/1 外) (未) 黄褐色SYR8/6	骨柱部では深い凹部を認する。高台骨柱は(未)で底盤をなす。底盤上に部分は(未)を抱く。高台は(未)。太棒の骨柱部1-2巻。			

30	国21	海老原 小鉢	5	4種類	11.2	3.3	4.6	70%	船:オーブー灰10YR5/2 盆:灰10YR8/2-10/3	内面及び外面上に施用。目録4種類ある。唐津焼。
31	国21	陶器 瓦器	5	4種類	(13.4)	4.1	5.6	100% ^{部品}	内) 灰10YR5/1 種 灰SYR8/6 外) 白灰3/19/6 種 灰SYR8/6	内面及び外面上の高さ付迄まで施用。目録4種類ある。唐津焼。
32	国21	瓦器 瓦器	5	1青戸内	種4.9	10%以下			内) 青/6/6 種 灰SY1/1 種 白灰NB/6	ややこする反対の側面に内側する口縁部付近につける。例の下は床の付有り。
33	国21	土器類 L7e12L1	5	26.0	種7.9	25%以下		内-外-側) に応じて種SYR8/4	整形輪で削除する。表面は手作業で削除。表面は手作業で削除。手作業部内面はくず削り。外面はくず削り。反転復元。	
34	国21	陶器 灯明	5	中央凹型	(3.8)	1.5	(4.4)	口縁4.6	内) 灰SYR8/1 種 灰SYR8/6 外) 灰SYR8/6 種 灰SYR8/6	口縫線内面及び込み込みで透明窓を修む。窓部は手作業を施す。芯部の底跡あり。右側として右側として使用か。反転復元。
35	国21	陶器 壁板	9	L7u11	種12.3	20%		内-外-側) 灰SYR8/6 種 領多縄2SYR5/6		
36	国22	衛生工事 便器	3	第1種 便器上3.3	(18.2)	種8.4	口縁10YR5/1	内-外-側) に応じて 黄褐色10YR7/3 外) 灰SYR8/6	内面とも蓋部が少し剥落する。表面は不規。口縫線部をコナ。脚部にケズを落す。	
37	国22	便器 便器 (窓口?)	3	2層	種6.2	10%以下		内) 青/6/6 外) 口縫線部 口縫線、口縫線、口縫線、口縫線、口縫線、口縫線	軸上に複数回が施業である。内面を刮拭ナ。ダラ棒端部をコナ。脚部に把手を削る。軸上に複数回が施業である。	
38	国22	土器品 有蓋 有蓋 有蓋	3	4層 中央凹型	7.8	4.1	4.0	80%	灰白10YR8/2	有溝土器
39	国22	土器品 有蓋 有蓋 有蓋	8	2層	種2.2	14.2	高台部 25% - 内-外-側) 白灰N7/	高さを貼付後。ナテ削除を施す。見込み高面に既成の状況あり		
40	国22	衛生工事 便器	7	3-2上皿	(24.4)	種6.1	口縁4.1	内) 浅灰2SYR3/3 種 灰SYR8/6 外) 灰SYR8/6 種 SYR8/3	内面と底部が剥離し剥落する。表面は不規。口縫線はくずす。芯部はくずす。上方へます。	
41	国22	衛生工事 便器	7	1-2上皿	種6.1	(7.0)	100% ^{部品}	内-外-側) に応じて 黄褐色10YR7/3 外) に応じて 黄褐色10YR7/4	内面は摩耗が激しく、剥落する。外面はk4からk6のハサク削除を施す。底面はナテ削除を施す。	
42	国22	衛生工事 便器	7	3-1層	5%以下		内) に応じて 黄褐色10YR7/4 外) に応じて 黄褐色10YR8/4	表面削除。次第に半分の竹筋状工具で表面突起を削除して表面突起を削除する。		
43	国22	衛生工事 便器	7	1層		10%以下		内-外-側) に応じて 黄褐色10YR5/4 外) 灰SYR8/3	次第で区画された中へうねきを生ずる	
44	国22	土器品 機械	7	2	(13.5)	2.7	(10.6)	55%	内-外-側) 灰SYR8/3 外) 灰SYR8/3	口縫線をヨコに削除。表面は手作業する。
45	国22	土器品 荷物?	7	2	(13.8)	3.0	(9.6)	口縁25%	内-外-側) 灰SYR8/2-6/2-7/2 外) 灰SYR8/6	内面は摩耗が著しく、剥落する。
46	国22	土器品	7	2	(12.0)	種2.9	不明	内) 灰SYR8/6 外) 灰SYR8/6	体外部表面を削除。芯部は1mm未満の玉石粒を含む。茎部を僅かに含む。内面は摩耗が著しく、剥落する。	
47	国22	土器品	7	2	(18.4)	3.3	(13.4)	口縁40H2.2 内) 灰SYR8/6 外) 灰SYR8/6	口縫線はヨコに削除。芯部から削除して立ち上がり外見させる。底面は木頭感。口縫線はk4。	
48	国22	土器品 機械	7	2	(17.4)	種5.1	不規	20%	内-外-側) に応じて 黄褐色10YR4/1 外) に応じて 黄褐色10YR4/3	口縫線をヨコに削除。内面は厚k5からみられ。外表面はウズグリ。シギキを施す。
49	国22	土器品 機械	7	2	(18.4)	種4.4	15%	内-外-側) 灰SYR8/3 外) に応じて 黄褐色10YR5/3	内面はガタ音を発して軋走を施す。外表面はガタ音。	
50	国22	衛生工事 便器 窓口食	7	4階平	(14.2)	種4.0	12%	内-外-側) に応じて 黄褐色10YR4/3 外) 灰SYR8/1 種 SYR8/2	摩耗が著しく、剥落する。口縫線部に剥落し剥離する。底面は木頭感。口縫線はk4。	
51	国22	衛生工事 便器	7	4	(25.2)	種5.4	口縁80H2.2	口縫線削除。内面の側面の崩れを修正。口縫線削除下部木方内の貴重品を抜く。伊豆高島瓦を施す。		
52	国22	衛生工事 便器 窓口食	7	4	(10.8)	種12.7	30%	内) 灰SYR8/1 外) 灰SYR8/1 種 不規	口縫線から側面の突起。受け口状跡をなす。口縫線部に注目。一部伝送復元。	
53	国22	衛生工事 便器	7	4		種10.3	25%	内) 灰SYR8/0.5 外) 灰SYR8/1	軸間に突出部を削除。ヨコサビナ。軸間を3.	
54	国22	衛生工事 便器	7	4開半	(11.8)	(7.7)	25%	内) 灰SYR8/1 外) に応じて 黄褐色10YR4/3	Q頭部削除。ヨコサビナ。木頭に付く。口縫線は木に2番の接縫大を施す。その他の吹き出物を削除。内面は摩耗が著しく、剥落する。反転復元。	
55	国22	衛生工事 便器	7	4		種7.3	10%以下	内) 灰SYR8/1 種 SYR8/2 外) 灰SYR8/2	頭部削除。ヨコサビナ。口縫線部はヨコサビナにより、外縁する手組目をなす。内面外表面は摩耗し剥離する。誤脱片。	
56	国22	衛生工事 便器	7	4	(25.4)	種5.0	10%以下	内) 黄褐色2SYR3/1 種 SYR8/2 外) 灰SYR8/1 種 不規	Q頭部削除。内面の側面の崩れを修正。口縫線削除下部木方内の貴重品を抜く。伊豆高島瓦を施す。	
57	国22	衛生工事 便器 窓口食	7	4	(4.0)	種5.0	口縁80H2.2	口縫線部はヨコに平行に2つ。口縫線は3条の凹線を施す。外面部は摩耗し剥離する。軸間を3.		
58	国22	衛生工事 便器 窓口食	7	4		種6.4	單頭部	内面は摩耗が著しく、剥落する。反転復元。		
59	国22	衛生工事 便器 窓口食	7	4		種6.4	單頭部	内面は摩耗が著しく、剥落する。内面はナテアリ。ヨコサビナ削除。芯部は1~2mmの凹部。単頭部を多く含む。反転復元。		
60	国22	衛生工事 便器	7	4	(27.2)	種5.3	口縁80H2.2	内面は摩耗が著しく、剥落する。平面削除する。外側に凹み目を削す。内面ヨコサビナ削除。軸間を3.		
61	国22	衛生工事 便器	7	4	(26.1)	種6.1	種100% ^{部品}	芯部と片側部を少し削除。内面は底の広い凹2箇。内面はナテを施す。反転復元。		
62	国22	衛生工事 便器	7	4	(25.4)	種5.0	100% ^{部品}	内面は摩耗が著しく、剥落する。底面は木頭感。口縫線部はヨコサビナにより平行に2つ。口縫線は3条の凹線を施す。外面部は摩耗し剥離する。軸間を3.		
63	国22	衛生工事 便器	7	4北半	(14.0)	種5.0	口縁80H2.2	内面は摩耗が著しく、剥落する。反転復元。		
64	国22	衛生工事 便器	7	4	種11.8	100% ^{部品}	内) 浅灰2SYR3/3 外) に応じて 黄褐色10YR5/3	内面は摩耗が著しく、剥落する。内面はナテアリ。ヨコサビナ削除。芯部は1~2mmの凹部。単頭部を多く含む。反転復元。		
65	国22	衛生工事 便器	7	5	(36.2)	種3.2	18%	内) 灰SYR8/1 外) 灰SYR8/1 種 不規	Q頭部削除。ヨコサビナ。吹き出物を削除。内面はナテを施す。反転復元。	
66	国22	衛生工事 便器	7	5	(36.0)	種4.5	口縁25%	内) 灰SYR8/1 外) 灰SYR8/1 種 不規	芯部削除。芯部を少し削除。内面は底の広い凹2箇。内面はナテを施す。反転復元。	
67	国22	衛生工事 便器	7	5	(32.8)	種7.3	口縁10%	内) 灰SYR8/1 種 白灰SY1/1 外) 灰SYR8/1 種 不規	摩耗して、剥離不規則。口縫線はヨコに2つ。内面はナテを施す。剥離は吹き出物とナテアリ。吹き出物を削除。内面はナテを施す。反転復元。	
68	国22	衛生工事 便器	7	5	(17.8)	種8.2	口縁25%	内) 灰SYR8/1 種 白灰SY1/1 外) 灰SYR8/1 種 5%V8/8	摩耗して、剥離不規則。口縫線はヨコに2つ。内面はナテを施す。剥離は吹き出物とナテアリ。吹き出物を削除。内面はナテを施す。反転復元。	
69	国22	衛生工事 便器	7	5	(36.0)	種4.5	口縁25%	内) 灰SYR8/1 外) 灰SYR8/1 種 不規	芯部削除。吹き出物を削除。内面は底の広い凹2箇。内面はナテを施す。反転復元。	
70	国22	衛生工事 便器	7	5	30	種16.3	13.0 種100% ^{部品}	内) 灰SYR8/1 外) 灰SYR8/1 種 不規	内面はモザイク。吹き出物を削除。内面は底の広い凹2箇。内面はナテを施す。反転復元。	
71	国22	衛生工事 便器	7	5	36	種7.7	種100% ^{部品}	内) 灰SYR8/1 外) 灰SYR8/1 種 不規	芯部削除。吹き出物を削除。内面は底の広い凹2箇。内面はナテを施す。反転復元。	
72	国22	衛生工事 便器 窓口食	7	5	37	種6.8	10%以下	内) 青/6/6 外) 灰SYR8/1 種 不規	芯部削除。吹き出物を削除。内面は底の広い凹2箇。内面はナテを施す。反転復元。	
73	国22	衛生工事 便器 窓口食	7	5	42	種6.2	10%以下	内) 灰SYR8/1 外) 灰SYR8/1 種 不規	芯部削除。吹き出物を削除。内面は底の広い凹2箇。内面はナテを施す。反転復元。	
74	国22	衛生工事 便器 窓口食	7	5	50	種4.6	不明	内) 灰SYR8/1 種 不規 外) 灰SYR8/1	口縫線部から削除する。内面はナテアリ。	
75	国22	衛生工事 便器	7	5	(14.0)	種8.9	口縁25%	内) に応じて 黄褐色10YR4/2 外) 灰SYR8/1-6/6-6/6	小部分の凹凸。表面層を削除。内面はナテアリ。削除後は吹き出物とナテアリ。	
76	国22	衛生工事 便器	7	5	(16.0)	種6.2	口縁80H2.2	口縫線部はヨコサビナ。吹き出物を削除。内面はナテを施す。内面はモザイク。吹き出物を削除。内面は底の広い凹2箇。内面はナテを施す。反転復元。		
77	国22	衛生工事 便器	7	5	(26.0)	種7.3	10%以下	内) 灰SYR8/1-7/7-7/7 外) 灰SYR8/1-7/7-7/7	芯部削除。吹き出物を削除。内面は底の広い凹2箇。内面はナテを施す。内面はモザイク。吹き出物を削除。内面は底の広い凹2箇。内面はナテを施す。反転復元。	
78	国22	衛生工事 便器	7	5	60	種19.0	種100% ^{部品}	内) 灰SYR8/1-6/6-6/6 外) 灰SYR8/1-6/6-6/6	内面はモザイク。吹き出物を削除。内面は底の広い凹2箇。内面はナテを施す。反転復元。	
79	国22	衛生工事 便器	7	5	61	種14.1	60%	内) 灰SYR8/1-6/6-6/6 外) 灰SYR8/1-6/6-6/6	内面はモザイク。吹き出物を削除。内面は底の広い凹2箇。内面はナテを施す。反転復元。	
80	-	織機用陶器	2	織機用陶器	種16.6	6.3	高台部 窓口	白色。内) 灰SYR8/2 外) 灰SYR8/2	内面はモザイク。吹き出物を削除。内面は底の広い凹2箇。内面はナテを施す。窓口はナテアリ。	

大古II遺跡

石器一覧表

報告書 固有番号	種類	調査 地図	遺構 層位	最高 長 cm	最高 厚 cm	重さ g	石材	推存率	備考
B1	打削石器 石頭(基 盤)	1 M1a25		5.1	2.8	0.4	3.8 サスカイト	100%	有茎式
B2	打削石器 石頭(基 盤)	1 M1a32	3層	4.2	3.8	0.8	10.6 サスカイト	100%	無茎式の石頭またはその未製品、または刃器の可能性あり。先端を欠損する。一部に薄面を残す。
B3	打削石器 石頭?	1 M1a2	3層	5.5	8.9	1.6	59.7 平岡 安山岩?	100%	複数面を残す剥片に剥離を施し、直線的な刃部をつくる。刃部の一部は磨滅が認められる。
B4	打削石器 石頭?	1 M1b25	3層	4.9	7.5	1.4	9.73 真白	100%	直線的な刃部の一部を打ちいた直線的な縦線上に、両面から剥離を施し刃部をつくる。
B5	研磨石器 合石	1 M1a2	3層	16.2	17.0	4.3	1600.0 砂岩	不明	両面に摩耗及び敲打痕あり。一部を欠損
B6	打削石器 石頭(基 盤)	2 M1a6- M1a5	2層	3.8	1.9	0.8	4.2 真白	100%	石頭未製品か、両面から剥離を残す。
B7	打削石器 石頭?	2 M1a4- d4	3層	6.4	3.9	1.8	49.8 サスカイト	100%	複数面を残す剥片に剥離を施し、直線的な刃部をつくる。
B8	打削石器 石頭?	2 M1b6- b5	3層	4.5	3.2	1.1	22.5 真白または粘 板岩	100%	複数面を残す剥片の縁辺2方に背面から剥離を施し、刃部をつくる。
B9	打削石器 スクリュー ?(-?)	2 M1a6- d4	1 平面鍛錬	5.8	4.8	0.9	35.5 真白	100%	刃倒れを防ぎ刃部をつくるが、一方に磨滅が認められる。
B10	打削石器 スクリュー ?(-?)	2 M1a5- b5	3層	5.3	4.4	0.8	18.5 真白または粘 板岩	100%	剥片の一片に両面から剥離を施し、刃部をつくる。
B11	打削石器 スクリュー ?(-?)	2 M1a4- d4	3層	5.7	4.0	0.7	18.0 真白	100%	複数面を残す剥片の一片縁上に背面から剥離を施し、刃部をつくる。両部には磨滅が認められる。
B12	打削石器 スクリュー ?(-?)	2 M1b6-1	3層	5.7	4.1	1.0	28.1 サスカイト	100%	複数面を残す剥片の一片縁上に剥離を施し、刃部をつくる。両部には磨滅が認められる。
B13	打削石器 石頭?	2 M1a2	3層	7.1	6.3	1.5	71.2 真白	100%	打削石井円形か、やや直線的な円形。両側縁に剥離を施し、刃部をつくる。両部には磨滅が認められる。部分的に二面削離。
B14	擦石器	2	機械搬入	12.0	11.1	3.4	803.5 砂岩	80%	やや直線的な円形。両面及び側面の計4箇所に敲打痕あり。
B15	擦石器	2 M1b2	3層	11.0	9.1	5.7	762.5 砂岩	100%	鉢形、砂岩。直線的な円形。両面及び側面の計4箇所に敲打痕あり。
B16	打削石器 石頭?	2 M1a7	3層	9.2	5.2	1.8	87.0 粘板岩	100%	円錐の標面を残す剥片に内溝する状態の刃部をつくる。
B17	打削石器 石頭?	2 M1b7-1		7.8	4.7	0.7	39.9 真白	100%	剥片の一辺に直線的な剝離を施し、刃部をつくる。
B18	打削石器 石頭?	2 M1a7-1		8.9	7.0	1.8	75.9 サスカイト	100%	二辺に背面から剥離を施し、刃部をつくる。刃部には磨滅が認められる。
B19	打削石器 石頭?	2 M1b7-1		5.4	4.3	1.0	25.8 真白または粘 板岩	100%	複数面を残す剥片の三辺に両面から剥離を施し、刃部をつくる。刃部にはわずかに磨滅が認められる。直線の削離となる。
B20	打削石器 石頭?	2 M1a7-1	3層	6.8	3.3	1.1	31.3 真白	100%	半円した円筒に対し、矯正後に剥離した剥片とみられ。一辺に片面から剥離を施し、刃部をつくる。刃部には磨滅が認められる。
B21	打削石器 石頭?	2 M1b7-1		7.8	7.0	2.8	196.4 砂岩	不明	剥片の凹部に沿って直線的な剝離を施し、刃部をつくる。
B22	擦石器	2 M1b7-1	上層	10.0	10.4	4.4	466.0 砂岩	80%	両面に摩耗が認められ。一部の剥離部分は他の部分同様に風化化しており、使用後に破碎か。
B23	打削石器 石頭?	4 L1a7-1b	3層	5.8	5.4	1.4	41.0 サスカイト	100%	2辺に連続的な剥離を両面から施し、やや内溝する刃部をつくる。両辺の交点は軸孔をなす。
B24	打削石器 石頭?	4 L1a7-1c	3層	6.8	4.8	1.4	50.8 真白	100%	側面2辺を削離しており、刃部及び基部の一部を欠損した石斧の可能性がある。
B25	打削石器 石頭?	4 L1a7-1d	3層	4.0	2.7	0.85	8.0 真白または粘 板岩	100%	主要剝離方向に沿う辺に連続的な剝離を施す。
B26	打削石器 石頭?	4 L1a7-1e	3層	3.8	4.5	0.4	41.8 真白	100%	2辺に両面からの連続的な剝離を施し刃部をつくる。
B27	打削石器 石頭?	4 L1a7-1f	3層	5.1	3.5	0.9	13.4 真白	100%	2辺に両面からの連続的な剝離を施し刃部状につくる。一方にはそれに直角する剥離が認められる。
B28	擦石器	4 L1a7-1g	3層	6.0	3.7	0.9	31.8 真白または粘 板岩	100%	直線的な縦の面に両面から剥離を施して刃部を設ける。刃部は扇状及び頭部を連続的に残す。
B29	打削石器 石頭?	4 L1a7-1h	3層	15.9	10.2	2.8	446.5 真白?	100%	剥片の凹面に対し、両面から剥離を施して刃部を設ける。刃部は扇状及び頭部を連続的に残す。
B30	擦石器	4 L1a7-1i	3層	9.1	4.8	0.8	8.6 片岩	100%	円錐を剥離し、剝離面に施設を加える? 剥離多く残存する。一部を欠損する。
B31	打削石器 石斧?	4	漆塗	7.7	4.5	1.8	52 真白	100%	刃部或いは石斧の一部か。一様に僅かな剝離を施し刃部をつくる。
B32	打削石器 石斧?	4	漆塗	3.3	1.8	0.45	2.2 真白	100%	石頭未製品か。
B33	擦石器	4	漆塗	16.8	12.5	6.3	1908.0 砂岩	不明	複数面の直角及び斜面が著しく磨滅する
B34	打削石器 石頭?	4	漆塗	8.3	3.5	2.1	0.4 真白	95%	有茎式、先端を欠損する。
B35	二辺丸削	4	漆塗	8.1	2.8	0.4	1.8 真白	100%	側面に磨耗?
B36	打削石器 石頭?	4	漆塗	9.4	32	7.8	23 真白	100%	有茎式、両面とも、基部から先端方向へ剝離を連続的に剥離する。
B37	打削石器 石頭?	4	漆塗	5.0	2.6	1.7	0.4 真白	100%	未製品か
B38	打削石器 石頭?	4	漆塗	6.3	3.05	(2.5)	0.5 真白	80%	無茎式。
B39	打削石器 石頭?	4	漆塗	9.4	32	2.4	2.8 真白	100%	複数面剥片の3辺に剥離を施し、直線的な刃部をつくる。
B40	打削石器 石頭?	4	漆塗	6.0	7.3	6.7	2.1 安山岩	100%	刃部及び基部の大部を欠損した石界か。両側縁に剥離を施す。
B41	打削石器 石頭?	4	漆塗	8.0	2.9	2.2	0.5 真白	100%	複数面を含む剥片の3辺に剥離を施し、刃部をつくる。片方は刃尖状となる。
B42	打削石器 石頭?	4	漆塗	21	3.0	0.8	0.4 真白	100%	複数面を含む複数の剥片先端部に剥離を調整する。
B43	打削石器 石頭?	4	漆塗	7.7	4.7	3.3	0.9 真白または粘 板岩	100%	複数面を含む複数の剥片先端部に剥離を施す。

遺物 番号	固・ 画面番号	器種	遺物 所在地	遺物 部位	最大 長さ (cm)	最大幅 (cm)	最大 厚さ (cm)	石材	残存率	備考		
124	図18	打製石器 スライ ス(レーパー)	4	50	5.75	3.55	0.8	19.0 真前または軸 屈筋。	100%	縫面を残す剝片の3辺に剥離を施し刃部をつくる。うち剥離2辺は直線的につくる。		
125	図18	打製石器 スライ ス(レーパー)	4	49	3.2	2.9	1.0	7.0 真前または軸 屈筋。	100%	2辺を剥離調整し刃部をつくる。		
126	図18	打製石器 スライ ス(レーパー)	4	77	4.1	2.9	0.9	10.1 真前または軸 屈筋。	80%	剝片の1辺を剥離調整し刃部をつくる。刃先角度はにじい。		
127	図19	打製石器 スライ ス(レーパー)	4	47	4.0	4.1	0.6	10.5 真前	100%	剝片の3辺を剥離調整し刃部をつくる。		
128	図19	打製石器 石突(?)	4	55.0A	8.0	(8.0)	1.0	47.6 真前	不明	石突刃部か		
129	図19	打製石器 方器	4	71	7.7	5.6	1.4	70.9 サスカイト	100%	刃片の3辺を剥離調整し直線的な刃部をつくる。		
130	図19	打製石器 石突(?)	4	74	(7.0)	5.9	4.2	243.1	不明	他の両面に剥離を施す。刃先の角度は鈍く、打設によるとみられる微細な凹凸がある。石器製作時等に開闢的な凹凸を作りための工具か。		
131	図19	打製石器 スライ ス(レーパー)	4	63	5.5	3.8	1.4	35.4 真前または軸 屈筋。	不明	縫面を残す剝片の3辺を剥離調整し直線的な刃部をつくる。No.124と同様の石器である可能性が高い。		
132	図19	磨製石器 石斧(柱状 片刃石斧)	4	77	(5.5)	(2.2)	2.3	48.7 基底石	不明	他の両面に剥離を施す。刃先角度はにじい。		
133	図19	磨製石器 石斧	4	70	7.0	4.2	2.45	98.2	100%			
134	図19	石斧(太型 片刃石斧)	4	63	9.4	5.2	4.0	321.0 戰粒玄武岩	100%	基部は大部分が欠損する。No.160と同様の石材を用いる。		
135	図19	打製石器 石突(?)	4	70	8.0	5.2	2.8	153.0 真前	100%	他の一部分に剥離を施す。刃先の角度は鈍く、打設によるとみられる微細な凹凸がある。		
136	図19	石突(?)	4	78	(8.1)	(4.0)	(1.6)	60.8 真前または軸 屈筋。	不明	縫面を残す剝片の3辺を剥離調整し直線的な刃部をつくる。2分の1以上を欠損する可能性あり。		
137	図19	磨製石器 石斧	4	80	9.7	3.5	1.3	64.9 砂岩	100%	絞込み(真手)を施す。刃片及び側面から剥離し片刃の刃部をつくる。ノミ状を呈する。		
138	図19	破片(?)	4	82	14.3	9.9	2.5	477.0 真前または軸 屈筋の妙跡。	不明	縫面を残す剥離平な様の一面に、研磨によるとみられる縦筋の痕跡を残す。大部分が欠損する。		
139	図19	磨製石器 鉢石	4	31	9.3	8.8	2.3	289.0 砂岩	100%	絞込み(真手)を施す。円形の半球面中央に複数の打設痕跡を残す。		
140	図19	磨製石器 鉢石	4	74	12.4	8.7	4.0	80.2 砂岩	100%	絞込み(真手)を施す。圓形の中央に複数の打設痕跡を残す。側面にも絞込み(真手)を施すものもあり、絞込みとして使用か。		
141	図19	磨製石器 鉢石	4	80	10.7	9.4	5.4	73.0 花崗岩	100%	やや異なる円柱体の両端中央に沿って打設痕跡を残す。		
142	図19	磨石製品	4	62	7.8	7.8	4.0	53.3 火山碎屑物 (鶴石)	100%?	孔糞部で形状は低い三角形に近い。各面は磨滅しているものとみられるのがほぼ平坦である。通常物か。		
143	図19	台石(石 皿)	4	73	33.7	35.2	8.6	14800 砂岩	100%	台石または石皿。集石這樣から出土。石器、貝器、有茎式。一部分を欠損する。		
144	図19	打製石器 石器	3	17.2	2.0	2.0	1.0	21.0 2(ビット)	3.5	1.5 0.45 サスカイト	100%	尖底式。一部分を欠損する。
145	図19	打製石器 石器?	5	10~11	1脚	2.8	2.1	0.3	1.5 チャート(青色)	100%	無茎式の石器とみられ、一部分を欠損する。	
146	図19	打製石器 石器?	5	L17.13 n.13	1.4	2.0	0.3	1.0 チャート(青色)	100%	石器。チャート、無茎式、先端部分を欠損する。		
147	図24	磨製石器 石斧	3	2脚	7.5	7.5	3.7	327.5 砂岩	100%	台石または石器。直方体の基盤部分を残す。		
148	図24	磨製石器 鉢石	3	3~1 1脚	17.7	5.8	6.1	104.5 砂岩	不明	直方体の相対する面上に着いし磨滅が認められる。使用後に磨かれた。		
149	図24	打製石器 石器-石 器	2脚	12.8 東西南 基下層	10.2	6.1	2.1	130.0 真前または軸 屈筋。	100%	縫面を削除皮付に施し、やや尖部が凹む部分削除をする。刃部は磨滅が著しく、矯正の痕跡が認められる。		
150	図24	磨製石器 鉢石	3	1北西 中層	10.2	6.7	4.7	414.5 砂岩	50%	縫面を削除皮付に施し、やや尖部が凹む部分削除をする。刃部は磨滅が認められ、矯正の痕跡が認められる。		
151	図24	磨製石器 鉢石?	4	4中央部	8.3	5.4	3.8	302.0 砂岩	90%	縫面を削除皮付に施し、やや尖部が凹む部分削除をする。刃部は磨滅が認められ、矯正の痕跡が認められる。		
152	図24	磨製石器 鉢石	4	4中央部	18.8	5.3	3.0	538.5 砂岩	100%	絞込み(真手)を施す。矯正の一方は両面に打設痕跡を残す。隙間に磨滅がみられるが、使用後のものと不思。		
153	図24	磨製石器 鉢石?	7	1西半	25.6	8.6	5.3	2117.0 砂岩	100%	確かに打設痕跡を残す。1箇所に人為的とみられる磨滅が認められる。		
154	図24	磨製石器 鉢石	8重版	機械削面	14.7	9.6	4.3	347.0 砂岩	100%	縫面を削除皮付に施し、やや尖部が凹む部分削除をする。刃部は磨滅が認められる。		
155	図24	打製石器 石器	7	102 3~7脚	3.7	2.4	0.7	5.0 真前	100%	縫面の凹部は正面から剥離し、刃部が削けた跡がある。縫面に打設痕が認められる。内裡骨材部分を剥離する。		
156	図24	打製石器 石器	7	4	7.8	6.2	1.0	55.5 サスカイト?	不明	打設石斧。尖端側を複数段に剥離する。刃部及び基部を欠損か。		
157	図24	打製石器 スライ ス(レーパー)	7	5西半	5.2	3.8	0.8	13.0 真前	100%	縫面を残す剝片の2辺を直線的に剥離し、その交点となる右端部を尖らせるが、刃部に追加剥離を施す。		
158	図24	打製石器 スライ ス(レーパー)	7	60	4.4	4.1	1.2	17.0 真前	100%	縫面から剥離し刃部をつくる。刃部はにじい。円錐を利用。僅かに縫面を残す。		
159	図24	打製石器 スライ ス(レーパー)	7	22北半	4.9	5.4	1.2	38.5 サスカイト	100%	2辺に剥離を施し、刃部をつくる。剥離は両面からされるが、主に1箇所から着しく施される。		
160	図24	磨製石器 石斧(太型 片刃石斧)	7	75	12.6	6.2	4.7	572.5 戰粒玄武岩	不明	絞込み(真手)、基部を欠損する。刃部は著しく磨滅する。		
161	図24	磨製石器 石斧	7	9	18.2	13.5	10.6	4600 砂岩	100%	縫面の2面を含む3箇所に打設痕が認められる。風化による剥離部分がある。		
162	図24	打製石器 スライ ス(レーパー)	7	7	3~1	4.3	3.1	1.6 真前	不明	刃部、側面は大きく剥離したのち、細かく縫隙状の剥離を残す。刃部僅かに磨滅する。		
163	図24	磨製石器 石突片刃 石斧	7	1中央 中層	9.2	6.0	2.8	197.5 玄武岩質漂砾 (戰粒玄武岩)	不明	刃部の一部及び基部の大部を欠損する。側面は一方のみを研磨する。		
164	-	-	9	91	23.3	19.8	5.8	2800 砂岩	100%	磨石道場から出土。台石、粒状砂岩、一面が著しく磨滅する。		

第4節 稲成Ⅰ遺跡

第1項 調査に至る経緯

近畿自動車道紀勢線事業に伴う田辺～すさみ町間の自動車道建設予定地が田辺市稻成町の稲成Ⅰ遺跡として埋蔵文化財包蔵地に指定されている範囲内にかかることから、県文化遺産課により平成21年度に試掘・確認調査が実施された。その結果、当該工事対象地は記録保存のための本発掘調査を要するものと判断され、平成23年度に公益財團法人和歌山県文化財センターが国土交通省近畿地方整備局紀南河川国道事務所の委託を受け、本調査を実施した。

第2項 位置と環境

1) 地理的環境

遺跡が立地するのは、標高約30mの尾根状をなす丘陵の先端部である。この丘陵は南流する稻成川と荒光川に挟まれ、両河川により形成された狭小な沖積平野は本遺跡の東西両側において、それぞれ南北に長く延びる。両河川は遺跡の約南300m付近で合流し、更に会津川に合流する。田辺湾に注ぐ会津川の河口は、本遺跡から南へ約1.7kmの距離にあり、遺跡の立地する丘陵上からは眼下に平野と田辺湾を望むことができる。

遺跡の北側は尾根が連なり、周囲には紀伊山地の一端を占める山塊が連なるが、稻成川はその山間を縫うように北へ延びる。遺跡の所在する丘陵の南側は、調査前は畑地や果樹園として利用されていた。また斜

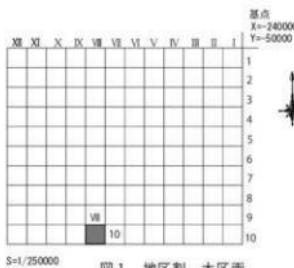


図1 地区割 大区画

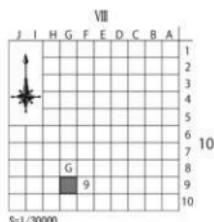


図2 地区割 中区画

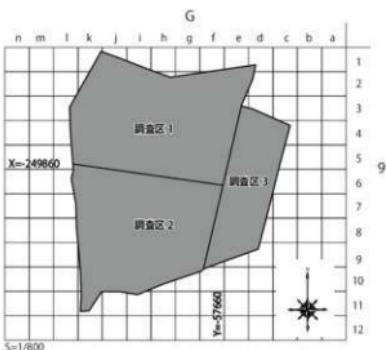


図3 調査区及び小区画

面の中腹にはそのために造成されたとみられる2段の平坦地が存在しており、1974年に国土地理院により撮影された航空写真（写真1）でも、既に当該丘陵の東側斜面は荒光川に沿うように宅地または畠地として開発が進んでいる様子が窺え、また、周囲の尾根に囲まれた平野部に向けて半島状に突出した丘陵であることがよくわかる。

（2）歴史的環境

旧田辺市域における各時代の歴史的環境は、「八丁田圃遺跡」の項で述べたとおりであり、ここでは稲成Ⅰ遺跡周辺の遺跡に限り記すこととする。

稲成川流域において弥生時代の遺跡は奥江原遺跡(24)、中の段遺跡(26)、東江原遺跡(27)、広芝遺跡(45)、平谷遺跡(22)、坊の谷遺跡(44)、稲成Ⅱ遺跡(161)等がある。これらはやや標高の高い場所に立地し、高地性集落と考えられる遺跡であるが、中でも富山遺跡(42)は標高80mに所在し、その防御的性格が指摘されている。また荒光川流域では標高30m程度の丘陵斜面に丸橋丘遺跡(31)があり、芳養川流域、会津川流域でもやはり同様の遺跡がみられる。

古墳時代には稲成古墳(28)、下村古墳(40)、糸田古墳(35)が築かれ、他に長田遺跡(21)や北沖代遺跡(39)がある。

奈良時代の遺跡としては、奥江原窯跡(23)、小屋川瓦窯跡(32)の他、丸橋丘火葬墓(30)、峯の庄火葬墓(67)、東江原火葬墓(33)等、台地上に火葬墓が営まれる。また、西沖代遺跡(38)は古墳時代から平安時代頃まで続く遺跡で、土師器、須恵器のほか灰釉陶器や緑釉陶器が出土している。

第3項 調査の方法

（1）地区割りの方法

地区割りは図1～3に示すとおりである。稲成Ⅰ遺跡の大区画は、八丁田圃遺跡第1～3次調査時の設定と同様にX=240000、Y=50000を原点として設定している。

また、本調査における調査区1・2・3はいずれも、「Ⅷ 10 G9」の範囲内に位置している。

更に、排土置き場の確保等、作業進行上の要請から、調査範囲を調査区1～3に分割して調査を進めた。まず調査区1について調査を実施した後、反転して調査区1の範囲に排土を移動し、調査区2及び3の調査を行っており、航空撮影・測量についてもこれに応じて2回に分け実施している。



図4 調査位置及び地区割（中区画）

(2) 基本層序

第1層 表土

第2層 2.5Y5/3 黄褐色土。礫を含む。遺物をほとんど含まない。

第3層 10YR3/2 黒褐色土。古墳時代から古代の遺物包含層である。

第4層 10YR4/4 褐色土。古墳時代の遺物包含層である。さらに分層が可能である

が、これは斜面が繰り返し崩落したことにより生じた土質の違いと考えられる。

第5層 10YR4/4 褐色土 上面が遺構検出面であるが、第5層の堆積が存在するのは調査区1及び調査区2の東端部分のみで、調査区内の一部の範囲に限られる。

第6層 10YR5/6 黄褐色土ほか。第5層の堆積がみられない部分では表土または第2層の直下に丘陵を形成する地盤層が露出しており、この地盤層上面が遺構検出面となるため、これらを総称して第6層とした。調査区1、2、3に共通して以上が基本層序となる。



写真2 基本土層 調査区セクションベルト1(南から)

第4項 調査成果

(1) 調査区1

調査区1では落ち込み状遺構1が検出されたのみであるが、南西端に第3・4層の堆積があつて遺物が集中して出土している。

落ち込み状遺構1 もとは方形の土坑であると考えられるが、隅丸の隅角を含む底辺7.4m×高さ1.8mの平面三角形をなす部分のみ残存するほかはすべて斜面の崩落により失われている。その形状から竪穴建物である可能性も指摘できるが、土層では掘り込みが明瞭でない。

(2) 調査区2

古墳時代の竪穴建物2棟分を検出した。いずれも斜面の崩落に伴い大部分が失われていたが、このうちの1棟でカマド、柱穴等を検出した。

竪穴建物1(図6、図版32・33) 1辺5.5mの方形に復元可能な竪穴建物である。カマド痕跡を含む建物北西側にあたる約3分の1のみが残存しており、この部分以外は斜面の崩落とともに失われている。

カマドは両袖を検出しており、その上部を覆う焼土及び焼土ブロックは僅かに南側へ偏りを見ることから、カマド燃焼部の天井部分が崩落したものと判断された。また、焼土中より長さ18cm程度の石が出土しているが、被熱の痕跡は見受けられることから支脚として使用されたものではなく、建物の廃絶後、カマドの崩落に伴って混入したものと判断された。また煙道部分は斜面を上方に伝う長さ40cmほどの浅い溝として検出された。西側壁面は比較的堅い地盤を掘り込んでいることから残存状態はよく、床面からほぼ垂直に立ちあがる。貼り床は認められず、検出範囲に限っては壁溝も確認されていない。また、柱穴とみられるピット(図8)を2基検出した。
竪穴建物2(図10、図版34) 1辺4.6mの方形に復元可能な竪穴建物であるが、残存するのは北東隅部分を含む面積にして5分の1程度の部分である。重複関係から、竪穴建物1に後出する。カマドの痕跡は検出されず、地山を掘り込んだ壁面の立ち上がりも竪穴建物1に比べ低いもの



図5 調査区1・2・3 遺構配図 (S=1/250)

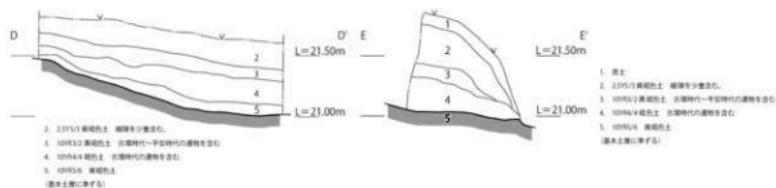


図6 調査区2 D-D' 断面南壁土層 (S=1/40)

図7 調査区2 調査区東壁 断割南壁土層 (S=1/40)

となっている。また北西側には壁溝を設けている。北東壁面にかかる柱穴は埋土の特徴からこの遺構に伴うものとみられるが、北西側に検出された径 0.1 ~ 0.17m の 2 基の小ビットは間連性が不明である。

溝状遺構 1 (図 5、図版 34) 長さ 13m にわたって検出された幅 0.5m、深さ 0.03m 程度の極めて浅い溝状遺構である。一部途切れる箇所もあるが、削平を受け部分的に残存したものと判断される。更に南北に延長していた可能性が高い。帰属時期は不明である。

(3) 調査区 3

調査区内に第 3.4 層の堆積はみられず、表土層直下が遺構検出面である第 6 層上面となることから全面的に削平を受けているものと判断される。調査区 2 における第 3・4 層の堆積状況と、後述する遺構 7 の検出状況からみて削平は 10cm 程度であると考えられる。

遺構 7 (図 12、図版 36) 長径 0.5m、短径 0.4m の楕円形に近い平面形状をなす土坑で、深さは 0.07m 程度である。弥生土器の鉢とみられる土器及び高環 (48) の脚部が出土しており、これらを埋納したとみられる。高環の環部は削平により失われたものとみられるが、この高環が完全に埋納されていたとすれば、深さは本来 20cm 程度はあったものと推定される。

遺構 18 (図 11、図版 36) 長径 1.3m、短径 0.55m の楕円形をなす土坑である。深さは 0.2m 前後である。遺物は出土していない。

溝状遺構 2 (図 5、図版 36) 延長 4.3m にわたる溝状の遺構で、本来は南北に更に延長していたものと考えられる。幅 0.5m、深さは 3cm 程度である。幅、深さや延長方向は溝状遺構 1 とよく似ている。遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

掘立柱建物 1 (図 11、図版 36) 柱穴 4 基を検出しており、少なくとも 2 間 × 1 間の規模は想定されるが、北西側に斜面が迫り、地形の制約からみて大規模なものとなる可能性は低い。柱穴 3 (P3) から須恵器 (46) 等が出土しており、時期は 6 世紀末～7 世紀初頭頃とみられる。

(4) 石帶巡方について

表土からであるが、石帶巡方 (3) が出土している。

石帶の装着方法は時期によって異なることが分かつており、当初は外鉄によって革帶に留められていたものが、後には潜り孔による穿孔方法を採用し、これに金属線を通して装着する方法に転換すると考えられている。この転換時期については長岡京跡における出土例のほとんどが潜り孔による穿孔方法によるものであることから、潜り孔を採用した石帶の使用は長岡京期までさかのぼるとみられている。

また、石帶具は小孔、線孔、無孔に分類されるが、これらは時期差による違いであることが指摘されており、透かし孔は消滅する方向へと変遷する (*9) ことから、無孔の石帶は、出土例からみて 10 世紀第 IV 四半期に使用のピークを迎えるとされる (*11)。

以上のように、石帶は寸法、透かし孔の有無、装着用の孔の穿孔技法とその数等の特徴がその生産・使用時期を示す。そこで稻成 I 遺跡出土の石帶をみてみると、復元であるが寸法が 42mm 四方で、周囲 4 面を平坦に磨き、且つ上面には面取りを施す。穿孔方法は中央から放射状に配置された潜り孔で、この孔の表面が他の表面に比べ著しく風化または劣化が進んでいることについて使用時の摩擦等を想定することができ、実際に銅線等の金属線を通して帶に装着していたとみられる。潜り孔は 1 箇所が欠損箇所に開けられているが、この穿孔は深さが他の 3 箇所とほ

ぼ同じで機能に不足ない状態であることから、穿孔前において既に欠損が有ったか、当該部分の穿孔作業時に欠損しながらも、再度穿孔を試みたことによると考えられる。更に他の1箇所は欠損により潜り孔断面の状況をよく観察することができ、これによると穿孔は1度貫通点に向けて方向を変えて穿たれており、初回の穿孔時に用いたものより径の小さい工具を使用して、2度目に貫通点に到達させ、これを繰り返すことにより1組の潜り孔を設けている。

石材はサヌカイトであり、後世のものとみられる比較的新しい欠損部分が新鮮な剥離面となっているため、この部分で石材本来の観察が可能である。あくまでも肉眼観察によるが、剥離面はさざくれ状の痕跡を残し、樹脂光沢を思わせるガラス質であることから、讃岐金山産のサヌカイトに近い特徴を有するといえる。また、大きさを平城宮・京出土例と比較してみると、正六位に相当する官位の官人が身につけていたものとされる規格に近似するが、袴帶の規格が律令制上の位階をそのまま現実的に反映するかという点は現在議論の決着をみておらず⁽¹²⁾、これを装着していた者の人物像は不明である。更に今回の調査において検出された集落の遺構は古墳時代末から飛鳥時代頃と考えられ、石帶が使用される時期とは異なる。よって当該集落遺構とは直接的に関連がないものと判断されるが、遺物包含層第3層中に僅かながら黒色土器等平安時代の遺物が混入することから、本遺跡の他地点において当該時期の遺構が存在する可能性が高い。

第5項 まとめ

稻成Ⅰ遺跡で検出されたのは1棟の掘立柱建物と2棟の竪穴建物のほか、土器を埋納した土坑等であり、これらはすべて調査区1東南隅から調査区2の東端、調査区3南半にかかる限られた範囲に集中して検出されている。

遺構検出面上には第3層及び第4層が堆積しており、これらの包含層は集落の廃絶後、長い年月のうちに、斜面の崩落とともに堆積したものであろうと考えられる。

この第3層の堆積を平面上で確認してみると遺構の展開する範囲とほぼ一致しており、且つ第3層の堆積がみられない部分については当該山塊の地層がその表面に観察される。第3層から第4層の堆積範囲が調査範囲のごく一部分に限定されるのは、後世に削平を受けたことでこれら包含層を含む覆土の大半が失われてしまったことによると推定され、本来遺構が展開する範囲は今回遺構を検出した範囲に留まらないことがわかる。

竪穴建物1及び2は一部分が比較的固い地山を削り込んで構築されており、竪穴建物1に設けられたカマドが斜面上方に煙道を持つ構造となっているのは効率的であるといえる。また、竪穴建物1及び2が掘立柱建物とよく似た方向に軸線を持つことは、集落内の建物配置の一端を示すものとみられ、また調査区3の北側では斜面が東へと張り出していることから、今回検出された遺構群を含む稻成Ⅰ遺跡の集落は、南南東方向へ広がる集落の北西端付近と推定される。そう想定した場合、斜面裾部付近では荒光川岸付近まで至る可能性もあり、その水産資源や水運の便といった環境的な恩恵を受けることになる。

今回遺構が検出された範囲は丘陵中腹部にある平坦部分であり、第3・4層の堆積状況から、この部分は遺構の帰属時期とみられる弥生～古墳時代において既に存在していた可能性が高い。集落は平坦地等高線に沿うような立地が推定されるが、これは、集落内での往来の利便性を考慮した可能性が高く、遺物の分布状況からも集落の範囲は、丘陵頂部まで及んでいなかったと考え

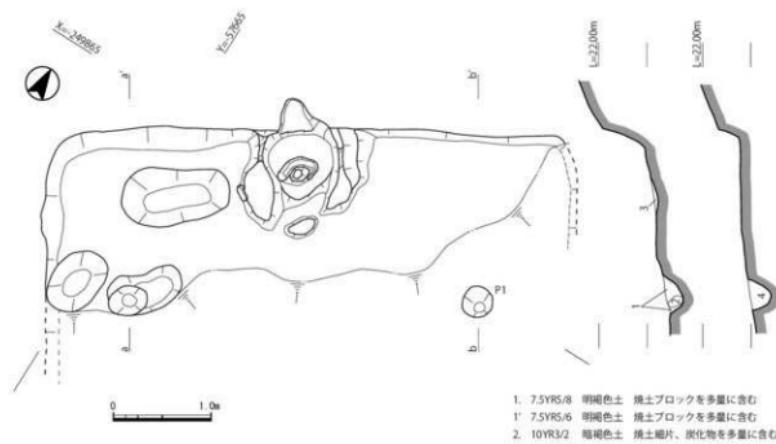


図8 積穴建物1 平面遺構実測図

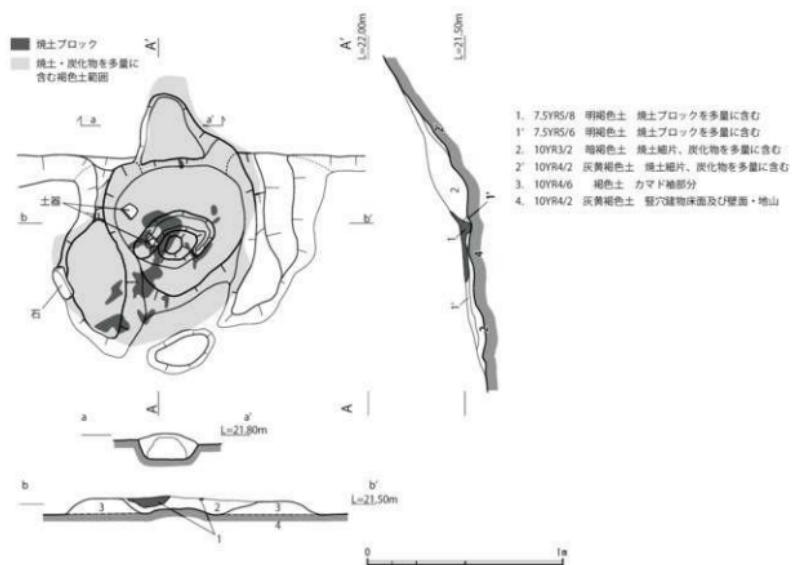


図9 積穴建物1 カマド実測図

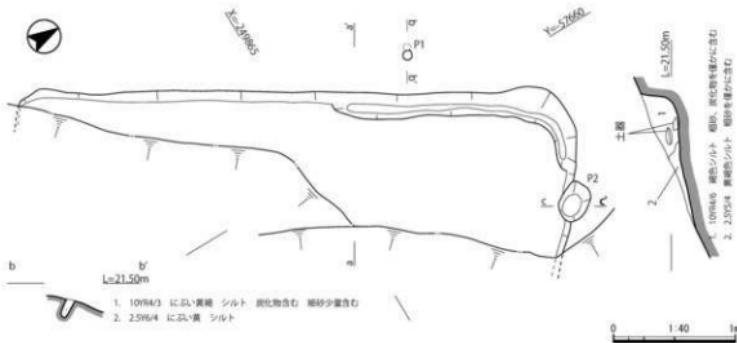


図 10 整穴建物 2 実測図

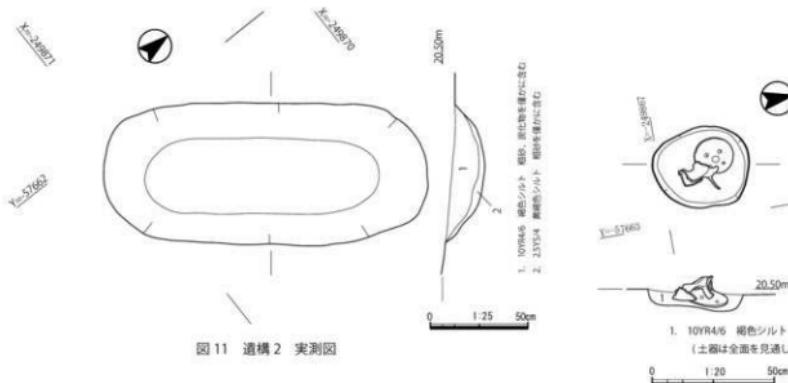


図 12 遺構 7 実測図

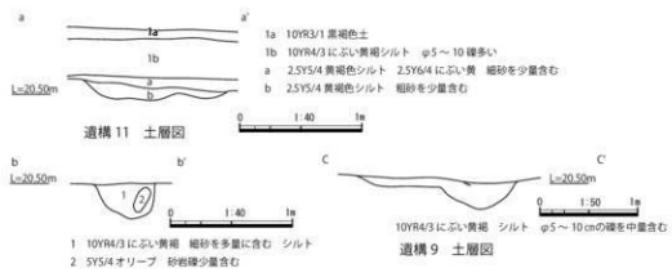


図 11 土層図

図 12 土層図

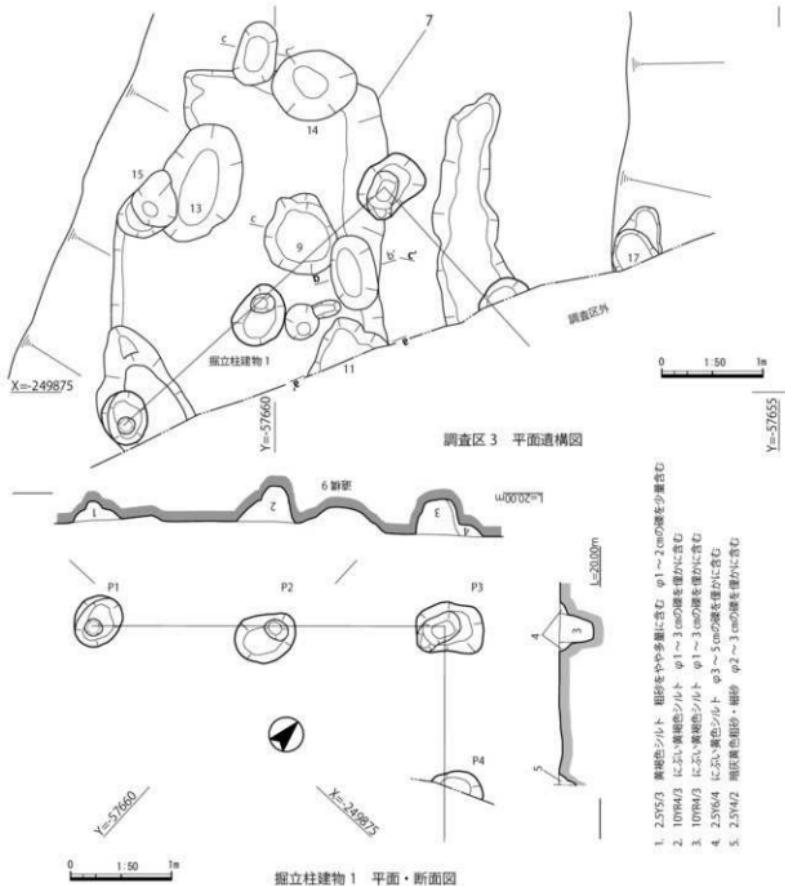


図 14 調査区 3 掘出遺構及び 据立柱建物 1 平面・土層図

られる。

今回検出された遺構は、集落のごく一部分であるが、稻成Ⅰ遺跡は荒光川水系における弥生時代中期以降の遺跡の展開、近接する稻成遺跡、稻成Ⅱ遺跡、北沖代遺跡、上流に存在する窯跡等も含めて検討する必要がある。平野部に立地する稻成遺跡では、自然流路跡で出土した遺物について、土石流等によって押し流されることにより堆積したものであるとの指摘がある(*12)。現在ほど土木技術が発達していない時代では土石流等の自然災害を予防するのは非常に困難であり、そうであっても河川のもたらす資源には依存しなければならないという要請があったものといえる。これら流域に形成された生活圏については近隣の遺跡とともに包括的に分析する必要があ

あり、今後周辺地域に分布する遺跡の詳細な調査、研究が望まれる。

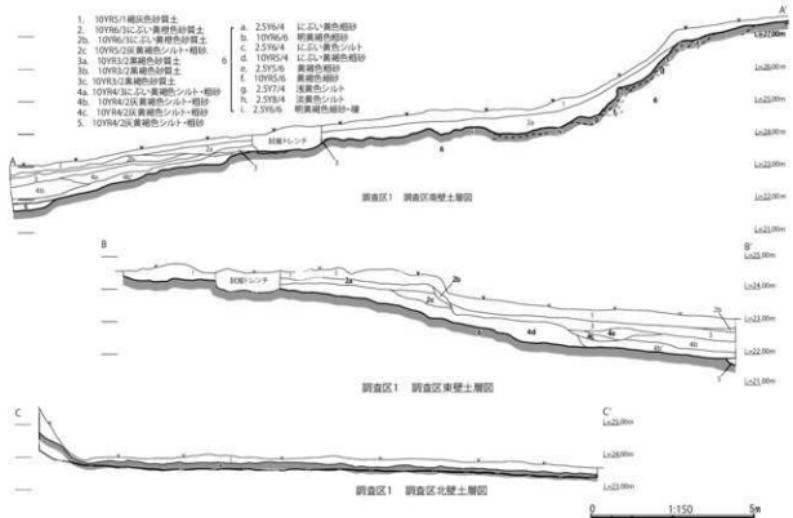


図15 調査区1 調査区壁面土層図

土器一覧表

報告書 番号	調査 面番号	種類 形態	調査区 地区	遺構 部位	口径 cm	高さ cm	底径 cm	残存率	色調	特徴・技法・特徴等
1	面19	土師器 高杯	1 QH	4層	(13.0)	残5.7	受鉢10cm下 (内・外) 黄褐7SYR7/6 (外) 棕7SYR2/6			摩滅著しく、調整は不明である。底部に粘土板を書き付けて整形したとみられ、軒部は板状とする。底部の穿孔は3箇所に認められる。
2	面19	土製品 又は浮 文式	1 QHg15	3層	3.4	1.2	3.4	100%	全体: 棕7SYR7/6~6/6	扁平で造形を失する。
4	面19	漆器器 盤	2 QHg16	2層	(19.2)	残5.1	口縁25cm (内) に近い赤褐5SYR5/4 (外) に近い赤褐5SYR5/4 (外) 赤褐10H8/8		口縁は外側に折り返し肥厚させる。内外面とも回転ナードを施す。	
5	面19	土師器 高杯	QHg18	3a層	(17.0)	残4.6	口縁25cm (内) に近い赤褐5SYR5/4 (外) に近い赤褐5SYR5/4 (外) 赤褐10H8/8		口縁はやや肥厚して屈する。内外面ともコナデを施し、底部を上方へつまみあげる。軒部以下は外面をナド後ハケ調整	
6	面19	土師器 高杯	2	3a層		残7.8	30%以下		(内) に近い赤褐5SYR5/4 (外) に近い赤褐5SYR5/4 (外) 深赤23YR7/3	軒部のみ。中実、軒方向にナギキを施す
7	面19	土師器 高杯	2	3a層		残5.3	20%以下		(内) 黄褐7SYR7/6 (外) 深赤23YR5/6	軒部上位のみ残存。軒部は後後に脚部内から充填。摩滅著しく、調整不明。
8	面19	土師器 高杯(脚 付柱)	2	3a層		残6.5	30%以下		(内・外) 深赤23YR5/6~6/6 (外) 棕4/2 深真理7SYR5/6	軒部のみ残存。中実、摩滅著しく、調整不良。
9	面19	土師器 支脚	2	3a層		8.2	80%		(内) に近い赤褐5SYR5/4 (外) 深真理7SYR5/6	支脚、外面ほぼ全体に被施痕跡がみられる。
10	面19	土師器 (把手)	2 QHg9	3a層		10%以下	(内・外) 明赤褐2SYR5/6 (外) 棕7SYR6/6		先端部分を欠損。把手部分はナデによる調整。	
11	面19	土師器 鉢	2	3a層		10%以下		(内) に近い赤褐10H9/7~6/6 (外) に近い赤褐10H9/7~6/6 (内) に近い赤褐10H9/7~6/6	先端部分を欠損。把手部分はナデにより、体部はハケによる調整。	
12	面19	漆器器 (良質/漆 器)	2	3a層		残4.7	1層 25%		(内) 漆4/6 (外) 黄4/6~5/6 漆オリーブ7SY4/2 深真理7SYR5/2	体部小位に2条の沈線を有し、また剥皮文を施す。外面全体に被施痕跡が認められる。
13	面19	土師器 鉢	2 QH	3a層		3.0	全体10cm 以下		(内・外) 棕7SYR7/6 (外) 黄2.5SY/1	全般的に摩滅著しく、調整不明。
14	面19	土師器 鉢	QHg15	3層	残2.0	4.4	高台10cm 以下	(内) 黄褐7SYR7/6~5/5 (外) 棕7SYR5/6	全般的に摩滅著しく、調整不明。	
15	面19	漆器器 盤	2 QH	3a層	(12.5)	残5.7	口径20cm (内・外) 漆4/6~5/6 (外) に近い赤褐5SYR4/3		口縁には1条の沈線あり、口縁端部はやや外傾する平坦面をなす。	
16	面19	漆器器 盤	2 QH	3a層	(16.5)	残4.8	口径30cm (内) 漆4/6 (外) 漆4/6 (外) 深灰10YR8/1		口縁端部や把手付近に凹痕を施す。底部以下外間に平行斜文タラキ場、内面は同心円の凸面となる。口縁付近のタキはナデにより一部不明瞭となる。	
17	面19	漆器器 盤	2 QHg18	3a層	(17.4)	残4.2	口径20cm (内・外) 漆4/6 (外) 深灰10YR8/1		口縁端部は外側に折り返し、やや摩滅する。外面を回転ナード。	

18	图19	惠恩器 变	2	3a:暗	(38.6)	横10.0	口幅20%	内~外) 白反SY6/1 斜) 白反NB/		
19	图19	惠恩器 变	2	3b:暗	(17.2)	残4.2	口幅15%	内~外~断) 白反SYB/1	口縫端部は外側に折り戻しとみられる。やや肥厚する。口縫部内外面を回転ナナ、面部以下外側をタキニ。内面に当たる真珠あり。	
20	图19	惠恩器 变	2	3b:暗		残6.7	口幅20%	内) 黑N/ ~外) 白反SY6/1 斜) 青反SPB/1~7~暗青SPB/1	中位に最大持合を面部及び底部は窄まる。体部外表面は上位を回転ナナ、下位をヘラケツります。	
21	图19	惠恩器 变	2	G0p18	3a:暗	(15.6)	残6.9	口縫端部下) 内~外) 白反N/ ~5~断) 增青赤GR4/1	体部中位に2つの浅溝がある。底部外表面をラウザリ、体部を回転ナナ、足込みで後脚側を踏む。ロ縫端部に麻底あり、陶芸TGが出土品に記載	
22	图19	惠恩器 变	2	G0p18	3b:暗		残4.5	(3.0) 口幅20% 内~外~断) 白反2.5YB/2~灰2.5YJ/2	やや小型化した短頭の高窓。上に開きに瘤状につり上方から先端して片脚つるつる。	
23	图19	黑色之恩 变	2	G0a18	3a:暗		残2.0	(8.2) 高台20% 内) 黑N/ 外~断) にぶい黄褐10YR7/4	A面、内部のみ素朴化する。内面に弱い凹みかげ。薄い作りで断面三角形の低い臺面を鉢付。体部外表面は多段状を見る。	
24	图19	惠恩器 变	2	G0	3a~3b:暗		残10.8	真~體(20%以下) 内) 黑反N/ 白反2.5YB/2 斜) 黑反2.5YB/1 斜) 黄反N/ 色斑) 青反2.5GY/1	やや厚の優美とみられる。翼部を回転ナナ、体部下位をヘラケツります。	
25	图19	惠恩器 变	2	3b:暗	(13.0)	3.8	口縫10% 以下 全体4%	内) 白反N/ ~外) 白反2.5YB/1 斜) 黄反2.5GY/1	やや小型、天井部を平坦につくる。ロ縫端部内面に波状線を呈する段有り。	
26	图19	惠恩器 变	2	G0e17	3b:暗	(14.0)	残3.5	口縫端部下) 内~外~断) 白反N/	ロ縫端部を丸くつくる。天井部欠損する。	
27	图19	惠恩器 变	2	G0e17	3b:暗	(13.0)	3.5	5%以下 内) 黑反2.5YB/4 斜) 白反4.5GY/1 斜) 黄反4.5GY/5/1に裏青2.5YJ/1をサンド	ロ縫端部は優やかに開き、種毛をぐくつくる。	
28	图19	惠恩器 变	2	G0p15	3b:暗	(13.0)	残3.7	30% 内~外~断) 白反N/	天井部及びロ縫端部の境は直接状をなし、ロ縫端部はあくびくやかに外側へ傾く。	
29	图19	惠恩器 变	2	G0a17	2b:暗	(12.2)	3.65	(8.6) 10% 内~断) 白反2.5YB/1 斜) 黑2.5YS/1	立ち上がりは低くやや内傾する。受部は丸みを持ち頭につくる。底面は回転ヘラツミで半球形となる。	
30	图19	惠恩器 变	2	G0	2b:暗	(11.1)	3.6	50% 内) 黑N/ (5) 白反N/ (5) にぶい黄褐10YR7/5	立ち上がりはやや低くつづり、斜面に立ちかかる。底部は断面が丸みをもつ三角形を呈する。底面に内巻石の漬跡あり。TK20B型式の特徴。	
31	图19	惠恩器 变	2	3b:暗	(11.0)	残2.7	口縫20%以下	内) 黑者青SPB/4/1~3/1 斜) 黄反SPB/5/1 暗赤10R2/4	立ち上がりはややくびくつづり、受部上面には弱い波状模様をなす波線がある。TK20B型式の特徴。	
32	图19	惠恩器 变	2	3a:暗	(12.7)	残3.9	20%	内) 黑N/ (5) 白反N/ (5) 青反SPB/5/1	立ち上がりは低く、直進的でやや内傾する。受部は丸みを帯び、底面は水平に突出する。底面部中央に直進状の底跡あり。TK20B型式の特徴。	
33	图19	惠恩器 变	2	G0	2b:暗	(11.5)	残4.3	20%以下 内) 黑N/ ~5~断) 白反NB/ 斜) 黑反NB/ ~7~	立ち上がりはやや直進形三瓣形を呈し、底やや内巻する。受部は底面に直進状の底跡あり。TK20B型式の特徴。	
34	图19	惠恩器 变	2	3b:暗	(11.0)	4.0	45% 内) 黑N/ (5) 白反N/ (5) 斜) 白反NB/	やや中型の坪身、立ち上がりは直進して低く内傾する。受部小さい。底部はやや弓形で、受部は回転ヘラツミの特徴。		
35	图19	惠恩器 变	2	G0	3a:暗	(11.2)	残4.2	口縫20% 内) 黑反2.5YJ/1 斜) 白反7.5R6/1~5/1 斜) 青7.5R5/2	やや小型の坪身、立ち上がりはやや厚くつづり、僅かに内傾する。	
36	图19	惠恩器 变	2	G0p16	3b:暗	(11.5)	2.7	9.0 20% 内) 黑反N/ ~7/ 斜) 白反NB/ ~7/ 斜) 白反2.5YJ/1 斜) 黑反SYH/1~5/ 斜) 黑反2.5YB/1	器壁に対する器高が低い。立ち上がりはやや低く、受部は僅かに斜方に突出する。底面は回転ヘラツミによるみならず、底くび直進面。	
37	图19	惠恩器 变	2	G0	3a:暗	(10.1)	3.2	(8.6) 口縫端部下) 内~外) 黑青SPB/5/1 斜) にぶいSYH/4	立ち上がりはやや低く、内傾する。受部は斜方に突出する。底部は回転ヘラケツミによる。	
38	图19	惠恩器 变	2	G0q17	3b:暗	(13.0)	20%以下	内~断) 黑青SPB/5/1 斜) 青黄3B5/1	やや中型、立ち上がりは直進して瘤状部をつくり内傾する。受部は小さく丸く上方突出する。底部は回転ヘラケツミによる。	
39	图19	惠恩器 变	2	3b:暗	(10.5)	残3.2	口縫20% 以下 全体4%	内~外) 黑N/ 斜) 白反N/	やや小型、立ち上がりは直進して瘤状部をつくり内傾する。受部は小さく丸く上方突出する。底部は回転ヘラケツミによる。	
40	图19	惠恩器 变	2	3c:暗	(11.4)	3.4	35% 内) 黑N/ ~5~ 斜) 白反N/	やや小型、立ち上がりは直進して瘤状部をつくり内傾する。受部は小さく丸く上方突出する。底部は回転ヘラケツミによる。		
41	图19	惠恩器 变	2	G0	3b:暗	(9.8)	残2.5	10%以下 内~外) 黑N/ ~5~ 斜) 白反2.5YR/2	小窓化した坪身である。立ち上がりは直進直角舟形を呈し、低く内傾する。受部小さく、輪筋にふるか。TK21B型式の特徴とみられる。	
42	图19	惠恩器 变	2	G0	4a:暗	(13.4)	残3.7	口縫10% 内~外~断) 黑青SPB/5/1	器壁やや厚く、口縫部付近僅かに内傾する。口縫端部は内面に直面面をつくり、底部は直進面とし、輪筋部は直進面とみられる。	
43	图19	惠恩器 变	2	G0e14	4b:暗	(12.0)	3.7	口縫10%下) 内~外) 白反N/ ~灰N/ 斜) 白反N/	立ち上がりは瘤部を夷り気味につくり、僅かに上方へつまみ上げる。受部はほんの少し、上面にうっすらとみらるる波紋を有する。裏面にヘラ描きあり。	
44	图19	惠恩器 变	2	G0p14	4b:暗	(9.0)	残5.3	口縫20% 内~断) 白反10BG/1 斜) 灰10Y/1	愈したは瘤部の裏面から瘤部とみられる。内面外に回転ナナを施し、ロ縫端部を直立気味につくる。	
45	图19	惠恩器 变	2	G0p15	4b:暗	(20.0)	残5.2	5%以下 内~断) オリーバK2.5GY/1 斜) 白反N/	口縫は内面と回転コナゴナにより調節、外縫は裏面に平行線のタラボ筋が強められ、内面は裏面に平行に直進筋が走る。	
46	图19	惠恩器 变	2	G0	3	(12.6)	残3.8	20% 内~外) 黑青10BG/1~5/1 斜) 白反10BG/1~5/1 斜) にぶい灰7.5YR/4	やや小型の坪身、天井部と面部に瘤状部を有しない。ロ縫端部はやや肥厚させいくつくる。TK20~TK21B型式の特徴とみられる。	
47	图19	惠恩器 变	3	G0	8	14.0	4.2	40% 内) 黑N/ 外) N/ 斜) 白反N/ ~4/	ワタリと輪筋付近へ工具を削る。天井部とロ縫端部は回転状をなす。天井部内面には土刷巻き上げ痕? が残る。TK23~TK20B型式の特徴とみられる。	
48	图19	惠恩器 变	3	G0	7	(14.5)	4.3	40% 内) 黑N/ 外) (5) N/ 斜) 白反N/ ~4/	摩擦著しく、調整は不器である。穿孔は管壁に認められる。	
49	图19	惠恩器 变	3	7		(14.7)	30%	内) 灰7.5YR/7/8~9/8~外) 白反) 7.5YR/6		

石經一覽

相手会員ID	固・仮会員ID	種別	開業地区	直営・複数店舗	最大立地面積m ²	最大幅員m	最大奥行m	重さkg	石材	荷存率	備考
3	石井方 道延	1 QR15	西園(山陽)	3.5	4.2	0.9	26.8	サスケイト サスケトイド?	75%	奥行き及び正面の幅面は鏡面的に無い。裏面は後付けに差し引くによる摩耗を行なう。序号は2段階の工程によるのみなら、孔内には穿孔方向を変えた折詰の強度の1段の強度を有する。	

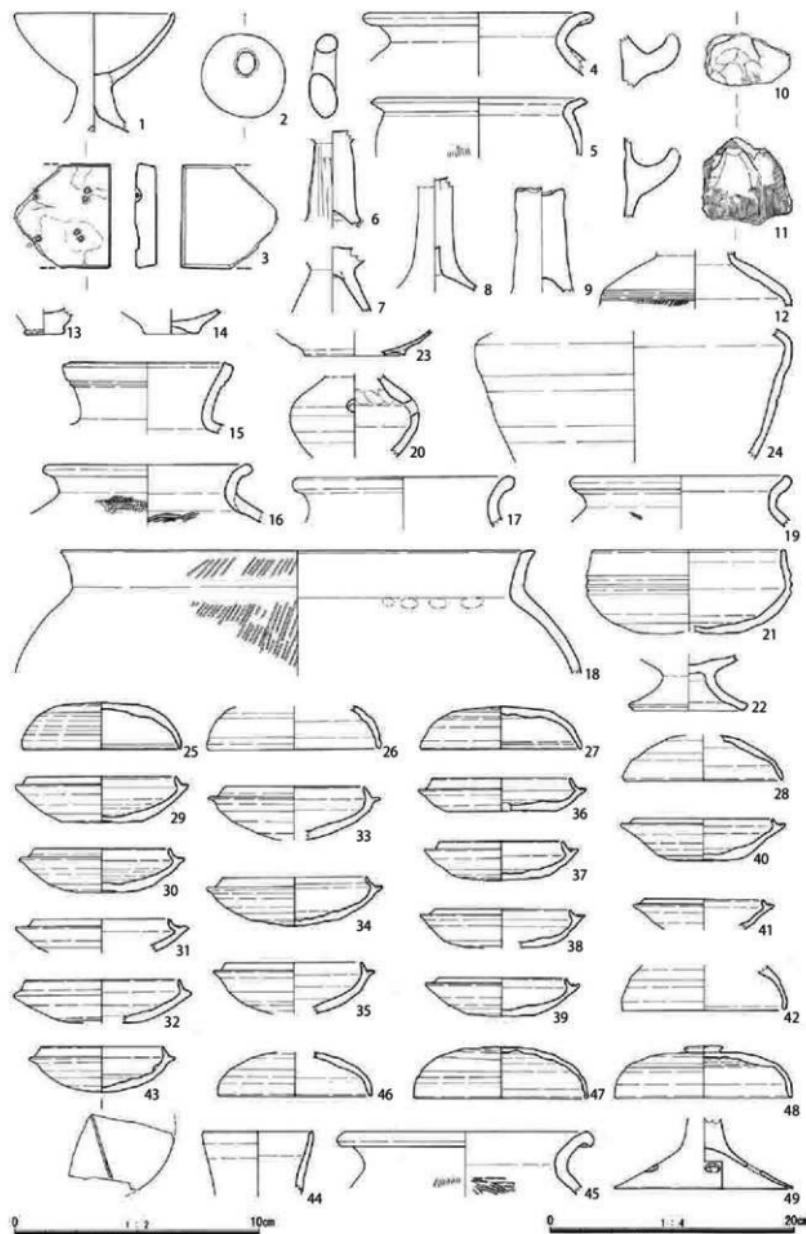


図 16 遺物実測図

第5節 安宅本城跡

第1項 調査に至る経緯

近畿自動車道紀勢線事業に伴う田辺～すざみ町間の建設工事により、安宅本城跡として埋蔵文化財包蔵地に指定されている範囲内に自動車道が建設されることになった。このため県文化遺産課で平成21年度から22年度にかけ5箇所にトレンチを設定して試掘確認調査を実施した結果、高架橋の橋脚が設置される2箇所について本調査が行われる運びとなった。また、当該地点は平成21年度に白浜町により実施された発掘調査の1トレンチ（図2）に近接する。

第2項 位置と環境

（1）地理的環境

安宅本城跡は、西牟婁郡白浜町安宅に所在する。白浜町は、和歌山県南部に位置し、地理的には田辺湾から紀伊水道を望む半島地域と富田川及び日置川の下流域に大きく分けることができる。市街地は北部の半島地域に形成されているが、南部では海岸地域まで迫る紀伊山地の深い谷あいに蛇行する富田川、日置川の下流域に広がる平野に集落が点在する。町域の81%が森林であり、田辺南部白浜海岸県立自然公園及び熊野古木灘海岸県立自然公園の海岸線、大塔日置川県立自然公園の渓谷や山村風景、自然林など自然環境に恵まれる。

日置川は果無山脈に源を発し太平洋に注ぐ延長77kmの河川で、深い渓谷を蛇行する急流のために河口域でも狭小な堆積平野が広がるのみである。本遺跡はその河口域の左岸に所在し、支流である安宅川の流れ込みにより形成されたわずかな平野に立地する。

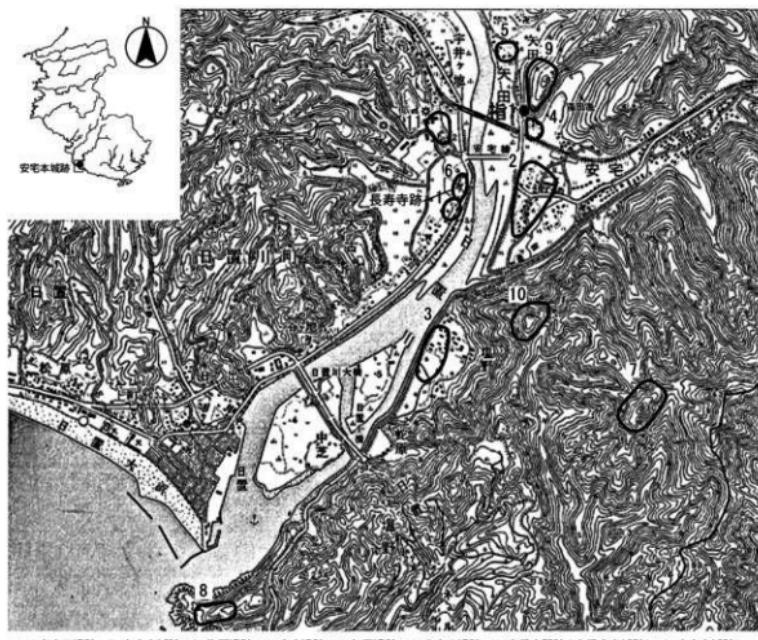
（2）歴史的環境

安宅本城跡を含む日置川下流域の平野部は遺跡の集中するところである。

縄文時代の遺跡としては大古I遺跡（6）があり、前期末の大歳山式、後期中頃の元住吉式が出土している。弥生時代の遺跡としては大古II遺跡（1）で中期の土器等が出土、矢田遺跡（5）では石廈丁が採集されている。八幡山城跡（9）からは後期末頃の土器が出土しており、高地性集落の存在が指摘されている。

古墳時代の遺跡は、集落跡として安宅遺跡（4）があるが、古墳は確認されていない。古代律令制下においてこの地域は牟婁郡に属し、その郡内に存在したとされる五ヶ郷のうち岡田郷または栗柄郷に比定される可能性が指摘されているものの、詳細は不明である。また、八幡山城跡では富本錢が出土しており、飛鳥池遺跡で出土したものとは字体や形状、成分が異なるため中世の模鎔錢である可能性も指摘されているが、後に藤原宮跡で同様の字体のものが出土している。

鎌倉時代前期の天福元（1233）年には、当該遺跡を含む範囲における安宅荘の成立が文書により明らかとなっている。日置川右岸の大古集落北側に位置する長寿寺はその創建年代が不明であるが、その境内地からは暦応5（1342）年の刻書がある備前焼大甕が出土しており、紀年銘を持つ備前焼としては最古のものである。長寿寺に伝わる平安時代中期（10世紀後半）の作とみられる本尊の薬師如来像、脇侍の日光、月光菩薩は必ずしも創建年代を示すものとは言えないが、少なくともその頃には当地域に寺院が造営され、一帯の中核地域的な様相を呈していたことも推定される。室町時代には安宅氏が一帯の領主として活躍するようになり、本拠の安宅本城跡はその安宅



1. 大古II遺跡 2. 安宅本城跡 3. 塩野遺跡 4. 安宅遺跡 5. 矢田遺跡 6. 大古I遺跡 7. 古武之間跡(古武之森城跡) 8. 向出城跡
9. 八幡山城跡 10. 勝山城跡 11. 大野城跡

図1 安宅本城跡及び周辺の遺跡

荘の中心に位置し、方形区画を持つ居館が想定されている。安宅莊はここを中心として日置川流域河口付近に広がる平野部の大半をその範囲とする(*13)。安宅本城跡の北東は紀伊山地の一端(標高85m)となるが、ここに築かれた八幡山城は麓の安宅本城跡に対する、いわゆる「詰めの城」である。安宅氏の支城は安宅莊に比定される範囲を含む地域を中心に現在9箇所(安宅莊内で8箇所)が確認されており、日置川下流域の限られた範囲においてこのような多数の支城が築かれている点は特徴的である。今回調査を実施した地点は安宅本城跡として埋蔵文化財公載地に指定されている範囲の南端にあたり、「安宅一乱記」において湊の所在地として伝承されている。

(3) 既往の調査

安宅本城跡ではこれまでに数度の試掘調査が行われたほか、平成14年度に財團法人和歌山県文化財センターが日置川町教育委員会の委託を受け、安宅小学校の北西100mの位置(図2)でトレンチ調査を実施している。この調査では柱穴や土坑、堀状構造または自然流路を検出したほか備前焼や輸入陶器等12~16世紀の遺物が出土した。

また、平成21年度には白浜町教育委員会により2箇所(図2)においてトレンチ調査が実施されているが、このうち今回の調査地にほぼ隣接するトレンチ(1トレンチ)で16世紀前半代に帰属すると考えられる大型の掘形を持った柱穴21基が整然と並んで検出された。

第3項 調査の方法

(1) 地区割りの方法

地区割りは、大古II遺跡の調査と共通である。

平面直角座標系（世界測地系）による X=-268000m、Y=-49000m を基点として大区画、小区画を設定した。調査区は大区画の範囲内に位置する（図3）。

(2) 基本層序

調査区1及び調査区2では次のとおり基本層序が異なる。

調査区1

調査時の地表面下0.5mまでは水田耕作土及び床土であり、5面の耕作面を確認した。その下層では東側へと緩やかに下る傾斜を検出した。これより下層は自然堆積であり、灰黄褐色のシルト及び細砂混じりのシルト層が厚く堆積するが、その下面では自然流路を、更にその下層においても古代に帰属すると考えられる自然流路を検出した。

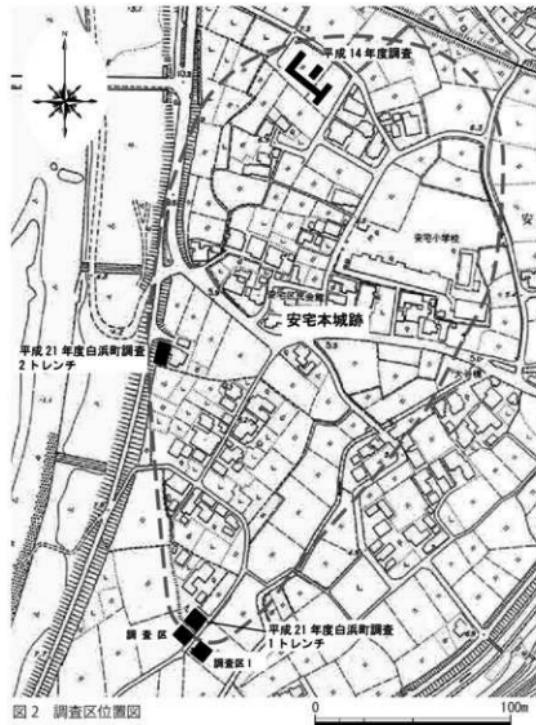


図2 調査区位置図

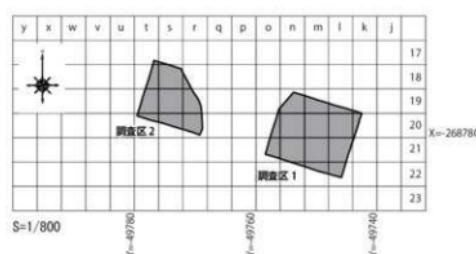
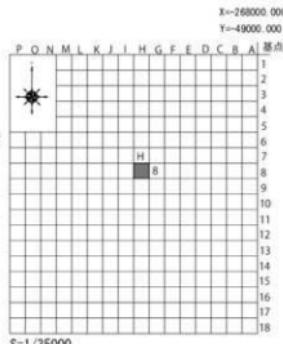


図3 調査区及び地区割



調査区 2

調査時の地表面下 0.9m までは水田耕作土及び床土であり、10 面程度の耕作面を確認したが、それより下層は自然堆積であり、西側の日置川に向かって下る地形となる。水田耕作土下位に含まれる遺物は近世末以降のものであることから、調査区 2 付近が地形的に安定するのは近代以降であると考えられる。

第 4 項 調査成果

(1) 調査区 1

遺構と遺物

第 1 遺構面（図 4、図版 37）

鋤痕と考えられる耕作痕跡を検出した。これらは 0.8m 程度の間隔を空けて 9 条程度が北北東方向から南南西方向へと延びる。

第 2 遺構面（図 5、図版 38）

遺構 1 は流路である。自然流路と考えられ、北から南への流水方向が推定される。幅 3.5 ~ 4.5m をはかるが、調査区の北壁付近で東へと広がることから、ここで幅を大きく広げるか、もしくは東へ屈曲していた可能性がある。埋土中に遺物は含まれない。

遺構 2 も自然流路であり、下層確認のため調査区東側に設定したサブレンチ内に検出したものである。埋土中に土師器、黒色土器（1）を含むことから、古代に帰属するものと考えられる。黒色土器（1）は内黒で低い高台が付く。摩滅が著しく、器表面の調整は不明瞭で、内面にミガキの痕跡と考えられる弧状の痕跡も窺えるが不明瞭である。またその形態からは在地産のものと考えられることから、この自然流路は遅くとも 10 世紀初頭には埋没したものと推定される。

(2) 調査区 2

第 1 遺構面（図 4、図版 37） 近世末頃と考えられる耕作痕跡を検出した。

第 2 遺構面（図 5、図版 38） 第 1 遺構面から掘り下げたものの、生活痕跡は検出されなかった。調査区周囲の堆積状況から判断して掘削可能な深度は地表面下 2.1m であり、その時点での平面を第 2 遺構面として平面図を作成した。

第 5 項 まとめ

調査区 1 及び 2 において検出されたのは近世以降の耕作痕及び自然流路であり、中世以前の生活痕跡は検出されなかった。また土層で確認された水田耕作の痕跡は短期間にもかかわらず繰り返し上方へとかさ上げされた様子が窺え、今回調査を実施した地点は近世末頃まで、治水面で不安定な状況にあったことが推定され、生活に適した環境であったとは考えにくい。

自然流路から出土した土師器の小片や黒色土器は摩滅が著しく、またこの自然流路以外に古代のものと認められる遺構は検出されていないことから、その由来は流路上流となる遺跡の中心域付近に求めざるを得ない。

1966 年に撮影したこの付近の航空写真では、今回の調査区より南西側に耕地が広がっており、それらの耕地が占める範囲の東側外郭線は今回の調査区付近まで、北から南へと緩やかに弧を描く。これには旧河岸等の地理的条件が影響している可能性もあり、その対岸（右岸）の住宅や敷地が河岸に沿って幾重にもラインを描く様に占地する状況も、各時期における河岸のラインを示

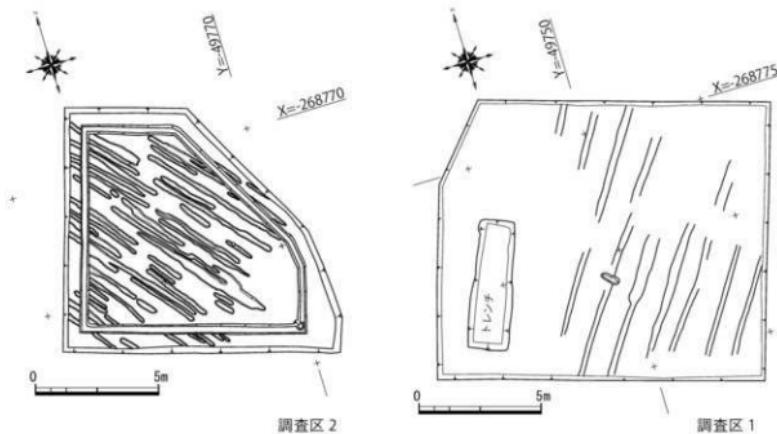


図4 調査区1・2 第1遺構面検出遺構図

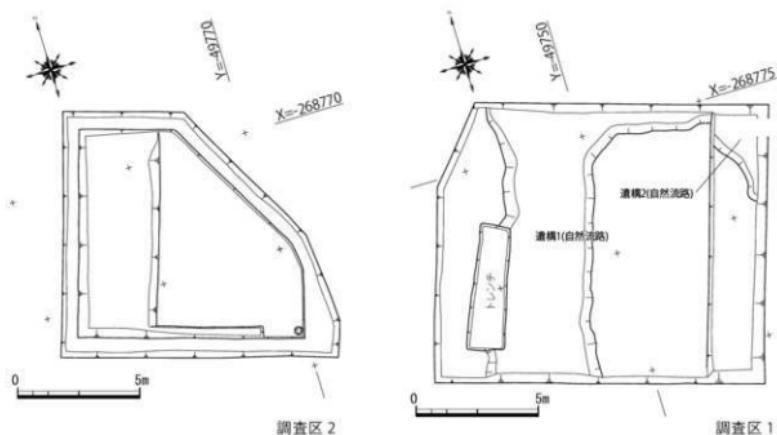


図5 調査区1・2 第2遺構面検出遺構図

しているものである可能性もあり、(*13) 近世末頃以降の遺物を含む土層が厚く堆積する状況とも合わせて、少なくとも近世末頃まではこの位置まで河岸が迫っていた可能性を指摘することができる。

平成21年度の調査で検出された掘立柱建物跡は、中世にはこの近接地域まで生活圏となっていたことを裏付けるものであるが、この付近の遺跡の広がりについては一時期における河川の浸食による影響も考慮する必要があることになり、「安宅一乱記」に描かれる湊の位置の比定には、近接地点での更なる調査が望まれる。



図6 遺物実測図

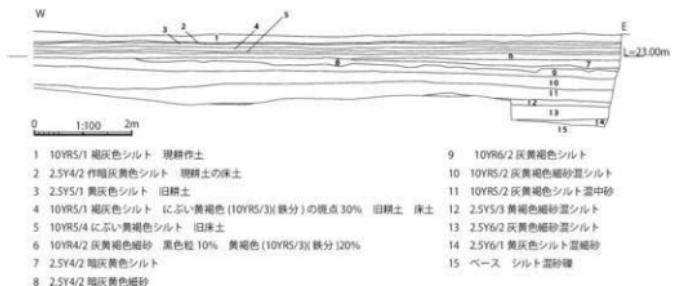


図7 調査区1 北壁土層



写真1 遺跡周辺航空写真 (国土地理院撮影)

第6節 用ノ口遺跡

第1項 調査に至る経緯

近畿自動車道紀勢線事業に伴う田辺市へすさみ町に至る自動車道及びこの自動車道から白浜空港へのアクセス道路について、その建設予定地の一部が田ノ口遺跡として埋蔵文化財包蔵地に指定されている範囲にかかることとなった。

これにより、県文化遺産課が平成23年度に確認調査を実施した。その結果、当該建設予定地は本調査の必要があるものと判断され、県文化遺産課が国土交通省近畿地方整備局紀南河川国道事務所と協議を進めた結果、丘陵斜面及び平野部の一部について本調査を実施する運びとなった。発掘調査は国土交通省近畿地方整備局紀南河川国道事務所の委託を受け、公益財団法人和歌山県文化財センターが実施した。

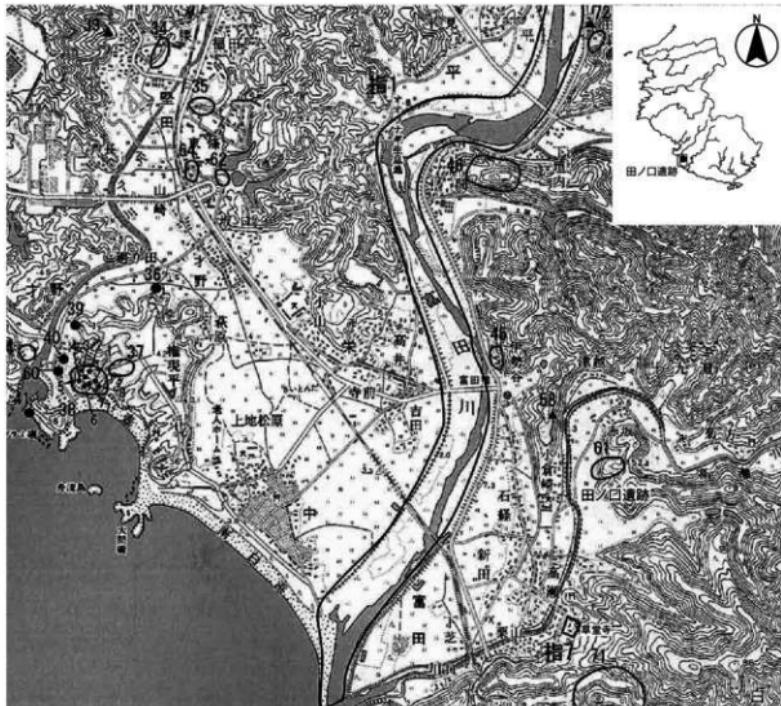


図1 田ノ口遺跡及び周辺の遺跡

第2項 位置と環境

(1) 地理的環境

田ノ口遺跡が所在する白浜町は和歌山県南部に位置し、町域の81%は森林で、田辺南部白浜海岸県立自然公園、熊野枯木灘海岸県立自然公園、大塔日置川県立自然公園を含み自然環境に恵まれたところである。また太平洋に面した半島域には、海水浴場のほか全国有数の温泉地である白浜温泉があり、観光資源も豊富である。

本遺跡の西側約600mを南北に延びる国道42号は県北部から太平洋沿岸を南へ走り、本州最南端である串本町潮岬付近を経由して三重県熊野市方面へ向かう主要交通路である。

町域には太平洋に注ぎ込む富田川、日置川といった2つの大きな河川があり、その下流域には沖積平野が広がる。田ノ口遺跡は富田川の河口付近に広がる平野の東端にあたるが、現在の河口からは東へ約2kmの位置にあり、富田川へ流れ込む高瀬川の東岸に形成された狭小な沖積平野の一部と、標高40m程度の丘陵西側斜面がその範囲に含まれる。

当該地点は戦後、丘陵上で畠地の開墾や植林がなされ、さらに昭和40年代に山裾の平野で圃場整備が進められたことから、現状では丘陵斜面は大部分が平坦地に造成され、丘陵裾部は住宅の敷地及び耕作地となっていた。山頂付近は海岸方面に眺望のきく場所であり、富田小学校が立地する低丘陵を挟んで遠く太平洋を望むことができる。

(2) 歴史的環境

田ノ口遺跡から約350m北西の丘陵上には、サヌカイト製の有舌尖頭器が出土した十九淵遺跡(58)が知られ、縄文時代草創期の遺跡とみられている。またこのほか、天狗谷遺跡(早期～晚期・25)、横浦岩陰遺跡(前期～後期)、細野遺跡(中期～後期)、垣谷遺跡(中期)、瀬戸遺跡(中期～晚期)、瀬戸田尻浜遺跡(晚期)等の縄文時代の遺跡が点在しており、縄文時代には草創期から晚期まで、この地域が人々の生活の場となっていたことが窺える。

また弥生時代の遺跡としては、瀬戸遺跡、日神社境内遺跡(45)等がある。

瀬戸遺跡は昭和50年代に、京都大学により発掘調査が実施されている。縄文時代中期から平安時代中期まで存続した遺跡と考えられており、縄文時代の遺物としては土偶が出土している。

江津良遺跡、瀬戸田尻浜遺跡は、出土・採集遺物からは海に面して立地する庄内併行期の遺跡であることが推定され、製塩土器も採集されている。端田岬遺跡は標高30m程度の丘陵上に所在する遺跡で、石鎚や石斧などの石器が採集されている。また、日神社境内遺跡は富田川東岸の河岸段丘上に所在し、田ノ口遺跡からは近い距離にある。

古墳時代の遺跡として、滑石製品等祭祀に伴うとみられる遺物が出土した坂田山遺跡のほか、県史跡である火雨塚古墳をはじめ権現古墳群(38)、脇ノ谷古墳(60)、オリフ古墳(39)、安久川古墳(40)等の古墳が存在する。これらの古墳はいずれも海岸に近い場所或いは河口付近に造営されたものである。火雨塚古墳は近世頃からその存在が知られており、主体部は横穴式石室で石室内には組合式石棺が存在する。墳丘は土の流出が著しいため不詳であるが、円墳であると考えられている。また権現古墳群は8基の古墳から成る古墳群で、標高40m程度の台地上に所在する。埋葬施設は箱式石棺で、昭和6年の自然災害による崩落の際には、1号墳から直刀や鉄鎌が出土した。

古代には、田ノ口遺跡の所在地を含む一帯は牟婁郡に属したと考えられている。『日本書紀』には現在の湯崎温泉を指すとされる「牟婁の溫湯」に関する記述が登場し、古くからその名が知られる。

さらに平安時代後期から鎌倉時代にかけて盛んになった熊野三山への参詣には、大辺路が富田川流域から新宮方面へ続くことから、田ノ口遺跡を含む一帯が当時、他地域との交通路に近い場所であったことがわかる。

鎌倉時代には、日置川下流域に安宅氏が本拠を構える。水軍として優れた勢力を有した安宅氏は中世以降もその海運力を駆使し、東海地方から紀南を経て瀬戸内地方へと延びる海上交易路に多大な影響力を持ったと考えられる。安宅氏は日置川沿いに數々の城を構えたが、上富田町に所在する龍松山城をその本拠とした山本氏が坂本付城、釣瓶山城、国陣山城、尻付山城、野田城、蛇喰城（以上は7城郭跡は上富田町内に所在する）等富田川流域に多くの城郭を築いており、現在の白浜町を含む一帯は安宅氏と山本氏の勢力が拮抗する地域であったといえる。

(3) 既往の調査

田ノ口遺跡においてこれまで発掘調査は実施されていないが、平成13年度に実施された分布調査では、土師器や奈良時代の製塩土器が採集されている。

第3項 調査の方法

調査区は調査区1～3の3つに分け、このうち排土の反転など作業進行上、調査区2を調査区2-1及び調査区2-2、調査区3を調査区3-1及び調査区3-2のそれぞれ2区画に分割した。調査は調査区1と調査区2-1、調査区2-2と調査区3-1及び調査区3-2区と3つの工程に分け、順次作業を進めた（図4）。航空写真測量は3回に分けて実施しており、調査面積は、合計4,117m²である。

(1) 地区割りの方法

調査区の地区割りは、平面直角座標系（世界測地系）第VI系による、X=270,000m、Y=54,000mを基点とした中区画（図3）及び小区画（図4）を設定した。これらの区画は3箇所の調査区相互の位置関係を把握し易くするため、各調査区を網羅するよう設定している。

また、基準点測量により、3級基準点及び4級基準点を



図2 調査区位置図

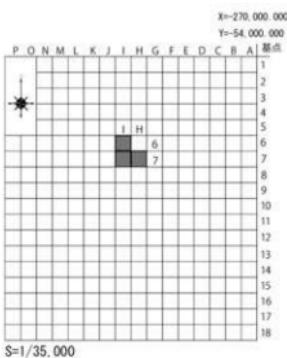


図3 地区割り（中区画）

設置した。

水準測量は、1等水準点から3級基準点まで観測を行い、さらに4級基準点まで観測し水準移動を行った。

(2) 基本層序

基本層序は調査区1から3において全て異っており、各調査区に共通する層位はない。よって各調査区について以下のとおり個別に設定した。(図5,6,7)

1) 調査区1(図5)

第1層 (表土) 圃場整備後の水田耕作土である。

第2層 平安時代後期以降の遺物包含層。複数の層位に細分が可能であるが、この層の堆積は高瀬川の増水や調査区東側にあたる斜面からの土の流出が主な要因であると考えられる。土器のほか、局所的に微細な骨片を含む炭化物が径20~30cmの範囲にまとまって混入する(写真1)。

第3層 第3a層及び第3b層に分層が可能である。第3a層は平安時代後期以降の遺物包含層であり、溝1の埋没後に堆積している。第3b層は薄く堆積した炭化物の層で、遺構109を扇頂として西側に向かい扇状の広がりがい窓える。微細な土器片を多量に含み、遺構101等周辺の遺構に流入している。

第4層 地山であるシルト層(第4a層)、岩盤及び遺物を含まない砂層(第4b層)を第4層とした。上面が遺構検出面であるが、調査区東半部分では当該土層まで削平が及ぶため、調査区の東側では表土層直下に岩盤が露出しており、そのまま丘陵斜面へ続くと考えられる。砂層は海浜砂と判断され、粒径の小さい砂が主体で、より深い位置では汽水域に見られる貝殻が含まれる。

2) 調査区2(図6)

調査区2にあたる場所は近代以後に住宅の敷地として造成されており、基本層序は敷地として利用されなくなった後の覆土と、地山である。平安時代後期以降の遺構も検出されているが、敷地造成時の削平は地山にまで及ぶとみられ、遺物包含層は近代以後の遺物を含む。

第1層 近代の廃棄物を含む腐葉土が主体となった表土である。

第2層 近世以降に構築されたと考えられる石垣の、残存する最下段を覆って堆積する。

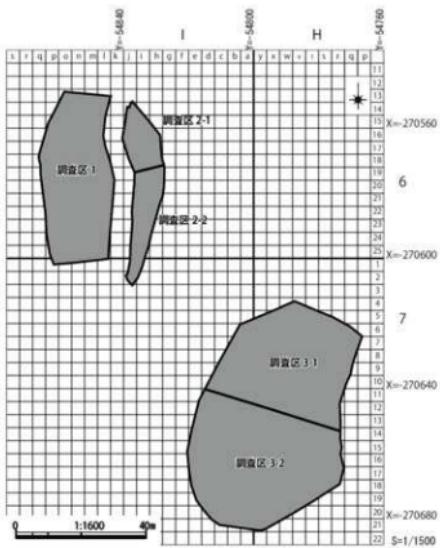


図4 調査区及び地区割 中区画及び小区画

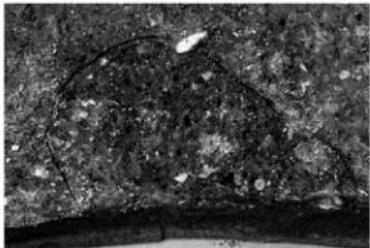


写真1 第2層中にみられる炭化物の集中

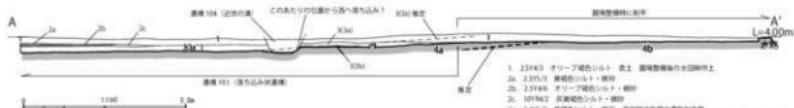


図5 調査区1 セクション1 南壁土壌図

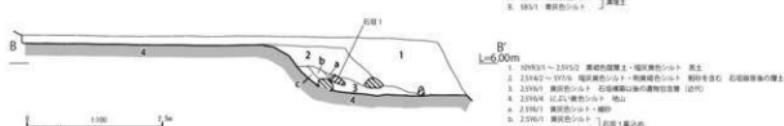


図6 調査区2 セクション1 北壁土壌図

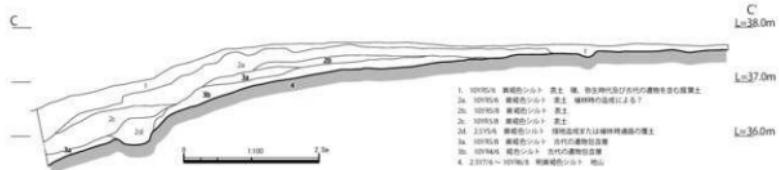


図7 調査区3 セクション1 南壁土壌図

第3層 近世（幕末以降）の遺物を含む包含層であり、下段の石垣から西側に存在する。石垣の構築に伴う整地土であるとみられる。

第4層 地山であり、遺構検出面である。上段では第1層直下となり、重機によるとみられる掘削痕跡が各所に残っていた。また調査区2-2の南端では、この層の上面に岩盤が露出している。

3) 調査区3（図7）

基本土層は調査区3-1・3-2について共通である。調査区3には畠地として開墾された平坦部分と丘陵斜面部分といった、地形が大きく異なる部分を含む。平坦部分は斜面を大きく削平しており、その縁辺となる斜面上端付近で僅かに旧地形を留めていると考えられるものの、大部分は地山である第4層上面（遺構検出面）を畠作に伴う土が覆う。丘陵斜面は地形上、絶えず崩落と堆積を繰り返す状況にあったことが想定され、畠地の開墾に伴う堆土や土の流出も考慮せざるを得ず、堆積土の帰属時期を判断するのはやや困難であるが、第3層は平安時代以降の遺物包含層と判断された。

第1層 表土。現地表面を覆う腐葉土で、礫及び弥生時代から古代にかけての遺物を含む。

第2層 表土。畠地開墾に伴う堆土とみられ、礫及び弥生時代から古代にかけての遺物を含む。

第3層 平安時代以降の遺物包含層。a～cに分層が可能である。斜面上で地山に平行して堆積する比較的均質な土層であるため、平安時代から近代の畠地開墾時に至るまで自然に堆積したものと判断された。ただし現況でも斜面各所に崩落がみられ、遺物の露出がみられることから、3c層以外については、これらのより細分された層ごとに帰属時期を特定することは困難である。

第4層 地山であり、上面は遺構検出面である。削平により一部露出した岩盤を含む。

第4項 調査成果

1) 調査区1

調査区1では第4(4a・4b)層上面で遺構検出を行い、近世以降の擾乱及び平安時代の遺構を同一面上に検出した。また調査区南半では圃場整備に伴うとみられる、耕歴を充填した暗渠が幅約0.3m、深さ約0.6mで枠目状に掘削されていた(図9)。

遺構101(図9、図版40・41・42)東西幅15m以上で西側は調査区外に及び、南北は35mにわたる。当初調査区北側から南方向へと延びる、幅広く浅い溝状遺構と考えられたが、調査区南半で南西方向へ落ち込む様相を見ることから、地形に伴う自然流路或は落ち込み状をなす地形であると判断された。またこの遺構の東側上端は遺構壘形の上端ではなく、圃場整備時に緩やかな斜面となっていたところが全面的に水平に近く削平されたことにより、東側の第3a層が削り取られて地山(第4a・4b層)が露出した結果、一見落ち込み状遺構の上端に近い形を呈しているものと判断された(図5)。そのため、当該遺構埋土の一部を基本土層の第3a層としている。ただし遺構104を挟んだ東西で底面の高さに違いがみられ、傾斜の連続性も認め難いことから、遺構104東側上端に沿った位置に西へ落ち込む段差状の上端が存在していた可能性が高い。遺物は土師器(6~9)、須恵器(10・12・13)、黒色土器(11)が出土しているが、遺物の分布は、これらが本来遺構109近辺に存在した遺物であり、そこから遺構101に落ち込んだとみられる状況を示し、遺構109に近い位置では集中して出土するものの、調査区西壁付近では疎となりほとんど出土をみなかった。

遺構104(図9、図版41)近世以降に掘削された溝であるが、それ以前に窪地として存在していたとみられる落ち込み状遺構101の痕跡を踏襲している可能性が高く、先述した遺構101の段差状の上端に沿って掘削されたと考えられる。埋土は径10cm以上の礫及び粗砂を多量に含んで固く締まっており、圃場整備時またはそれ以前に人为的に埋め戻されたと考えられる。また、調査区南端付近で腐朽の進んだ樋状の木製品の残片を確認しており、調査区南側の現有水路に延長していたことがわかる。染付等の近世陶磁器、灰釉陶器等が出土している。

遺構108(図11、図版42)長径約0.83m、短径約0.53m、深さ約0.3mを測る土坑である。第3a層直下に存在し、西半分を遺構104に切られる。埋土はほとんどが遺構109に伴うとみられる炭化物で、微細な土器片を多量に含む。底付近には自然石が投げ込まれたとみられる状態で出土した。帰属時期は遺構109とほぼ同じとみることができる。

遺構109(図10、図版43,44)長径約3.3m、短径約2.4mの不定形をした土坑である。深さは中央付近で最も深く約0.2mを測る。また底面の3箇所に径約0.2~0.3m、深さ約0.2~0.3mのピットを検出した。遺物は土師器の小皿(30~44)、椀(45~51)、土師器壺(75~78)、のほか、灰釉陶器椀(58~59)・皿(60~61)、黒色土器椀(65~74)、土釜(79)等があり、それらの一部は口縁を下にし俯せにした状態で出土した。また口縁を上に向けて置かれた小皿(図版43)には3個程度を重ねて置いた状態で出土したものが確認されている。

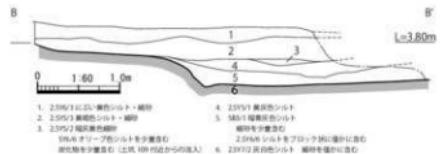


図8 遺構101 土層図

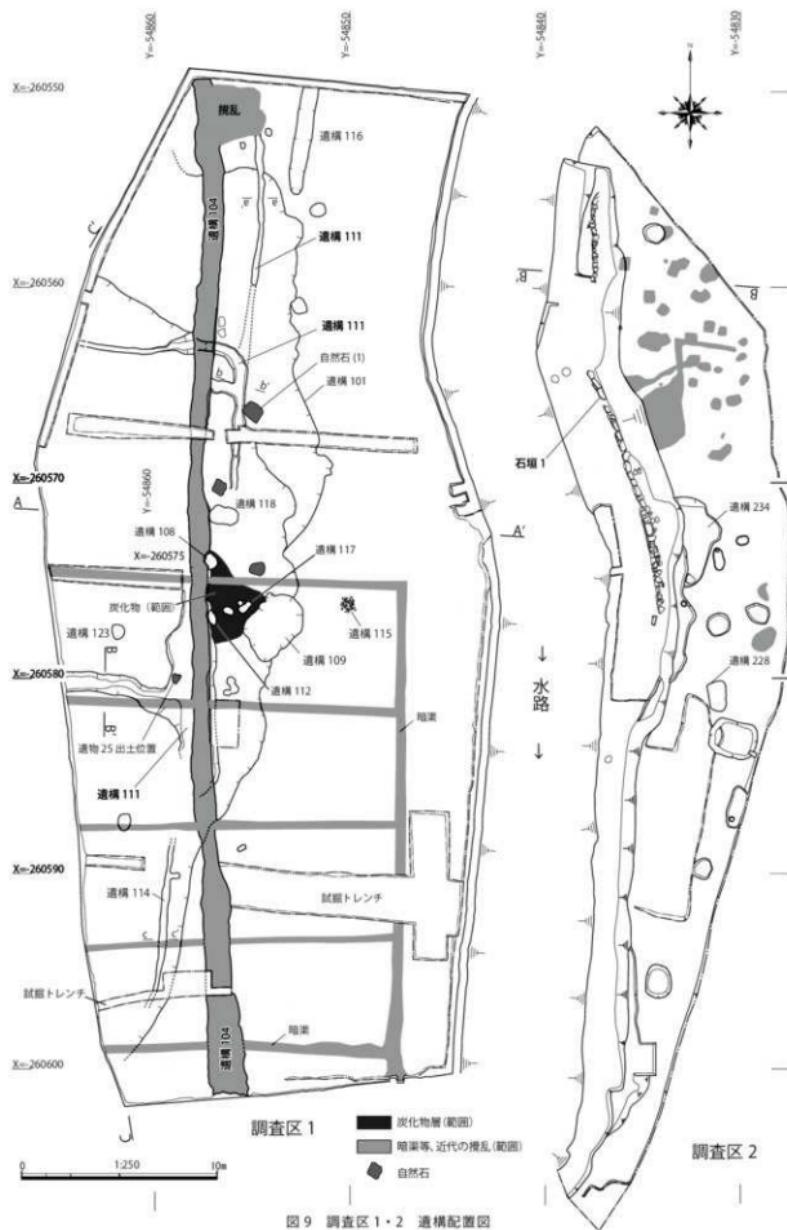


図9 調査区1・2 道構配置図

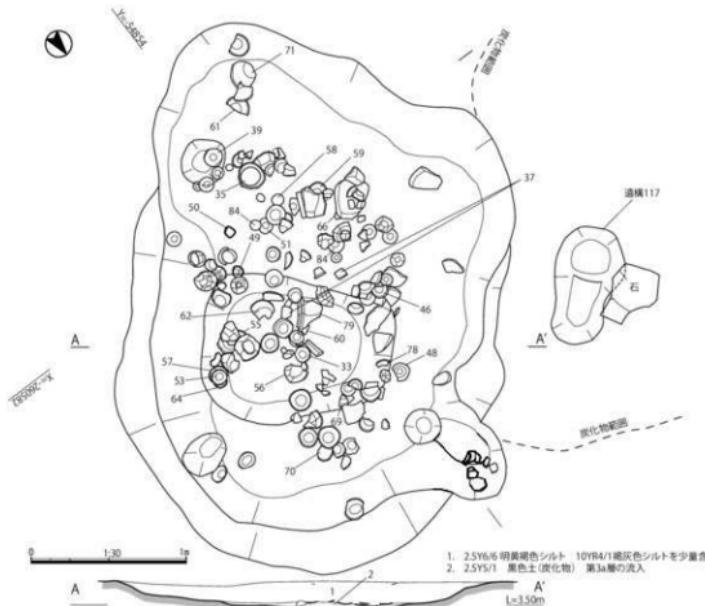


図 10 遺構 109 遺物出土状況図及び土層図

俯せに置かれた甕、土釜は中位から底部を欠損しており、当該遺構は上半を削平されているものと判断される。埋土中には土器片が多量に含まれておらず、遺物取り上げ時に確認し得た個体数は土師器、灰釉陶器、黒色土器等合わせて約 120 個体であるが、本来はより多くの個体が存在したものと考えられる。

埋土は、上層（第 1 層）が明黄褐色のシルトで、地山由来の微砂を多量に含み、下層（第 2 層）は炭化物を主体とする黒色土である（図 10）。第 1 層は当初分層が可能であると考えられたものの、土層断面にはマーブリング状の模様が観察され、これは雨水等に伴う表土の流入によるものと判断された。また、基本層序の第 3b 層は当該遺構西側上端から西方向へ広がるように薄く堆積する炭化物で、5 ~ 10mm の微細な土器片を多量に含む。

出土遺物が多いため、遺物について種類ごとの説明を次に述べる。また、出土遺物の総括的な検討は「小結」にて後述する。

土師器小皿（30 ~ 44、図版 61・62）

口径が 9 ~ 10cm 程度の、手捏ねにより成形された皿である。概ね体部内外面をヨコナデ調整し、底部は未調整である。ほとんどの個体の体部外面には、多段状をなす。

形態上大きく分けて、底部から口縁部にかけて体部を曲線的につくるものと直線的につくるものがあり、曲線的につくるものは口縁端部を僅かに丸く肥厚させるもの（35）、不明瞭であるが内面に沈線をほどこすもの（39）等がある。体部が直線的に延びるものは底部から体部にかけの屈曲が著しく、口縁端部を外反させるもの（42 ~ 44）も存在する。両者の区別は必ずしも明確

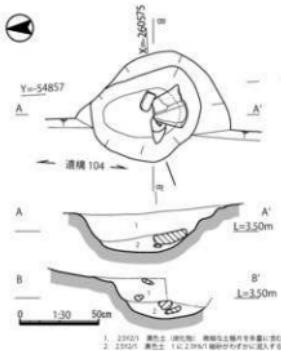
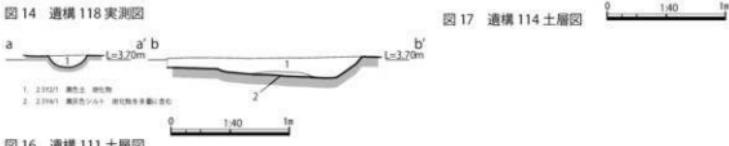
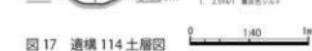
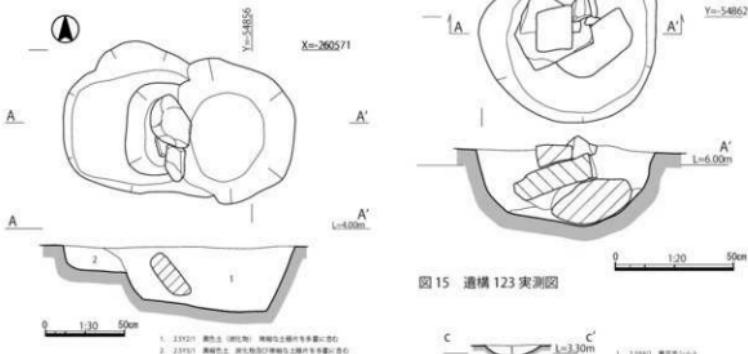
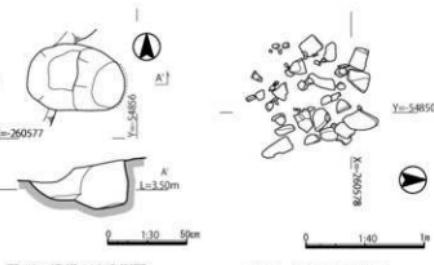


図11 遺構 108 実測図



でなく、曖昧なものも含まれる。形態の詳細な区別については「小結」において後述する。

土師器椀 (45 ~ 51、図版 62・63)

土師器椀は「多段ヨコナデ技法」(*14) を施すもので、体部外面の稜線はやや不明瞭なものが多い。内面は使用に伴うとみられる摩滅が著しいが、幅 1cm 程度のハケによるとみらる調整痕を残す個体が存在する。高台は貼り付けにより、断面形状は長方形をなし「ハ」の字に開くもの(45 ~ 47)、断面三角形を呈するもの(48 ~ 51)まで様々である。また、見込みに重ね焼の痕跡を残すもの(46) や、底部に木の葉の圧痕を残すもの(57) も存在する。

土師器皿 (52 ~ 57 図版 62)

土師器皿としたものには2種類あり、浅く広がる体部に径の小さい高台がつくものと、椀をの器高のみを低くした形態のものがあるが、この細分については「小結」において後述する。53、54は体部下位で屈曲する特徴を持つもので、白磁の皿I類(*4)に近い形態をとり、高台の形状も角高台に似る。さらに56、57は口縁から底部まで体部は緩やかに弧を描き外面が多段状を呈する。

黒色土器（65～74、図版63）

黒色土器は、椀のみでA類（内黒、65～70）が大半を占め、B類（両黒、71～74）は少量である。A類には体部が丸みをもって外湾し径の大きい高台を持つもの（65・66）、体部が直線的に延び、径の小さい高台を持つもの（67）、やや小型で体部は丸く、径の小さい高台を持つもの（69、70）がある。これらは黒化処理した内面にヘラミガキの痕跡は不明瞭で、外面は多段状をなす。

B類（71・72）は薄いつくりで器の内外面にヘラミガキが施される。図に示したものは高台部分を欠損しているが、73のような内側までヘラミガキを施した低い高台が貼り付けられていたものと考えられる。

土師器甕（75～77、図版64）

4個体分が出土しており、いずれも口縁部及び胴部の形態が異なる。

75は屈曲した口縁にヨコナデを施し、端部を上方につまみ上げる。頸部以下は調整が不明瞭ではあるが、内外面ともにハケ目の痕跡、外面のみに指頭圧痕が観察される。肩部以下を欠損しているが、胴部は球形をなすものと考えられる。胎土は砂粒及び結晶片岩の細礫を含む。76はやや肥厚した口縁に横方向のハケ調整を施すことで、頸部以下は摩滅のため調整が不明である。最大径が頸部よりやや下がった位置になると見えられ、やや長胴になるものと考えられる。77は口縁部から頸部にかけての屈曲が強く、口縁端部は僅かに外側へ折り返す。口縁部から頸部までにヨコナデを施し、頸部以下は内外面にナデを施すが、内面は上位にヘラ状工具の使用痕跡が観察される。肩部に最大径を持つとみられ、底部に向かって径を小さくする長胴の形態をとるものと考えられる。78は口縁部は直線的に斜め上方へ開くもので、肩部付近までの出土であるが、寸胴の形態を示すと考えられる。摩滅のため調整は不明瞭であるが、ハケ目の痕跡及び指頭圧痕が観察される。

以上の形態的差異は時期的变化を示す可能性があり、その帰属時期については土釜（79）の出土とも合わせ検討する必要があるものと考えられる。

土釜（79、図版64）

土師器釜で、口縁部に極めて近い位置に幅の狭い鉗を巡らせるものである。胎土に含まれる砂粒は径1～3mmの石英が大部分であるが、雲母片も観察される。やや丸みを帯びる体部下位から底部付近までが残存しており、口径とほぼ同じ22cm前後の器高が復元される。形態からは浜津C型(*16)とされるものに近いと考えられ、搬入品である可能性が高い。時期は10～11世紀後半頃と考えられる。

灰釉陶器（58～61、図版63）

灰釉陶器は、椀、皿、長頸壺が出土している。

58は椀で、体部は薄く、底面は高台貼付後糸切り痕をナデ消す。釉を内面にハケ塗りしているとみられる。時期は、K-90からO-53窯式の時期(*注)であると考えられる。59も椀で、底

部に糸切り痕を残し、所謂「三日月高台」に近い形状を示す貼り付け高台で、貼付後に内側のみナデを施す。釉はハケ塗りによるとみられ、見込みに重ね焼の痕跡を残す。O-53 窯式の時期と考えられる。60 は段皿で小型のものである。幅のやや狭い口縁部内面及び高台部を除く外面に釉を施すが、施釉方法は不明である。O-53～H-72 窯式の時期と考えられる。61 は小型の皿で、釉は見込みと高台以外を漬け掛けする。口縁は端部を丸く作り、やや外反気味となる。K-90～O-53 窯式の時期に相当すると考えられる。

その他、62 は円盤状の平高台を持つもので椀とみられ、同様の底部を持つ皿が出土している。64 は小型の「て」字状口縁皿で、胎土から搬入品とみられる。

遺構 111（図 8、図版 44）幅 0.2～0.4m で、調査区北端付近から中央付近までの延長 18m にわたる。遺構 101 の底面にも検出された、調査区南側の溝状遺構 114 とは本来一連の遺構であった可能性が高い。深さは 5cm 程度（図 16.17）であるが、調査区南側は北側に比べ比高差 0.6m を測る低地であることからみて、当該遺構は調査区北側から遺構 101 内に向かう北から南への水流痕跡であると判断される。途中分岐して西側へと流れる箇所が有るのは、より標高の低い高瀬川方向へと流れが向かったものであろう。圃場整備時の暗渠が同様の方向に掘削されているところからも、当該地点の水の流れとしては自然であると考えられる。遺構 104（近世溝）が位置的に重複しこれに切られているが、当該遺構の埋土は地山に由来するとみられる微砂を多量に含むシルトであり、両者の埋土の判別は容易である。須恵器壺胴部の破片がまとまって出土しており、また、遺構 101 から遺構 109 に関わるとみられる炭化物がまとまって出土していることから、当該遺構の帰属時期は土坑 9 とほぼ同時期であるか、先行すると考えられる。遺物は須恵器のほか、椎状石製品（25）が出土した。

遺構 112（図 12、図版 45）長径約 0.6m、短径約 0.4m の、平面が梢円形をなす土坑である。深さは最深部で約 0.3m を測るが、西半部分はテラス状の平坦面となっている。埋土は第 3b 層の流れ込みと見られる炭化物を多量に含むもので、径 5cm 程度の小さな円礫が混入する。

遺構 114（図 9.17、図版 40）遺構 111 と同様の溝状遺構である。幅約 0.3m で、延長 7.5m を検出した。深さは平均 5cm 程度であり極めて浅く（図 17）、遺構 111 から延長する水流の痕跡であると考えられる。遺物は土師器椀または皿の高台部が出土しており、時期は遺構 111 と同時に帰属すると考えられる。

遺構 115（図 13）径 0.05～0.2m 程度の石が 40 個程度、集石状に集中する遺構である。礫は同様の大きさのものが第 4 層中にも確認されているが、これらはもろい砂岩礫で形状や色調が大きく異なっており、当該遺構出土の礫は表面の摩滅が進んだ所謂河原石である。堀形は検出されておらず、上部のほとんどが削平された土坑等の底面付近であると考えられる。

遺構 116（図 9、図版 40）幅約 1.0m の溝状以降で、調査区北端付近に長さ約 5.8m にわたり検出された。深さは中央付近で約 5cm と極めて浅いものである。遺構 111、114 と同様に、北から南方向への流水痕跡と考えられる。



写真 2 自然石(1)及び周囲の断面

遺構 117(図 9、図版 45)長径約 0.96m、短径約 1.8m の土坑である。深さは 0.1 ~ 0.2m で、遺構 109 に由来する炭化物層(第 3b 層)下に検出された。

遺構 118(図 14、図版 40)長径約 1.5m、短径約 1.0m の、平面形がやや方形に近い楕円形をした土坑である。深さは最も深い位置で 0.4m を測り、第 3b 層の流れ込みと見られる炭化物を多量に含んだ黒色の埋土は径 20 ~ 30cm の礫を含む。西端にテラス状の平坦面を有する。

遺構 123(図 15、図版 40)径約 0.64 ~ 0.74m の、やや円形に近い平面形をなす土坑である。深さは約 0.3m で、炭化物を多量に含む埋土から一辺 30 cm 程度の礫が投げ込まれたとみられる状態で出土した。

自然石(1)(図 9、写真 2)上面は平坦であり、表面の風化及び摩滅の状態から、本来は地表に長く露出していたものと考えられるが、表面には何らかの使用痕跡とみられるものは観察されなかった。

周囲を掘り下げたところ(写真)、下半は地山に埋もれた状態であった。調査区東側の丘陵斜面には砂岩の露出がみられ、他所より持ち込まれた等の可能性は無く、地山である砂層には径 20 cm 以上の比較的大きな礫も多く含まれていることから、調査区周辺においては普遍的に同様の転石が見られるものと推定される。調査区北端に擾乱坑があり、径 2.0m 以上とみられる巨大な自然石を確認したが、これらはかつて近辺の地表に存在していた転石である可能性がある。

(2) 調査区 2

調査区 2 は調査区 1 東側の用水路を挟んで山裾にあたる位置に設定した。用水路は調査 1 で検出した遺構 104 に変わる水路として近代以降に掘削されたもので、本来の地形は調査区 1 から調査区 2 にかけて、緩やかな傾斜をなしていたと推定され(図 17)、調査区 2 の平坦部分は山裾部分を切り取り、谷側へは石垣を構築することで敷地の平坦面を確保したものと考えられる。

調査区 1 で検出した遺構に近い時期と考えられるのは遺構 234 のみで、ほとんどは遺物を含まないか、近世末以降に帰属するとみられる染付片等の出土をみるのみである。

遺構 228(図 19、図版 45)長辺約 2.5m、短辺約 1.5m の、平面形が隅丸の長方形をなす土坑である。深さは約 1.2m で、埋土は径 20cm 以上の礫を含む。遺物は陶器の甕(84)等が出土しており、帰属時期は近世末以降と考えられる。

遺構 234(図 20、図版 44)南北約 4.5m、東西約 1.9m の不定型な平面形をなす土坑で、深さは最深部で 0.3m であるが、旧地形の凹んだ部分が依存したものである可能性もある。西側は石垣堀形により切られており、遺物も少量のため時期を判断するのは難しいが、土師器や黒色土器の小片が埋土中に含まれることから、調査区 1 の検出遺構に近い時期に帰属すると考えられる。

4.3 調査区 3

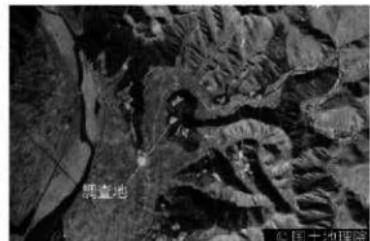


写真 2 調査地周辺の空中写真



写真 3 遺構 346 出土焼土塊・礫

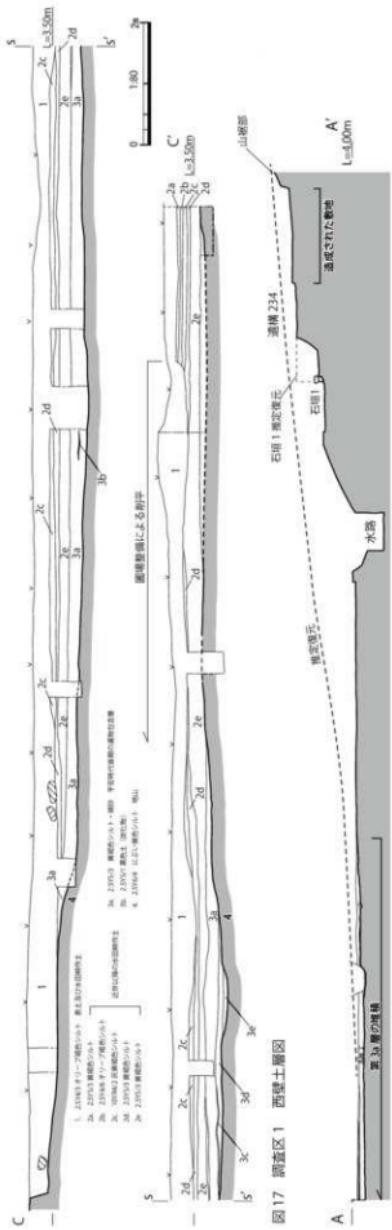


図17 調査区1 西壁土層図

図18 調査区1～2 横断図及び旧地形復元図

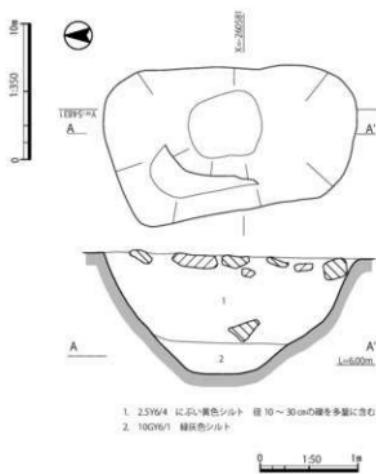


図19 調査区2 遺構228実測図

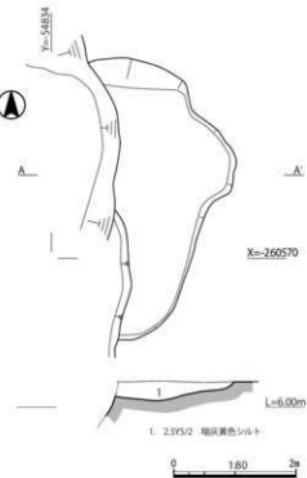


図20 調査区2 遺構234実測図

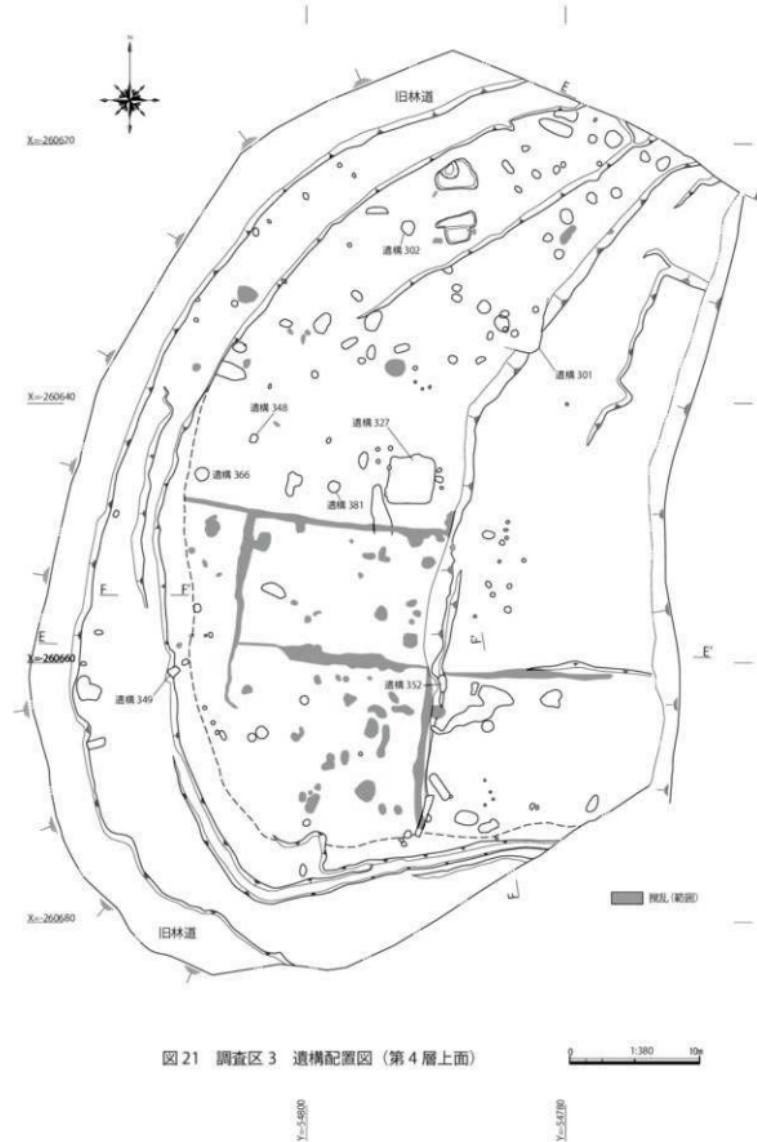


図 21 調査区 3 遺構配置図（第 4 層上面）

Y=5470

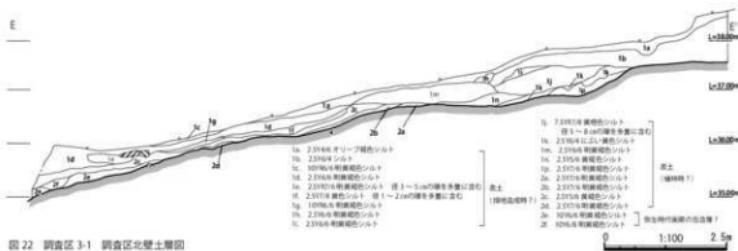


図 22 調査区 3-1 調査区北壁土層図

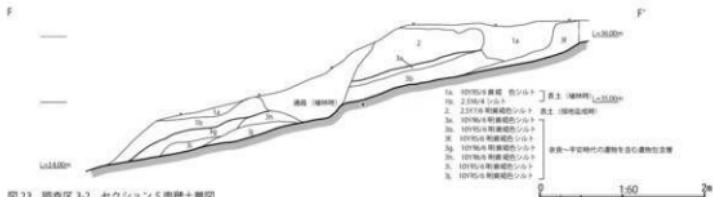
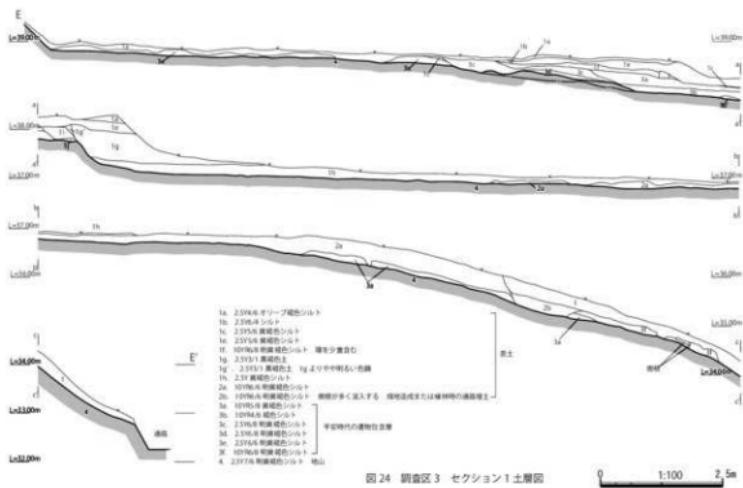
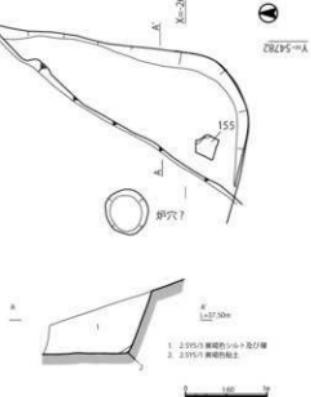
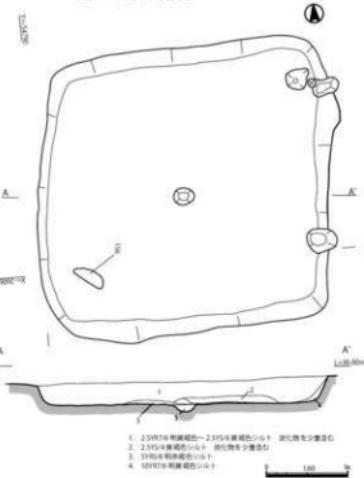
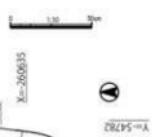
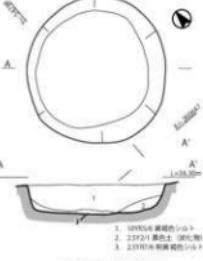
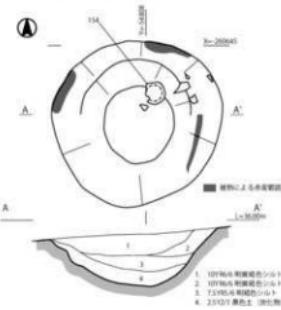
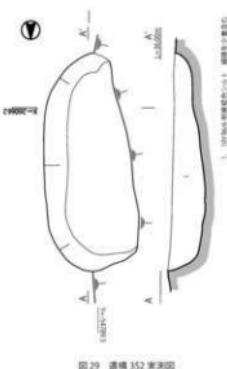
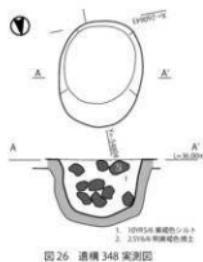


図23 調査区3-2 セクション5南壁土脚



調査区3を設定した丘陵斜面の土地利用状況については、終戦直後の1948年に米軍が高度6700mから撮影した航空写真（国土地理院WEBサイト、国土変遷アーカイブ上の公開画像）により、この時既に当該斜面において広範囲に伐木がなされ、開墾が行われている様子を把握することができる。（写真2）また次に述べるとおり、調査区3の全体に及ぶ削平は調査区3-1の北側において著しく、標高の高い場所を切り取り平坦地を造成していることが土層から窺える。

第1a～1n層は植林に伴い、もとの畠地に堆土を移動させて盛り土状にしたものと考えられる。



(図 22)、土中にはプラスチック製品の混入もみられた。また第 2a ~ 2d 層は畠地に伴う土であると考えられ、西側の斜面に盛り土としていることがわかる(図 24)。いずれにしても調査区 3 では大部分で地山まで搅乱が及んでおり、その範囲では表土直下が遺構検出面となつた。ただし第 2e, 2f 層は比較的土質が均一であり、弥生時代後期の遺物をやや多量に含むことから、弥生時代後期の包含層である可能性がある。

遺構は、弥生時代及び平安時代の遺構を検出したが、これらは同一の遺構検出面上において検出された。ただし弥生時代の遺構、遺物は調査区 3-1 の範囲内にほぼ限られており、平安時代の遺構、遺物は調査区 3-1 南端から調査区 3-2 にかけて集中する傾向がみられた。

第 3a ~ 3j 層は平安時代の遺物を含む遺物包含層であり、斜面の縁辺付近にのみ残存するが、比較的均質であることから平安時代以降、畠地が開墾されるまでの期間に、自然に堆積したものと考えられる。機械掘削は第 1 層及び第 2 層の一部について行い、第 3 層以下を人力で掘削した。

表土(第 1 層、第 2 層)からの出土遺物は土師器、須恵器、製塙土器(100)、石錘(102)等がある。

第 3 層の出土遺物は、土師器、須恵器、黒色土器、土釜等があり、土師器は皿(111 ~ 115)、环(119 ~ 120)がある。

弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺構及び遺物

遺構 301 (図 31、図版 46) 壁穴建物と考えられる遺構で、検出されたのは隅角部分を含む一部分のみであるが、削平された第 4 層上面に、同遺構に伴うと見られる炉跡等の遺構を検出した。建物の規模は不明である。床面には中央に凹みを持つ台石(155)が、凹みのある面を下にして置かれた状態で出土した。また、庄内式併行期と考えられる時期の甕の小片も出土したが、摩滅の著しいものがほとんどである。

遺構 327 (図 30、図版 47) 一边 3.6m のほぼ正方形をなす遺構で、壁穴建物跡と考えられる。貼床は検出されておらず、中央に設けられた径 0.2m のピットは柱穴であるとみられるが、深さは 8cm と浅いものである。北東隅付近より台石とみられる石器(156)が出土したほか、庄内式併行期とみられる時期の甕の底部(150)、高环(151)が出土した。

平安時代の遺構

遺構 302 (図 25、図版 46) 径 1.0m の平面形が円形をなす土坑である。深さは 0.14m あり、底面はほぼ平坦で一部分が凹む。壁面に被熱による赤変部分は認められず、埋土中にまとまった炭化物の混入もみられない。

遺構 348 (図 26、図版 47) 長径 0.64m、短径約 0.5m の土坑である。遺構内は径 5 ~ 10cm の焼土塊 50 個が詰め込まれた状態で、間隙を黄褐色シルトが占める。焼土塊は黄褐色で表面には皺状の凹凸が目立ち、径 1 ~ 5cm 程度の円礫や角礫を含む。接合することができたのは僅か 2 点であるが、幅 6cm 程度、厚さ 2 ~ 3cm 程度の帶状となる可能性がある。なお、これらの焼土塊は被熱の程度において部分的差異が認められる。

遺構 352 (図 29、図版 47) 長径 1.1m、短径 0.5m の平面形が梢円形をなす土坑である。深さは 0.2m

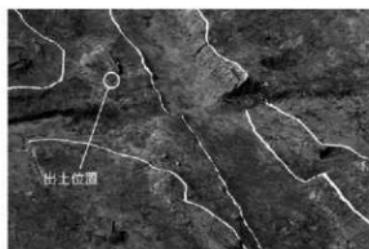


写真 5 棒状石製品出土位置

で、一部分が削平されている。土師器や須恵器の小片が出土した。

遺構 358（図 21、図版 48）1 辺 0.4m の長方形に近い、やや不定形な平面形をなす土坑で、深さは 0.03m と非常に浅い。二彩または三彩（52）が出土した。

遺構 366（図 27、図版 47）径約 1.0m の平面形が円形をなす土坑である。深さは 0.3m で断面は半円形となる。壁面には被熱による赤変部分が 3箇所に認められ、第 1～4 層に分層可能な埋土の最下層（第 4 層）には炭化物の集中がみられる。以上のことから、この土坑内で火を焚く行為が行われたと考えられ、その後埋め戻されることなく放置された結果、第 1～3 層にあたる埋土が遺構内に流れ込んで堆積したものと考えられる。第 1 層からは土師器皿（154）が出土しているほか、黒色土器片等が第 2～4 層中から出土しており、遺構の帰属時期はこれらの遺物に極めて近いものと考えられる。

第 5 項　まとめ

（1）遺構 109 及びその出土遺物について

今回の調査において検出した遺構は遺構 109 及びその周囲に位置する遺構 108、112、117、118、123 等の土坑群であり、それらの一部は遺構 101 とした落ち込み内にも存在する。

遺構 109 周囲の土坑群は径 0.5～1.5m まで様々な大きさがあるが、比較的大きな石が出土することと、埋土の大部分が炭化物で占められることが共通する。また、いずれも土層にはマーブリング状の模様を観察することができることから、一部は地表面の炭化物が雨水等によって流され遺構内に侵入し堆積したものと考えられるが、その炭化物中には多量の土器小片が含まれており、人為的に投げ込まれた可能性がある。また地形的にみても、これらの土坑群は必ずしも地表面の堆積物が流れ込み易い地形的条件にあるとはいえない。以上のことから、これらの遺構は埋め戻すという行為を伴わず、埋土中の遺物も埋納されたものではなく、煮炊き後の炭化物や台石等として使用した自然石を集めて隨時これらの土坑に廃棄したものと推定される。各土坑の炭化物は検出面上で確認が可能であったことから、土坑が炭化物で満たされた時点で、新しい土坑を掘削したと考えられ、その間には雨水等による炭化物の流れ込みもあったものと推定される。

遺構 109 の埋土を洗浄した結果、上層に含まれる微砂は、その粒度や組成から基本層序第 4 層（地山）に含まれるものと同一であると判断され、埋土第 1 層は表土の流れ込みによる堆積であることが分かった。炭化物を多量に含む埋土第 2 層の堆積は土坑の下位中央付近において顕著であるが、これは遺構の西側に広く堆積する第 3b 層の流れ込みによるものとみられる。第 3b 層が土坑上端から連続して流入する状況は土層断面において確認されてはいないが、これには雨水等が上端から第 3b 層を洗い流しつつ土坑内へ流入したことにより堆積したものが埋土第 2 層であると理解することができる。このことから、遺構 109 内に土器が持ち込まれ始めた時点では遺構西端付近あるいは遺構 117 付近で火を焚く行為が行われたとみることができ、その後も土器を持ち込む行為は続けられたものの、遺構 109 内には、雨水等とともに周囲から容易に土が流れ込む状態で有ったと推定される。また遺構 109 の底面に検出した 3 基のビットは埋土内に第 2 層の流入が見られず、第 1 層の流入により土坑が完全に埋没するまで、これらを柱穴とした掘立柱の覆い屋が設けられていた可能性もある。

炭化物の検出範囲は土坑の西側に限られるが、遺構 117 付近から西側へ広がるように極めて薄く堆積しており、遺構 117 付近においては大きさ 5～10mm の微細な土器片を多量に含む。こ

これらの土器片は本来、遺構 109 内か若しくはその近辺に置かれていた土器の破片とみられ、土坑内に土器が持ち込まれる等の、往来の際に踏み砕かれたものである可能性が高い。

土坑内からは土師器椀、皿等供膳具のほか土師器甕、土釜が出土しており、多量の炭化物の検出からみても、この付近で食物の煮炊きが行われた可能性は極めて高い。また土師器椀、皿、黒色土器椀は内面に摩滅がみられ、日常で使用していたものを持ち込んだ可能性もあるが、同時に近辺において飲食が行われたと考えられる。土坑内の遺物は、その飲食に使用した後の器を土坑内に納めたものと理解されるが、器を丁寧に重ね置く、或いは俯せにするといった置き方からは、単なる廃棄であるとは考えにくく、祭祀による等の見方が可能である。埋土中には小片が多量に含まれ、重ねて置かれたものが中央やや東寄りの位置に認められたほかは、一定のまとまりや特定の位置的傾向は認められなかった。また平面形状は不定形であるものの、炭化物層の堆積は中央付近のみに認められることから、土坑が繰り返し掘削され拡張されたような形跡も窺われず、最初に掘削された土坑に複数回土器の持ち込みがなされたものと推定される。

次に土器等の種類別による比率を表 1 及び図 32 に示す。対象としたものは合計 129 点である。出土遺物には小片となったものが多く、全ての個体を網羅しているわけではないが、概ね数量的傾向は捉え得るものと考えられる。土師器椀 (a, b)、土師器皿、土師器甕、土釜、灰釉陶器、黒色土器、「て」字状口縁皿の 8 種類に分け内訳を表示しているが、土師器椀及び土師器皿が最も多く、両者の比率はよく似た数値を示す。次に多いものは黒色土器で、A 類 (内黒) が全体の 84% を占め B 類 (両黒) を圧倒する。灰釉陶器は 5 個体分出土しており、椀 2 個体、皿 2 個体、長頸甕 1 個体である。土師器は更に、「て」字状口縁皿が 1 個体含まれるが、埋土中に含まれる微細な破片からは、少なくとも 2 個体以上の存在が確認できる。

遺構 109 から出土した土師器皿は先述したとおり形態上の差異が認められ、以下の 4 タイプが認められる。a：体部は緩やかなカーブを描き、1 から 2 段のナデを施す。底部から体部への屈曲は弱く、丸みを帯びる。口縁端部はやや厚めに丸くつくり、不明瞭な沈線を施すものや、丸く肥厚させるものがある。b：a タイプによく似る形態を示すものの、体部のカーブはより直線的で、口縁端部は、やや薄くつくる傾向が認められる。c：体部に 1 から 2 段のナデを施し、底部から底部にかけての屈曲は、丸みを帯びるものやや顯著である。体部上位は直線的になり口縁端部は薄くつくる。d：体部に 1 から 2 段のナデを施しあるが、底部から底部にかけての屈曲は顯著である。体部は口縁端部にかけて外反させるといった分類が可能である。

これらの土師器皿について、口径及び器高の数値から散布図を作成したのが図 33 である。各個体の口径を横軸方向に、器高を縦軸方向に表しており、図上では、体部を丸くつくる傾向のみられる a, b タイプと、直線的または外反させる c, d タイプを分けて表示し

種類	割合 (%)	種類	割合 (%)
土師器椀 a	38.8	土釜	0.8
土師器椀 b	1.6	黒色土器 A	14.7
土師器皿	34.1	黒色土器 B	2.3
土師器甕	3.1	灰釉陶器	3.9

表 1 遺構 109 出土土器等の種類別割合

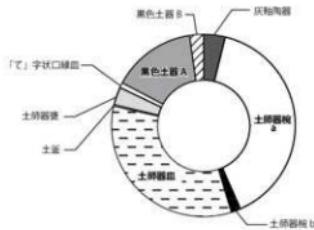


図 32 遺構 109 出土土器等の種類別割合構成

た。63は比較のため表示したもので、平高台の皿である。口径に比較して器高の低さが目立つ。また、36は接合可能であったものの中に1例のみ認められたもので、他に比べひと回り大きくなつくる。この2個体を除いて、口径は α 、 β タイプで9.0～10.0cm、 γ 、 δ タイプで9.4～10.4cmの範囲に収まり、口径が大きくなるとともに器高が増す傾向を示すが、法量の分化は明瞭でなく、大小に関わらず両者はそれぞれほぼ同様の形態を指向することがわかる。

次に、土師器碗についてであるが、出土した土師器は必ずしも高い器高に見込みの深い形態をとるものばかりでなく、52～57のように浅く、且つ器高の低いものが存在する。そこで遣構109、101及び炭化物層出土の個体を含め、合計37個体の土師器について口径及び器高を計測し散布図を作成した結果、図34に示すとおりとなり、土師器碗aとしたものは全体として口径が大きくなれば器高が高くなる傾向を示し、器の大小に関わらず全体的なプロポーションが維持され、ほぼ一定した形態を指向して作られる傾向が窺える。52、53、54は碗aとは分布傾向をやや異にしており、形態は体部外面が多段状を呈し、高台は小さく断面が逆台形を示すもので体部からほぼ垂直か、わずかに内側に傾いて接地する。また口径は碗よりやや大きくなる傾向を示す等、土師器碗aに近い特徴を有しながら口径に比べ器高が低くなっている、青磁浅形碗に近い形態をとるもので、これらを土師器碗bとした。胎土はいずれも砂粒をほとんど含まない精良なものである。55は高台を欠損しているが、これに含まれると考えられる。

56、57は碗aに近似する形態をとるが、口径が小さく、器高の下がるものである。これらは碗aに含めたが、同様な形態のものが増加すれば、この形態のものについて、a、b以外のタイプとして取り扱うことも可能であると考えられる。

比較のため遣構109出土の黒色土器から得られた数値の分布状況を同時に表示したが、黒色土器については、口径が大きくなれば器高も高くなる相関関係がみられ、器の大小によらず一定の形態を維持する傾向がより明らかである。これらのことから、土師器碗については、口径及び器高から得られる数値の偏在性による差異が認められ、明瞭な一線をもって分類することは困難であるが、形態上いくつかに分類できる可能性が高い。口縁部の形態が内済するもの、外湾するもの、内面に沈線を有するもの等々であることとも、このことを補強する。またこれらの土器の胎土は、浅黄色から淡黄色を示すものが多い。

遣構109を含む調査区1全體における出土遺物を概観すると、一定の時期幅をもつ可能性があるといえる。灰釉陶器では、遣構109出土の碗及び皿はK-90～O-53及びH-72窯式の段階にあたり、尾張、西三河、東美濃において出土した灰釉陶器を10段階に区分した編年(*15)では第5～7段階に相当し10世紀末～11世紀前半頃の時期が推定される。また遣構104からの出土であるが、削り出しの角高台を有する皿の小片があり、時期はそれ以前にさかのぼる可能性も

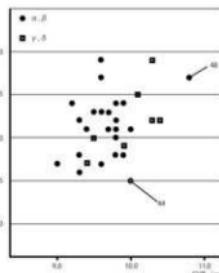


図33 土師器皿の口径と器高

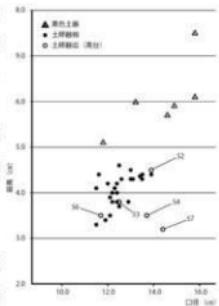


図34 土師器碗の口径と器高

残る。

遺構 109 では形態の異なる土師器甕 4 個体及び土釜は、10 世紀末～11 世紀前半頃のものとみられ (*16)、それは土器が持ち込まれ始めてから放棄されるまでの時期にあたる可能性がある。また遺構 109 の出土遺物は土師器を主体とする椀、皿の器種構成が指摘できるが、黒色土器は椀が主体であるものの B 類の割合は少なく、瓦器は含まれない。土師器椀、皿については法量未分化の傾向 (*17) がみられ、10 世紀後半頃の特徴を示すといえる。灰釉陶器折縁皿 (27) は O-53 期 (*18) に相当するとみられる。遺構 101において、遺構 109 が帰属すると考えられる時期の前及び以後の遺物を出土をみていることは、遺構 109 が掘削される以前にも、この場所で同様の行為が行われていたことが推定されるが、検出された調査区 1 の遺構群は概ね、10 世紀後半～11 世紀前半の時期に帰属すると考えられる。また土師器椀は、高台の断面が長方形をなし「ハ」の字に開くものや、断面三角形をなすもの、さらには体部下位がやや屈曲するもの等がみられ、これらは灰釉陶器の影響を検討する必要があると考えられる。

調査区 1 に存在する自然石 (1) は周囲を斬ち割って土層を観察した結果、移動の形跡が窺えず、本来この近辺に産出する砂岩の転石であることが分かった。また上面が平坦で風化・摩滅していることから、かつて長期間地表面に露出していたことが推定され、その平坦面を何らかの目的で使用した等の可能性は残る (*19)。

(2) 権状石製品について

遺構 101 から出土した権状石製品は、滑石製で頂部に紐を作り、底部は平坦に磨かれている。管見では、同形の遺物は類例に乏しいとみられるが、形状及び紐の存在から紐にひも等を通して使用する用途の石製品に近いとみて、棹秤のおもりである「権」を模した可能性の高いものと判断し「権状石製品」とした。ただし重さは 756.0g (*20) で、同時期の権衡の基準とされた唐の 1 両 (約 41.9g) から計算するとほぼ 18 両 (18.0429) という値が算出される。同様に、やや下る時期ではあるが 1 尻 (3.73g) からは、200 尻 (202.681.) が算出され、分銅としての使用も考慮に入れ必要がある。県内では、形状や大きさは異なるものの、岡田遺跡で分銅形石製品の出土があり、円柱に近い形状をなし頂部に紐を作り出すところは類似する。

(3) 遺構 366 について

調査区 3 における出土遺物の分布状況をみると、c13 区画が最も遺物量が多く、その区画に位置するこの土坑が本遺跡の中心的な遺構の一つとなり得る可能性は高い。埋土に含まれる遺物は 9 世紀前半頃のものと考えられ、周囲から出土する遺物もほぼ同時期とみられる。

(4) 調査区 3 出土土師器について

調査区 3 では庄内式併行期に相当する土器の他、古代の土器が出土している。次に、これらについて述べる。

土師器甕・皿・須恵器甕・長頸壺、製塙土器、綠釉陶器、二彩或いは三彩とみられる小片等があり、第 3ab 層からの出土が多く、大部分が斜面上に廃棄されたとみられる状況で出土しているが、152 のように土坑からの出土もあり、投棄の際には地表面を浅く掘り窪める場合もあったものと推定される。119、120 は土師器甕で、119 は 盖 (130) と組み合わされるものである。120 は直線的な体部が広い口縁をつくり、底部に低い高台がつく。体部内面は右回りのナデを施し、外側はヘラ削りの後ヘラによるミガキを施すが、間隔の広い粗雑なものを弧状に数回に分け

て施すものである。130は蓋で、上面中央が浅く窪んだツマミを持ち、外面、内面とも不定方向のナデを施す。外面にはヘラミガキを施すが、數度往復し方向を変え4回行うもので、ミガキというよりは沈線状の装飾となっている感があり粗雑な印象を受ける。これらはいずれも搬入品とみられるが、120は平城京跡SE311-Bに同様の出土例があり、これによれば時期は天長2（825年）以降と推定されている（*21）。また、形態及び技法等からみて、調査区3出土の古代の遺物は概ねその時期に帰属するものとみられる。

（5）墨書き土器について

墨書き土器は3点（130、146、147）出土している。147は「佐夜」の文字が読み取れる。「佐夜」からは「佐夜部氏」等が連想されるが、この2文字が本来何を表現したものかは不明である。また130は判読できない。146は土器片の一端に残るのみで、文字の一部分とみられる。

（6）緑釉陶器について

調査区1遺構101で出土した緑釉陶器はすべて小片で器種は不明であるが、軟質の素地に濃い緑色の釉がかかり、近江産である可能性が高く、時期は10世紀中頃以降とみられる。

調査区3では包含層中より3点出土しており、椀（98）及び皿とみられる器種（101）があるが、胎土や釉の特徴から、同一個体である可能性がある。硬質で淡い緑色の釉が掛けられ、表面にはラスター現象がみられる。高台は底部外面の中央がやや四凹んだ円盤状の平高台で、縁辺に沿って使用時のものと考えられる釉の剥落がある。釉及び胎土から東海産の可能性を検討したが、平高台である等の特徴から洛北産であると考えられ（*23）、時期は9世紀前半頃とみられる。

（7）遺構の性格等

調査区3から出土した二彩（三彩）は県内において出土例の少ないもので、全国的にみれば官衙跡等での出土が顕著な遺物である。また灯明皿に使用したとみられる环に付着した大量の煤及びこれらの土器が斜面に廃棄されたとみられる出土状況を示す。

また遺構はその性格を明らかにし得たものはないが、円形に掘られた火を焚く行為を伴う土坑や、焼土塊を詰め込んだ土坑等單なるたき火や廃棄に伴うものと考えにくい遺構の存在は祭祀的な行為を想起させ（*24）、これらが仏教または山岳信仰等の祭祀に伴うものであるという解釈について、検討の余地があるといえる。また多彩陶器はその産地を特定し得なかったが、緑釉陶器の出土と併せ、当時の政権中枢部と関わりの深い、官的な性格を想起させる。

調査区1の出土遺物は、調査区3の出土遺物と比べ帰属時期が下ることから、調査区1の遺構群は調査区3に後出するものと考えられる。検出遺構群の性格としては、祭祀に伴うものとの見方が可能な点で共通しており、双方において検出された遺構には何らかの関連性を想定することが可能で、調査区1でも権状石製品の出土をみていることから、ともに官的な要素を帯びるといえる。出土遺物の産地からみれば、調査区1出土土器は僅かに白磁が含まれるもの、紀の川流域産とみられる片岩礫を含んだものや、体部外面が多段状をなすものなどが多く、在地産のものが多数を占めるといえる。同様に灰釉陶器も、東海地域には太平洋側からアクセスしやすいという地理的条件から、本遺跡に直接持ち込まれた可能性が高い。調査区3では猿投產とみられる須恵器が出土しているものの、搬入品とみられる环のほか、墨書き土器や緑釉陶器、多彩陶器等、政権中枢と関わりの深い地域において多くみられる遺物の出土がより顕著である。

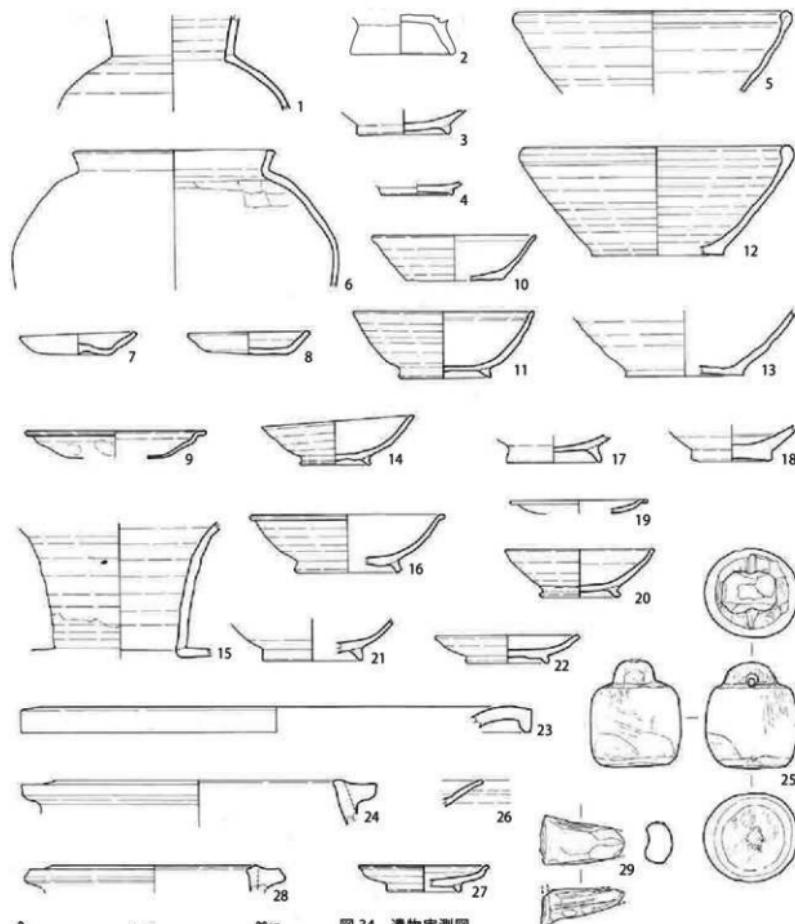


図34 遺物実測図

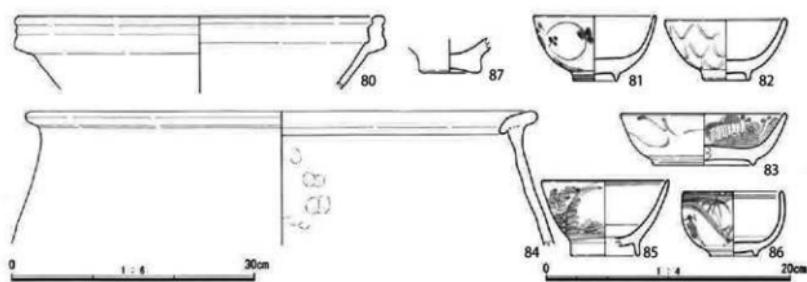


図35 遺物実測図

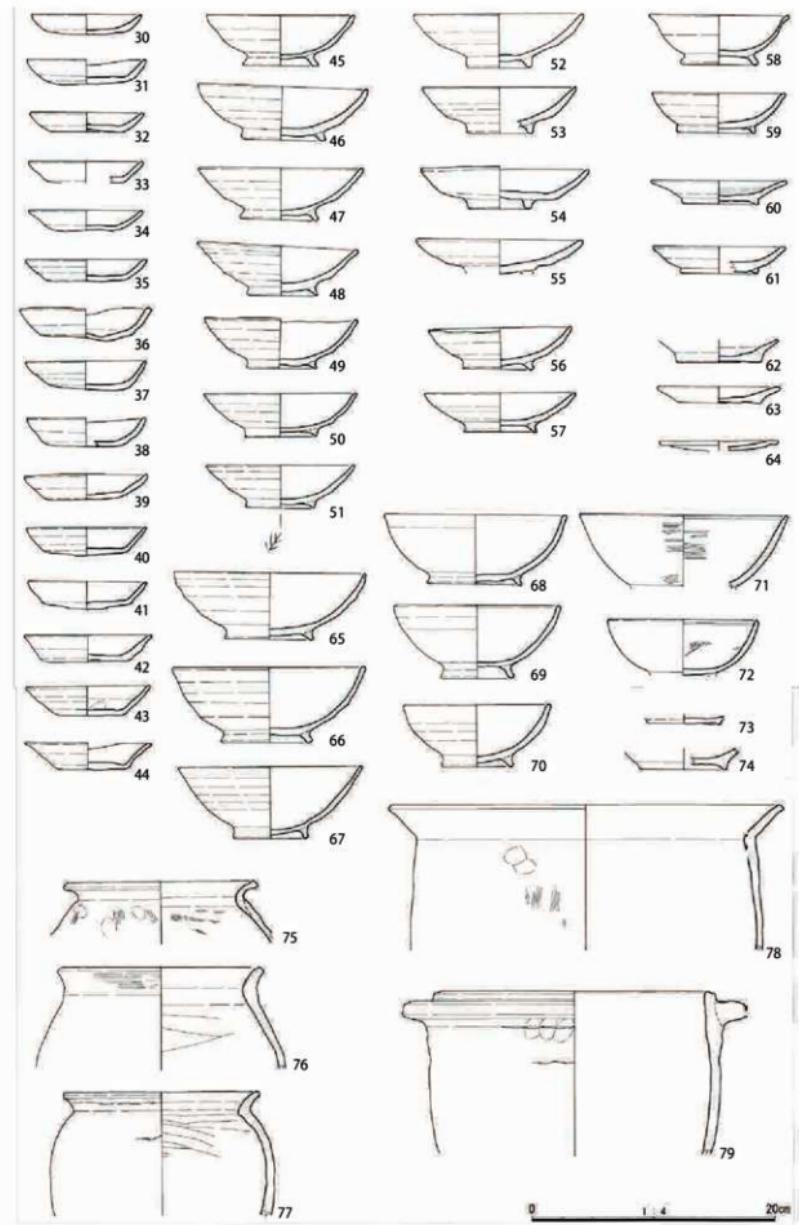


図36 遺物実測図

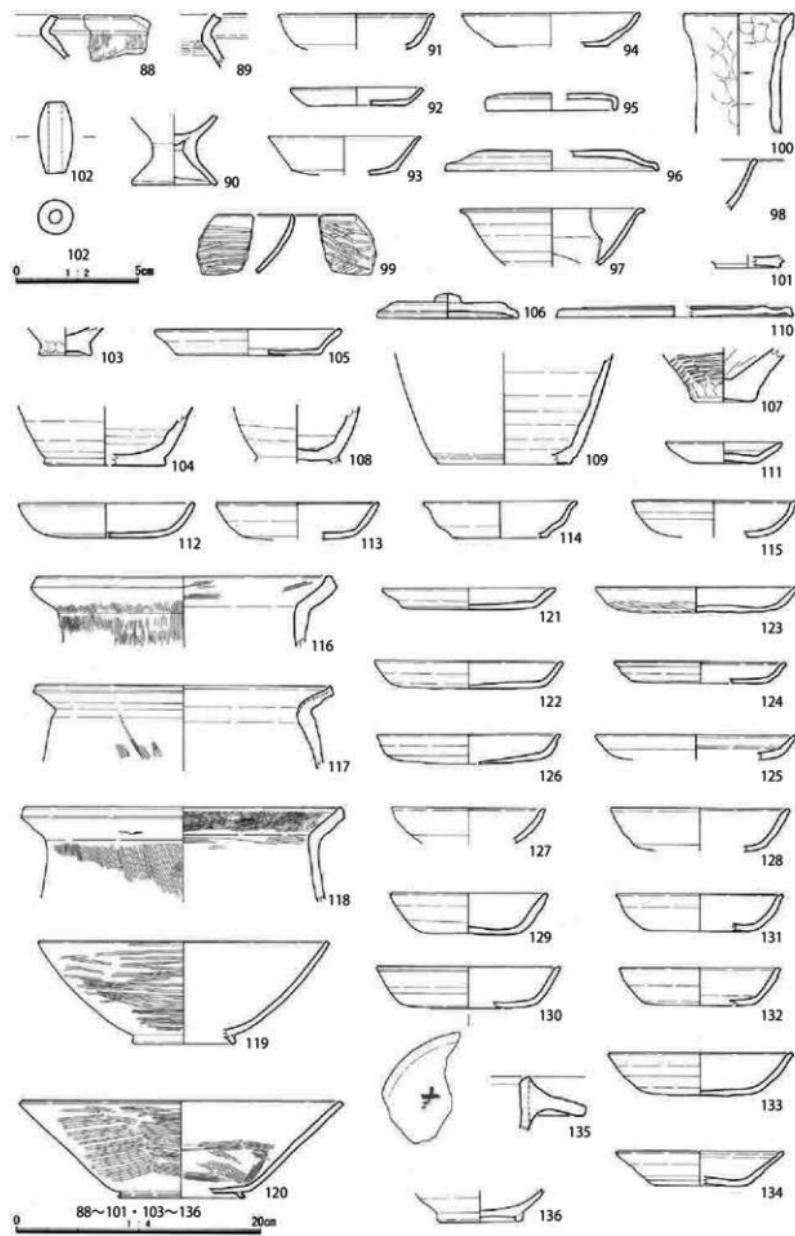


図 37 遺物実測図

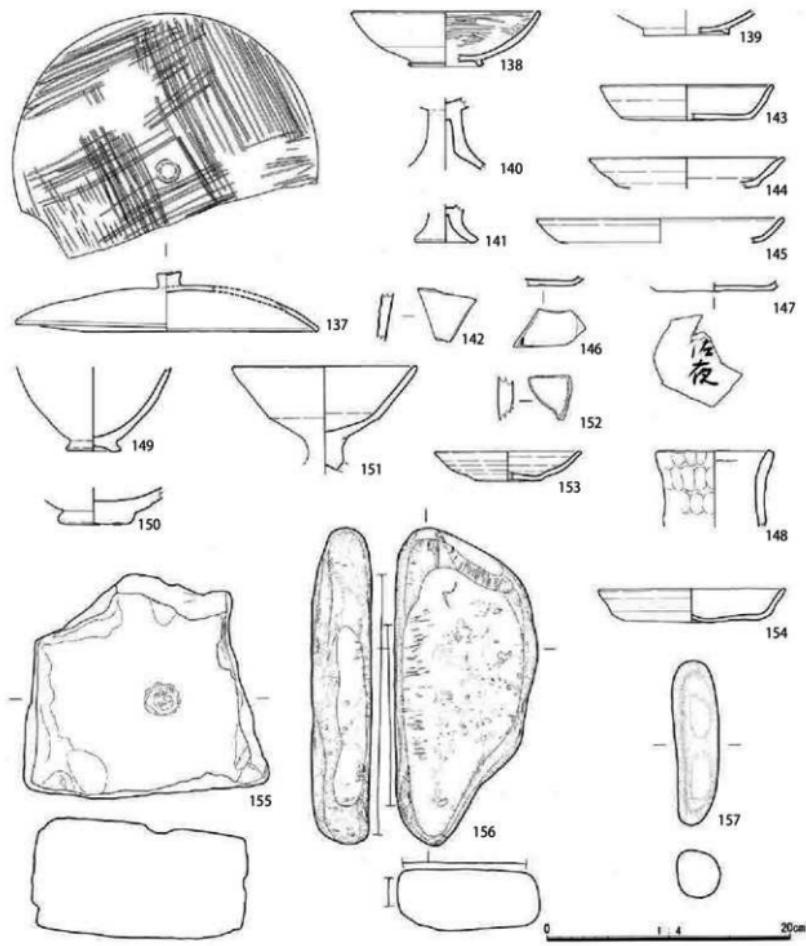


図38 遺物実測図

土器一覧表

器物番号	器種	断面形状	断面測定値	口径cm	高さcm	底径cm	残存率	色調	特徴等	
1	圆筒形 直筒	直筒		7.0	10.0	7.0	10%以下	(全体) 反白(NB) ~ 7 内面(リップ) 2.5cm~5.2	縦溝から裏面にかけて凹凸があり、裏面内側及び斜面外側にみられる鉢の付着は焼成時の自然な痕跡及び施釉による。	
2	圆筒形 直筒	直筒	8.5	3.6	7.0	10.0	40%~70%	(全体) 淡黄青10YR8/2 (3) 淡黄青7.5YR8/3 (底) 淡黄青10YR8/3 (底面) 7.5YR7/4	高台形のみ残存。摩崖墓とし、傾度不明。	
3	圆筒形 直筒	直筒	19	1.0	7.0	10.0	100%	(内) 淡黄青10YR8/2 (外) 淡黄青7.5YR8/3	摩崖墓らしい、内面の内側化させる。見込みには僅かにガラスの痕跡あり。高台は僅かに大きめ。付着付子字痕跡を有す。	
4	圆筒形 直筒	直筒	19	1.0	6.0	10.0	100%	(全体) 反白(NB) / 青色 反白7.5YR8/1~8/2	摩崖墓らしい、内面の内側化させる。見込みには僅かにガラスの痕跡あり。高台は僅かに大きめ。付着付子字痕跡を有す。	
5	圆筒形 直筒	直筒	22.0	8.7	10.0	10.0	25%	(内) 反白(NB) / 口縁部(リップ) 及び 内面(リップ) 口縫(リム) 及び (底) 淡黄青10YR8/2 (底面) 7.5YR7/4	口縫は内側に凹凸があり、やや外側にむかって茎部に凹凸がある。口縫から 底面は外側に凹凸したリップを有す。底は僅かに盛り高さがある。	
6	圆筒形 直筒	直筒	20	13.3	10.0	10.0	30%	(内) 淡黄青7.5YR8/9 (内) 淡黄青7.5YR8/2 (底) 淡黄青10YR8/2	口縫は内側に凹凸があり、底面を多少前に凹む。僅かに内側盛り。底面以下は 外側を若干下げる。内面に工具による擦痕を有す。	
7	土器類 直筒	直筒	16	9.6	2.0	6.0	70%	(内) 反白(NB) / 2~3 底面(リム) 100%	手づけによる成形。底面は反白(NB) / 2~3 淡黄青7.5YR8/3~8/4 (底) 反白10YR8/2	厚底のつくり。口縫はコルク削ぎを有す。内面に僅かが有る。口縫部は丸く 底面は内側を下げる。口縫上部に凹凸した茎部を有す。位は僅かに盛り高さ あり。底面は純粋で淡黄青色を有す。底面地方から輸入品か。10世紀後半。
8	土器類 直筒	直筒	20	9.8	2.0	7.0	75%	(内) 淡黄青7.5YR8/4 (外) 淡黄青7.5YR8/3~8/4 底面(リム) 100%	手づけによる成形。底面は反白(NB) / 2~3 淡黄青7.5YR8/3~8/4 (底) 反白10YR8/2	厚底のつくり。口縫はコルク削ぎを有す。内面に僅かが有る。口縫部は丸く 底面は内側を下げる。口縫上部に凹凸した茎部を有す。位は僅かに盛り高さ あり。底面は純粋で淡黄青色を有す。底面地方から輸入品か。10世紀後半。
9	土器類 直筒	直筒	20	14.7	10.0	10.0	35%	(内) 反白(NB) / 2~3 底面(リム) 100%	手づけによる成形。底面は反白(NB) / 2~3 淡黄青7.5YR8/2 (底) 反白10YR8/2	厚底のつくり。口縫はコルク削ぎを有す。内面に僅かが有る。口縫部は丸く 底面は内側を下げる。口縫上部に凹凸した茎部を有す。位は僅かに盛り高さ あり。底面は純粋で淡黄青色を有す。底面地方から輸入品か。10世紀後半。
10	圆筒形 直筒	直筒	13.4	3.7	10.0	10.0	20%	(内) 反白3.5YR8/1 淡黄青10YR8/4 底面(リム) 100%	口縫は底面から垂直的に凹む。外側は回転子字痕跡が有るが、全体的に 底面は内側を下げる。口縫上部に凹凸がある。	
11	圆筒形 直筒	直筒	20	14.6	5.5	7.0	80%	(内) 反白4.5 (外) 淡黄青7.5YR8/4 底面(リム) 100%	A型、内面の手づけを有する。エッジは認められない。口縫部が外側に内側に凹 状の凹凸がある。底面は回転子字痕跡を有す。底面から全体が内側に凹む。	
12	圆筒形 直筒	直筒	20	14.0	10.0	10.0	30%	(内) 反白(NB) / 外 淡黄青7.5YR8/1	口縫部が内側に凹む。底面を多少前に凹む。僅かに内側盛り。底面以下は 外側を若干下げる。内面に工具による擦痕を有す。	
13	圆筒形 直筒	直筒	23	3.0	10.0	10.0	100%	(内) 反白(NB)	厚底のつくり。底面は回転子字痕跡を有す。内面に僅かが有る。口縫部は丸く 底面は内側を下げる。口縫上部に凹凸した茎部を有す。位は僅かに盛り高さ あり。底面は純粋で淡黄青色を有す。底面地方から輸入品か。10世紀後半。	
14	圆筒形 直筒	直筒	20	12.3	4.0	5.0	50%	(内) 淡黄青7.5YR8/3~4 淡黄青7.5YR8/4 外 淡黄青7.5YR8/3~4	口縫は底面を丸くつくる。底面は回転子字痕跡を有す。内面に工具による擦 痕を有す。底面は内側を下げる。内面に工具による擦痕を有す。	
15	圆筒形 直筒	直筒	18	11.0	10.0	10.0	25%	(内) 反白(NB) ~ 7/7 外 淡黄青7.5YR8/1	底面の内側が底面が反対し、底面以下は僅かに内側に凹む。外側は回転子字痕跡が有るが、全体的に 底面は内側を下げる。口縫上部に凹凸がある。	
16	圆筒形 直筒	直筒	18	16.0	4.0	8.0	10%	(内) 口縫10 底面(リム) 30%	口縫部は玉縫目で内側に凹む。内側に回転子字痕跡が有るが、底面は内側に凹む。 A型、内面の手づけを有する。エッジは認められない。口縫部が外側に内側に凹 状の凹凸がある。底面は回転子字痕跡を有す。底面から全体が内側に凹む。	
17	圆筒形 直筒	直筒	21	7.0	10.0	10.0	100%	(内) 反白(NB) ~ 7/7	厚底のつくり。底面は回転子字痕跡を有す。内面に僅かが有る。底面から全体が内側に凹む。	
18	白陶 直筒	直筒	24	2.0	10.0	10.0	100%	(内) 反白7.5YR8/1~2 外 淡黄青7.5YR8/1	内面は底面を丸くつくる。底面から内側に凹む。底面は回転子字痕跡を有す。体 全体が内側を下げる。内面に工具による擦痕を有す。	
19	土器類 直筒	直筒	18	10.1	11.0	10.0	100%	(内) 反白7.5YR8/3~4 淡黄青7.5YR8/3 外 淡黄青7.5YR8/1~2	厚底のつくり。底面は回転子字痕跡を有す。内面に工具による擦痕を有す。	
20	土器類 直筒	直筒	23	10.1	12.0	10.0	40%	(内) 反白4.5 底面(リム) 100%	口縫部は玉縫目で内側に凹む。内面に工具による擦痕を有す。内面に僅かが有る。 A型、底面は回転子字痕跡を有す。底面から内側に凹む。	
21	圆筒形 直筒	直筒	18	10.1	12.0	10.0	100%	(内) 反白7.5YR8/1~2 外 淡黄青7.5YR8/1~2	厚底のつくり。底面は回転子字痕跡を有す。内面に僅かが有る。底面から全体が内側に凹む。	
22	圆筒形 直筒	直筒	18	10.1	11.7	10.0	30%	(内) 反白(NB) 底面(リム) 100%	厚底のつくり。底面は回転子字痕跡を有す。内面に工具による擦痕を有す。体 全体が内側を下げる。内面に工具による擦痕を有す。	
23	圆筒形 直筒	直筒	18	10.1	12.0	10.0	100%	(内) 反白(NB) / 外 淡黄青7.5YR8/1~2 底面(リム) 100%	厚底のつくり。底面は回転子字痕跡を有す。内面に工具による擦痕を有す。	
24	圆筒形 直筒	直筒	17	10.1	10.1	10.0	100%	(内) 反白7.5YR8/3~4 淡黄青7.5YR8/3 外 淡黄青7.5YR8/1~2	厚底のつくり。口縫に二三次の擦痕を有す。底面は純粋で淡黄青色を呈 す。底面地方から輸入品か。	
25	圆筒形 直筒	直筒	18	10.1	10.1	10.0	100%	(内) 反白7.5YR8/3~4 淡黄青7.5YR8/3 外 淡黄青7.5YR8/1~2	厚底のつくり。口縫に二三次の擦痕を有す。底面は純粋で淡黄青色を呈 す。底面地方から輸入品か。	
26	圆筒形 直筒	直筒	1	10.5	10.0	10.0	95%	(内) 反白(NB)	口縫は端端で、内面に回転子字痕跡を有す。無縫。	
27	圆筒形 直筒	直筒	5	10.4	2.0	10.0	95%	(内) 口縫10 底面(リム) 50%	底面部は玉縫目で内側に凹む。内面に工具による擦痕を有す。内面に僅かが有 る。底面は回転子字痕跡を有す。内面に工具による擦痕を有す。	
28	圆筒形 直筒	直筒	16	11.1	10.0	10.0	100%	(内) 反白7.5YR8/2~3 外 淡黄青10YR8/2~3	厚底のつくり。底面は回転子字痕跡を有す。内面に工具による擦痕を有す。体 全体が内側を下げる。内面に工具による擦痕を有す。	
29	土器類 把手	直筒	15	11.2	2.0	10.0	25%	(内) 反白7.5YR8/2~3 外 淡黄青10YR8/2~3	厚底のつくり。底面は回転子字痕跡を有す。内面に工具による擦痕を有す。	
30	圆筒形 直筒	直筒	20	10.0	9.0	10.0	100%	(内) 反白7.5YR8/2~3 淡黄青7.5YR8/2~3 外 淡黄青7.5YR8/1~2	厚底のつくり。底面は回転子字痕跡を有す。内面に工具による擦痕を有す。 A型、底面は回転子字痕跡を有す。	
31	圆筒形 直筒	直筒	20	10.0	9.6	2.0	7.0	70%	(内) 反白7.5YR8/2~3 淡黄青7.5YR8/2~3 外 淡黄青7.5YR8/1~2	厚底のつくり。底面は回転子字痕跡を有す。内面に工具による擦痕を有す。 A型、底面は回転子字痕跡を有す。
32	圆筒形 直筒	直筒	20	10.0	9.3	1.0	60%	(内) 反白7.5YR8/2~3 外 淡黄青7.5YR8/1~2	厚底のつくり。底面は回転子字痕跡を有す。内面に工具による擦痕を有す。	
33	圆筒形 直筒	直筒	20	10.0	9.8	2.0	7.0	80%	(内) 反白7.5YR8/2~3 淡黄青7.5YR8/2~3 外 淡黄青7.5YR8/1~2	厚底のつくり。底面は回転子字痕跡を有す。内面に工具による擦痕を有す。
34	圆筒形 直筒	直筒	20	10.0	9.3	1.0	6.0	25%	(内) 反白7.5YR8/2~3 淡黄青7.5YR8/2~3 外 淡黄青7.5YR8/1~2	厚底のつくり。底面は回転子字痕跡を有す。内面に工具による擦痕を有す。 A型、底面は回転子字痕跡を有す。
35	圆筒形 直筒	直筒	20	10.0	9.8	1.0	6.0	40%	(内) 反白7.5YR8/2~3 淡黄青7.5YR8/2~3 外 淡黄青7.5YR8/1~2	厚底のつくり。底面は回転子字痕跡を有す。内面に工具による擦痕を有す。
36	圆筒形 直筒	直筒	20	10.0	10.8	2.0	7.0	80%	(内) 反白7.5YR8/2~3 淡黄青7.5YR8/2~3 外 淡黄青7.5YR8/1~2	厚底のつくり。底面は回転子字痕跡を有す。内面に工具による擦痕を有す。
37	圆筒形 直筒	直筒	20	10.0	9.9	2.0	6.0	50%	(内) 反白7.5YR8/2~3 淡黄青7.5YR8/2~3 外 淡黄青7.5YR8/1~2	厚底のつくり。底面は回転子字痕跡を有す。内面に工具による擦痕を有す。
38	圆筒形 直筒	直筒	20	10.0	9.7	2.0	6.0	70%	(内) 反白7.5YR8/2~3 淡黄青7.5YR8/2~3 外 淡黄青7.5YR8/1~2	厚底のつくり。底面は回転子字痕跡を有す。内面に工具による擦痕を有す。
39	圆筒形 直筒	直筒	20	10.0	10.0	2.0	6.0	70%	(内) 反白7.5YR8/2~3 淡黄青7.5YR8/2~3 外 淡黄青7.5YR8/1~2	厚底のつくり。底面は回転子字痕跡を有す。内面に工具による擦痕を有す。
40	圆筒形 直筒	直筒	20	10.0	9.8	2.0	7.0	70%	(内) 反白7.5YR8/2~3 淡黄青7.5YR8/2~3 外 淡黄青7.5YR8/1~2	厚底のつくり。底面は回転子字痕跡を有す。内面に工具による擦痕を有す。
41	圆筒形 直筒	直筒	1	10.0	9.6	2.0	6.0	35%	(内) 反白7.5YR8/2~3	厚底のつくり。底面は回転子字痕跡を有す。内面に工具による擦痕を有す。
42	圆筒形 直筒	直筒	20	10.0	10.4	2.0	7.0	70%	(内) 反白7.5YR8/2~3 淡黄青7.5YR8/2~3 外 淡黄青7.5YR8/1~2	厚底のつくり。底面は回転子字痕跡を有す。内面に工具による擦痕を有す。
43	圆筒形 直筒	直筒	20	10.0	10.1	2.0	5.5	50%	(内) 反白7.5YR8/2~3 淡黄青7.5YR8/2~3 外 淡黄青7.5YR8/1~2	厚底のつくり。底面は回転子字痕跡を有す。内面に工具による擦痕を有す。
44	圆筒形 直筒	直筒	20	10.0	10.2	2.0	6.0	70%	(内) 反白7.5YR8/2~3 淡黄青7.5YR8/2~3 外 淡黄青7.5YR8/1~2	厚底のつくり。底面は回転子字痕跡を有す。内面に工具による擦痕を有す。
45	圆筒形 直筒	直筒	20	10.0	12.0	4.2	8.0	25%	(内) 反白7.5YR8/2~3 淡黄青7.5YR8/2~3 外 淡黄青7.5YR8/1~2	厚底のつくり。底面は回転子字痕跡を有す。内面に工具による擦痕を有す。

参考 書名 番号	固・ 仮名 表記	種類	登録区 域地図	遺構 位置	口径 cm	高さ cm	周長 cm	推定年 代	色調	形態・性状・特徴等
80	国35 土師器 蓋付	3 H25y7	1場	推1.0 (内・外) 横7.5YR6-8 (外) 横7.5YR7-8						堆積層が薄く傾斜は不明瞭であるが、外側にはナデ調整によるとみられる。
81	国35 土師器 蓋付(灯明)	3 H25y12	1場	(12.6) 29%以下 (内・外) 黄灰青2.5Y4/2 (底面) N15/ N16 (内・外) 黄灰青2.5Y4/4						口縁部は底面から僅かに内側へ立ち上がり、底部には底盤状の凹みが底 部、内面にはヨコナデ調整、口縁部附近に底が付着し、口縁品目として使 用する。
82	国35 土師器 蓋付	3 H25y8	1場	(10.5) 西1.5 (内・外) 10% (内・外) 黄灰2.5Y4/1 (外) 黄7.5YR7-6						口縁部は平坦で、やや膨張する。小型の器である。
83	国35 土師器 蓋付	3 H25y10	1場	(12.4) 口縁20% (内・外) 黄5YV6-2 (底面) 須白N17/ N18 (内・外) 黄5YV1/2						口縁部は底面から直線的に立ち上がり、底部には底盤状の凹みが底 部、内面にはヨコナデ調整、口縁部附近に底が付着し、ヨコナデ品目と して使用する。
84	国35 土師器 蓋付	3 H25y11	1場	(14.6) 口縁5% (内・外) 橙7.5YR7-6 (外) 横7.5YR7-6						口縁部は底面から緩やかに内側へ立ち上がり、内外面にヨコナデ調整を施 す。底部は浅鉢。
85	国35 土師器 蓋付	3 H25y21	直保	(10.6) 西1.4 25% (全体) 内7H6 ~5H						小形の器で底面が丸い。口縁は直角に近く屈曲し、堆積は平坦面をなす。 ツマリの有無は不明である。
86	国35 土師器 蓋付	3 H25y19	1場	(11.4) 推1.7 10% (内・外) 黄10YR7-1 (外) (内・外) 黄10YR5/ H2 (内・外) 黄2.5Y7/1						やや大型のツマリを有しない直筒器である。天井部はカクツギにより平面面を なす。底部下部はカクツギを有する。内面には僅かに底盤状の凹みが底 部、内面にはヨコナデ調整を施す。
87	国35 陶脚陶 蓋付	3 H25y13	1場	(16.1) 口縁5% (内・外) 橙2.5Y7-2 (外) 黄2.5Y7-4 (脚跡) (外) リーパー 底付 (内) 黄2.5Y7-1 (内) 黄2.5Y7-2 (内) 黄2.5Y7-3 (内) 黄2.5Y7-4						脚跡がありリーパーは僅に認められ、堆積部はやや乳突性についで外反 する。底部下部はカクツギを有する。内面には僅かに底盤状の凹みが底 部、内面にはヨコナデ調整を施す。
88	国35 粗脚陶 蓋付	3 H25y10	1場	(10.0) 口縁5% (内・外) 黄5YV1/1 H2 (内) 黄5YV1/1						堆積部は底面から直線的に立ち上がり、底部には底盤状の凹みが底 部、内面にはヨコナデ調整を施す。
89	国35 高足土 器蓋付	3 H25y15	直保	推9 10% (内・外) 黄5YR7-2 (外) 黄5YR7-4 H2 (内) 黄5YR7-4						天井部の内面、外側は直角で底面は緩やかに内側へと傾く。口縁部は底 部は底盤状の凹みが底部、内面にはヨコナデ調整を施す。
90	国35 輪足器 蓋付	3 H25y10	1場	(8.0) 口縁5% (内) 黄2.5Y7-2 (外) 黄2.5Y7-3						口縁部はやや円錐形で天井部は直角で底面は底盤状を呈するから かも。外面にはヨコナデ調整を施すとはビザガラ路。
91	国35 輪脚陶 蓋付	3 H25y10	1場	推1.0 20% (内・外) 黄2.5Y7-2 (外) 黄2.5Y7-3 H2 (内) 黄2.5Y7-3						中足部が高かに立ちむる平底器である。天井部は淡黄色でスクレーフ痕が僅かに ある。底付、底北付ともらわ。時代は前半前山跡。
92	国35 供生土 器蓋付	3 H25y18	2場	(2.3) 4.2 底付80% (内) 黄2.5Y7-3 (外) 黄2.5Y7-4 H2 (内) 黄2.5Y7-4						底部は直面にビオサの痕跡を有する。
93	国35 輪足器 蓋付	3 H25y12	直保	推9 10% 20% (後) オリーブ45Y6/1						底面に凹凸あり跡跡を有する。天井部は凹凸テテ。
94	国35 土師器 蓋付	3 H25y10	1場	(15.1) 2.15 12.0% (内・外) (内) 黄10YR7-4 (外) 橙7.5YR7-6 H2 (内) 黄2.5Y7-3						口縁部は底面から直線的に立ち上がり、内側にはヨコナデ調整を施す。底部は 底盤状の凹みが底部、内面にはヨコナデ調整を施す。
95	国35 土師器 蓋付	3 H25y17	2場	(11.4) 2.0 20% (内・外) 黄5YV6-1 (外) 黄5YR7-2						小形の器である。中央がやや膨り上昇するツマリを有し、口縁は底やかにS 字形で傾いて直線的、堆積は丸つぶ。
96	国35 土師器 蓋付	3 H25y10	1場	(10.5) 底付20% (内) 黄2.5Y7-3 (外) 黄2.5Y7-2 (内) 黄2.5Y7-3 (外) 黄5YV1/1						底面の内面、外側にはやや上昇が他のタガが認める。内面は板状 工法によるみられる子母器である。
97	国35 土師器 蓋付	3 H25y16	直保	推1.7 25%以下 (内) 黄5YV6-1 (外) 黄5YV7-2 H2 (内) 黄5YV7-2						底部は底盤部は底盤状の凹みが底部、内面にはヨコナデ調整を施す。
98	国35 土師器 蓋付	3 H25y15	1場	推9.1 10% 10%以下 (内) 黄5Y6 ~4 (外) 黄5Y6 ~4 (内) 黄5YR7-4						底盤部または底盤とみられる。天井部は低く凹凸に出でる、不明瞭である。 全体は直面である。
99	国35 土師器 蓋付	3 H25y16	直保	(10.0) 底付5% (内) 黄5Y7-3 H2 (内) 黄5Y7-3						底盤部から、ツマリをもつて規定される。
100	国35 輪足器 蓋付	3 H25y10	1場	(8.0) 口縁5% (内) 黄2.5Y7-2 (外) 黄2.5Y7-3						口縁部やや円錐形で天井部へと傾く。底盤は底盤状を呈するから かも。外面にはヨコナデ調整を施すとはビザガラ路。
101	国35 輪脚陶 蓋付	3 H25y10	1場	推1.0 5.7% 底付20% (内) 黄2.5Y7-3 (外) オリーブ45Y6/1 H2 (内) 黄2.5Y7-3						中足部が高かに立ちむる平底器である。天井部は淡黄色でスクレーフ痕が僅かに ある。底付、底北付ともらわ。時代は前半前山跡。
102	国35 供生土 器蓋付	3 H25y18	2場	(2.3) 4.2 底付80% (内) 黄2.5Y7-3 (外) 黄2.5Y7-4 H2 (内) 黄2.5Y7-4						底部は直面にビオサの痕跡を有する。
103	国35 輪足器 蓋付	3 H25y15	直保	推9 10% 20% (後) オリーブ45Y6/1						底面に凹凸あり跡跡を有する。
104	国35 輪足器 蓋付	3 H25y12	直保	推9 10% 20% (後) オリーブ45Y6/1						底面に凹凸あり跡跡を有する。天井部は凹凸テテ。
105	国35 土師器 蓋付(灯明)	3 H25y12	1場	(15.1) 2.15 12.0% (内・外) (内) 黄10YR7-4 (外) 橙7.5YR7-6 H2 (内) 黄2.5Y7-3						口縁部は底面から直線的に立ち上がり、内側にはヨコナデ調整を施す。底部は 底盤状の凹みが底部、内面にはヨコナデ調整を施す。
106	国35 土師器 蓋付	3 H25y17	2場	(11.4) 2.0 20% (内・外) 黄5YV6-1 (外) 黄5YR7-2						小形の器である。中央がやや膨り上昇するツマリを有し、口縁は底やかにS 字形で傾いて直線的、堆積は丸つぶ。
107	国35 供生土 器蓋付	3 H25y18	直保	推4.4 5.4% 底付40% (内) 黄5Y6-1 (外) 明褐色10YR7-6 H2 (内) 黄2.5Y7-2						底面の内面、外側にはやや上昇が他のタガが認める。内面は板状 工法によるみられる子母器である。
108	国35 土師器 蓋付	3 H25y16	直保	推1.7 25%以下 (内) 黄5YV6-1 (外) 黄5YV7-2 H2 (内) 黄5YV7-2						底部は底盤部は底盤状の凹みが底部、内面にはヨコナデ調整を施す。
109	国35 土師器 蓋付	3 H25y15	直保	推9.1 10% 10%以下 (内) 黄5Y6-1 H2 (内) 黄5Y6-1						底盤部または底盤とみられる。天井部は低く凹凸に出でる、不明瞭である。 全体は直面である。
110	国35 土師器 蓋付	3 H25y16	直保	(10.0) 底付5% (内) 黄5Y7-3 H2 (内) 黄5Y7-3						底盤部から、ツマリをもつて規定される。
111	国35 土師器 蓋付	3 H25y14	2場	(8.4) 1.7 底付5% (内) 明褐色10YR7-7 (外) 淡黄色10YR8-4 (内) 明褐色10YR7-8 (外) 基礎2.5Y3/1						口縁はヨコナデにより、直線的に傾く。ヨコナデ調整が認められる。堆積 部は直線的に底みどりあり、底部が付ける。底盤は不完全の方の子。
112	国35 土師器 蓋付	3 H25y15	2場	(14.4) 底付3% (内) 黄5Y7-3 H2 (内) 黄5Y7-3						口縁部は底面から直線的に傾く。ヨコナデ調整が認められる。堆積 部は直線的に底みどりあり、底部が付ける。底盤は不完全の方の子。
113	国35 土師器 蓋付	3 H25y16	直保	推10.0 9.0% 底付25% (内・外) 橙7.5YR7-6 H2 (内) 橙7.5YR7-6 ~6 (外) 橙7.5YR7-6						口縁部は底面からやや直線して立ち上がり、底盤は僅かに上方へまづ上げる。口縁 部は直線的に底みどりあり、底部が付ける。底盤は不完全の方の子。
114	国35 土師器 蓋付	3 H25y16	直保	推3.0 底付20% (内) 黄5Y7-8 H2 (内) 黄5Y7-8						口縁部は底面からやや直線して立ち上がり、底盤は僅かに上方へまづ上げる。 口縁部は内面にヨコナデを施す。底盤は直面である。
115	国35 土師器 蓋付	3 H25y12	2場	(12.2) 3.0 底付25% (内) 黄5Y7-3 H2 (内) 黄5Y7-3						口縁部は直面に傾曲して天へつづき、堆積は僅かに上方へまづ上げる。口縁 部は直線的に底みどりあり、底部が付ける。底盤は不完全の方の子。
116	国35 土師器 蓋付	3 H25y15	直保	推9.0 底付25% (内) 黄5Y7-3 H2 (内) 黄5Y7-3						口縁部は直面に傾曲して天へつづき、堆積は僅かに上方へまづ上げる。口縁 部は内面外壁にヨコナデを施す。底盤は直面である。
117	国35 土師器 蓋付	3 H25y16	直保	推9.0 底付25% (内) 黄5Y7-3 H2 (内) 黄5Y7-3						口縁部は直面に傾曲して天へつづき、堆積は僅かに上方へまづ上げる。口縁 部は内面外壁にヨコナデを施す。底盤は直面である。
118	国35 土師器 蓋付	3 H25y13	2場	(26.0) 推17.1 底付25% (内) 黄5Y7-3 H2 (内) 黄5Y7-3						底盤部を有する直筒器である。外周は底面へ一端まで下がる。口縁部 は直線的に底みどりあり、底部が付ける。底盤は直面である。
119	国35 土師器 蓋付	3 H25y12	2場	(22.6) 8.4 底付5% (内) 黄5Y7-3 H2 (内) 黄5Y7-3						底盤部を有する直筒器である。外周は底面へ一端まで下がる。口縁部 は直線的に底みどりあり、底部が付ける。底盤は直面である。
120	国35 土師器 蓋付	3 H25y12	2場	推10.0 10.0% 底付20% (内・外) 明赤陶2.5YR9-9 (外) 明赤陶2.5YR8-8						底盤部を有する直筒器である。外周は底面へ一端まで下がる。口縁部 は直線的に底みどりあり、底部が付ける。底盤は直面である。
121	国35 土師器 蓋付	3 H25y15	2場	14.0 1.8 11.0% 底付55% (内) 黄5Y7-3 H2 (内) 黄5Y7-3						口縁部は底面からやや直線して立ち上がり、底盤は僅かに上方へまづ上げる。口縁 部は直線的に底みどりあり、底部が付ける。底盤は直面である。
122	国35 土師器 蓋付	3 H25y11	2場	(15.3) 2.2 底付25% (内) 黄5Y7-3 H2 (内) 黄5Y7-3						口縁部は底面からやや直線して立ち上がり、底盤は僅かに上方へまづ上げる。口縁 部は直線的に底みどりあり、底部が付ける。底盤は直面である。
123	国35 土師器 蓋付	3 H25y11	2場	16.4 2.1 13.0% (内) 黄5Y7-3 H2 (内) 黄5Y7-3						口縁部は底面からやや直線して立ち上がり、底盤は僅かに上方へまづ上げる。口縁 部は直線的に底みどりあり、底部が付ける。底盤は直面である。
124	国35 土師器 蓋付	3 H25y12	2場	(14.0) 1.7 口縁5% (内) 黄5Y7-3 H2 (内) 黄5Y7-3						口縁部は底面からやや直線して立ち上がり、底盤は僅かに上方へまづ上げる。口縁 部は直線的に底みどりあり、底部が付ける。底盤は直面である。
125	国35 土師器 蓋付	3 H25y12	2場	推2.0 底付5% (内) 黄5Y7-3 H2 (内) 黄5Y7-3						口縁部は底面からやや直線して立ち上がり、底盤は僅かに上方へまづ上げる。口縁 部は直線的に底みどりあり、底部が付ける。底盤は直面である。
126	国35 土師器 蓋付	3 H25y11	2場	推2.4 底付5% (内) 黄5Y7-3 H2 (内) 黄5Y7-3						口縁部は底面からやや直線して立ち上がり、底盤は僅かに上方へまづ上げる。口縁 部は直線的に底みどりあり、底部が付ける。底盤は直面である。
127	国35 土師器 蓋付	3 H25y12	2場	推2.9 底付25% (内) 黄5Y7-3 H2 (内) 黄5Y7-3						口縁部は底面に僅かに傾いて直線する。天井部は底盤状である。
128	国35 土師器 蓋付	3 H25y11	2場	推3.5 底付25% (内・外) 橙7.5YR7-8 (外) 黄5YR8-8						口縁部は内面に直立せず、底盤は僅かに下方へまづ上げる。口縁部まで ヨコナデ調整を施す。底盤は直面である。
129	国35 土師器 蓋付	3 H25y11	2場	12.7 3.4 8.2% (内・外) (内) 黄5Y7-3 H2 (内) 黄5Y7-3						口縁部はやや底面に傾いて直線する。天井部は底盤状である。口縁部まで ヨコナデ調整を施す。底盤は直面である。
130	国35 土師器 蓋付	3 H25y13	2場	推3.4 11.0% (内) 黄5Y7-3 H2 (内) 黄5Y7-3						口縁部はやや底面に傾いて直線する。天井部は底盤状である。口縁部まで ヨコナデ調整を施す。底盤は直面である。
131	国35 土師器 蓋付	3 H25y12	2場	推3.0 9.0% 底付30% (内) 橙7.5YR7-8 (外) 黄5YR7-8						口縁部は直面に傾いて直線する。天井部は底盤状である。口縁部まで ヨコナデ調整を施す。底盤は直面である。
132	国35 土師器 蓋付	3 H25y16	2場	推3.1 2.5% (内) 黄5Y7-3 H2 (内) 黄5Y7-3						口縁部は直面に傾いて直線する。天井部は底盤状である。口縁部まで ヨコナデ調整を施す。底盤は直面である。
133	国35 土師器 蓋付	3 H25y20	2場	推3.3 10.0% 底付20% (内) 黄5Y7-3 H2 (内) 黄5Y7-3						口縁部は直面に傾いて直線する。天井部は底盤状である。口縁部まで ヨコナデ調整を施す。底盤は直面である。

報告書番号	期・ 遺跡名	種類	調査実施区	調査実施位	目標 cm	高さ cm	深度 cm	開発率	色調	剖面-技法-特徴等
134	期25 遺跡67	土師器 底盤?	3 H7c12	2a層	(13.7)	2.9	(8.0) 30%	内:95% SYR8/8 断: SYR7/8-6/7	□縁は底部から直線的に開き、内外面はヨコナデ調整を出す。口縁後部内面に高い沈みが出来る。底盤は未調節であるが、後縦柱が残る。	
135	期25 遺跡67	土師器 底盤?	3 H7c12	2a層		2.5	3%以下	内:外: 灰白2.5YB/1-8/2 断: 灰白2.5YB/1	口縁付近から長い縫合が下方向に延びる。縫合部分はヨコナデ調整、内面はナデ調整及び堆積物が残る。	
136	期25 遺跡67	灰白色土 底盤?	3 H7c12	2a層		2.0	7.0	高台50% (全体) 灰白M/6	底部に円軌跡切り痕跡を有する。底部に断面高台形状で貼付。内外面とも神経質的。	
137	期25 遺跡67	土師器 底盤?	3 H7c12	2a層	25.6	4.8	50%	内:95% 線SYR8/8 断: 黄褐色SYR8/6	内:(13.0) 1.5cm幅のうねりがある。丸く継続したたなじめの凹凸を手方向から施す。主がきは1方向につき十箇所以上させて施す。口縁縛りは平面につくる。	
138	期25 遺跡67	高白色土 底盤?	3 H7c12	2a層	(15.2)	4.4	(6.1) 口縁2.5 高台15%	内: 因NA/ 95% 淡黄褐色SYR8/4 断: 淡黄褐色SYR8/2	A類。内面のみ美化処理する。内面はやや難いEガキを施す。外縁は口縁上部をヨコナデ調整し、下部は未調節である。低い高台を貼付後、ナデ調整。	
139	期25 遺跡67	高白色土 底盤?	3 H7c12	2a層		2.0	(4.6) 進道45%	内: 灰色NA/ 外: 灰SYR8/6 断: 灰SYR8/6	A類。内面のみ美化処理する。内面は東洋模倣と見受けられる。断面三角形の低い高台を貼付。	
140	期25 遺跡67	灰白色土 底盤?	3 H7c12	2a層		3.5	底盤20%	内: 灰SYR8/6-5 断: 灰SYR8/6	摩滅強く、縫合不規則である。	
141	期25 遺跡67	土師器 底盤?	3 H7c12	2a層		3.5	底盤100% (全体) 灰白SYR8/2 断: 因NA/	摩滅強く、縫合不規則であるが、外縁はナデ調整とみられる。		
142	期25 遺跡67	陶器 底盤?	3 H7c12	2a層		角度不明	3%以下	内: 灰SYR8/2-3-4-5 断: SYR8/3-3-4-5	外縁に真横のV字跡、内面に明暗面を描ける。基盤不明である。縫合角縛りか、縫合V字縛り。	
143	期25 遺跡67	土師器 底盤?	3 H7c12	2a層	(14.0)	2.4	(11.6) 30%	内: 灰SYR8/6 断: 灰SYR8/6	□縁はやや難曲して底部から立ち上がる。口縁外面をヨコナデ調整し、底盤ナデ調整を施す。口縁縛り内面に沈みを出す。	
144	期25 遺跡67	土師器 底盤?	3 H7c12	2a層	(16.0)	2.5	(12.0) 20%以下	内:95% 線SYR8/6 断: 灰SYR8/6	□縁は進道から直線的に開く。内面はヨコナデ調整により、やや段差をなす。	
145	期25 遺跡67	土師器 底盤?	3 H7c12	2a層	(20.2)	2.0	口縁20%	内:95% 線SYR8/6 断: 淡黄褐色SYR8/4	□縁はやや難曲して底部から立ち上がる。口縁外面をヨコナデ調整し、底盤ナデ調整を施す。口縁縛り内面に沈みを出す。	
146	期25 遺跡67	土師器 底盤?	3 H7c12	2a層		0.7	10%以下	内: 灰SYR8/6-4 断: 灰SYR8/6	□縁はやや難曲して底部から立ち上がる。底盤ナデ調整を施す。ぐく側であるが縫合が残る。	
147	期25 遺跡67	土師器 底盤?	3 H7c12	2a層		0.8	(3.6) 進道40%	内: 灰SYR8/6-4 断: 灰SYR8/6-4	□縁はやや難曲して底部から立ち上がる。底盤ナデ調整を施す。(後縫)と片側縫合が残る。	
148	期25 遺跡67	灰白色土 底盤?	3 H7c12	2a層	(8.0)	4.2	20%	内: 灰SYR8/6-3 断: 灰SYR8/3-2-2	□縁は僅かに外反。底部は跡跡を刻むを施す。外縁に強烈な摩滅が數多く残る。	
149	期25 遺跡67	灰白色土 底盤?	3 H7c12	2a層	304	4.4	進道100%	内: 灰SYR8/7/8 断: 333/24/1	摩滅強く調整は不明である。	
150	期25 遺跡67	灰白色土 底盤?	3 H7c12	2a層	327	3.0	(5.5) 底盤70%	内: 断: SYR8/4-4 断: 淡黄褐色SYR8/4	摩滅強く調整は不明である。	
151	期25 遺跡67	灰白色土 底盤?	3 H7c12	2a層	(15.0)	8.5	口縁20%	内: 灰褐色SYR8/1-5 断: SYR8/1-5	摩滅強く調節は不明であるが、片側内面はナデ調整とみられる。縫合は中央で二つに分かれて残る。	
152	期25 遺跡67	三輪式灰白色 底盤?	3 H7c12	358		1.8	3%以下	内: 灰SYR8/2 (断: 灰褐色SYR8/1-1) 内: 灰SYR8/2 (断: 灰褐色SYR8/1-2) (断: 灰褐色SYR8/1-3) 内: 灰SYR8/2	既習の土器で、表面ほとんど化粧土を剥げた後、洗練する。跡は透明及び縫合で、一片側は三輪とみられる。	
153	期25 遺跡67	土師器 底盤?	3 H7c12	388	(11.8)	2.4	(5.6) 進道40% 底盤20%	内: 灰SYR8/4-4 断: 灰褐色SYR8/1-1 内: 灰SYR8/4-4 断: 灰褐色SYR8/1-1	□縁は底部から僅かに窓を開いて開口状の窓を作り、受け口状の窓を作り。微熱痕跡が認められる。	
154	期25 遺跡67	土師器 底盤?	3 H7c12	398	(15.2)	2.7	(12.5) 50%	内: 灰SYR8/4-4 断: 灰褐色SYR8/1-1-6/8 内: 灰SYR8/4-4 断: 灰褐色SYR8/1-1-6/8	□縁はやや難曲して底部から立ち上がる。口縁外面をヨコナデ調整し、底盤は未調節であるが部分的にナデが認められる。	

石器-気泡

報告書番号	期・ 遺跡名	種類	調査実施区	調査実施位	最大大きさ cm	最大幅 cm	高さ cm	石材	開発率	特徴
25	遺跡67	褐色石器品	H7c12	101	8.7	7.4	7.3	70% 墓石	100%	滑石型で、表面は平滑に磨かれて、中肋が削らる円滑便を有する。
102	遺跡67	石製品 石器?	3 H7c12	數個	2.9	1.4	1.4	6.2 墓石	平滑	
109	遺跡67	砾石器 石器?	3 H7c12	30/91	36.5	28.0	18.0	100% 石器	100%	半溝に半球状の凹みを有する。
156	遺跡67	砾石器 石器?	3 H7c12	32/77	28.3	18.0	7.3	81.0 磨耗鉈器	100%	
157	遺跡67	砾石器 石器?	3 H7c12	101	12.8	3.8	4.0	304.5 破片	100%	

第7節 岩崎大泓遺跡・岩崎大泓II遺跡

第1項 調査に至る経緯

近畿自動車道紀勢線事業に伴う田辺～すさみ町間の自動車道建設により、その建設予定地の一部が西牟婁郡上富田町の岩崎大泓遺跡として埋蔵文化財包蔵地に指定されている範囲内にかかることから、県文化遺産課により平成23年度に確認調査が実施された。その結果、当該工事対象地は記録保存のための本発掘調査を要するものと判断され、平成24年度に公益財團法人和歌山県文化財センターが国土交通省近畿地方整備局紀南河川国道事務所の委託を受け、本調査を実施した。

第2項 位置と環境

岩崎大泓遺跡、岩崎大泓II遺跡は塗屋城跡と非常に近い位置にあり、地理的環境及び歴史的環境については塗屋城跡の項において先に述べたとおりである。両遺跡の立地するところは富田川西岸にあたり、岸に沿って北東から南西へと長く連なる丘陵地にある、狭小な平野部を有する谷筋である。遺跡の範囲は北、西、南方を丘陵に囲まれた盆地状の地形を呈する平野部を中心に、丘陵斜面の裾部分を含む。(図1)

第3項 岩崎大泓遺跡

岩崎大泓遺跡は北西から南東方向に延びる細い谷筋に立地する。岩崎大泓II遺跡とは指呼の距離にあり、現況は水田である。これらの水田は谷筋の北西から段をなして標高を下げ東南端は低地となるが、今回の調査区は谷筋で最も標高の低い部分(標高14.0m付近)に位置する(図1)。

(1) 調査の方法

1) 地区割りの方法

調査地は中央を現有水路によって南北に分断されることから、便宜的にこの水路より北側を調査区1、南側を調査区2とした(図3)。調査面積は調査区1が1013m²、調査区2が302m²である。

地区割り(図2・3)は岩崎大泓遺跡及び岩崎II遺跡の両遺跡について共通で、X=255.700、Y=-54.200を原点として中区画を設定している。両遺跡とも中区画C8・C9・C10の範囲にあり、小区画は図3の通りである。

2) 基本層序(図5)

第1・2層 現在の水田耕作土及び床土

第3・4層 近世の水田耕作土及び床土。弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、近世陶磁器を含む。

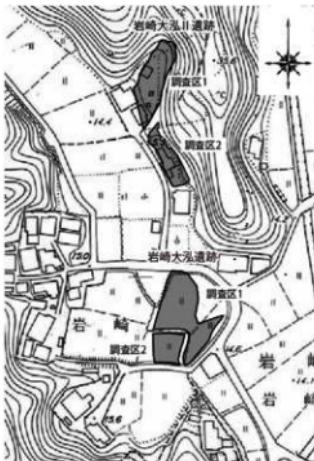


図1 調査区及び周辺の地形 S=1/3000

第5層 中世の遺物包含層。3層に分層可能であり、土師器、瓦器等を含む。

第2～5層においては磨滅の著しい弥生土器片（時期は弥生時代後期末）が含まれる。第5層を掘削後、第6層上面において遺構検出を行った。

(2) 調査成果

1) 調査区1

調査区は中央が狭まり、東西両端で広くなる亜鉛状の平面形となる。その東側で鈎溝群を、西側で土坑群（遺構1～13）と落ち込み状遺構（遺構31・32）を検出した（図4）。遺構1～13は浅いものが多く、遺物の出土がみられないものについては自然地形である可能性も検討したが、埋土の特徴から遺構であると判断された。

また、遺構検出面以下の堆積状況を確認するため、トレンチ（A～E）を設定した。各遺構の規模等は以下のとおりである。

遺構1（図4・6） 長径1.1m、短径0.6m以上、深さ0.08mの楕円形をなすとみられる土坑である。埋土は1層で、出土遺物はない。

遺構2（図4・6） 長径1.1m、短径0.9m、深さ0.08mの楕円形をなす土坑である。埋土は1層で、弥生土器の細片が出土した。

遺構3（図4・6、図版49） 長径1.2m、短径0.6m、深さ0.2mの楕円形をなす土坑である。埋土は1層である。弥生土器の細片2点が出土した。

遺構4（図4・6、図版49） 長径1.15m、短径1m、深さ0.1mの楕円形をなす土坑である。底面には凹凸がある。埋土は1層である。出土遺物はない。

遺構5（図4・6） 長径0.75m、短径0.45m、深さ0.05mの楕円形をなす土坑である。埋土は1層である。土師器細片1点、近世とみられる陶器の甕（54）、染付碗（55）が出土した。

遺構7（図4・6、図版49） 長径0.6m、短径0.4m、深さ0.05mの楕円形をなす土坑である。埋土は1層で出土遺物はない。

遺構8（図4・6） 長径1.3m、短径0.6m、深さ0.05mの楕円形をなす土坑である。埋土は1層で出土遺物はない。

遺構11（図4・6） 長径1.15m、短径0.5m、深さ0.05mの楕円形をなす土坑である。埋土は1層である。弥生時代後期末の高環脚部（60）、底部（58）が出土した。

遺構12（図4・6） 径0.5mの円形をなす土坑である。埋土は1層である。出土遺物はない。

遺構13（図4・6、図版49） 長径1.1m、短径1m、深さ0.5mの楕円形をなす土坑である。埋土は3層で、出土遺物はない。

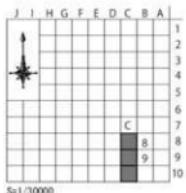


図2 調査区及び小区画

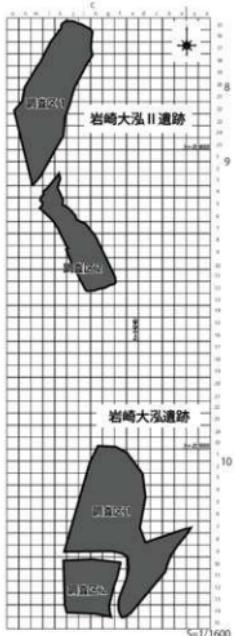


図3 地区割り 中区画

遺構 14(図 4・6) 長径 1.95 m、短径 1.1 m、深さ 0.14 m の土坑である。鋤溝を切っており、これより新しい。埋土は 3 層に区分可能で、第 4 層から、陶器(天目茶碗)の細片 1 点が出土した。

遺構 21(図 4・6) 径 0.35 m の円形をなす土坑で、深さ 0.15 m、埋土は 1 層である。

遺構 22(図 4) 径 0.26m の円形をなす深さ 0.1m の土坑で、弥生土器片及び須恵器片が出土した。

遺構 24(図 4) 長径 0.4 m、短径 0.25 m の楕円形をなす土坑で、深さ 0.15m である。遺物は、瓦器皿の小片、土師器片、瓦器皿が出土した。瓦器皿は 13 世紀代に帰属するとみられる。

遺構 26(図 4・6) 長径 0.45 m、短径 0.2 m の楕円形をなす土坑で、深さ 0.25 m のビットである。25cm の柱痕跡が確認できるが出土遺物はない。

遺構 28(図 4・6) 長径 0.42 m、短径 0.3 m、深さ 0.05m の楕円形をなす土坑である。埋土は 1 層で、出土遺物はない。

遺構 29(図 4・6) 直径 0.25 m、深さ 0.1 m を測る円形のビットである。埋土は 1 層である。

遺構 30(図 4・6) 直径 0.35 m の円形をなす、深さ 0.15 m の土坑である。埋土は 1 層で出土遺物はない。

遺構 31(図 4・5) 北西方向への落ち込み状をなす遺構である。埋土には中世の遺物を含む。

遺構 32(図 4・5) 西側への落ち込み状をなす遺構である。出土遺物はない。

A トレチ(図 4・5) 遺構 31 に対し設定した。遺構 31 埋土は水平堆積のシルト層及び粘土層で、上層から古墳時代から中世にかけての遺物が出土し、下層から古墳時代の遺物が出土した。

B トレチ(図 4) 遺構 32 に対し設定した。遺構 32 の埋土は水平堆積のシルト層及び粘土層で、A トレチにおいて確認した土層と同様である。

C トレチ(図 4・5) 遺構 33 に対し設定したトレチである。遺構 33 の埋土は水平堆積のシルト層及び粘土層の堆積である。

D トレチ(図 4) 遺構 33 に対し設定した。遺構 33 の埋土は水平堆積のシルト層及び粘土層であり、C トレチにおいて確認した土層と同様の状況が観察された。

E トレチ(図 4・5) 遺構 20 に対し設定した。遺構 20 の埋土は水平堆積のシルト層及び粘土層であるが、上端から下端方向への傾斜が遺構 31・32 と比べ幾分急角度となる状況が窺えた。

2) 調査区 2

水田遺構とみられる落ち込み状の遺構 18・19 を検出した、いずれも平面形状は方形をなすと考えられる。また、北東～南西方向への水流が推定される溝状遺構を検出しており、遺構 18・19 に関わるものとみられる。遺構検出面以下の堆積状況を確認するため、E トレチを設定した。

遺構 15(図 4・6、図版 49・50) 南西方向から北東方向に延び幅 0.6 ~ 0.8 m、深さ 0.4 m を測る。断面 U 字形をなし、底部で長さ 3.25 m、幅 5 ~ 10cm、厚さ 0.5cm の薄い板状の木片を検出した(写真 1)。底部のレベルから北東から南西への水流が推定され、水田跡と考えられる遺構 18 に流れ込む。堆積土は 4 層に分層が可能で、第 2 層から細片の黒色土器片、土師器碗の小片、弥生土器及び焼土片が出土した。

遺構 16(図 4・6、図版 49) 幅 0.7 ~ 1 m を測る溝である。断面形状は肩部に段をなすもので、段は幅約 0.3 m を測る。底部は断面 U 字形を呈し、残存する深さは約 0.25 m を測る。堆積土は 3 層に分層可能で、第 1,2 層からは、土師器、瓦器、須恵器壺蓋の細片が出土した。

遺構 17(図 4・6、図版 49) 遺構 16 に平行して掘削された遺構 17 は、途中で二股となるが、

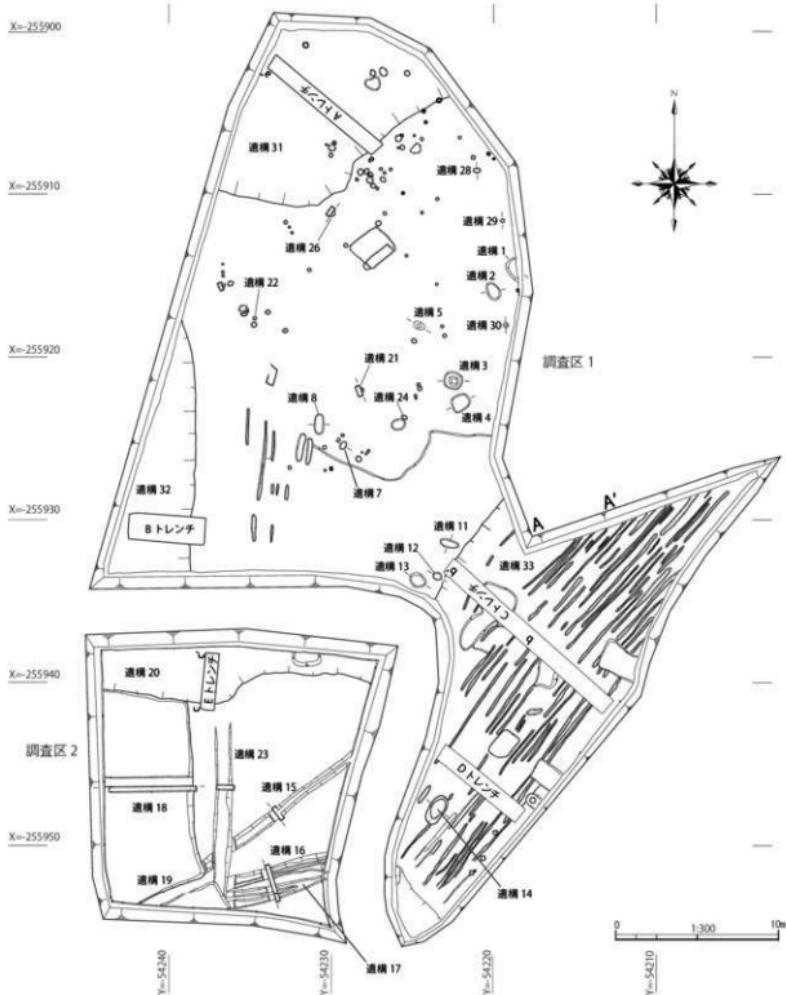
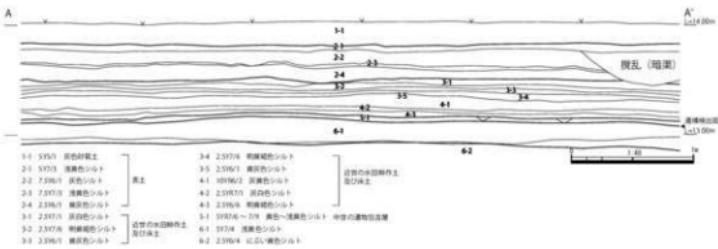


図4 岩崎大泓遺跡 遺構配置図 S=1/300

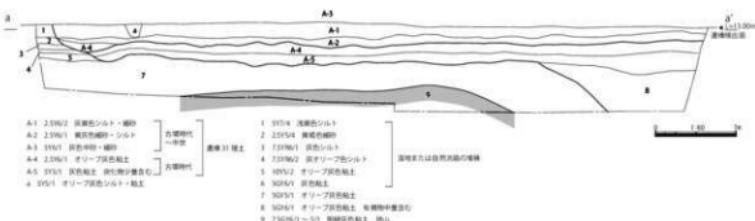
両者の切り合い関係は明瞭でなく、双方ともに幅約0.35mを測る。深さは北側が0.25m、南側が0.35mである。ともに断面はU字形を呈し、底部のレベルから遺構16同様、遺構19へと流れ込んでいたものと推定される。埋土から弥生土器の細片が出土した。

遺構18(図4-6、図版50) 水田遺構と考えられる方形の区画である。11~13m×5.5mにわたって検出され、深さは0.14mである。堆積土は2層に分層可能で、白磁の細片が出土した。

岩崎大泓遺跡・岩崎大泓II遺跡



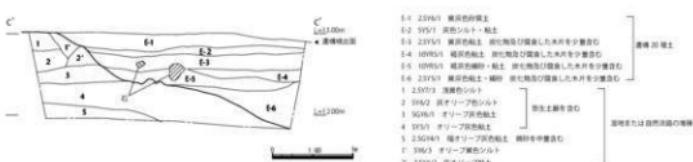
岩崎大泓遺跡 調査区1 調査区北壁土層図（基本層序）



岩崎大泓遺跡 調査区1 Aトレンチ南壁土層図



岩崎太弘遺跡 調査区1 Cトレンチ南壁土層図



岩崎太弘遺跡 調査区2 Eトレンチ南壁土層図

図5 調査区壁面土層（基本層序）及びトレンチ土層図

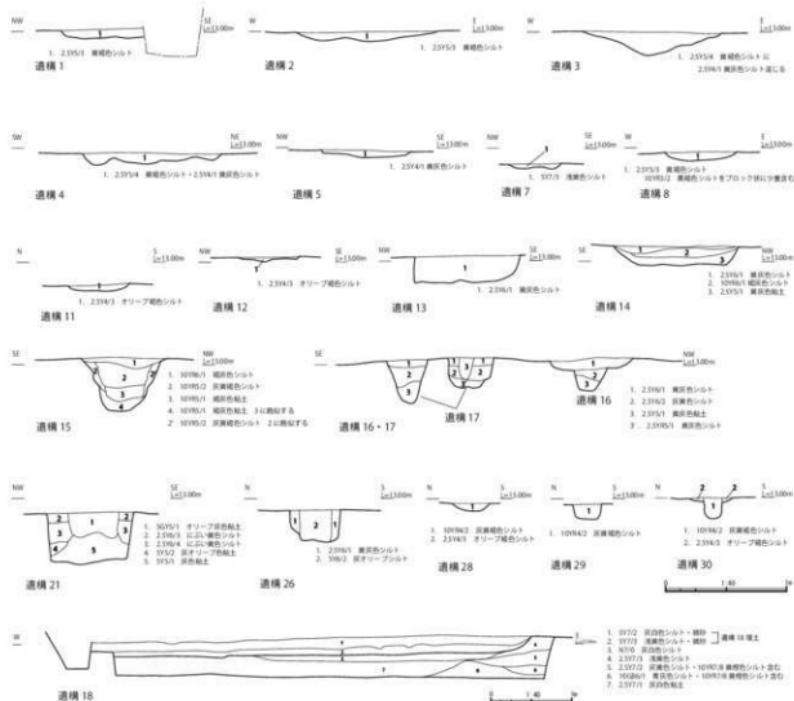


図6 調査区1・2検出遺構 土層図

遺構 19(図4) 遺構18同様、水田遺構と考えられる。遺構18に南面し、検出された範囲は方形区画をなす遺構の一辺とみられることから、遺構18とは同時期に存在した水田の可能性がある。水路とみられる遺構16・17が流れ込み、埋土からは、瓦器底部とみられる小片や土師器、ふいごの羽口、須恵器片などが出土した。瓦器底は細片であるが、復元高台径5cmで高台の断面形は台形を呈することから、13世紀前半の水田とみられる。

遺構20(図4) 現有の溝に並行し、幅3.5m以上、深さ1.1m以上を検出した。Eトレレンチの土層観察によれば、北方向へなだらかに落ち込む傾斜をもつことがわかる。調査区1では当該遺構とみられるものは検出されていないが、現有の溝に平行することから、この溝の前身である可能性がある。埋土からは外面に叩きをもち、煤がついた弥生土器底の細片が出土した。

遺構23(図4) マンガン粒を多量に含む黄色系のシルト土からなる畦畔状の遺構である。長さ10.5mにわたって検出され、幅0.7~0.8m、高さ0.5mを測る。須恵器片が出土した。遺構15・16・19を切っており、これらに後出するものと考えられる。

(3) 小結

落ち込み状遺構は、調査区1及び2の北側と西側に存在しており、この場所は調査区中央付

近を中心として、中世頃まで島状の微高地となっていたことが推定される。またこれらの落ち込み状をなす遺構は水田遺構と判断されることから、当該調査区周辺においては中世頃から水田が営まれていたとみられる。

第4項 岩崎大泓II遺跡

(1) 調査の方法

1) 地区割の方法

岩崎大泓II遺跡は新規に発見された遺跡である。今回の調査地は岩崎大泓遺跡が立地する谷筋から、北東方向へ延びる小規模な谷及び丘陵の南西裾を占める南北約90mにわたる範囲である。この範囲は丘陵斜面に設けられたコンクリート擁壁によって南北に分断されることから、南側を調査区1、北側を調査区2とし、併行して調査を進めた。調査面積は調査区1が307m²、調査区2が671m²である。

2) 基本層序

両調査区で堆積状況及び土層に差異が認められたため、基本土層は調査区毎に設定した。

調査区1

第1・2層 現在の水田耕作土及び床土である。

第3層 中世から近世に堆積したとみられる遺物包含層。中世及び弥生時代の遺物を多量に含む。

第4層 丘陵から続く傾斜に沿って堆積する。中世及び弥生時代の遺物を多量に含む。

調査区2

第1・2層 現在の整地土層、水田耕作土及び床土。

第3層 中世の遺物包含層。中世及び弥生時代後期末頃の遺物を含む。

第4層 丘陵から続く傾斜に沿って堆積する。中世の遺物を含む。

(2) 調査成果

1) 調査区1

遺構検出面は2面で、第3層上面及び第5層上面である。

第3層上面(第1遺構面) 検出遺構

検出した遺構は井戸、土坑、ピット等である。井戸は平面円形の掘形に漆喰を塗りかため円柱状の井筒をつくるもので、ここからは近世陶器等が出土した。当該遺構面上に検出された遺構はいずれも近世に帰属するとみられるもので焰烙、すり鉢等の近世陶器が多く出土したが、ほかには少量且つ小片ながら弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、灰釉陶器等がある。

第5層上面(第2遺構面) 検出遺構

落ち込み1(図5) 西側に落ち込む自然地形に沿ってシルト及び粘土の堆積(第3・4層)があり、ここから弥生時代後期末の遺物等が出土した。第3層は近世の遺物を含むことから、この頃までは斜面から低地に土砂が自然に流れ込む状態であったことがわかる。第4層の除去後、下位の第5層上面では落ち込み状の地形が検出され、斜面裾部分にあたるものと推定された。調査はこの落ち込み状の地形と谷筋の方向に直交するセクションベルト及びトレント1~4(図6)を設けて進めた。

出土遺物は、小片で磨滅の著しいものが多いが、弥生時代後期末頃に帰属するとみられる弥生

土器が大半を占める。出土遺物については以下のとおり層位ごとに述べる。

第1・2層 土師質の焰烙（1）、近世陶磁器、弥生土器が出土した。

第3層 土師質の羽釜（17）及び弥生土器が出土した。

第4～9層 弥生土器片が出土した。時期は弥生時代後期末に帰属するとみられ、壺・甌・高环・鉢・器台・小型土器等がある。壺は広口壺（21～23・25）と二重口縁壺（25）がある。広口壺は口縁部を拡張せずその端部に加飾を施さないもの（21～23）や、口縁部を拡張をするもの（24）がある。口縁部を拡張するものには竹管文を施すもの（24）がみられるが、二重口縁壺（25）には、口縁端部の加飾がみられない。高环は、屈曲する環部を持つもの（12・27・28・31）と椀状の杯部（40～42）を持つものがある。脚柱部は中実のもの（29・30・36～39）と中空のもの（31・33・42）があって、裾部は逆漏斗状に聞くもの（34～36・42）がみられる。また、中実で短い脚柱部をもつもの（15・16）も認められる。

以上のとおり、高环は環部及び脚柱部の形状が多様であるが、環部の形状が椀状をなすものは、脚柱注部が短く、逆漏斗状に聞く裾部を付けるものが多いという傾向が認められる。また裾部に穿たれる透孔は径1.6～1.8cmで比較的大きいものが目立つ。器台（26）は、中実の脚柱部に低い環部を持つもので、高环と作りは同一である。鉢は脚台を作り（46）がみられるが、残存状態からは全体の形状を復元することができない。他に小型のコップ型をなす手づくねの土器（50）があり、底部内面には年輪状の同心円をなす痕跡が窺え、これについては棒状の木材のやや尖った先端に粘土を貼り付ける等といった成形方法も検討する必要があると考えられる。甌は全体を復元できる個体がなく、底部のみの観察であるが、外面にタタキをもつもの（43・47）ともたないもの（44・45・48・49・51）がある。

2) 調査区2

調査区は北東から南西方向へと短く延びる、谷状をなす地形の底部に設定した。谷底部は南西方向に段をなして標高を下げる。現状は水田及び宅地であり、3段の平坦面が認められた。遺構検出は第4層上面及び第5層上面で行い、いずれも室町時代とみられる遺構を検出した。段状をなす地形は、緩やかな傾斜を残しながらも各遺構検出面上で確認されたことから、この谷底部では室町時代以降、整地により斜面の平坦化を試みつつ土地の利用が続けられたものと推定される。次に述べる各遺構等の説明では、調査区内の各段について北東側に位置する上位のものから、それぞれ上段、中段、下段と表現する。

第4層上面（第1遺構面）検出遺構

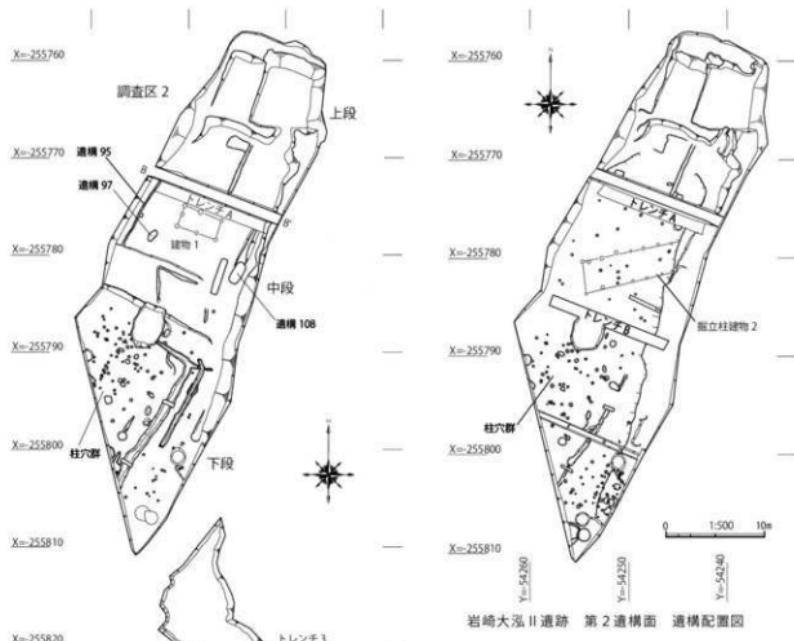
上段には溜池であったといわれる大規模な土坑状の擾乱があり遺構は検出されなかったが、中段では掘立柱建物1を検出した。下段は遺構密度が高く、土坑、ピット等を検出した。上段の最高所から下段上面までの標高差は約3.5mである。

中段検出遺構

建物1（図7） 中段に検出した遺構99～102、104、106、107からは、桁行2間、梁行1間の規模で、柱間が約2.1mを測る掘立柱建物が復元される。建物の方向は長辺が等高線に平行しており、段状の地形を意識して建てられたことが窺える。

遺構95（図7） 幅、深さ共に0.1～0.15mを測る。谷状地形の西側斜面に沿って検出された溝状の遺構で、敷地内の排水を目的とした溝と考えられる。遺物は出土しない。

岩崎大泓遺跡・岩崎大泓II遺跡



岩崎大泓 II 遺跡 第 2 遺構面 遺構配置図



岩崎大泓 II 遺跡 第 1 遺構面 遺構配置図

図 7 岩崎大泓 II 遺跡 第 1 遺構面 遺構配置図

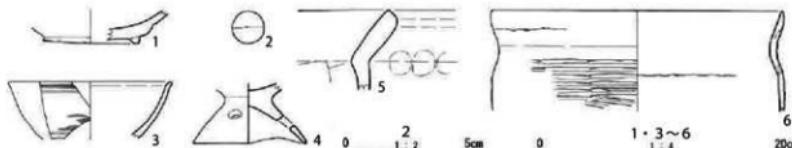


図 12 岩崎大泓遺跡 遺物実測図

岩崎大泓遺跡・岩崎大泓II遺跡

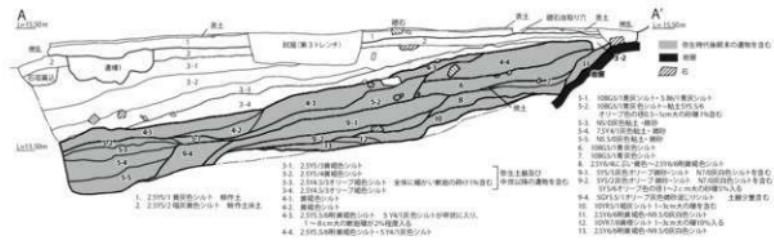
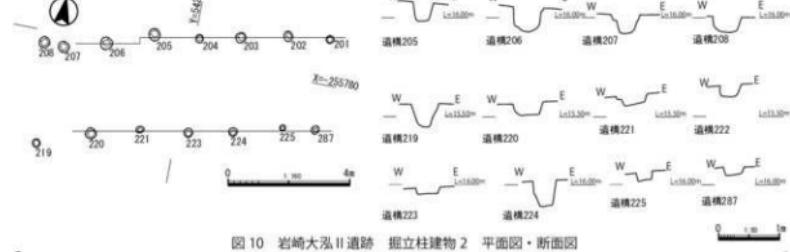


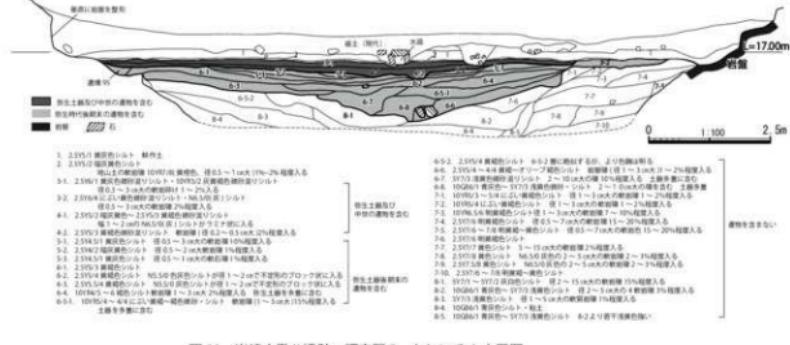
図8 岩崎大泓II遺跡 調査区1 落ち込み1セクションベルト 土層図



図9 若島大塚II遺跡 掘立柱建物I 平面図・柱穴土層図



www.ijerpi.org | 573 | ISSN 2231-3639 | International Journal of Engineering Research and Production



遺構 97 (図 7) 楕円形を呈し、 0.8×0.4 m、深さ 15cm を測る。遺物は出土しない。

遺構 108 (図 7) 建物 I の東南、丘陵裾部で検出した土坑である。遺物は出土しない。

下段検出遺構

柱穴群 (図 7) 掘立柱建物にともなうとみられる柱穴群である。溝 I の西側に集中し、総数 65 基を数える。規模は概ね直徑 0.15 ~ 0.4 m、深さ 0.1 ~ 0.4 m である。溝に平行、或いは直交する方向に並ぶ傾向をみせ、谷筋を意識した配置であると考えられる。複数時期の建物が重複しているものとみられ、同一の場所において建て替えがなされたものと考えられるが、1 棟分としての組合せを明らかにできるものはない。柱穴 38 からは 15 世紀後半 ~ 16 世紀前半の時期とみられる青磁碗の小片が出土しており、当該柱穴群はこの時期に帰属するものと考えられる。

溝 1 (図 7) 調査区中央東よりの位置に、谷筋が延びる方向に平行して掘削された溝である。

幅 0.7 ~ 0.8 m、深さは約 0.2 m を測り、北側では幅約 0.25 m となる。下段の遺構はこの溝により東西に大きく分断され、この溝から西側で、より遺構密度が高くなる。このような遺構分布から、この溝は敷地を区画するために設けられたものと考えられる。出土遺物は弥生時代後期末の器台 (73) や土師質の焰壺 (74) 等がある。

第 5 層上面 (第 2 遺構面) 検出遺構

第 5 層上面では明瞭な段差が確認されず、地形は谷筋に沿ったなだらかな傾斜となる。遺構密度は低く、検出された遺構は、東西方向にならぶ 2 列の柱穴と柱穴とみられるピット群である。

掘立柱建物 2 (図 8) 規模は 1 間 × 6 間以上で、柱間は約 1.4 ~ 1.6 m を測る。直徑は概ね約 0.2 ~ 0.3m で、深さは約 0.1 ~ 0.3m である。明瞭な柱痕を持つことから掘立柱建物としたが、2 列の槽である可能性もある。谷筋の方向とは関連性が窺えないが、これについては傾斜地であるという立地条件と、細く長い建物の形状及びその規模から、建物の一辺に負荷が集中することを避け倒壊を防ぐ等、安定性を求めたことによる可能性がある。位置的にはやや東側斜面に接して建てられる印象があり、斜面への登坂施設的性格も考慮する必要があろう。

掘立柱建物 3 (図 6) 規模は 2 間 × 2 間で、総柱となる。柱間は約 1.7 ~ 2.0 m で、柱痕は検出されていない。各柱穴は径約 0.25 ~ 0.3m で、深さは約 0.1 ~ 0.2m である。出土遺物はない。

柱穴群 (図 8) 調査区南端で、柱穴群を検出した。最も標高の低い位置において遺構密度が高くなる傾向は第 4 層上面と同様である。概ね径約 0.15 ~ 0.2m 前後、深さ 0.1 ~ 0.2m である。一群の柱穴は、明確な組合せを特定できないものの、掘立柱建物に伴うものと考えられる。

トレンチ A・B (図 7・8・11) 東側の丘陵裾部では流路の肩口を検出しており、谷中心部方向への堆積を確認していることから、当該時期の谷部は丘陵からの雨水等が流れ込む谷地形となっていた可能性が高い。遺構検出面より下層の堆積を確認するため、トレンチ (A ~ A') を設定した。谷筋の東西の岩盤を垂直に掘削して整形を行っている状況が窺えるが、これは敷地面積の確保を狙ったものと考えられる。

また、トレンチ Bにおいても、トレンチ A と同様の堆積状況が確認された。堆積状況は、上層が 2.5 Y 4.5/1 ~ 2.5 Y 5.5/4 (黄褐色) シルトで軟岩礫が混入し、下層は 10 Y R 4/5 (褐色) ~ 10 Y R 5/4 (にぶい黄褐色) シルト層で同様に軟岩礫が混入する。これらの層からは弥生土器片が多量に出土した。さらに下層は 10 G B 6/1 (青灰色) シルトとなるが、出土した弥生土器は少量である。

(3) 小結

調査区2においては掘立柱建物のほか、低地部分においても多数のピットが存在し、当時ににおいて生活空間の一部となっていたことが窺える。また標高の高低により遺構の粗密がみられる。

第5項まとめ

岩崎大泓遺跡と岩崎大泓II遺跡は相互に関連性が高い遺跡であることから、弥生時代後期末及び鎌倉時代～室町時代の各時代毎に、両遺跡について包括的に述べる。

弥生時代後期末

岩崎大泓II遺跡の調査区1に検出した落ち込み1からは、多量の弥生土器片が出土した。これらは概ね弥生時代後期末の時期に限られるもので、ほぼ全ての遺物が著しく摩滅しており調整の不明なものがほとんどであるものの、高环は器種別にみて最も出土量が多く、なかには环部と脚部で色調の違う粘土を用いるもの(10)や、透孔の径が大きいもの(29・33)がある等、有田川流域以南にみられる当該時期の土器に共通する特徴をもつ。ただ高环は脚部の5箇所に透孔を有するもの(32)が有る等、やや独自的な要素も含む。

これらは土層観察から、遺跡の東側にある標高30m程度の丘陵上から流れ込んだものである可能性が高く、当該丘陵頂部には集落跡の存在が推定されるが、現況では平坦地を有するものの、遺物の散布等はこれまで確認されていない。

鎌倉時代～室町時代

岩崎大泓遺跡では水田遺構のほか、それに関連した水路とみられる溝（遺構15・16・17）等が検出された。岩崎大泓遺跡を含む一帯は富田川沿いに南へ向かって標高を下げるが、今回検出された溝は丘陵裾から標高の低い南へと導水することが可能で、岩崎大泓II遺跡の所在する狭い谷筋からの流水に対し排水機能を有したものとみられ、低地に営んだ水田への給水量を調整していた可能性がある。

岩崎大泓遺跡で検出された水田遺構とみられる方形の落ち込みは、全体のごく一部分であると考えられるが、これらは谷筋の中央寄りに位置し、且つ北西から南東へと連続していることは、導水を考慮し、谷筋における自然の水流をトレースするように配してされたものと考えられる。遺構16及び17はこれらの水田に水関わるものであろうと考えられる。当該谷筋における現在の水田も北西方向から段をなして南東側に低くなるよう区画されており、やはり導水を考慮されたものといえ、生産域及び生活域における導排水を重視したことが窺える。なお、この谷筋に設けられた現有水路は、今回検出されたこれらの溝と位置をほぼ同じくする。

岩崎大泓遺跡が主に生産域としての性格を帯びたものであったとみられるのに対し、岩崎大泓II遺跡は居住域としての性格が窺え、この2つの遺跡は北、西、南の三方を丘陵に囲まれた盆地を以て生産域を含む生活空間となした一単位の集落跡としての見方も可能である。遺構95は敷地周縁にあたる斜面裾に設けられた、細く溝状をなす遺構であるが、谷筋の中では比較的標高の高い中段に位置しており、掘立柱建物1が建つ敷地内への浸水を防ぎ斜面下方へと排水するためのものと考えられる。このように、より高所にあって周到に敷地内を整備した掘立柱建物1は、集落内において優位を占めるといえ、居住域における階層の存在が窺える。

ところで、岩崎大泓II遺跡調査区1で出土した多量の弥生土器が丘陵頂部に当該時期の集落の存在を想定させることは前述したとおりであるが、丘陵頂部と調査区1は比高差が大きく、且つ調査区1のほぼ西半分にわたる広い範囲に土器の出土がみられることは、丘陵頂部から意図的に谷部へ投げ込んだ可能性も指摘でき、これらの遺物が斜面を伝って自然に落ち込んだとする解釈にやや不自然さを残すといえる。

また、現在岩崎大泓II遺跡東側の丘陵頂部付近にみられる平坦地が人為的な造成によるものであるとすれば、これらの土器はその造成時に生じた排土中に含まれるものであった可能性も指摘することができ、本来ここに存在した集落が平坦地の造成により地山ごと削平され、それに伴って多量の土器を含む排土が西側へ押し出され、時間とともに（例えば雨水とともに）少しずつ斜面下方へと転落を続けたとすれば、出土したほとんどの弥生土器がこれほど摩滅の進行した状態であることも頗ける。少なくとも、調査区2にあたる谷部分は大きく改変されており、調査区1で検出された落ち込み1の埋土は、その部分からの排土も含まれるものと推定される。当該遺構の第3・4層中に含まれる軟岩礫は、そのとき掘削された地山の一部である可能性もある。

仮に丘陵頂部等において造成がなされたものとすれば、その時期について室町時代以降との見方も可能であるが、今回の調査において明確にし得なかった。ただし、調査区2を平坦地とした時期を室町時代頃に想定することは可能であろう。岩崎大泓遺跡の両調査区では、土地を造成し敷地を得る行為のあったことを窺わせる。

また、掘立柱建物2は傾斜に対応した建て方がなされておらず、且つ壁面寄りの位置にあって、建築物としてはやや不自然な建て方をしているといえるが、これについては、当該掘立柱建物が居住を目的としたものではなく、丘陵頂部へ至ることを容易にするための構築物であるという見方が可能であり、検討の必要があると考えられる。更に、岩崎大泓II遺跡の所在する谷地形や、その調査区1で検出された落ち込み状の遺構に対しても、例えば人為的な掘削である等といった、異なる観点からの解釈も可能となろう。近隣地点における更なる調査が望まれる。

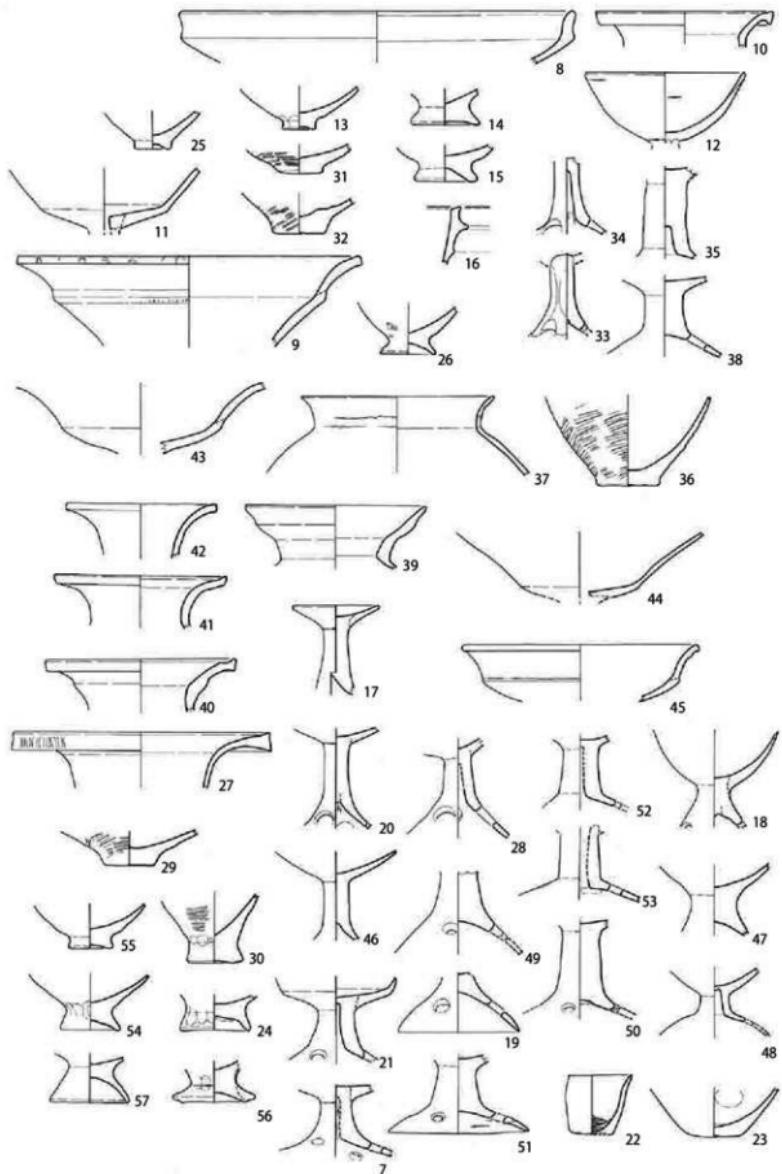


図 13 岩崎大泓II遺跡 遺物実測図

岩崎大泓遺跡・岩崎大泓II遺跡

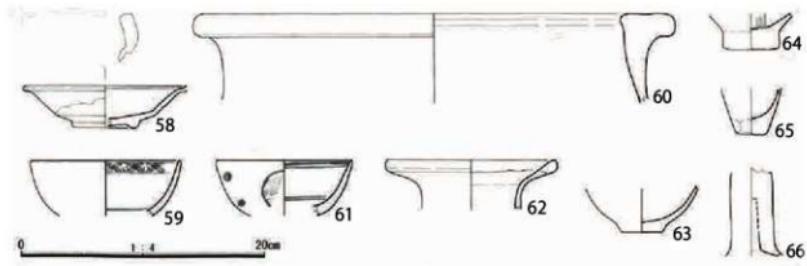


図14 岩崎大泓II遺跡 遺物実測図

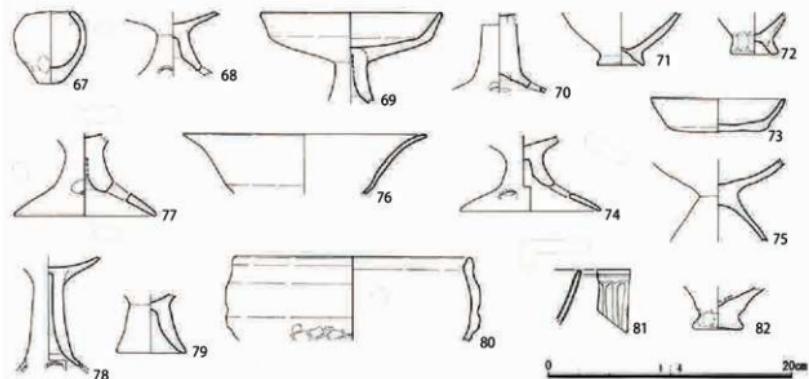


図15 岩崎大泓II遺跡 遺物実測図

岩崎大泓遺跡 土器観察表

報告書番号	國・國版番号	種類 器種	調査地区	造構 層位	口径 cm	高さ cm	底径 cm	残存率	色調
1	国12 国版68	山茶碗	1区 C10:5	4層		残2.5	7.9	高台25%	内・断) 灰白2.5Y8/1 外) 灰白NB/
2	国12 国版68	鉢 鉢底彌	1区 C10:9	4層複查		直径1.3		100%	全体) 灰NS/
3	国12 国版68	磁器(染付) 碗	1区 C10:5	bhレ 4~2層	(13.0)	残4.7		15%	内・外) 明暦灰7.5Y8/1 断) 灰白NB/
4	国12 国版68	弥生土器 器台	1区 C10:6	6~2層		残5.0	(9.1) 10.3	脚部50%	内・外) 棕7.5YR7/6 灰白N7/ ~灰NB/ 断) 灰SY5/1.
5	国12 国版68	土器 器台	1区 C9:25	機械削製 側溝		残6.7		5%以下	内) 棕灰2.5YS/2 外) 赤褐色SYR6/6 黑2.5Y2/1
6	国12 国版68	弥生土器 器台	1区 C10:2	1層 下層	(24.0)	残8.2		5%以下	内・外) 棕7.5YR7/6~棕2.5YR6/6 断) 棕SYR6/6

岩崎大泓II遺跡 土器観察表

1	国13 国版68	焰焰	1区 C9:6	1'層	(32.0)	残4.2		口縁20%以下	内・断) 黄褐7.5YR7/8 外) 棕SYR6/6
2	国13 国版68	弥生土器 広口壺	1区	3層	(14.4)	残2.9		口縁一部 25%	全体) 淡黄褐10YR8/4
3	国13 国版68	弥生土器 鉢	1区 C9	トレンチ1		残3.1	(2.7)	底部100%	内) にぶい黄褐10YR7/4~6/4. 外) 棕SYR7/6~6/8 断) 灰NB/
4	国13 国版68	弥生土器 鉢	1区 C9:8	3層		残3.5	(2.6)	高台100%	内・外) 棕SYR6/8 断) 棕SYR7/6~6/6
5	国13 国版69	弥生土器 壺	2~1区 C9:3	トレンチ4 3層		残2.4	3.7	底部100%	内・断) 棕7.5YR7/6 外) 淡黄褐7.5YR8/4
6	国13 国版69	弥生土器 壺?	2~1区 C9:9	トレンチ4 3層		残3.4	4.2	底部100%	内) 淡黄褐10YR8/4 黄灰2.5YS/1 外・断) 淡黄褐7.5YR8/4
7	国13 国版68	弥生土器 壺(底部)	2~1区	3層		残3.0	5.3	5%以下	全体) 棕7.5YR7/6
8	国13 国版68	弥生土器 壺(底部)	1区	3層		残3.0	4.8	5%以下	内・外) 棕SYR7/6 断) 棕SYR6/6
9	国13 国版68	弥生土器 壺	1区 C9:7	3層	(12.9)	残5.8		30%	内・外) 棕7.5YR7/6 断) 黄灰2.5Y6/1
10	国13 国版68	弥生土器 壺	1区 C9:8	3層		残5.0			津留田推測80% 中野田推測80% 内) にぶい棕7.5YR7/4~6/4 外) 棕7.5YR6/6
11	国13 国版68	弥生土器 壺(口縁)	1区 C9:9	トレンチ2	(28.0)	残7.4		口縁20%	内・断) 灰白10YR8/2~淡黄褐7.5YR8/3 灰白10YR7/7~10YR6/1
12	国13 国版69	弥生土器 高H(外部)	1区 C9	落ち込み1 3~4層		残5.9		口縁縦部0% 全体20%	内・外) 棕SYR6/6 断) 灰NB/
13	国13 国版70	弥生土器 高H(脚部)	1区 C9:9	トレンチ4 3層		残6.3		脚柱100%	全体) 淡黄褐10YR8/4
14	国13 国版69	土器器 高H(脚部)	1区 C9:9	トレンチ4		残6.4		脚柱100%	内・外) 棕7.5YR7/6 断) 灰SY6/1
15	国13 国版69	弥生土器 高H	1区 C9:9	セグメント 9層		残7.5		10%以下	全体) 淡黄褐10YR8/4~にぶい黄褐10YR7/4
16	国13 国版69	弥生土器 高H	1区 C9:9	セグメント 9層		残6.8		10%以下	内・断) 淡黄褐10YR8/4~にぶい黄褐10YR7/4 内) にぶい黄褐10YR7/4
17	国13 国版68	土器器 土鍋?	1区 C9:8	3層		残4.7		5%以下	内) 淡黄褐2.5YS/2 外) にぶい棕7.5YR5/4 淡黄褐2.5YS/2 にぶい棕7.5YR5/4
18	国13 国版68	弥生土器 鉢	1区 C9:9	トレンチ2		残4.2	4.4	底部100%	内) 淡黄褐7.5YR8/4 外) 淡黄褐7.5YR8/4 淡黄褐7.5YR8/4
19	国13 国版69	弥生土器 夏	1区 C9:9	セグメント 9層	(15.8)	残6.5		口縁20%以下	全体) 淡黄褐7.5YR8/3 灰白2.5Y8/1
20	国13 国版69	弥生土器 夏	1区 C9:8	トレンチ1 5層		残7.35	(5.2)	底部100%	全体) 淡黄褐7.5YR8/4~8/6
21	国13 国版69	弥生土器 広口壺	1区	落ち込み1 4層	(12.2)	残4.4		口縁25%	内) にぶい黄褐10YR7/4 外) 淡黄褐10YR8/4 不明瞭
22	国13 国版69	弥生土器 夏?	1区	落ち込み1 3~4層	(14.2)	残4.4		口縁30%	内) 棕SYR6/8 外) 棕SYR6/8 褐灰7.5YR5/1
23	国13 国版69	弥生土器 広口壺	1区	落ち込み1 4層	(15.4)	残4.2		口縁25% 全体20%	全体) 灰白2.5Y8/2
24	国13 国版68	弥生土器 広口壺	1区 C9:9	セグメント 9層	(20.8)	残4.6		口縁40%	内・外) 淡黄褐7.5YR8/4~8/6 灰白7.5YR6/1
25	国13 国版69	弥生土器 夏?	1区 C9:9	落ち込み1 3~4層	(14.6)	残5.2		口縁15%	内・外) 棕7.5YR7/6 断) 灰白N7/
26	国13 国版68	弥生土器 灰(漆付?)	1区 C9:9	4層	(8.8)	残7.3		40%	内・外) 淡黄褐10YR8/4 断) 灰白7.5Y7/1
27	国13 国版69	弥生土器 高H(外部)	1区 C9	落ち込み1 3~4層		残5.4		口縁縦部0% 全体30%	内・外) 棕SYR6/6 断) 灰白2.5Y7/1
28	国13 国版69	弥生土器 高H	1区	落ち込み1	(18.0)	残4.7		口縁25%	全体) 黄褐10YR8/6
29	国13 国版68	弥生土器 高H	1区 C9:8	トレンチ4	脚柱 2.0	残6.4		30%	全体) 灰NS/0 棕7.5YR7/6 断) 灰N4/0
30	国13 国版69	弥生土器 高H	1区 C9	落ち込み1 3~4層		残7.6		脚柱100% 全体30%	全体) 棕7.5YR7/6
31	国13 国版68	弥生土器 高H	1区 C9:8	トレンチ1 4層		残6.85		脚柱100%	内・外) 淡黄褐7.5YR8/6 断) 灰白2.5Y7/1
32	国13 国版68	土器器 高H	1区 C9	1層		残6.0		40%	全体) 棕7.5YR7/6
33	国13 国版69	弥生土器 高H	1区 C9:9	セグメント 9層		残6.5		脚部40%	内・外) 灰N6/ ~5/ 断) 灰N4/
34	国13 国版69	弥生土器 高H	1区	落ち込み1 4層		残6.7		脚柱推測0% 全体30%	内・外) 棕7.5YR7/6 内) にぶい棕7.5YR7/4~6/4

岩崎大泓遺跡・岩崎大泓II遺跡

報告書 番号	図・ 図版番号	種類 器種	調査区 地区	遺構 部位	口径 cm	高さ cm	底径 cm	残存率	色調
35	図13 図版68	弥生土器 器台	1区 C9:9	4層		残4.9 (9.9)	脚部30%	内・外) 棕7.5YR7/6 断) にぶい棕7.5YR7/4	
36	図13 図版69	弥生土器 高坏	1区	落ち込み1 4層		残6.5 (11.5)	脚部(60%下 部) 30%底 部80%	全体) 棕7.5YR7/6~6/6	
37	図13 図版69	弥生土器 高坏	1区	落ち込み1 4層		残6.1 3.1	30%	内・外) 棕7.5YR7/6 黄灰 N5/ 断) 反N5/1	
38	図13 図版70	弥生土器 高坏	1区 C9	落ち込み1 4層		残6.0 4層	30%	内・外) 棕7.5YR7/6 黄灰 2.5YR6/1 断) 黄2.5YR6/1	
39	図13 図版69	弥生土器 高坏(脚部)	1区	落ち込み1 4層		残6.2 4層	30%以下	内・外) 棕7.5YR7/6~6/6 断) 棕7.5YR7/6	
40	図13 図版68	弥生土器 高坏	1区 C9:8	トレンチ4		残7.9 3.4	10%以下	内) にぶい棕7.5YR7/3 棕7.5YR7/6~6/6 外) にぶい棕7.5YR7/3 棕7.5YR7/6	
41	図13 図版69	弥生土器 器台	1区	落ち込み1 4層		残6.1 4層	30%	内・外) 棕7.5YR7/6~6/6 断) 棕7.5YR7/6	
42	図13 図版69	弥生土器 高坏	1区	落ち込み1 4層		残5.7 4層	30%以下	全体) 棕7.5YR7/6~6/6	
43	図13 図版68	弥生土器 茎	1区 C9	セグション 4層		残3.0 4層	4.0 底部90%	内) 浅黄褐7.5YR8/4 外) 浅黄褐7.5YR8/6 断) 浅黄褐7.5YR8/3	
44	図13 図版69	弥生土器 茎	1区	落ち込み1 3-4層		残3.8 3-4層	3.7 底部100%	内) 棕7.5YR7/6~6/6 外) 黄褐7.5YR7/8 断) 棕7.5YR7/6	
45	図13 図版69	弥生土器 茎	1区	落ち込み1 4層		残4.6 4層	4.8 底部100%	内) 浅黄褐7.5YR8/4 外) 棕7.5YR7/6 断) 不明	
46	図13 図版70	弥生土器 茎	1区 C9	落ち込み1 3-4層		残4.0 3-4層	6.2 底部100%	内・外) 棕7.5YR7/6~7/8 断) 浅黄褐10YR8/3	
47	図13 図版69	弥生土器 茎	1区 C9:9	セグション 4層		残5.7 4層	4.4 底部100%	内・外) 浅黄褐7.5YR8/4 7.5YR8/6 断) 浅黄褐7.5YR8/4	
48	図13 図版68	弥生土器 茎	1区 C9	4層		残2.9 3-4層	5.7 底部100%	内・外) 棕7.5YR7/6 外) 棕7.5YR7/6 浅黄褐10YR8/4	
49	図13 図版70	弥生土器 茎(底部)	1区 C9	落ち込み1 3-4層		残3.4 (6.5)	6.5(6.5) 以下	全体) 浅黄褐10YR8/4~棕7.5YR7/6	
50	図13 図版68	ミニチュア土器	1区	4層	5.1	4.9 3.4	3.4 3.4 底部80% 底径60%	内) 棕7.5YR8/8 外) 棕7.5YR7/6~6/6 断) 棕7.5YR7/6	
51	図13 図版68	弥生土器 茎	1区 C9:9	4層		残4.1 4層	4.0 10%	内) 棕7.5YR7/6~6/6 外) 浅黄褐7.5YR8/6 断) 明黄褐10YR8/4	
52	図14 図版70	唐津 皿	1区 C9:11-j11	4	(13.0)	3.5 (5.2)	25%	輪) オリーブ黄7YR8/3 露地) にぶい棕7.5YR7/3~3-4層灰2.5Y7/2	
53	図14 図版70	磁器(染付) 碗	1区 C9:11	5	(12.0)	残4.6 5	20%	内) 明りいづれ2.5Y7/1 外) 明りいづれ灰GY7/1	
54	図14 図版70	陶器 壺(口縁)	1区 C9:11	5	(39.6)	残7.3 5	15%	内・外) 棕2.5YR6/6 外) にぶい赤褐色2.5YR5/4	
55	図14 図版70	磁器 碗	1区 C9:11	5	(11.0)	残4.5 5	口縁25%	内・外) 灰白5YV8/1 断) 灰白10Y8/1	
56	図14 図版70	弥生土器 広口壺	1区 C9:10	6 下層	(13.4)	残4.0 6	口縁25%	内・外) 棕7.5YR7/6 断) 灰白2.5Y8/1	
57	図14 図版70	弥生土器 鉢?	1区 C9:10	6 6層		残3.8 (3.2)	底部65% 休部40%	内) 棕7.5YR7/6 外) 黄褐7.5YR8/8 灰白2.5Y7/1	
58	図14 図版70	弥生土器 壺?	1区 C9:11	11		残3.0 (4.6)	底部100%	内) にぶい黄褐10YR7/4 外) 棕7.5YR7/6 断) 灰白10YR7/2	
59	図14 図版70	ミニチュア土器 盆	1区 C9:11	11		残3.8 11	底部100% 全体80%	内) 棕7.5YR7/6 外) 棕7.5YR7/6 断) 灰白10YR7/1	
60	図14 図版70	弥生土器 高坏(脚柱)	1区 C9:11	11		残7.3 11	脚柱100%	全体) 浅黄2.5YB3/3~8/4	
61	図15 図版70	ミニチュア土器	2区 C8n:23	谷 上層	3.9	5.9 2.0	90%	内・外) 棕7.5YR7/6~6/6 断) 棕7.5YR7/6	
62	図15 図版70	弥生土器 器台	2区 C8m:19	3層		残5.3 3層	30%	内・外) 浅黄褐7.5YR8/6 断) 反N5/	
63	図15 図版70	土師器 高坏	2区 C8n:1-11-k11	4層	(14.7)	残7.5 4層	20%	内) 浅黄2.5YB3/3 外) 浅黄褐10YR8/3 断) 灰白2.5YB3/3	
64	図15 図版70	弥生土器 高坏(脚柱)	2区 C8n:23	4層		残6.5 4層	30%以下	内・外) 棕7.5YR7/6~6/6 断) 棕7.5YR7/6	
65	図15 図版70	弥生土器 鉢	2区 C8m:25	4層		残3.4 (3.8)	底部80%	内) 棕7.5YR7/6 外・断) 黄褐7.5YR7/8	
66	図15 図版70	弥生土器 鉢	2区 C8m:18-19	4層		残3.3 4層	3.6 5%以下	内・外) にぶい黄褐10YR7/4 断) にぶい棕7.5YR7/4	
67	図15 図版70	土師器 坏	2区 C8n:22	4層	10.9	2.8 8.2	65%	内) 浅黄褐7.5YR7/6 外・断) 棕7.5YR7/6	
68	図15 図版70	弥生土器 高坏	2区 C8n:22	トレンチ2		残6.1 (11.3)	脚部50%	全体) にぶい棕7.5YR6/4	
69	図15 図版70	弥生土器 器台	2区 C8n:22	トレンチ2		残6.9 1	30%以下	全体) にぶい棕7.5YR7/3~5/4 外・断) 一部) 反N5/	
70	図15 図版70	弥生土器 高坏(脚部)	2区 C8n:22	トレンチ2	20.0	残4.9 20.0	口縁15%	全体) 棕7.5YR7/6	
71	図15 図版70	弥生土器 高坏	2区	セグション 8-1層		残6.7 (11.5)	30%	全体) 棕7.5YR7/6~浅黄褐7.5YR8/6	
72	図15 図版70	弥生土器 高坏(脚部)	2区 C8n:22	トレンチ3		残9.4 1	脚柱100%	内・断) 棕7.5YR6/6 外) 棕7.5YR7/8~6/8	
73	図15 図版70	弥生土器 器台	2区 C8n:25	1 2層		残4.8 5.5	底部90%	内) 棕7.5YR7/6 外) 棕7.5YR7/6~6/6 断) 棕7.5YR7/6~6/6	
74	図15 図版70	埴烧	2区 C8e:25	1	(19.0)	残6.9 1	口縁15%	内) 棕7.5YR7/6~断) にぶい棕7.5YR7/3	
75	図15 図版70	青磁	2区 C8e:24	38		残4.5 38	5%以下	輪) オリーブ灰4.5Y5/2 露地) にぶい棕7.5YR7/4	
76	図15 図版70	弥生土器 茎(底部)	2区 C8e:20	202		残3.5 202	底部100%	内) 浅黄褐7.5YR8/4 外) 黄褐7.5YR7/8 断) 浅黄褐7.5YR8/4 黄灰2.5Y6/1	

註

*1 引用・参考文献 1

*2 本報告では、紀南を現在の西牟婁郡及び東牟婁郡、紀中を現在の有田郡及び田辺市龍神村を含む日高郡の範囲としている。

*3 引用・参考文献 2

*4 引用・参考文献 2

*5 環境省による。田辺市齋田崎と西牟婁郡白浜町番所ノ鼻を結ぶ線及び陸岸により囲まれた海域を指す。本報告書にいう「田辺湾」はこの海域をいう。

*6 引用・参考文献 4

*7 石材の加工方法、技法については文献 19 による。

*8 例えば、安宅氏の水軍力を頼みとする等が挙げられる。

*9 訳 2

*10 引用・参考文献 9

*11 実際の身分を反映するかという点については、明確となっていない。

*12 引用・参考文献 11

*13 海岸線の例であるが、福岡県大和町には各時期の築堤上に家屋が建てられる同様の景観がみられる。

*14 引用・参考文献 20,21

*15 引用・参考文献 22

*16 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」

*17 引用・参考文献 17

*18 広久手 C3 号窯出土例に類似し、O-53 期、11 世紀以降の時期とみられる。引用・参考文献 16,18

*19 台石の上に供膳具を据えて行うといった祭祀は郡馬県前橋市山王庵寺跡例が挙げられる。

*20 計測値に欠損部分を補正した数値

*21 引用・参考文献 12

*22 洛北での出土例に同様の軸が掛けられる硬質のものが知られているが、このうち平高台のものは石作、本山庵跡に例がある。引用・参考文献 13

*23 引用・参考文献 14

*24 引用・参考文献 15

引用・参考文献

1. 大垣俊一 2002「田辺湾周辺の地質、地形と海洋生物」Argonauta7 関西海洋生物談話会

2. 和歌山県史 考古資料

3. 田辺市史 第 1 卷

4. 田辺市史 第 4 卷

5. 平尾政幸 2001「平安京の石製跨具とその生産」『研究紀要 第 7 号』財團法人京都市埋蔵文化財研究所

6. 上富田文化財教室シリーズ

7. 上富田町史編さん委員会編『上富田町史 史料編下』上富田町 1992

8. 『跨帶をめぐる諸問題』

9. 田中 2002 「腰帶具の変遷と諸問題」『跨帶をめぐる諸問題』

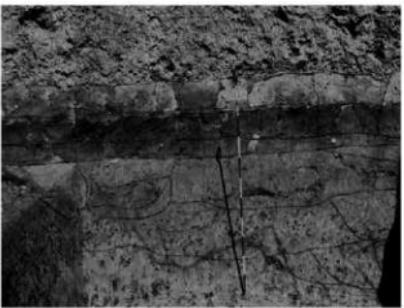
10. 中川 2002「中国出土の腰帶具」『鉢帯をめぐる諸問題』、田中 1990「律令時代の身分表象（1）」
11. 「延成遺跡」財団法人和歌山県文化財センター 1990
- 12 「平城宮発掘調査報告 IV 官衙地域の調査」奈良国立文化財研究所 1966
- 13 高橋照彦 2003「平安京近郊の縄輪陶器生産」『古代の土器研究 律令的土器様式の西・東：古代の土器研究会 第7回シンポジウム 平安時代の縄輪陶器：生産地の様相を中心』
- 14 高橋 潔 1999「27 梅ヶ畠祭祀遺跡」『平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 15 「田殿尾中遺跡発掘調査報告書」有田川町教育委員会 2012
- 16 「愛知県古窯跡群分布調査報告」愛知県教育委員会 1983
- 17 近江俊秀 1995「II 各地の土器様相 近畿 紀伊」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995
- 18 尾野善裕「第III章 古代の灰釉陶器生産と来姓古窯跡群」来姓古窯跡群 豊田市埋蔵文化財調査報告書 第31集 豊田市教育委員会 2008
- 19 平尾政幸 2001「平安京の石製跨具とその生産」『研究紀要 第7号』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
- 20 「鳴神地区遺跡発掘調査報告書 一般国道24号バイパス関連遺跡発掘調査』和歌山県教育委員会 1984
- 21 武内雅人「古代末期紀伊国の大土器様相」考古学研究第33巻第1号
- 22 「岡田・西国分II遺跡発掘調査概報」岩出町教育委員会 1981
- 23 「野田・藤並地区遺跡発掘調査報告書」和歌山県教育委員会 1985
- 24 「北野庵寺 発掘調査報告書」財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983
- 25 平尾政幸 2002「安京の石鉢生産」『鉢帯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所
- 26 「片山遺跡C・D地点発掘調査概報」吉備町教育委員会 1981
- 27 「天満1号墳(泣沢女の古墳)」吉備町教育委員会 1994
- 28 「東郷遺跡 埋蔵文化財調査報告第3集」御坊市遺跡調査会 1987
- 29 森田勉・横田賢次郎 1978「太宰府出土の輸入中國陶磁器について」九州歴史資料館
- 30 伊藤淳史「唐古遺跡出土の繩文ある弥生土器」史林第97巻第1号史学研究会 2014
- 31 「京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度」京都大学考古学研究会 1977
- 32 「平城宮発掘調査報告 II」奈良国立文化財研究所 1962
- 33 「平城宮発掘調査報告 VI」奈良国立文化財研究所 1976
- 34 「平城宮発掘調査報告 XVI 兵部省地区的調査」奈良国立文化財研究所 2005
- 35 「田能遺跡発掘調査報告」尼崎市教育委員会 1972
- 36 「田能遺跡発掘調査報告書」尼崎市教育委員会 1983
- 37 「摂津加茂 関西大学文学部考古学研究紀要」関西大学 1968
- 38 森本 晋 1983「喜志遺跡 80-3区の石器」『喜志遺跡・東阪田遺跡発掘調査概要・VI』
- 39 「伊丹市史 第4巻」伊丹市 伊丹市史編纂専門委員会 1968
- 40 「朝日遺跡 土器編・総論編」愛知県埋蔵文化財センター 1991
- 41 「紀州古城館情報」2011年4月号



1.
第1次調査区及び
第2・3次調査地
(西から)



2.
第1次調査区完掘状況
(北から)



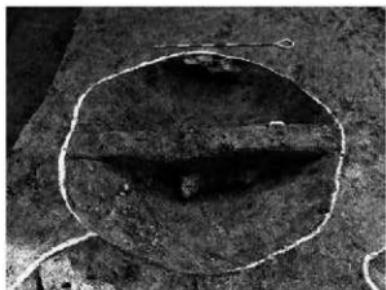
3.
調査区北東壁断面土層
(南南西から)



1. 1002 土坑 掘削状況（西から）



2. 1003 土坑 掘削状況（南南東から）



3. 1004 土坑 掘削状況（西から）



4. 1006 土坑 掘削状況（西から）

5. 遺構掘削状況（西北西から）





1. 調査区 2-2、2-3 全景
(上空から・東が上)



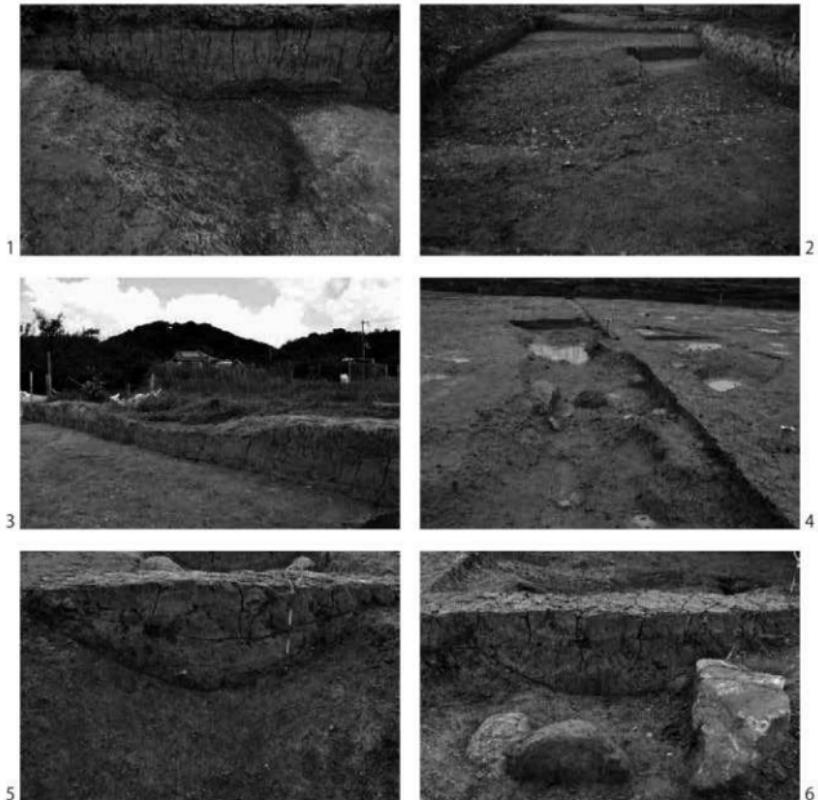
2.
調査区 2-1 遺構 2001(東から)



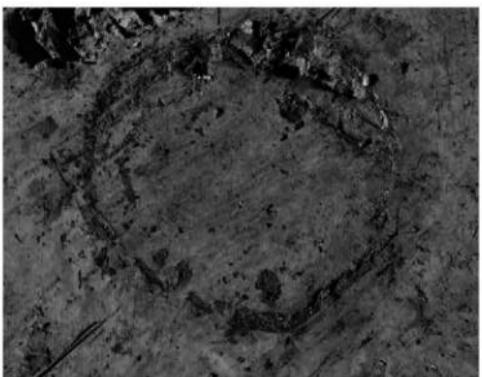
3. 調査区 2-1 調査区西端 第4層検出状況
(東から)



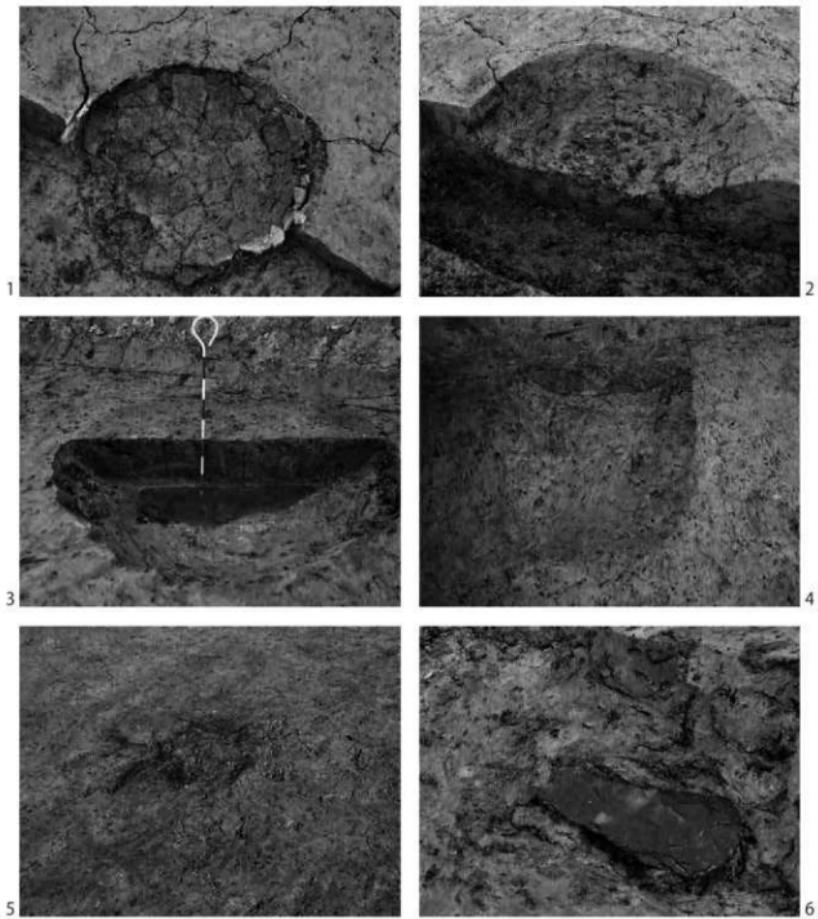
4. 調査区 2-1 遺物 (1) 出土状況
(東から)



1. 調査区 2-1 遺構 2001 土層
(北から)
2. 調査区 2-1 遺構 2001 完掘状況
(北から)
3. 調査区 2-1 調査区東壁土層
(北西から)
4. 調査区 2-1 遺構 2002
掘削状況及び土層 (北西から)
5. 調査区 2-1 遺構 2002 a-a' 土層
(東から)
6. 調査区 2-1 遺構 2002 b-b' 土層
(西から)



7. 調査区 2-2 遺構 2254 検出状況 (南西から)



1. 調査区 2-2 遺構 2254 完掘状況 (南西から)
土器内埋土除去後の状況 (南西から)
2. 調査区 2-2 遺構 2254 完掘状況 (南西から)
土器内埋土除去後の状況 (南西から)
3. 調査区 2-2 遺構 2258 土層 (東から)
土層 (東から)
4. 調査区 2-2 遺構 2289 完掘状況 (北から)
土層 (北から)
5. 調査区 2-2 遺構 2191 検出状況 (東から)
土層 (東から)
6. 調査区 2-2 遺物 (28) 出土状況 (東から)
土層 (東から)
7. 調査区 2-2 調査区中央部分遺構半裁状況
(南から)





1. 調査区 2-2・2-3 全景（南から）



2. 調査区 2-3 調査区西壁土層（北東から）



3. 調査区 2-3 遺構完掘状況（東から）

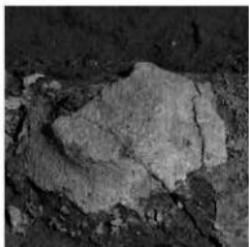


4. 調査区 2-2・2-3 航空写真（西から）

1. 調査区 3-1 全景
(南から)



2. 調査区 3-1
調査区北壁土層
(南から)

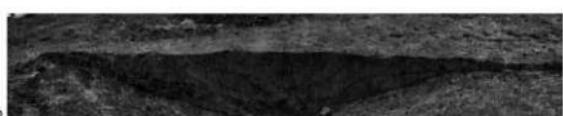


4

3. 調査区 3-1 遺構 3001
完掘状況 (南から)



5. 調査区 3-1 遺構 3002
遺物出土状況 (北から)



6. 調査区 3-1 遺構 3002
土層 a-a' (南から)

1. 調査区 3-1
遺構 3002 完掘状況
(南から)



2. 調査区 3-2,3
遺構 3008 完掘状況
(南から)



2



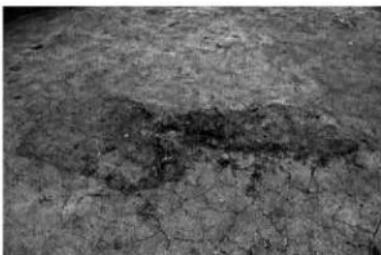
3. 調査区 3-2 遺構 3008 土層 a-a' (南西から)



4. 調査区 3-3 遺構 3008 土層 b-b' (北東から)



5. 調査区 3-2 遺構 3079 土層 (東から)



6. 調査区 3-2 遺構 3079・3080 検出状況
(西から)



1. 調査区 3-2 遺構 3079 完掘状況（東から）



2. 調査区 3-2 遺構 3080 土層（西から）



3. 調査区 3-2 遺構 3080 完掘状況（西から）



4. 調査区 3-2 調査区北壁土層（西から）



5. 調査区 3-2 畦畔状遺構検出状況（南東から）



6. 調査区 3-2 畦畔状遺構断面及び土層
(南東から)



1.
調査区 3-3
調査区北壁土層
(南から)



2.
調査区 3-4
調査区西壁土層
(北東から)



3. 調査区 3-4 遺構検出状況（南から）



4. 調査区 3-5-2 調査区南壁土層（北から）



5. 調査区 3-5-2 畦畔状遺構土層（北から）



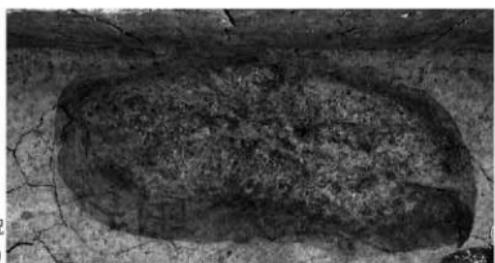
調査区 3-5-2 調査区東壁土層
(南西から)



調査区 3-5-2 遺構 3068 土層
(西から)



調査区 3-5-2 遺構 3068
樹皮検出状況
(西から)



調査区 3-5-2 遺構 3068 完掘状況
(西から)



1. 調査区 3-7-1

調査区南壁土層
(北西から)



2

2. 調査区 3-5-1

調査区東壁土層
(南西から)



3.

調査区 3-5-1 遺構検出状況
(南から)



4

4.
調査区 3-7-4 遺構検出状況
(東から)



5. 調査区 3-7-3 遺構検出状況 (東から)



6. 調査区 3-7-4 第 3a 層堆積状況 (北から)

1. 調査地航空写真
(北から)



2. 調査地遠景
(北から)



3. 堀切遠景
(北西から)





1.
堀切完掘状況及び
セクションベルト 1
(北から)



2.
堀切完掘状況及び
セクションベルト 2
(北から)



3.
表土堆積状況及び地山





1.
調査区南側
及び丘陵尾根
(西から)



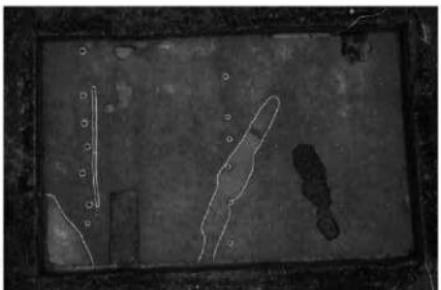
2.
調査区全景 (西から)



3.
調査区全景 (北から)



1. 調査地及び調査区 1 全景
(南西から)



2. 調査区 1 第 1 遺構面 遺構検出状況
(上空から・上が東)

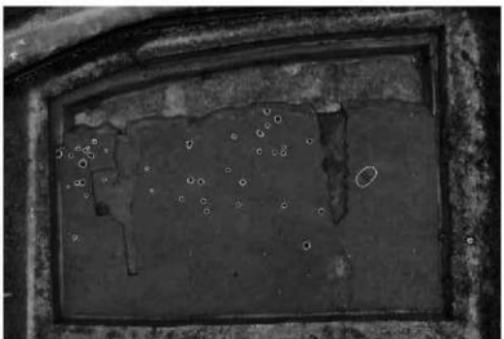


3. 調査区 1 第 2 遺構面 遺構検出状況
(上空から・上が東)

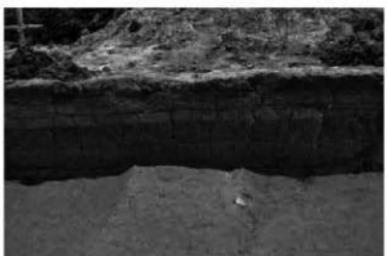


4. 調査区 2 第 1 遺構面 遺構検出状況
(上空から・上が東)

1. 調査区2 第2遺構面 遺構検出状況
(上空から・上が東)



2. 調査区1 調査区南壁土層（北から）



3. 調査区1 畦畔状遺構土層（西から）



4. 調査区2 調査区西壁土層（東から）



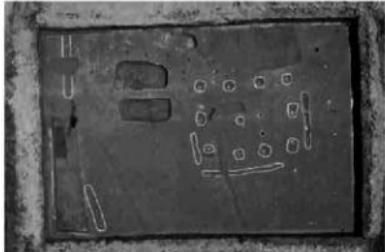
5. 調査区2001 遺構1 土層（北から）



6. 調査区2 調査区北壁土層（南から）



7. 調査区2 調査区北壁土層（南から）



1. 調査区4 第1遺構面遺構検出状況
(上空から・上が東)



4



2. 調査区4 掘立柱建物1柱穴1(北から)



5



3. 調査区4 掘立柱建物1柱穴2(東から)



6

4. 調査区4 掘立柱建物1柱穴3(東から)



7

5. 調査区4 掘立柱建物1柱穴4(東から)



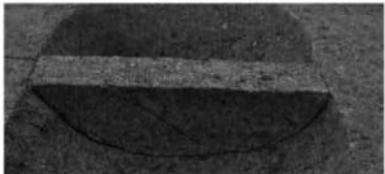
6. 調査区4 掘立柱建物1柱穴5(北から)

7. 調査区4 掘立柱建物1柱穴6(南から)

8. 調査区4 掘立柱建物1柱穴7(西から)



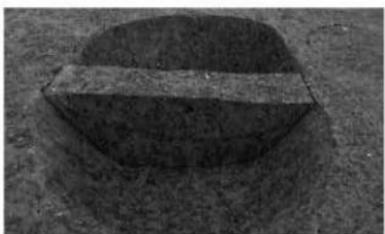
1. 調査区 4 挖立柱建物 1 柱穴 8 (西から)



5. 調査区 4 遺構 4020 土層 (西から)



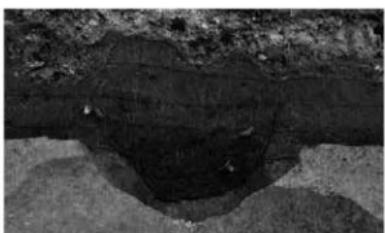
2. 調査区 4 挖立柱建物 1 柱穴 9 (西から)



6. 調査区 4 遺構 4022 (南から)



3. 調査区 4 挖立柱建物 1 柱穴 10 (西から)



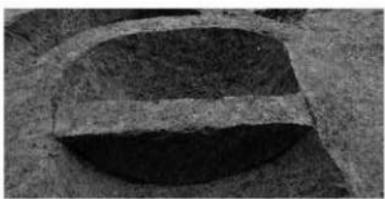
7. 調査区 4 遺構 4026 (西から)



4. 調査区 4 挖立柱建物 1 柱穴 11 (東から)



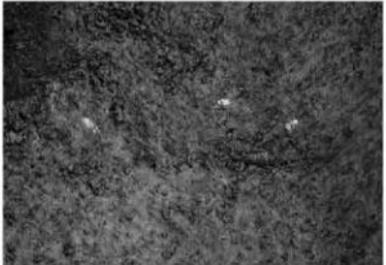
8. 調査区 4 遺構 4029 (南から)



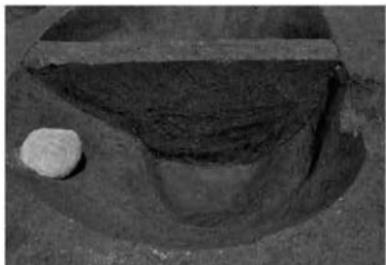
9. 調査区 4 遺構 4030 (南西から)



1. 調査区 4 遺構 4031 土層（東から）



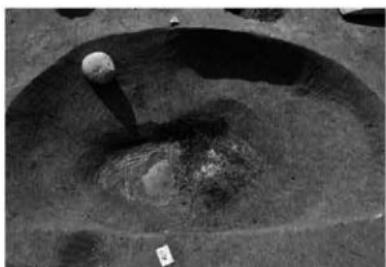
5. 調査区 4 遺構 4032 骨片出土状況



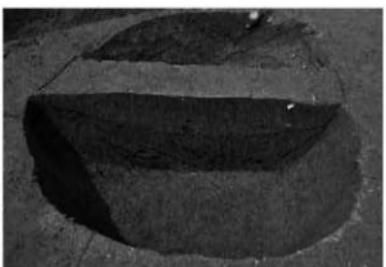
2. 調査区 4 遺構 4032 土層（南から）



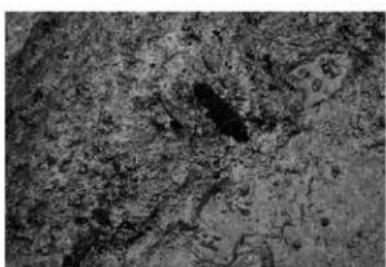
6. 調査区 4 遺構 4047 土層（北から）



3. 調査区 4 遺構 4032 完掘状況（東から）



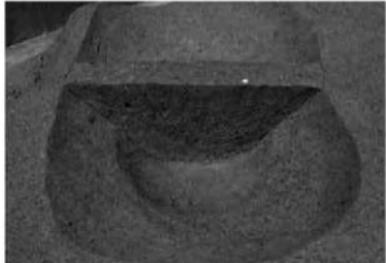
7. 調査区 4 遺構 4049 土層（西から）



4. 調査区 4 遺構 4032 遺物(116)



8. 調査区 4 遺構 4050 土層（南から）



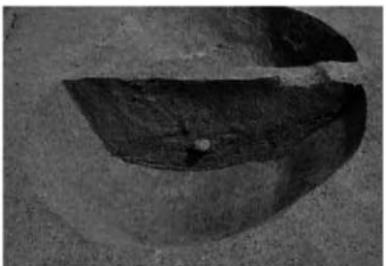
1. 調査区 4 遺構 4053 土層（東から）



2. 調査区 4 遺構 4058 土層（東から）



3. 調査区 4 遺構 4059 土層（西から）



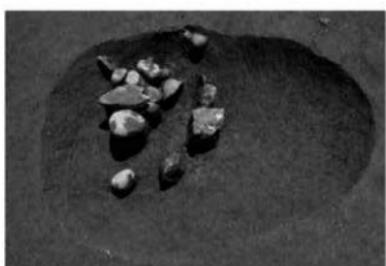
4. 調査区 4 遺構 4060 土層（南から）



5. 調査区 4 遺構 4062 土層（東から）



6. 調査区 4 遺構 4063 土層（西から）



7. 調査区 4 遺構 4070



8. 調査区 4 遺構 4073 検出状況（北から）



1. 調査区 4 遺構 4074 土層（南から）



2. 調査区 4 遺構 4077 土層（北東から）



3. 調査区 4 遺構 4077 砂出土状況（北西から）



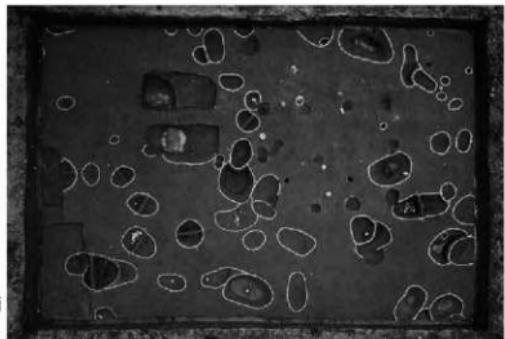
4. 調査区 4 遺構 4090 検出状況（北から）



5. 調査区 4 遺構 4091（西から）



6. 調査区 4 遺構 4093 検出状況（南東から）



7. 調査区 4 第2遺構面
(上空から・上が北)



1. 調査区5 井戸5001 (北西から)



2. 調査区5 井戸5001 断面 (北から)



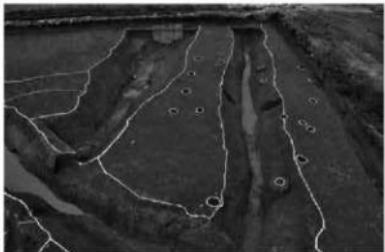
3.
第2次調査
調査地全景
(西から)



4. 調査区3 第1遺構面 (西から)



5. 調査区3 全景 (南東から)



6. 調査区3 (南から)



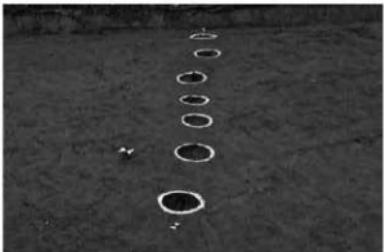
1. 調査区3 遺構3001 土層（南東から）



2. 調査区3 遺構3002 土層（南から）



3. 調査区3 遺構3003 土層（東から）

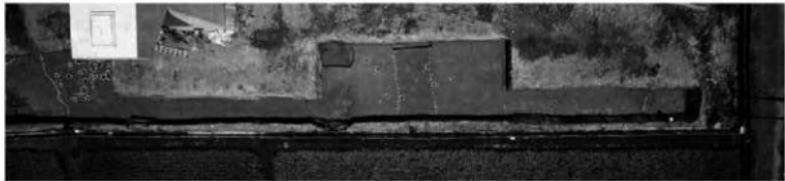


4. 調査区3（南西から）



5. 調査区3 遺構3006セクション3 土層
(南から)





1. 調査区 6 第2遺構面（南から）



2. 調査区 6 第2遺構面（北から）



3. 調査区 6 第2遺構面（西から）



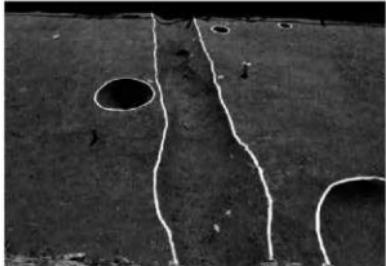
4. 調査区 8 全景
(上空から・上が北)



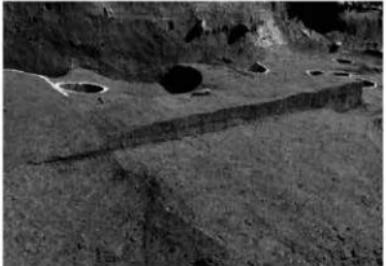
5. 調査区 7 第1遺構面検出遺構（上空から・上が北）



6. 調査区 7 第2遺構面検出遺構（上空から・上が北）



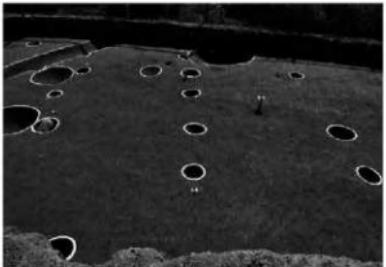
1. 調査区 7 遺構 7013 完掘状況（北から）



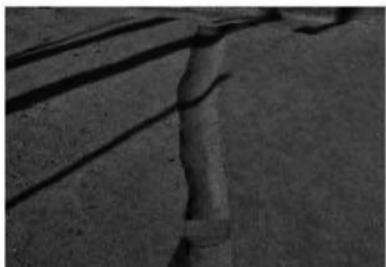
5. 調査区 7 遺構 7102 土層（南から）



2. 調査区 7 遺構 7004i 遺物出土状況（北から）



6. 調査区 7（北から）



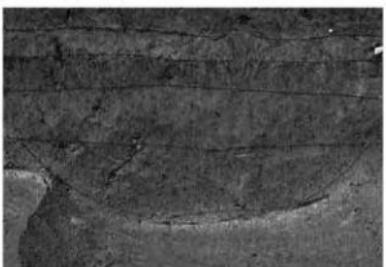
3. 調査区 7 遺構 7102 完掘状況（南から）



7. 調査区 7 遺構 7005 遺物出土状況（南から）



4. 調査区 7 遺構 7102 完掘状況（北から）



8. 調査区 7 遺構 3001 土層（南東から）



1. 調査地航空写真（東から）



2. 調査区 1 全景（上空から・上が西）



3. 調査区 2 及び 3 全景（上空から・上が西）



1. 調査区 1 全景（北西から）



2. 調査区 1
調査区西壁及び丘陵頂部現況
(東から)



3. 調査区 1
調査区東壁土層 C-C'
(南から)



1. 調査区 1 調査区東壁土層北半（西から）



2. 調査区 1 調査区東壁土層南半（西から）



3. 調査区 1

セクションベルト 1 A-A'
南端北壁（北西から）



4. 調査区 3

セクションベルト 1 A-A'
北壁（北西から）



5. 調査区 2

セクションベルト F-F'
(北から)



6. 調査区 2

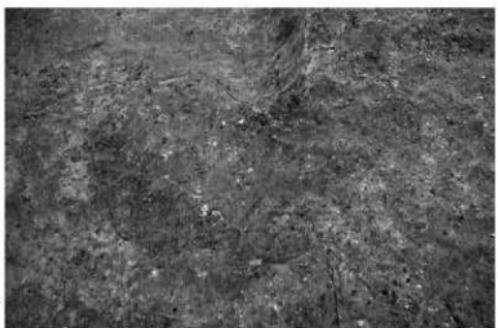
土層断割部分 E-E'
(南から)

4





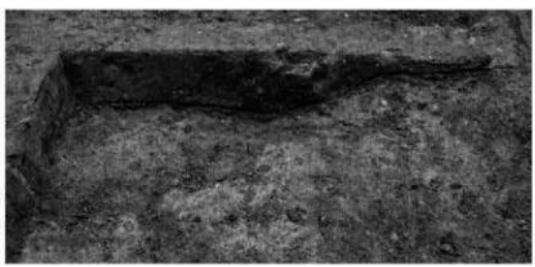
1. 調査区 2
竪穴建物 1 検出状況
(西から)



2. 調査区 2
竪穴建物 1 カマド検出状況
(北東から)



3. 調査区 2
竪穴建物 1 カマド内土層
(北東から)



4. 調査区 2
竪穴建物 1 カマド内土層
(南東から)



1. 調査区 2
竪穴建物 1 カマドセクションベルト土層
(南東から)



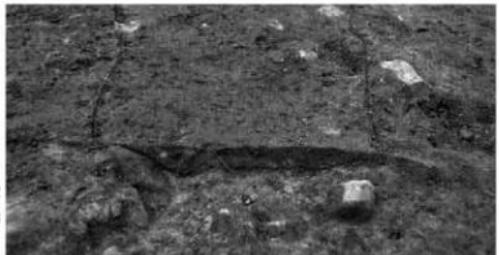
2. 調査区 2
竪穴建物 1
(南西から)



3. 調査区 2
竪穴建物 1 P 1 土層
(南東から)



4. 調査区 2
竪穴建物 1 完掘状況
(北東から)



1. 調査区 2
溝状遺構 1 土層
(南から)



2. 調査区 2
竪穴建物 2 完掘状況
(南東から)



3. 調査区 2
竪穴建物 2 セクションベルト土層
(北東から)



4. 調査区 2
竪穴建物 2
P 1 土層
(南から)

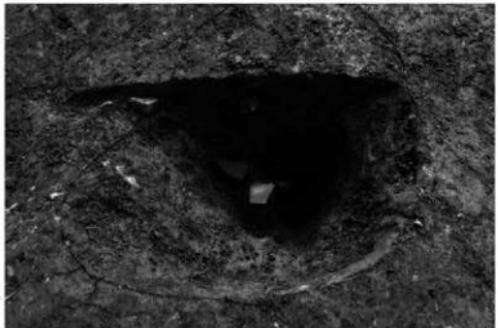


5. 調査区 2
竪穴建物 2
P 2 完掘状況
(南から)



1. 調査区 3 掘立柱建物 1

(北東から)

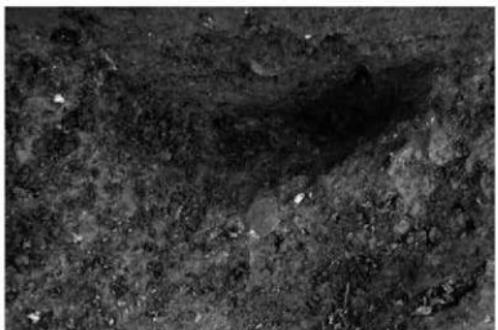


2. 調査区 3

掘立柱建物 1

P1 土層及び遺物出土状況

(北西から)



3. 調査区 3

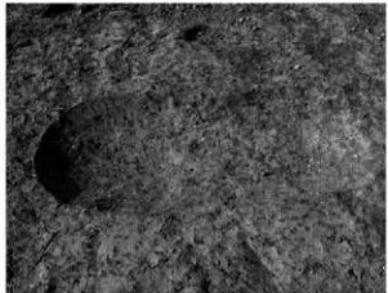
掘立柱建物 1

P4 土層

(北西から)



1. 調査区3 遺構18 土層
(北西から)



2. 調査区3 遺構18 完掘状況
(南東から)



3. 調査区3 遺構7 遺物出土状況
(北から)



4. 調査区3 完掘状況
(南から)



5. 調査区3 完掘状況
(北から)



6. 調査区3 地山地層露出箇所
(北から)



1. 調査区 1・2 第1遺構面遺構検出状況（上空から・上が北）



2. 調査区 1 第1遺構面 遺構検出状況（北から）



3. 調査区 2 第1遺構面 遺構検出状況（西から）



1. 調査区 1・2 第2遺構面遺構検出状況（南から）



2. 調査区 1 第2遺構面 遺構検出状況（北から）



3. 調査区 2 第2遺構面 遺構検出状況（北から）





1. 調査区1 航空写真（上空から・上が東）



2. 調査区1
遺構 101・104・111・116
(北から)



1.

調査区 1

セクションベルト A-A' 土層 (南西から)



2.

調査区 1

セクションベルト A-A' 土層 (南から)



3.

調査区 1

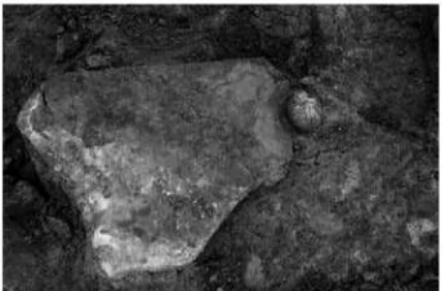
遺構 101 土層 (北から)



4.

調査区 1

遺構 104 壁面 第 3a,3b 層断面 (西から)



1.

調査区 1

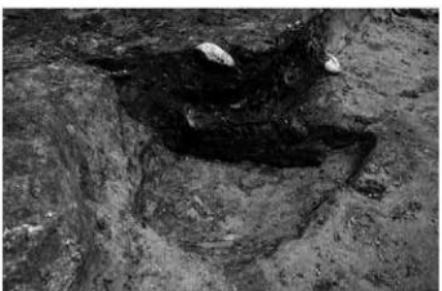
遺構 101 遺物 (25) 出土状況 (南西から)



2.

調査区 1

遺構 101 遺物 (25) 出土状況 (北西から)



3.

調査区 1

遺構 108 土層 (北から)



4.

調査区 1

遺構 108 土層 (西から)



1. 調査区 1 遺構 109 遺物出土状況（西から）



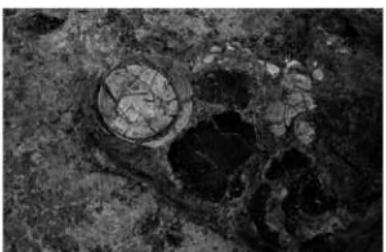
2



3



4



5

2. 調査区 1 遺構 109 遺物出土状況（東から）

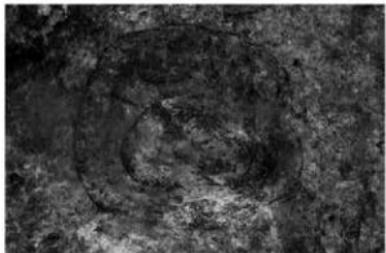
3. 調査区 1 遺構 109 遺物 (58) 出土状況
(西から)

4. 調査区 1 遺構 109 遺物 (79) 出土状況
(西から)

5. 調査区 1 遺構 109 遺物出土状況（西から）

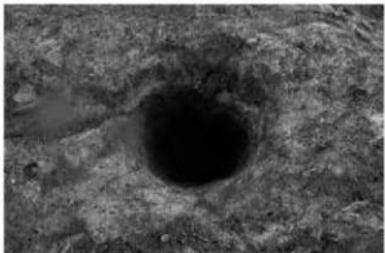
6. 調査区 1 遺構 109 遺物出土状況（西から）





1. 調査区 1

遺構 137 完掘状況
(西から)



2

2. 調査区 1

遺構 139 完掘状況
(西から)



3. 調査区 1

遺構 109 完掘状況
(東から)



4. 調査区 1 遺構 111 土層 a-a' (北から)



5. 調査区 1 遺構 111 完掘状況 (南から)



1. 調査区 1 遺構 112 完掘状況（西から）



2. 調査区 1 遺構 111 土層 b-b'（南から）



3. 調査区 1 遺構 117 完掘状況（南東から）



4. 調査区 1 遺構 119 完掘状況（西から）



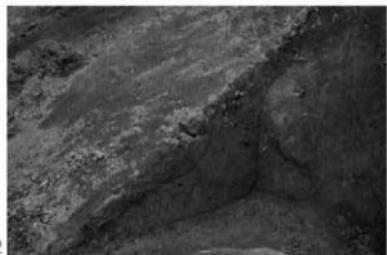
5. 調査区 2 石垣 1 南端検出状況（北西から）



6. 調査区 2 遺構 228 完掘状況（西から）



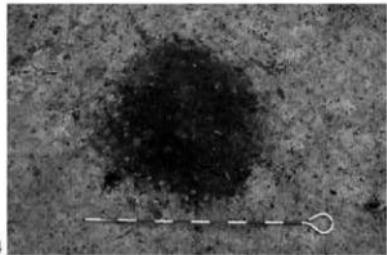
7. 調査区 2 土層 B-B'（北から）



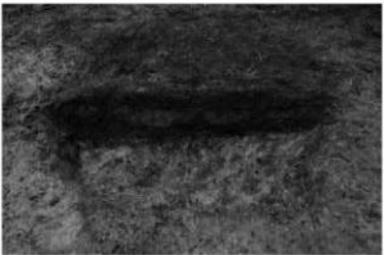
2



3



4



5

2. 調査区3 遺構301 完掘状況（西から）

3. 調査区3 遺構301 土層（南西から）

4. 調査区3 遺構302 土層（北から）

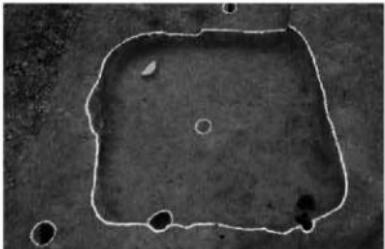
5. 調査区3 遺構303 土層（北から）

6. 調査区3 遺構381 土層（南から）





1. 調査区3 土層（西から）



2. 調査区3 遺構327 完掘状況（西から）



3. 調査区3 遺構352 完掘状況（西から）



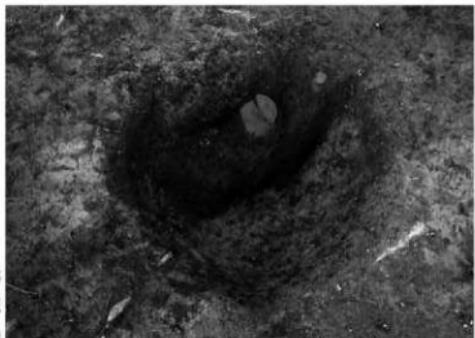
4. 調査区3 遺構348 土層（北から）



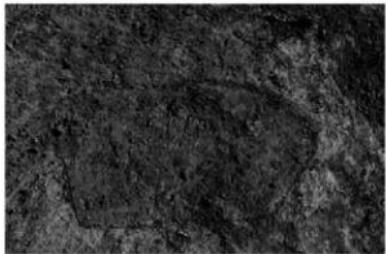
5. 調査区3 遺構366 検出状況（南から）



6. 調査区3 遺構366 土層（南から）



7. 調査区3
遺構366 遺物(154)出土状況
(南から)



1. 調査区 3

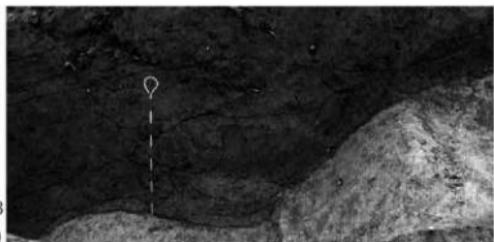
遺構 358 検出状況（西から）



2

2. 調査区 3

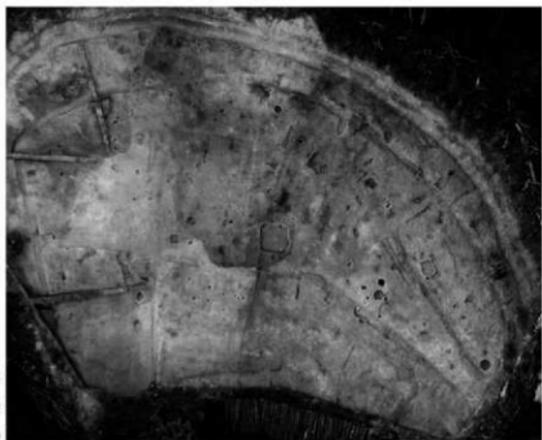
遺構 358 遺物 (152) 出土状況
(西から)



3. 調査区 3
土層 F-F' 南端部分 (東から)

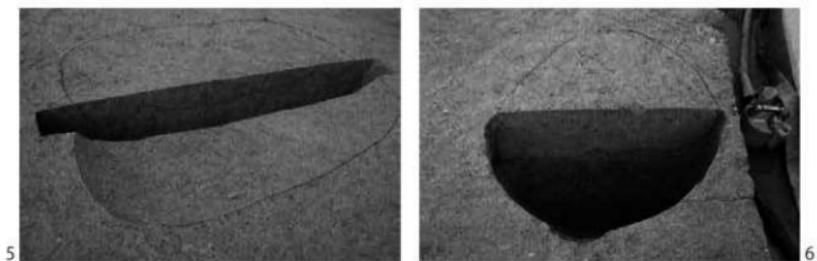
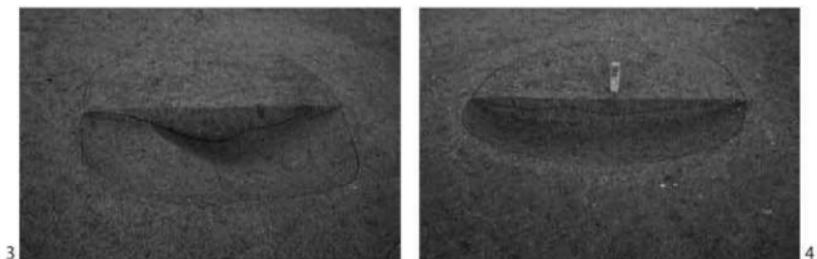
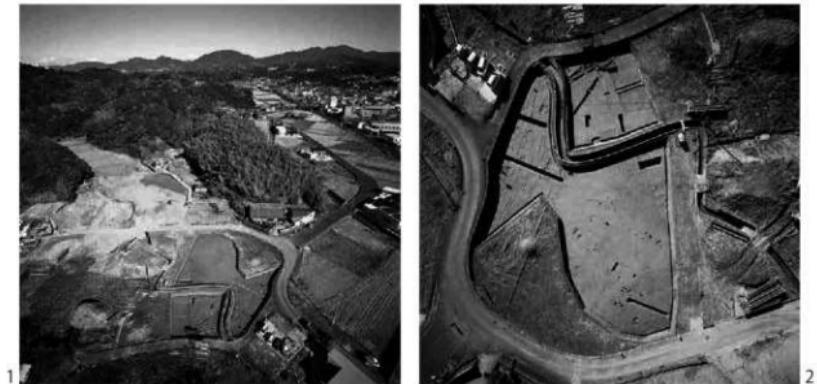


4. 調査区 3
土層 E-E' (北から)



5. 調査区 3

調査区全景
(上空から・上が西)



1. 岩崎大泓遺跡 全景（南西から）
2. 岩崎大泓遺跡 全景（南西から）
3. 岩崎大泓遺跡 遺構 3 土層（南から）
4. 岩崎大泓遺跡 遺構 4 土層（南から）
5. 岩崎大泓遺跡 遺構 7 土層（南から）
6. 岩崎大泓遺跡 遺構 13 土層（西から）
7. 岩崎大泓遺跡 遺構 15、16、17（南から）



1. 岩崎大泓遺跡 遺構 15 土層（北東から）



5. 岩崎大泓遺跡 西壁土層（北東から）



2. 岩崎大泓遺跡 遺構 15（北東から）



6. 岩崎大泓遺跡 遺構 18 土層（南東から）



3. 岩崎大泓遺跡 南壁土層（北から）



7. 岩崎大泓遺跡 C トレンチ断面（北から）



4. 岩崎大泓遺跡 西壁土層（北東から）



1. 岩崎大泓II遺跡 第1遺構面全景
(南西から)



2. 岩崎大泓II遺跡 第2遺構面全景
(南西から)



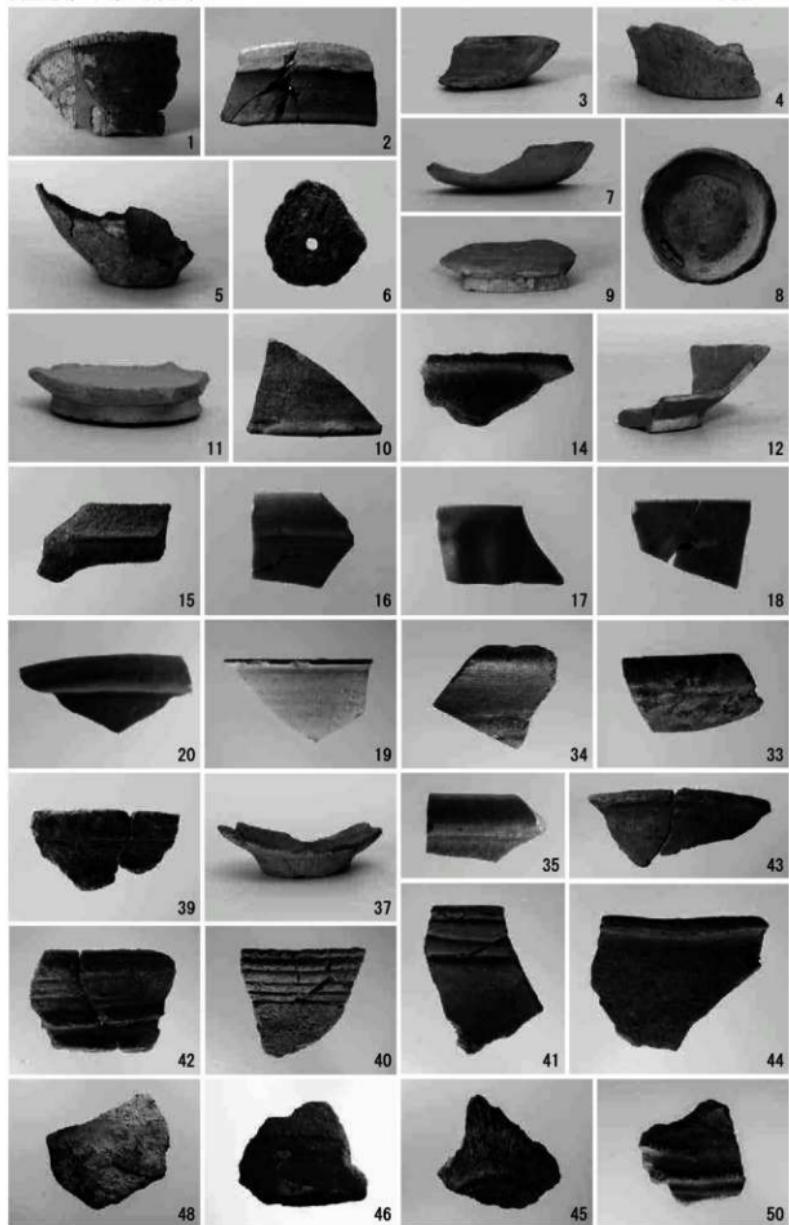
3. 岩崎大泓II遺跡 落ち込み土層
(南西から)

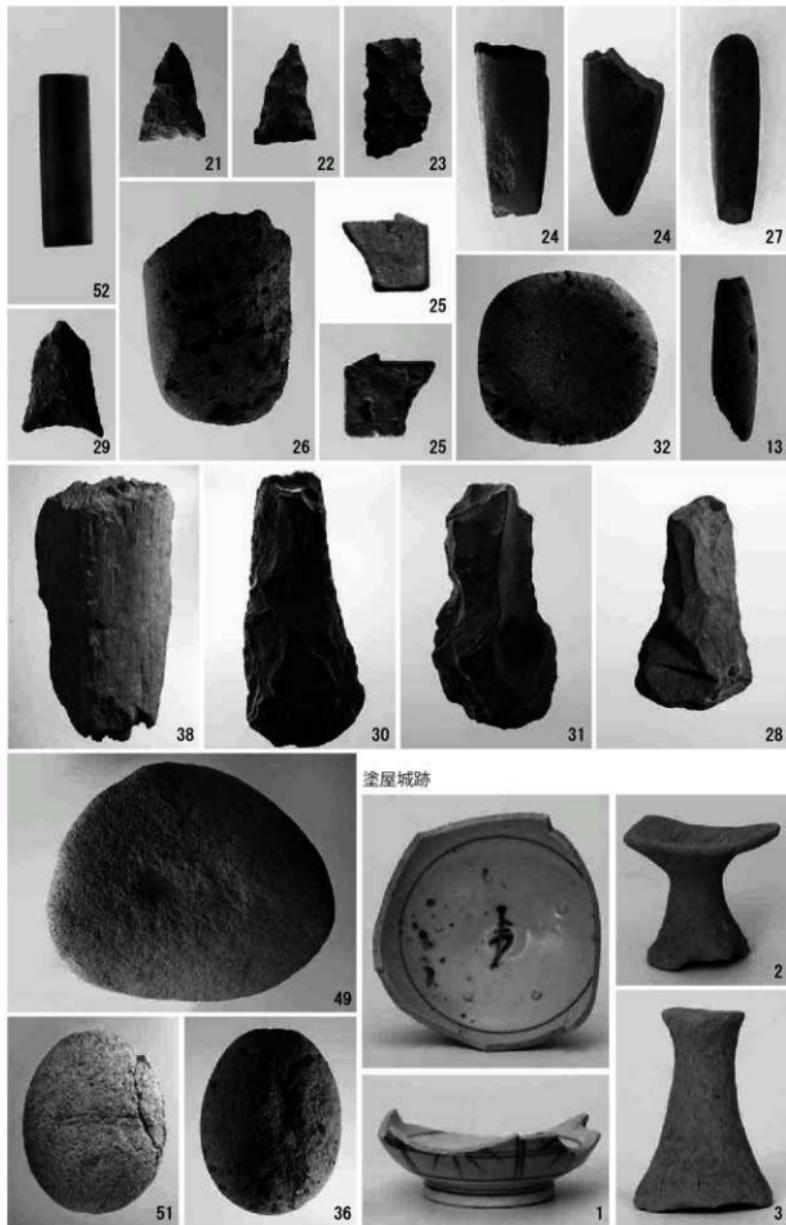


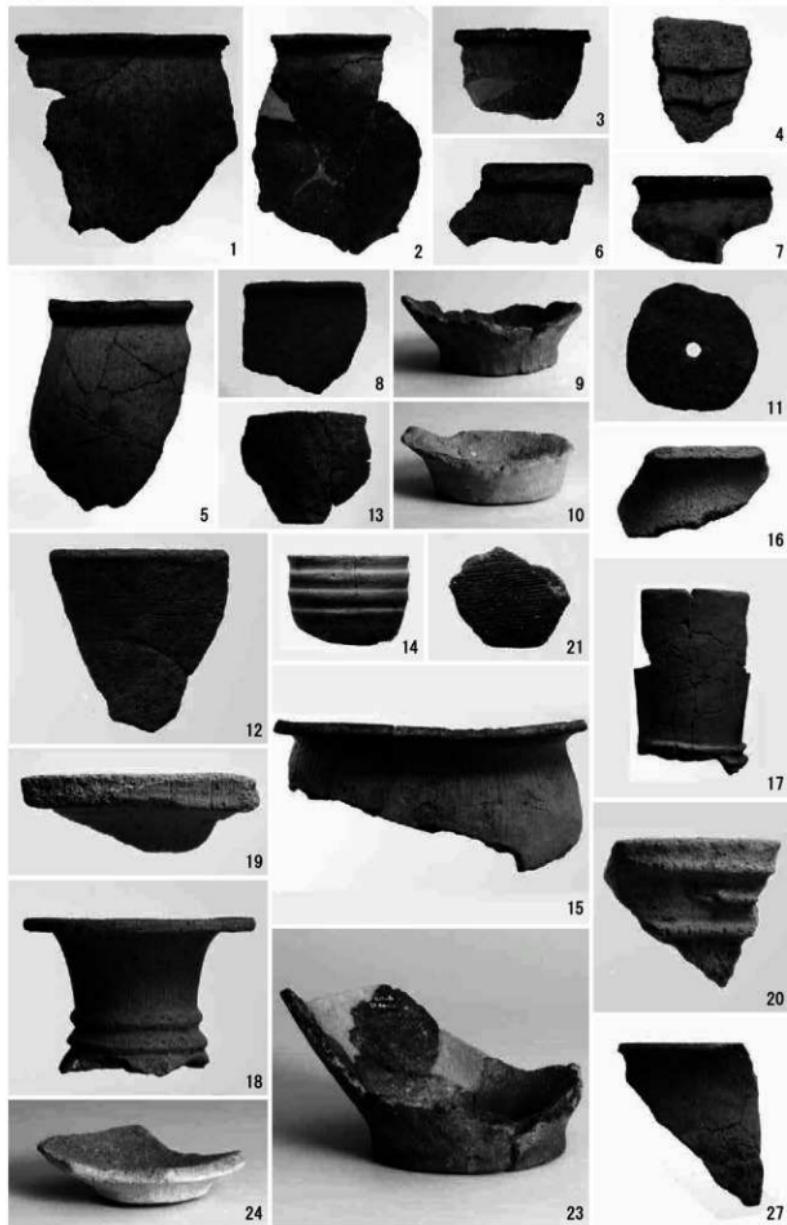
4. 岩崎大泓II遺跡 調査区1遺構1
(北から)

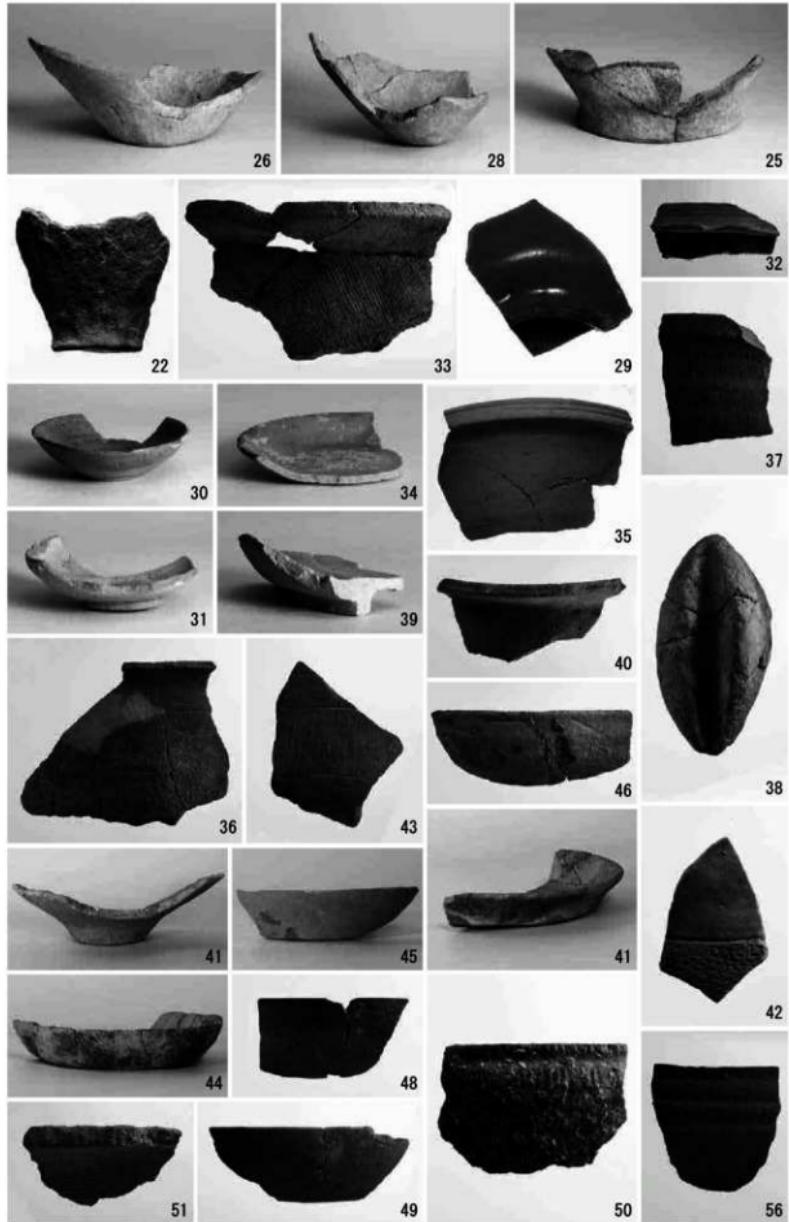


5. 岩崎大泓II遺跡 調査区2
(北から)

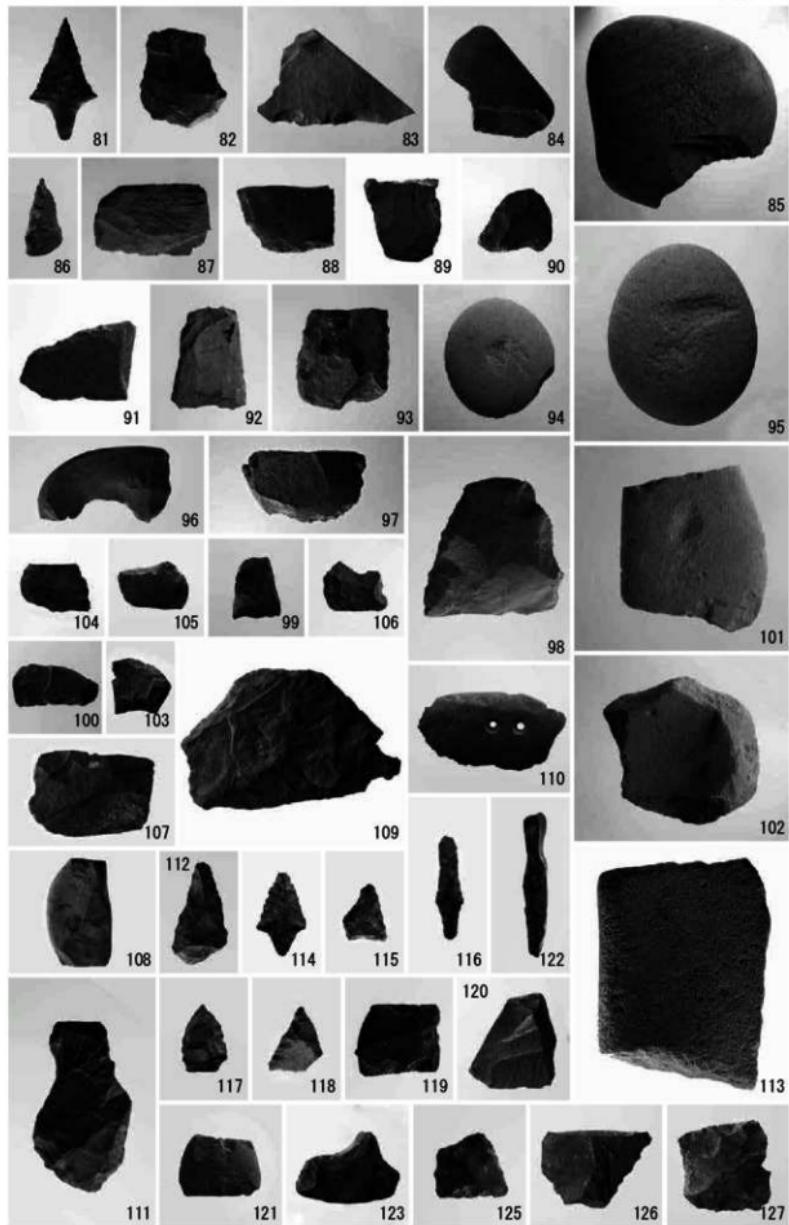


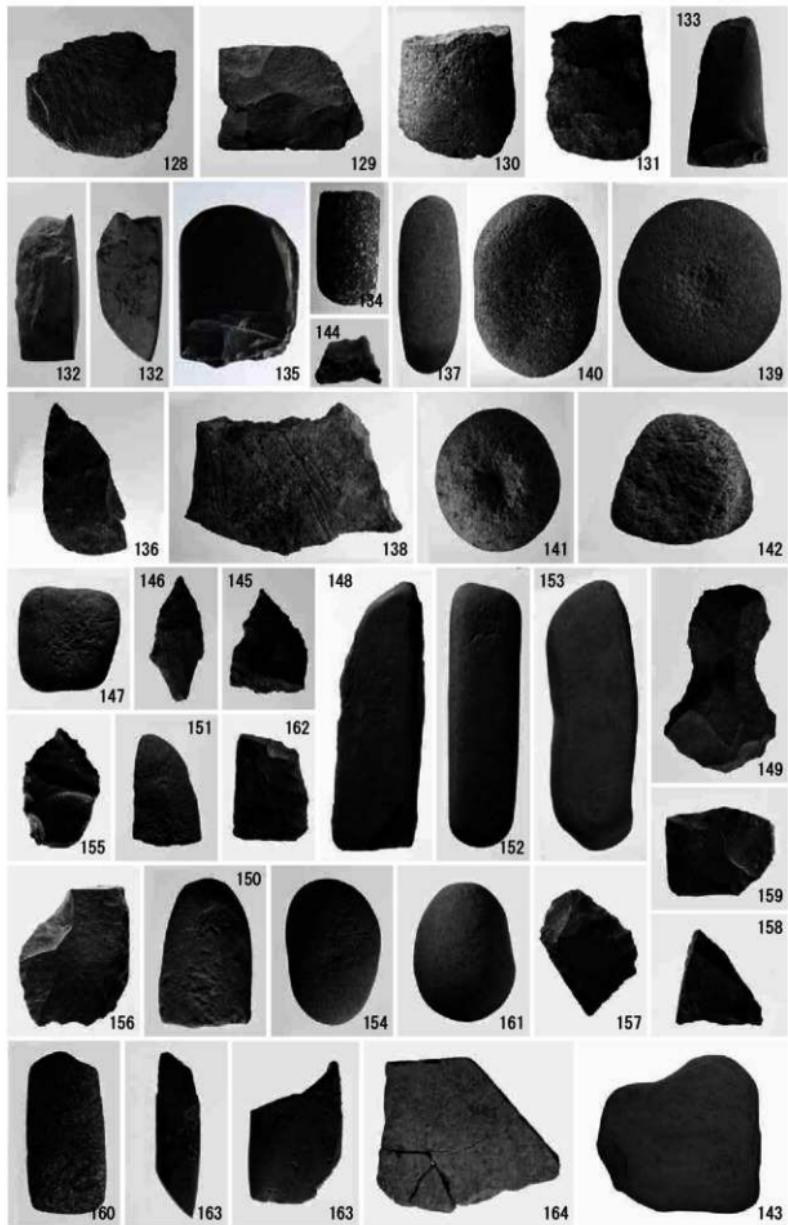




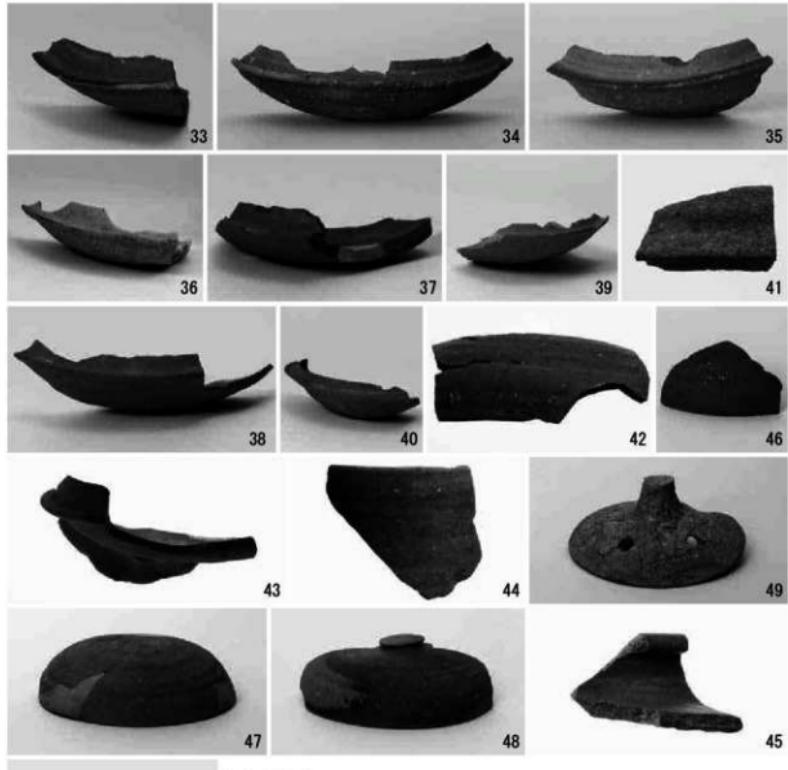




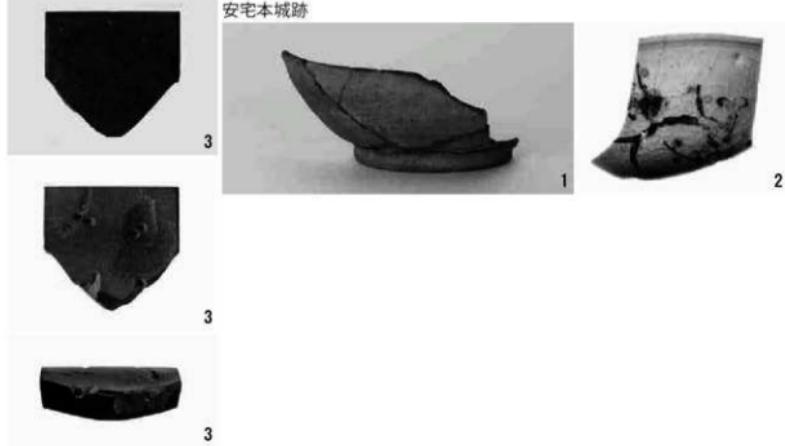




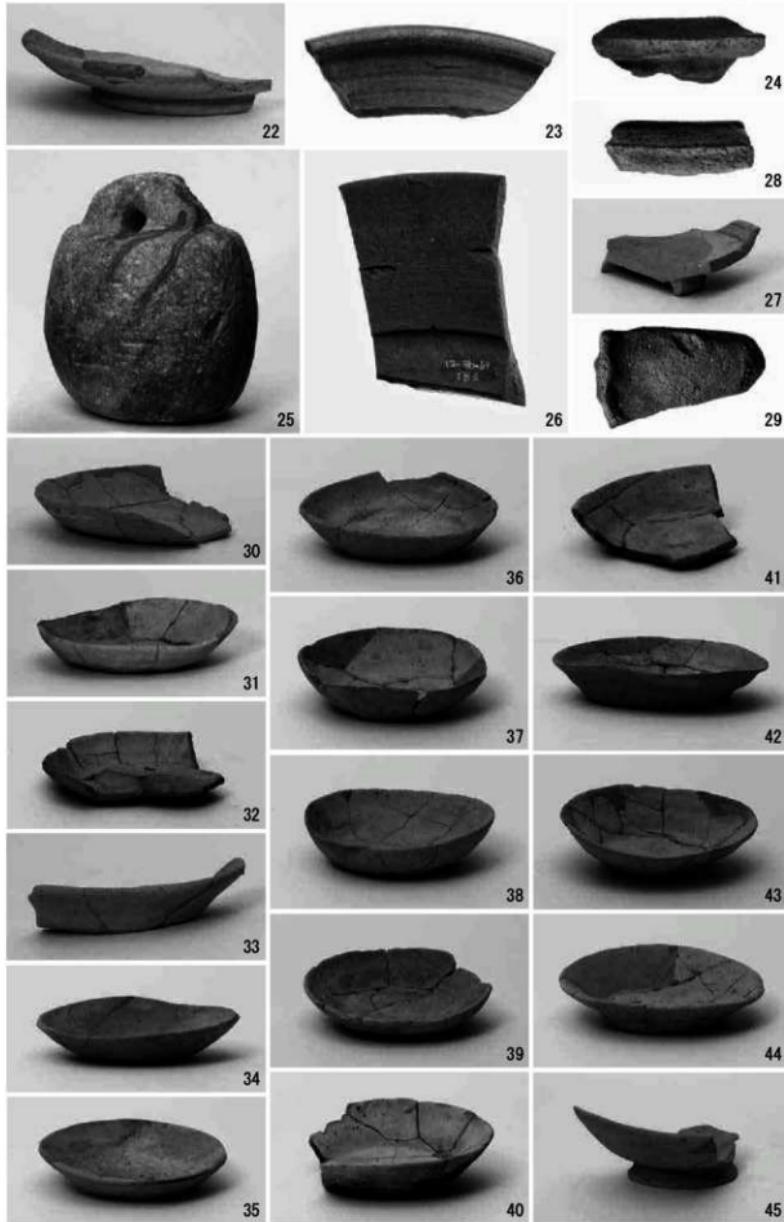


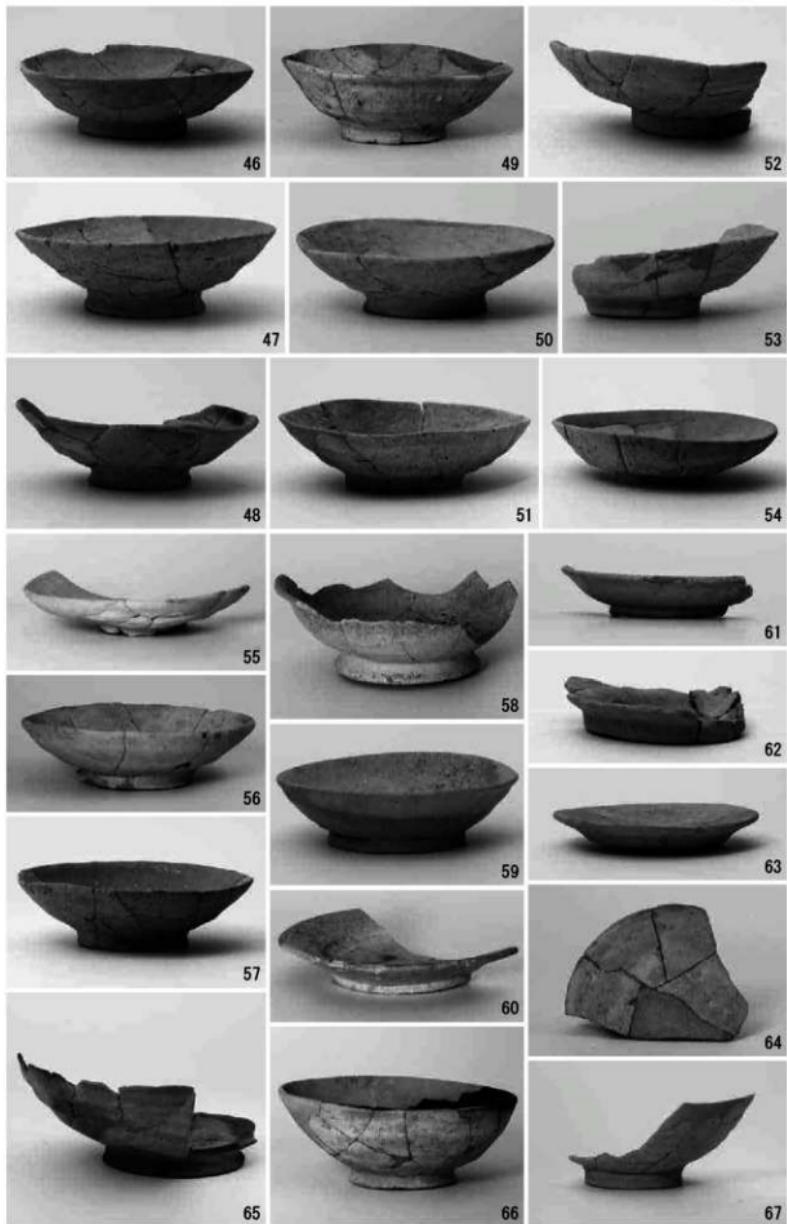


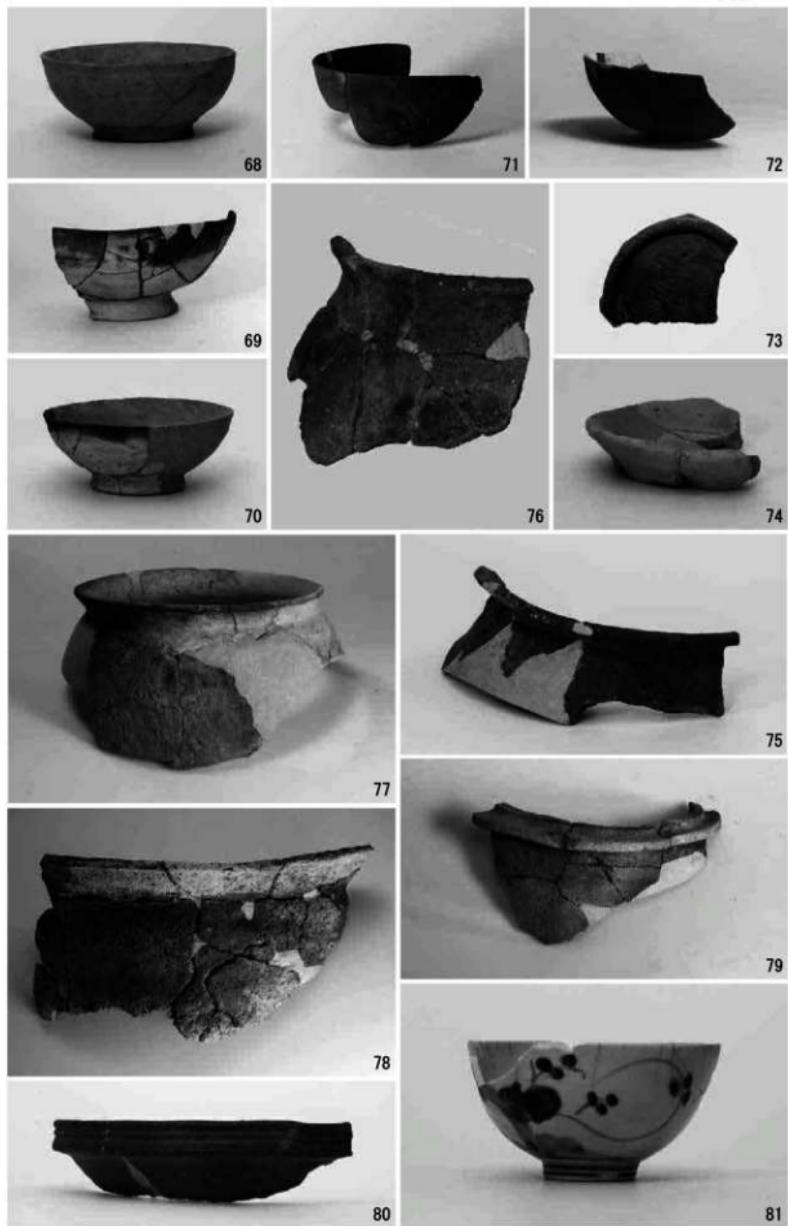
安宅本城跡



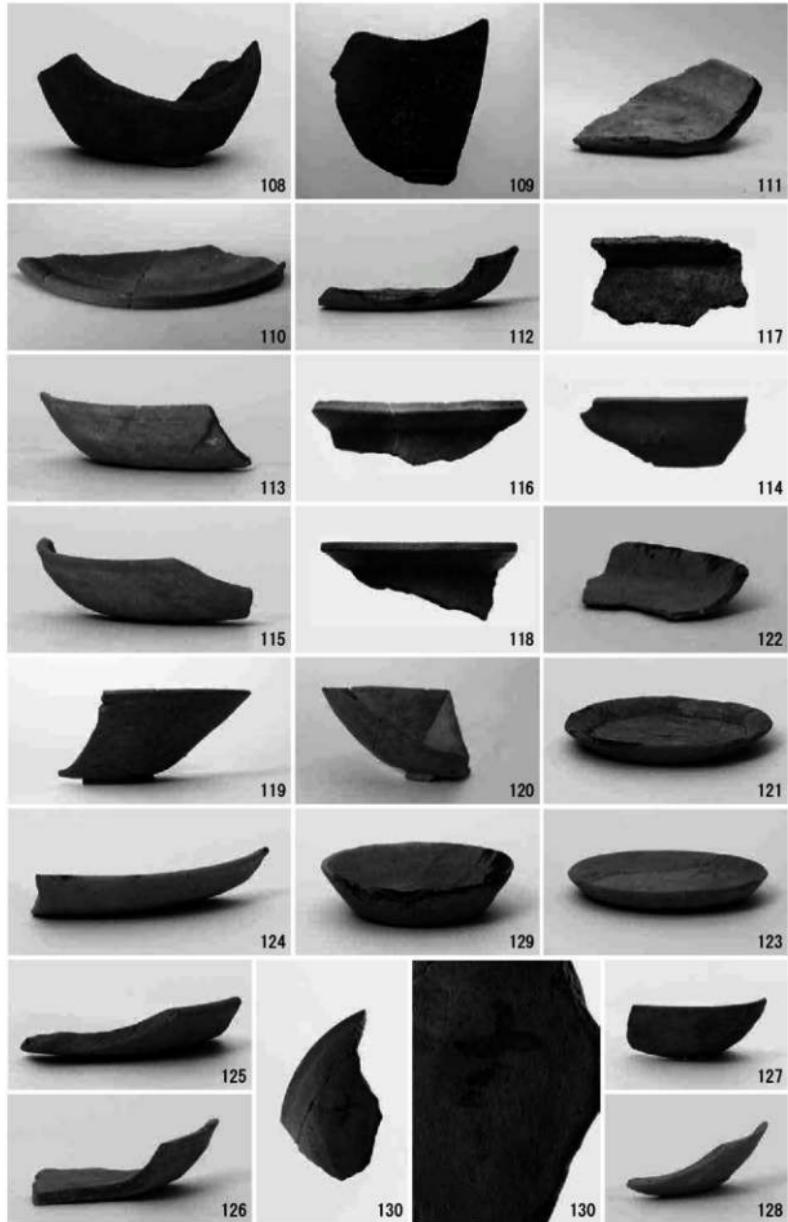


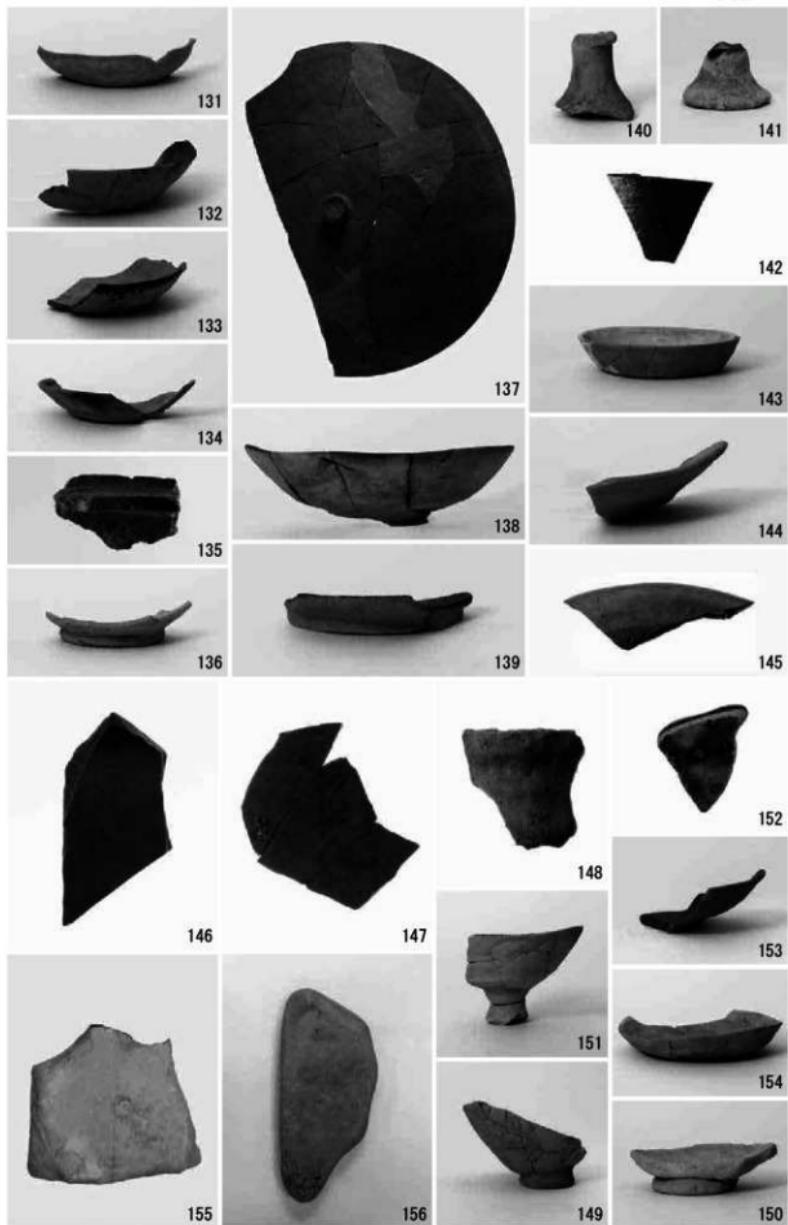


















報告書抄録

ふりがな	めざいせき、はつちようたんぽいせき、ぬりじょうあと、おおふねにいせき、いなりいせい、あたぎほんじょうあと、たのくちいせき、いわさきおおふねいせき、いわさきおおふねにいせき						
書名	日岡遺跡、八丁田園遺跡、塙屋城跡、大古II遺跡、稻成I遺跡、安宅本城跡、田ノ口遺跡、岩崎大泓II遺跡						
副題名	近畿自動車道紀勢線事業に伴う発掘調査報告書						
編集著者名	寺西郎平						
編集機関	公益財團法人 和歌山県文化財センター						
所在地	〒640-8404 和歌山市若槻1263番地の1						
刊行年月日	西暦2015年1月9日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		
日岡遺跡	和歌山県 田辺市秋津町	30206	63	33° 44' 50"	135° 23' 50"	1次 2010.06.22~12.06	296
八丁田園 遺跡	和歌山県 田辺市秋津町	30206	064	33° 44' 51"	135° 23' 47"	1次 2010.06.22~12.06	142
塙屋城跡	和歌山県 西牟婁郡上富田町朝来	30404	003	33° 41' 42"	135° 24' 54"	2次 2011.06.22~12.06	873
大古II遺跡	和歌山県 西牟婁郡白浜町	30401	008	33° 34' 36"	135° 27' 30"	1次 2012.10~2013.02	247
稻成I遺跡	和歌山県 田辺市稲成町	30206	160	33° 44' 45"	135° 22' 39"	2次 2012.10~2013.02	1134
安宅本城 跡	和歌山県 西牟婁郡白浜町	30401	061	33° 34' 32"	135° 27' 50"	3次 2011.08.17~12.07	869
田ノ口遺跡	和歌山県 西牟婁郡白浜町十九瀬	30401	160	33° 33' 32"	135° 24' 35"	2012.05.08~11.15	1074
岩崎大泓 遺跡	和歌山県 西牟婁郡上富田町岩崎	30404	035	33° 41' 28"	135° 24' 53"	2010.09~2011.03.25	2759
岩崎大泓II 遺跡	和歌山県 西牟婁郡上富田町岩崎	30404	044	33° 41' 33"	135° 24' 52"	2012.10~2013.02	1315
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
日岡遺跡	集落生産	弥生時代	土坑	弥生土器			
八丁田園 遺跡	集落生産	弥生時代	溝、土坑、ピット	弥生土器、石器、管玉			
稻成I遺跡	集落生産	平安~鎌倉時代	畦畔状遺構	土師器、須恵器、青磁、白磁、石器、石帶			
田ノ口遺跡	集落生産	古墳時代	土坑、ピット、堅穴建物跡、掘立柱建物跡	土師器、須恵器、			
		平安時代		黒色土器、石帶遙方			
		奈良					
		平安時代	溝、土坑、ピット	土師器、須恵器、灰陶陶器、黑色土器、白磁、椎状石製品			
大古II遺跡	集落生産	弥生時代	土坑、ピット	弥生土器、繪画土器、石器（石礫、台石、石包丁）			
	集落生産	室町時代	井戸				
安宅本城跡	城郭	中世		黒色土器			
塙屋城跡	城郭	古墳時代		土師器			
	城郭	中世	廻切				
	近世			磁器			
岩崎大泓 遺跡	集落生産	弥生時代		土器（庄内併行期）			
	集落生産	中世	ピット、土坑、落ち込み状遺構				
岩崎大泓II 遺跡	集落生産	弥生時代		土器（庄内併行期）			
	集落生産	中世	掘立柱建物、ピット、土坑				
要約	近畿自動車道紀勢線事業に伴い、9箇所の遺跡を調査した。八丁田園遺跡では弥生時代前期及び中期の遺構面を検出し、また包含層中から石帶遙方に出土した。塙屋城跡では廻切とみられる遺構について、規模等を明らかにすることができた大古II遺跡では弥生時代中期の遺構から、建物を描いた可能性の指摘される繪画土器が出土したほか、縄輪陶器が出土し、古代とみられる掘立柱建物を検出した。稻成I遺跡で丘陵中腹において堅穴建物跡2棟、掘立柱建物跡1棟分を検出し、古墳時代における集落の展開が確認されたほか、石帶遙方が出土した。田ノ口遺跡では奈良に伴う可能性のある遺構を検出しており、椎状石製品が出土した。						

目座遺跡、八丁田園遺跡、塗屋城跡、大古II遺跡、稻成I遺跡、
安宅本城跡、田ノ口遺跡、岩崎大泓遺跡、岩崎大泓II遺跡

—近畿自動車道紀勢線事業に伴う発掘調査報告書—

発行年月日 : 2015年1月9日

編集・発行 : 公益財団法人 和歌山県文化財センター
和歌山市岩橋 1263 番地の1

印刷・製本 : 白光印刷株式会社
和歌山市雜賀崎 2021 番地の3